

審判

DER PROZESS

フランツ・カフカ Franz Kafka
青空文庫

第一章　逮捕・グルウバツハ夫人との 対話・次にビュルストナー嬢

誰かがヨーゼフ・Kを**誹謗**したにちがいなかつた。なぜなら、
何もわるいことをしなかつたのに、ある朝、逮捕されたからであ
る。彼の部屋主グルウバツハ夫人の料理女は、毎日、朝の八時ご
ろに朝食を運んでくるのだつたが、この日に限つてやつてはこな
かつた。そういうことはこれまであつたためしがなかつた。Kは

なおしばらく待ち、枕まくらについたまま、向う側の家に住んでいる老婆がいつもとまったくちがつた好奇の眼で自分を観察しているのをながめていたが、やがていぶかしくもあれば腹がすいてきもしたので、呼鈴を鳴らした。すぐにノックの音が聞え、この家につけぞ見かけたことのない一人の男がはいつてきた。すんなりとはしているが、がんじよう 頑丈からだな身体のつくりで、しつくりした黒服を着ていた。その服は、旅行服に似ていて、たくさんの襞ひだやボタンがつき、バンドもついており、そのため、何の用をするのかはつきりはわからぬが、格別実用的に見受けられた。「どなたですか？」と、Kはききただし、すぐ半分ほどベッドに身を起した。

ところが男は、まるで自分の出現を文句なしに受入れろと言わんばかりに、彼の質問をやりすごし、逆にただこう言うのだつた。

「ベルを鳴らしましたね？」

「アンナに朝食を持つてもらいたいのです」と、Kは言い、まず黙つたままで、いつたいこの男が何者であるか、注意と熟考とによつてはつきり見定めようと試みた。

ところがこの男はあまり長くは彼の視線を受けてはいないで、扉のほうを向き、それを少しあけて、明らかに扉のすぐ背後に立つていた誰かに言つた。

「アンナに朝食を持つてきてもらいたいのだそうだよ」

隣室でちよつとした笑い声が聞えたが、その響きからいつて、

数人の人々がそれに加わっているのかどうか、はつきりしなかつた。見知らぬ男はそれによつてこれまで以上に何もわかつたはずがなかつたが、Kに対して通告するような調子で言つた。

「だめだ」

「そりやあ変だ」と、Kは言つて、ベッドから飛びおり、急いでズボンをはいた。

「ともかく、隣の部屋にどんな人たちがいるのかを見て、グルウバツハ夫人がこの私に対する邪魔の責任をどうとるのか知りたいのです」

こんなことをはつきり言うべきではなかつたし、こんなことを言えば、いわばその男の監督権を認めたことになるということに

すぐ気づきはしたが、それも今はたいしたこととは思われなかつた。見知らぬ男もずっとそう考えていたらしい。男がこう言つたからである。

「ここにいたほうがよくはないですか？」

「いたくもありませんし、あなたが身分を明らかにしないうちは、あなたに口をきいていただきたくもないんです」

「好意でやつたんですよ」と、見知らぬ男は言い、今度は進んで扉を開けた。

Kがはいろいろと思つてゆつくり隣室へはいつてゆくと、部屋はちよつと見たところ、前の晩とほとんどまつたくちがつたところがなかつた。それはグルウバツハ夫人の住居で、おそらくこの家

具や敷物や花瓶^{かびん}や写真やでいっぱいの部屋は、今日はいつもよりいくらかゆとりがあった。そのことはすぐには気づかなかつたが、おもな変化は一人の男がいるという点にあつただけに、なおさらそうであつた。男は開いた窓のそばで一冊の本を読みながらすわつていたが、ふと本から眼を上げた。

「君は部屋にいなければいけなかつたのだ！ いつたいフランツは君にそう言わなかつたか？」

「で、どうしようというんです？」と、Kは言い、この新しく知つた人物から眼を転じて、戸口のところに立ち止つているフランツと呼ばれる男のほうを見、次にまた視線をもどした。

開いた窓越しにまた例の老婆が見えたが、彼女はいかにも老人

らしい好奇の眼で、今ちょうど、向い合つた窓のところへ歩み寄つて、その後の成行きを一部始終見届けようとしていた。

「グルウバツハ夫人にちよつと——」と、Kは言い、彼から遠く離れて立っている二人の男から身を引離そうとするようなしぐさを見せて、歩みを進めようとした。

「いけない」と、窓ぎわの男が言い、本を小さな机の上に投げて、立ち上がった。「行っちゃいけない。君は逮捕されたんだぞ」

「どうもそうらしいですね」と、Kは言い、次にたずねた。「ところで、いつたいどうしてなんですか？」

「君にそんなことを言うように言いつかっちゃいない。部屋にはいつて、待っていたまえ。訴訟手続きはもう始まつたんだから、

時が来れば万事わかるようになるだろう。君にこんなに親切に話すことは命令の範囲を出ているんだ。けれど、おそらくフランツ以外に聞いている者は誰もいないだろうし、あれからして規則に違反して君に親切なんだからね。これからさきも、君の監視者がきまつたときのように幸運に恵まれるなら、安心できるわけだよ』

Kはすわろうと思つたが、さて、部屋じゅうどこにも窓ぎわの椅子のほかにすわるところがないことに気づいた。

「まあ今に、万事がしごくもつともだということがわかるさ」と、フランツが言い、もう一人の男といつしょに彼のほうに歩み寄つてきた。特に後者はKよりもひどく背が高く、何度も彼の肩をたたいた。二人ともKの寝巻をためつすがめつして、君はこれから

もつとわるいシャツを着なければならぬようになるだろうが、このシャツもほかの下着類といつしょに保管しておいてやろう、そして事が有利に解決したら、君にまた返してやろう、と言うのだった。

「そういうものを倉庫に入れるくらいなら、おれたちに渡したほうがましだ」と、彼らは言つた。「倉庫ではしばしば横領されることがあるし、そのうえ、ある期間が過ぎると、その手続きが終ろうが終るまいがおかまいなく、何でもかでも売り払つてしまふからね。それに、こんな訴訟はなんて手間取ることだろう、ことに近頃はねえ！ もちろん、最後には倉庫から売上金をもらうだろうが、第一に、売却の場合言い値の金高できまるものじやなく、

賄賂の金高が物を言うんだから、この売上金というやつからして少ないものだし、そのうえこんな売上金は、手から手へと長年かかつて渡つているうちにには、減つてゆくのが普通だよ」

Kはこんな話にほとんど注意をはらつていなかつた。自分の持物に対する所有権というものはおそらくまだあるはずだが、彼はそんなものをあまり重んじていなかつたし、自分の置かれた状態をはつきり知ることのほうが、いつそう大切だつた。しかし、この連中のいる前では、少しもゆつくり考えてみることができず、二番目の監視人——まつたくのところただの監視人にすぎないはずだが——の腹がしそつちゅう、明らかになれなれしげに彼にぶつかり、彼が眼を上げると、頑丈そうな、わきへねじれた鼻をし

た、ここでつぶりした図体とはおよそ似つかわしからぬ干からびて骨ばった顔が見え、この顔が彼の頭越しにもう一方の監視人と話し合っていた。いつたいこいつは何者だろう？ 何をしゃべっているのだろう？ どんな役所の者なのだろう？ おれは法治国に住んでいるのだし、国じゅうに平和が支配しているし、すべての法律は厳として存在しているのに、何者がおれの住居においておれを襲うということをあえてしたのだろうか？ 彼はつねに、万事をできるだけ気安く考え、最悪のことはそれがほんとうに始まつてから信じ、たといいつさいの危険が迫つても、将来のことは取越し苦労しない、という傾向であつた。ところが今の場合、それは正しくないように思われた。すべてを悪戯^{いたずら}と見なすこと

ができようし、何かわからぬ理由から、おそらく今日は彼の三十歳の誕生日だからというのだろうが、銀行の同僚が計画した性のよくない悪戯と見なすことができよう。それはもちろんありうることだし、おそらくなんらかのやりかたで監視人たちに面と向つて笑つてやりさえすれば事はすむのであつて、そうすれば彼らもいっしょに笑いだすことだろう。おそらくこの連中は町角の使い走りの男たちなのだ。そう言えば、彼らに似ていなきこともない。

——それにもかかわらず、彼は今度の場合、この監視人のフランスという男を最初に見たまさにそのときから、彼がおそらくこの連中に對して持つてゐる最小の利点さえも放棄はすまい、と決心したのであつた。自分が冗談を解しなかつたのだ、と後になつて

言われるだろうという点では、Kはほんの少しでも危険を覚えなかつたが、確かに彼は——経験に徴して考へるなどというのは普通彼の習慣ではなかつたのだが——二、三の、それ 자체は取るに足らない出来事のことを見い出していた。それらの場合に、意識的な友人たちとはちがつて、ありうべき結果を少しも予想しなかつたため、慎重でない態度をとり、そのため、その結果によつてひどい目にあわされたのであつた。あんなことは二度と繰返してはならないし、少なくとも今回はやつてはならない。もし喜劇ならば、自分もいつしょになつてやつてやろう、そう彼は考えたのだった。

彼はまだ自由であつた。

「失礼します」と、彼は言つて、急いで二人の監視人のあいだを通つて自分の部屋へ行つた。

「やつは物がわかるらしいな」と、背後で言うのが聞えた。

部屋にはいつた彼は、すぐ机の引出しをあけた。そこは万事がきちんと片づいていたが、捜した身分証明書だけは、興奮しているためか、すぐには見つからなかつた。とうとう自動車証明書を見つけだし、それを持つて監視人たちのほうへ行こうとしたが、この書類はあまり役にたたぬようと思えたので、もつと捜したうえ、ついに出生証明を見つけだした。彼がまた隣室にもどつたとき、ちょうど向い合つた扉が開き、グルウバツハ夫人がそこへ足を入れようとした。彼女はほんの一瞬間姿を見せただけで、Kを

認めたとたん、明らかに当惑した様子を見せ、ごめんなさいと言つて、引っこみ、きわめて慎重に扉をしめた。

「どうぞおはいりなさい」と、Kは今ならまだ言うこともできた。だが彼は、書類を持つて部屋の真ん中に立ち、まだ扉をじつと見ていたが、扉は二度とは開かず、やがて監視人たちに声をかけられてびっくりした。二人の男は開いた窓ぎわの机にすわつており、Kが気づいたときには、彼の朝飯を食つていた。

「なぜあの人のはいらなかつたんです?」と、彼はきいた。

「はいっちやいけないんだよ」と、大きいほうの監視人が言つた。
「君は逮捕されているんだからな」

「いつたいどうして逮捕なんかされているんです? しかもこん

なやりかたで？」

「ああ、また始まつたね」と、その監視人は言い、バタパンを蜜の壺に浸した。「そんな質問には返答しないよ」

「答えてもらわなくちゃなりません」と、Kは言つた。「これが私の身分証明書です、今度はあなたがたのを見せてください、それに何よりもまず逮捕状をね」

「冗談言うな！」と、監視人は言つた。「君は君の立場に往生でききず、今君のすべての仲間の中でも明らかにいちばん身近にいるおれたちを無益に怒らせるつもりだつたらしいな」

「そうだ、君も観念したほうがいいぜ」と、フランツが言い、手にしていたコーヒー茶碗を口もとへは持つてゆかずに、長々と、

いかにも意味ありげな、しかしどういうつもりなのかわからぬ眼ま
差ながしで、Kをじっと見つめた。

Kは思わず知らず、フランツと視線で渡り合っていたが、やがて書類をたたいて、こう言つた。

「これが私の身分証明書です」

「そんなものがなんだというんだ」と、大男の監視人がすぐさま叫んだ。「子供より行儀がわるいぞ。いつたいどうしようつていふんだ? われわれ監視人と身分証明書だとか逮捕状だとかのことで議論すれば、君のたいへんな、厄介きわまる訴訟がたちまち片づくとも思つてゐるのか? われわれは下したつ端ばなんで、身分証明書なんか知つたことじやないし、君を毎日十時間ずつ見張つ

てその報酬をもらうということ以外、何も君とは関係がないんだからね。これがおれたちの身分に関するすべてだ。それでもおれたちには、おれたちが仕えている偉い役所は、こんな逮捕をやる前には、逮捕の事由や逮捕人の身柄を非常に詳しく調べあげている、ということはわかるんだ。それに誤りなんかありやしない。

われわれの役所は、おれの知るかぎりでは、もつともおれはいちばん下の連中だけしか知らないが、何か住民のうちに罪を搜すんじやなくて、法律にあるとおり、罪のほうに引きつけられ、そしておれたち監視人をよこさざるをえないんだ。それが法律というもんだ。どこに誤りがあるんだ？」

「そんな法律つて知りませんね」と、Kは言つた。

「それだからなお困るんだよ」と、監視人が言つた。

「ただあなたがたの頭にだけある法律なんですよ」と、Kは言い、なんとかして監視人の考へていることのなかにはいりこみ、それを彼の都合のよいほうに向けるか、あるいはそれにもぐりこんで同化しようと思つた。ところが監視人はただ突き放すように言うのだった。

「今にわかるようになるよ」

フランツくちばしが嘴を入れ、

「おい、ウイレム、あいつは、法律を知らないって白状し、同時に、自分は無罪だつて言い張つてゐるぜ」

「まったくお前の言うとおりだが、あいつには全然わからせるこ

とはできやしないよ」と、もう一方の男が言つた。

Kはもう返事をしなかつた。こんな下つ端の連中——彼ら自身が、そうだ、と白状している——のおしゃべりでこれ以上頭を混乱させられる必要なんかあろうか、と彼は思つた。連中は、自分自身でもまつたくわからないことを言つてゐるのだ。落着きはらつてゐるのは、阿呆あほうだからこそのことだ。自分と対等の人間とほんの少しでも言葉を交わせば、万事は、こんな連中と長々しやべつていてるよりも比較にならぬほど明瞭めいりょうになるだろう。Kは二、三度、部屋の中のあいている場所を行つたり来たりしたが、窓の向うに、例の老婆が一人のもつと老いぼれた老人を窓ぎわに引つ張つてきて、抱きかかえるようにしてゐるのが見えた。Kはこん

な見世物になつてゐるのに我慢してはいられなかつた。

「あなたがたの上役のところへ連れていつてくれませんか」と、
彼は言つた。

「あちらが、そうしろ、と言われるならばね。それまではだめだ」と、
ウイレムと呼ばれた男が言つた。

「で、君に言つておくが」と、彼は言い足した。「部屋に帰つて
おとなしくしていて君についての指示が来るのを待つたがいいね。
つまらぬ考えでぼんやりしてないで、落着いているがいいぜ。そ
のうち大きな命令が君に下るよ。君はおれたちを、おれたちの親
切にふさわしいようには扱わなかつたね。おれたちは相も変らぬ
つまらぬ連中かもしれないが、少なくとも今は君に対しては自由

な人間だ、ということを君は忘れてるんだ。これはけつして少しばかりの優越じやないんだぜ。それでも、君が金を持っているなら、あの喫茶店から軽い朝飯ぐらいは取つてきてやるつもりはあるよ」

この申し出には答えず、Kはしばらくじつと立ち止っていた。隣の部屋の扉、あるいは控えの間の扉を開けてさえも、おそらく二人はあえて彼を阻止しないだろうし、極端にまでやつてみるとがおそらく最も簡単な、事の解決法であろう。けれど二人は彼につかみかかつてくるかもしれないし、一度たたき倒されたならば、現在彼らに対してある点ではまだ持ち続けている優越的地位をすべて失つてしまうのだ。それゆえ彼は、事の自然な成行きが

もたらすはずの解決の安全ということのほうを選び、部屋にもどつたが、彼のほうからも監視人のほうからも、もう一言も発せられなかつた。

彼はベッドに身を投げ、洗面台から見事な林檎りんごを取つた。昨晩、朝食のためにとつておいたものである。今のところこの林檎だけが彼の朝飯だが、一口大きくかじつて確かめたところでは、ともかく、監視人たちのお情けで手に入れるができるかもしけない、きたならしい喫茶店の朝飯よりはずつとましだつた。気分がよくなり、前途に期待が持てる気がした。この午前中は銀行の仕事を休むことになるが、それも、彼が銀行で占めているかなり高い地位からいえば、なんとでも言い訳がたつことだつた。ほんと

うの言い訳を述べるべきだろうか？　彼はそうしよう、と思つた。

その場合に大いにありうることだが、もし人が彼の言うことを信じないならば、グルウバツハ夫人、あるいはあちらの二人の老人を証人によることもできる。ところでこの二人の老人は、確かに今、向い合つた窓ぎわに歩みを進めているのだつた。監視の連中が彼を部屋に追いやつて、いくらも自殺する可能性のあるここにただひとり放つておくということは、Kには不思議に思えたし、少なくとも監視人たちの考えそうな筋道から言つて不思議であつた。もちろん同時に、今度は自分の考える筋道からして、自殺するというどんな理由があるのか、と自問してみた。あの二人が隣室にすわつており、自分の朝飯を平らげてしまつたから、とでも

いうのか？　自殺しようなどというのはばかげたことであるから、たといしようとしても、そのばかばかしさのために実行はできなかつたであろう。もし監視人たちの頭の足りなさがあんなにひどくないのであつたら、連中もまた、おれと同じ確信から、おれをひとりで放つておくということに危険を認めなかつたのだ、と考えることもできたのだが。連中は今、もし見ようと思うのなら、彼が、上等のブランデーを納めてある小さな戸棚とだなのところへ来て、まず一杯目を朝飯がわりに乾しほ二杯目のほうは元気をつけるためだときめている様子を、ながめていることだろうが、二杯目のほうはただ、実際にそんな必要があるというおよそありそうもない場合に備えてやつてゐるのだつた。

そのとき、隣室からの呼び声が彼をひどく驚かしたので、彼は歯をコップにぶつけた。

「監督が呼んでおられる！」と、いうことだつた。彼を驚かしたのは、ただその呼び声だけだつた。この短い、断ち切られたような、軍隊式の叫び声は、監視人のフランスのものとはまったく思えないのでつた。ところで命令そのものは、彼にはきわめて好ましかつた。

「どうどう来ましたね！」と、彼は呼び返し、戸棚をしめ、すぐ隣室へ急いで行つた。そこには二人の監視人が立つていて、当然だといわんばかりに、彼をまた部屋へ追い返した。

「冗談じやないぞ、え？」と、彼らは叫んだ。

「シャツを着たまま監督の前に出ようつていうのか？ そんなことをしたら、あの人は君をさんざんにたたきのめさせんぞ、それにおれたちも巻き添えだ！」

「ちえ、放つておいてくれたまえ！」と、もう洋服箪笥だんすのところまで押しもどされていたKは、叫んだ。「寝込みを襲つておいて、礼装して来いもあるもんか」

「なんと言おうとだめだ」と、監視人たちは言つたが、Kが大声で叫ぶと、まつたくおとなしく、いやほんと悲しげにさえなり、そのため、彼を当惑させ、あるいはいわば正気に返らせるのだった。

「ばかばかしい仰山さだ！」と、なおもぶつぶつ言つたが、すで

に上着を椅子から取上げ、しばらく両手で持ったまま、監視人たちの指図さしそくを求めているような格好になつた。二人は頭を振つた。

「黒の上着じやなくちやいけない」と、彼らは言つた。

Kはすぐさま上着を床に投げ、言つた。——彼自身、どんなつもりでこう言つたのか、わからなかつた。

「だつてまだ本審理じやないんだ」

監視人たちはにやりとしたが、主張はまげなかつた。

「黒の上着じやなくちやいけない」

「そうすれば事が早くすむのなら、それでもかまいませんよ」と、

Kは言い、自分で洋服箪笥をあけ、長いことたくさんの服をひつかきまわし、いちばんいい黒の服を選んだ。腰まわりの出来がよ

いので知人たちのあいだでほとんど大評判となつた背広である。

そして、別なシャツも引出して、念入りに着はじめた。風呂にはいれ、と無理強いすることを監視人たちが忘れたので、万事を早めることができたのだ、と心ひそかに思った。しかし二人がおそらくそのことを思い出すのではないかと様子をうかがっていたが、もちろん彼らにはそのことは思いつかなかつた。そのかわり、Kは着替えしております、という報告を携えてフランツを監督のところへやることを、ウイレムは忘れはしなかつた。

着物を完全に着てしまふと、ウイレムのすぐ前を通つて、空の隣室を抜け、次の部屋に行かねばならなかつた。扉は両側ともすでに開かれていた。この部屋には、Kもよく知つているとおり、

少し前からタイピストのビュルストナー嬢が住んでいるが、彼女は非常に早く仕事に出てゆくのがならわしであり、帰りも遅いので、Kとは挨拶^{あいさつ}以上にたいして言葉を交わしたことなかつた。ところが夜間用の小さな机がベッドのそばから部屋の真ん中に引張り出されて審理用の机にされ、その向うに監督がすわつっていた。脚^{あし}を組んで、片腕を椅子の背にかけていた。

部屋の隅^{すみ}には三人の若い男がいて、壁にかかつたマットに留めてあるビュルストナー嬢のさまざまな写真をながめていた。開いた窓の把手^{とつて}には、一枚の白いブラウスがかかっていた。向いの窓にはまた例の二人の老人がいたが、仲間がふえていた。というのは、彼らの背後に、ずっと背丈^{せたけ}の高い一人の男が、胸のはだけた

シャツ姿で立つており、赤みがかつた鬚^{ひげ}を指でおしたり、ひねつたりしていたからである。

「ヨーゼフ・Kだね？」と、監督はきいたが、おそらくはただ、Kのきよろきよろした眼差を自分に向けさせるためであつた。Kはうなずいた。

「今朝^{けさ}の出来事できつと非常に驚いたどううな？」と、監督はたずね、そう言いながら両手で、蠟燭^{ろうそく}とマッチ、本と針床といつた、まるで審理に必要な物でもあるかのように夜間用の小さな机の上にのつている数少ない品物を、わきへ押しやるのだつた。

「そうですね」と、Kは言つたが、ついに物のわかる人間に向い合つて、自分のことに関する話ができるのだ、という快い感情が

彼をとらえた。

「確かに驚きはしましたが、けつして非常に驚いたというわけで
もありません」

「非常に驚いたわけでもない？」と、監督はきき、机の真ん中に
蠅燭を立てて、そのまわりにはほかの品々を並べたてた。

「どうも申上げた意味を誤解しておられるらしいですが」と、K
は急いで述べたてようとした。

「つまり」——ここで彼は言葉を切り、椅子はないだろうかと、
あたりを見まわした。

「すわってもかまいませんか？」と、彼はきいた。

「それはできることになつている」と、監督は答えた。

「つまり」と、Kはこれ以上間まをおかずにはしゃべりはじめた。

「もちろん非常に驚きはしましたが、人間三十にもなると、そして、私がそういう運命にあつたように、孤軍奮闘しなければならなかつたとすると、驚きなんていうものには鍛えあげられ、たいして苦にもしなくなります。ことに今日の出来事のようなのにはそうです」

「なぜ、ことに今日の出来事のようなのにはそうなんだ？」

「事のすべてを冗談だと見ている、と言うんじゃないのです。冗談にしては、やられた道具だてがおおげさすぎますからね。アパートの住人みな、そしてあなたがたも、事に加担しておられるようですし、こうなると冗談の範囲を超えていきますからね。だから、

冗談なんだ、と言うつもりはありません」

「まつたくそうだ」と、監督は言い、何本マツチがマツチ箱のなかにあるのか、数えていた。

「しかし一面、この事件はたいして重要性を持つてはいません。そう推論できるのは、私は告発されてはいるものの、私が告発されるような罪は、少しも見つけだせないからです。しかし、それも二の次です。問題は、誰に告発されたのか、ということです。どの役所が手続きをやっているのか？　あなた方は役人なのか？　どなたも制服は着ておられないし、あなた方の服は」——ここで彼はフランスのほうを向いた——「制服とは申せませんからね。どうみても、むしろ旅行服といったものです。こうした疑問に明

瞭なご返事を願いたいと思います。これがはつきりすれば、お互
いにきわめて気持よくお別れできる、と確信します」

監督はマツチ箱を机の上に置いて、言つた。

「君はたいへん間違つてゐる。ここにおられる方々も私も、君の
事件についてはまったく枝葉の存在なんだ。実のところ、それにつ
いてはほとんど何ひとつ知つてはいやしない。われわれは規則
どおりの制服を着ることもできようが、それで君の事件がどうな
ろうというものじやない。君が告発されてゐるなどということは、
私はまったく言えないし、あるいはむしろ、いつたい君が告発さ
れているのかどうかさえ、知つてはいないのだ。君が逮捕された、
ということは確かだ。それ以上は知つたことじやない。おそらく

監視人たちが何かよけいなことをしやべったかもしれないが、それならそれはただのおしゃべりだ。君の質問にはお答えしないが、われわれのことや、君にこれから起るかもしれないことやにはあまり頭を使わないで、それよりか君自身のことを考えるほうがよい、と忠告しよう。自分は潔白だという気持でこんな騒ぎをやらないことだな。君がほかのことでは与えているとしてわるからぬ印象を、ぶちこわしてしまうからね。それにまた、およそ口をもつと慎むことだ。君がこれまでしやべったことはほとんどみな、ただほんの一言二言にとどめておいても、君の態度からしてわかつたことだろうし、そのうえ、君にとつて格別有利なものでもなかつたからね」

Kはじつと監督を見た。見かけたところ年下らしい男から、ここで杓子定規の説教をされるのか？公明正大に言つたおかげで、訓戒されるわけか？そして、逮捕理由についても命令の出し主についても、何も聞かされないのか？彼は一種の興奮状態に陥つて、あちこちと歩くのだつたが、誰もその邪魔をする者はなく、彼はカフスを引つこめたり、胸のあたりにさわつたり、頭髪をなで直したりし、三人の男の前を通りながら、言つた。

「まつたくばかげたことだ」

これを聞いて三人は彼のほうを向き、言うことは聞いてやるがという様子だが、真剣な顔つきで、彼をじつと見た。Kは最後にまた監督の前で立ち止つた。

「ハステラー検事は私の親友なんですが」と、彼は言つた。「電話をかけてかまいませんか?」

「よろしい」と、監督は言つた。「だが、電話をかけることにどんな意味があるのかは私にはわからないが、まあ、個人的な用事で検事と話さねばならないんだろうな」

「どんな意味かわからないですって?」と、Kは腹をたてたとい
うよりは啞然^{あぜん}として叫んだ。

「あなたはいつたい何者です? 意味などと言つているくせに、およそありうるかぎり無意味なことをやつているじゃないですか? かわいそなくらいばかげたことじやありませんか? この方々がまず私を襲つたのに、今はこの部屋であちらこちらに立つ

たりすわつたりしてて、あなたの面前で私に高等馬術をやらせて
いるんです。私は明らかに逮捕されているらしいが、検事に電
話することがどんな意味を持つていてるか、と言われるんですか？
よろしい、電話はかけますまい」

「だがまあそう言わずに」と、監督は言つて、電話のある控えの
間のほうに手を伸ばし、「どうぞ、電話をかけたまえ」

「いや、もう結構です」と、Kは言い、窓ぎわへ行つた。

向うでは連中がまだ窓ぎわにいたが、今やつと、Kが窓ぎわへ
寄つたので、静かにながめていることを少しばかり邪魔された様
子だつた。二人の老人は身体からだを起そうとしたが、彼らの後ろの男
が制していた。

「向うには向うで、あんな見物がいるんです」と、Kは大声で監督に向つて叫び、人差指で外を示した。

「そこからどけ！」と、彼は窓向うにどなつた。

三人のほうもすぐ二、三歩退き、そのうえ、二人の老人は男の後ろにまわつたが、男は二人の老人をその幅広い身体でおおい隠し、その口の動きから判断するのに、遠くてよくはわからないが何か言つてゐるらしかつた。しかし、彼らはすつかり見えなくなつてしまつたのではなく、そつとまた窓ぎわに近づくことのできる瞬間をねらつてゐるらしかつた。

「あつかましい、遠慮のないやつらだ！」と、部屋のほうに振返りながら、Kは言つた。Kが横眼で見取つたところでは、監督も

おそらく彼の言うことに同感だつたらしかつた。しかしました、全然彼の言うことに耳をかしていないうにも思えた。というのは、片方の手をしつかりと机の上に押しつけ、指の長さをそれぞれ比べてみている様子だつたからである。二人の監視人は飾り布でおつたトランクに腰をかけ、膝ひざをこすつていた。三人の若い男が手を腰にあてて、ぼんやりとあたりを見ていた。どこか忘れられた事務室でのように静かであつた。

「さて、みなさん！」と、Kは叫んだが、一瞬のあいだ、三人全部を肩に背負つているように思えた。「あなたがたのご様子では、私についての用件は終つたものと考えてよさそうですが。私の意見では、あなたがたの行動が正しかつたか、正しくなかつたか、

というようなことをもうこれ以上考えずに、互いに握手し合つて事を円満に決着することがいちばんよいように思われます。あなたがたも私と同意見でいらっしゃるなら、どうか——」

そう言つて彼は、監督の机に歩み寄つて、手を差出した。監督は眼を上げ、唇を噛んでKが差出した手を見ていた。監督は応じてくれるものと、Kはまだ思いこんでいた。ところが監督は立ち上がると、ビュルストナー嬢のベッドの上に置かれた、硬くて円い帽子を取上げ、新しい帽子をためすときやるように、両手で念入りにかぶりながら、「君は万事をなんて単純に考えているんだろう！」と、Kに言つた。「円満に事を決着する、と言うのかね？いや、いや、ほんとうにそうはいかないよ。もつともそうか

といつて、君を絶望させるつもりは少しもない。いや、そんなことをどうしてしよう？　ただ君は逮捕された、それだけの話だ。

そのことを君に知らさねばならなかつたので、そうしたまでだし、君がそれを受入れたということも見てとつた。それで今日のところは十分だし、お別れもできる。もちろんしばらくのことだがね。きつと君は、もう銀行に行きたいところだろうね？」

「銀行ですつて？」と、Kは言つた。「私は逮捕されたんだ、と思つていましたよ」

Kはちよつと居丈高になつてきいた。というのは、彼の申出た握手は受け入れられなかつたけれども、ことに監督が立ち上がりてからは、この連中のすべてからいよいよ拘束されていない立場

にある自分を感じたからである。彼はこの連中と戯れるのだった。
彼らが立ち去るときになつたら、玄関まで追つかけてゆき、私は
逮捕されているのですが、と言つてやる下心だつた。そこで彼は
また繰返した。

「逮捕されたんですから、どうして銀行へ行けましょう」

「ああ、そのことか」と、すでに戸口にいた監督は言つた。「そ
れは君の考え方違いだよ。君は逮捕された、確かにそうだが、それ
は君が職業をやつてゆくことを妨げはしないんだ。今までどおり
の暮しかたをしても、ちつともかまわないんだ」

「それじゃあ逮捕されるのも、たいしてわるいことじやありません
んね」と、Kは言い、監督のそばに近づいた。

「初めからそう言つてはいるはずだ」と、監督は言つた。

「しかしそれなら、逮捕通知もたいして必要でなかつたようですが」と、Kは言つて、さらに近くへ寄つていつた。ほかの連中も近寄つてきた。皆が狭い部屋の扉のところへ集まつた。

「それは私の義務だつたのだ」と、監督が言つた。

「ばかりしい義務ですね」と、Kは負けてはいずに言つた。

「そうかもしない」と、監督が答えた。「だが、こんな話で時間をつけしたくない。君が銀行に行くものとばかり私はきめこんでいた。君はあらゆる言葉を気にしているので言つておくが、銀行に行くように君を強制するつもりはないんで、君が行きたいと思つているときめこんだけのことだ。そして、君が気軽に出て

けられ、銀行に出てもできるだけ目だたぬようにするため、君の同僚の三人の方々を君のためにここへお連れしてきてある

「なんですか？」と、Kは叫び、三人をまじまじとながめた。

このなんの特徴もない、貧血の若い男たちは、写真を撮つたとき

^と

の仲間としてだけ今も記憶に残つてゐるのだが、事実彼の銀行の

行員だが、同僚というわけでなく、同僚などというのはおおげさ

な話で、監督の全知全能ぶりにはすきがあることを示してゐるの

だつたが、ともかく彼らは銀行の下つ端の行員にはちがいなかつ

た。どうしてKは彼らに気づかなかつたのだろうか？ この三人

に気づかなかつたなんて、なんと監督や監視人たちに気をとられ

ていたことだろう！ 身体つきのぎごちない、両手をぶらぶら振

つて いる ラーベン シュタイナー、**金壺眼**^{かなつぼまなこ} の ブロンド の クリヒ、慢性の筋肉引きつりのため 気味の悪い 薄笑い を 浮べて いる カミナ
।。

「お早う」と、Kはしばらくして言い、きちんと頭を下げる三人に手を差伸べた。

「僕は君たちにちつとも気がつかなかつた。それじや、仕事に岡かけようか?」

三人は笑いながら、ずっとそれを待ちもうけてでもいたかのように氣を入れてうなずき、ただKが帽子を部屋に取残して手にしていないのに気づくと、彼らは皆相次いで取りに走つていつたが、その様子からは、ともかくある種の当惑ぶりというものが想像さ

れるのであつた。Kは黙つて立つたまま、二つの開いた扉を通つてゆく後ろ姿を見ていたが、いちばん^{あと}後は、もちろん、気のはいつていないうーべンシユタイナーで、彼は格好のよい早足をやつてみせるだけだつた。カミナーが帽子を渡したが、Kは自分に、これはともかく銀行でもしばしばせざるをえないことだつたが、カミナーの薄笑いはそうしようと思つてやつているのではない、いやおよそ彼は、自分でやろうと思つて薄笑いなど浮べることはできないのだ、と言つて聞かせた。次に控えの間でグルウバツハ夫人が一同に玄関の扉を開けたが、彼女はまつたくたいして責任を感じてはいないように見受けられた。そしてKは、いつもと同じように、不必要に深く彼女の大きな団^{づうたい}体に食いこんでいる工

プロンの紐^{ひも}を、見下ろした。表でKは、時計を片手にして、もう半時間にもなる遅刻をこれ以上不必要に延ばさないように、自動車に乗ろうと決心した。カミナーは、車を呼ぶために角まで走つてゆき、ほかの二人は明らかに、Kの気をまぎらそうと努めるのだったが、突然クリヒが筋向いの家の戸口を示した。そこにはちょうど、例のブロンドの鬚^{ひげ}の大男が姿を見せ、図体をすっかり見せてしまつたことに最初の瞬間は少し当惑して、壁のところまで引っこみ、そこにもたれていた。二人の老人はまだ階段を降りてくるところだつた。自分がすでに先刻見つけ、そのうえ現われるだろうと期待さえしていた例の男をクリヒが指さしたこと、Kは立腹してしまつた。

「あんなところを見るんじゃない！」と、大声で叫んでしまい、一人前の男たちに対してこんな物の言いかたをすることがどんなに目だつことかに、気づくことさえなかつた。だが弁解の必要もなかつた。ちょうど自動車が来たからである。彼らは車に乗り、走りだした。そのときKは、監督と監視人たちとが帰つてゆくのに全然気づかなかつたことを思い出した。監督に気を取られて三人の行員を見そこない、今度はまた行員たちに気を取られて監督を見失つたのだつた。こんなことではあまり気を配つているとは言えないし、この点でもつと精密に観察しよう、とKは決心した。しかし、彼は思わず知らずのうちに振向き、自動車の背のクツシヨンの上へ身体を曲げ、できればまだ監督と監視人たちが見えな

いか、とうかがつてみた。しかし、すぐにまた向き直り、ゆつたりと車の片隅かたすみによりかかつて、誰か相手を求めようとすると試みさえもしさしなかつた。今のところ話しかける必要がある様子もなかつたが、三人の行員たちは疲れているようであり、ラーベンシユタignerは右側、クリヒは左側で、車の外をながめ、ただ力ミナーだけが例のごとくにやにやして、なんでもいたしますという面持だつた。こんなのをからかうことは、残念ながら人情としてできることだつた。

この春Kは、できれば——というのはいつもたいてい九時までは事務室にすわつていたからだが——仕事のあと、ひとりでかあ

るいは行員たちといつしょに、ちょっとした散歩をし、そのあと
であるビヤホールに行き、年配の紳士が多い常連のテーブルの仲
間にはいつて、普通、十一時まですわるというふうにして、夜分
を過す習慣だつた。しかし、たとえばKの仕事の力 億 りきりょうと信頼
できる点とを非常に評価している支店長にドライブに誘われたり、
あるいはその別荘での晩餐 ばんさんに招かれたりするときには、こんな
時間の割り振りにも例外があつた。そのほかにKは、一週に一度、
エルザという女のところへ行くが、夜じゅう通して朝も遅くまで
或る酒場に勤めている女で、日中に訪ねると、きまつてベッドに
いて迎えるのだった。

しかしこの夜は——日中は仕事に追われ、また丁重で親しげな

誕生日の祝いを言わせながらたちまち過ぎ去つてしまつたが——
Kはすぐ家に帰ろうと思つた。昼間の仕事のちよつとした合間に、
彼はそのことを考えていた。いつたいなぜこんなことを考へるの
かはつきりとはわからなかつたが、今朝の出来事のためにグルウ
バツハ夫人の家全体に大きな混乱が引起され、秩序を回復するた
めにはまさに自分が必要なようと思われるのだつた。しかし、こ
の秩序が一度回復されれば、あの出来事のあらゆる痕跡こんせきは消え
てなくなり、万事は元どおりになることだらう。ことに例の三人
の行員については何も恐れる必要はなく、彼らはまた銀行の大勢
の勤め人仲間のうちに埋もれてしまい、彼らにはなんらの変化も
認められなかつた。Kはときどき彼らを、一人あるいは三人いつ

しょにというふうに、自分の事務室に呼んでみたが、彼らの様子をうかがう以外の目あてもなかつたのだつた。ところが、いつでも安心してかえすことができた。

夜の九時半に、住んでいる家の前に来ると、入口で一人の若い男に出会つた。その男はそこで足を踏んばつて立つており、パイプをふかしていた。

「どなたですか？」と、Kはすぐたずね、顔をその若い男に近づけたが、玄関の薄暗がりのなかではよくは見えなかつた。

「門番の息子です、旦那」と、若者は答え、パイプを口から放して、わきへどいた。

「門番の息子だつて？」と、Kはきき、ステッキでいらっしゃした

ように床をたたいた。

「旦那、ご用でしようか？ 親爺おやじを呼んできましようか？」

「いや、いいよ」と、Kは言つたが、その声のなかには、この男がある悪事をやつたのだが自分はゆるしてやるのだ、というような何かゆるすような調子が含まれていた。

「もういいよ」と、彼は言い、歩みを進めたが、階段を登る前に、もう一度振向いた。

まっすぐ自分の部屋へ行つてもよかつたが、グルウバツハ夫人と話したくなつて、すぐ彼女の部屋の扉をたたいた。夫人は靴下を編みながら机のそばにすわり、机の上にはさらに一山の古靴下がのつっていた。Kはどぎまぎして、こんなに遅くお邪魔してすみ

ません、と申し訳をしたが、グルウバツハ夫人は非常に愛想よく、そんな申し訳は聞きたくないというふうで、あなたならいつでも、お話ししてよい、私があなたを間借りのうちいちばんよい、いちばんりっぱな方だと思つていることはよくご存じでしょう、と言うのだった。Kは部屋を見まわしたが、また完全に元どおりになつていて、朝には窓ぎわの小さな机の上にのつていた朝飯の道具も、すでに片づけられてあつた。

「女の手というやつは、こつそりと多くのものを片づけるものだと、思つた。自分ならおそらく道具を即座にたたき割つてしまつて、部屋から運び出すことなどはきっとできるものではなかつたろう。彼はグルウバツハ夫人を感謝めいた気持でじつと見つめた。

「なぜこんなに遅くまでお仕事をなさるんです?」と、彼はたずねた。

二人とも机にすわり、Kはときどき手を靴下のなかへ突つこんだ。

「仕事が多うござんしてね」と、彼女は言つた。「昼間は間借りの方々にかかりきりですし、自分の仕事を片づけておこうとするど、どうしても夜分だけしかありません」

「今日はさだめしよけいな仕事をおさせしましたろう?」

「どうしてですか?」と、夫人はたずね、いくらか真顔になつて仕事の手を膝^{ひざ}に休めた。

「今朝ここにいた連中のことです」

「ああ、のこと」と、彼女は言い、また平静にかえつて、「た
いして手のかかることではありますんでしたわ」

Kは黙つて、靴下編みをまた始めた夫人をながめた。のこと
を言つたので、彼女は不審に思つてゐるようだ、のことと言つ
たのを変なふうにとつてゐるらしい、と思つた。それだけに、
のことを言うことが大切なのだ。年配の婦人とだけあのことを話
すことができる。

「いや、きつとお手数をおかけしました」と、彼は言つた。「し
かし、あんなことはもう二度と起りますまい」

「ええ、あんなことは二度と起りませんよ」と、励ますように言
い、ほとんど悲しげに彼に微笑みかけた。
ほほえ

「ほんとうにそうお思いですか？」と、Kはたずねた。

「そうですとも」と、彼女は低い声で言つた。「けれど何より、
のことあまりむずかしくお考えになつてはいけませんわ。こ
の世の中では何が起るかわかつたものじやありませんもの！ K
さん、あなたがうちとけて私とお話しくださるので、私もつつま
ず申しますが、私は扉の後ろでちよつと盗み聞きしましたし、
二人の監視人たちも私にいくらか話してくれましたの。なにしろ
あなたのご運に関することですし、ほんとうに私の気にかかるこ
とですもの。そりやあ、私には出すぎたことでしょうよ、なにし
ろ私は下宿の女将おかみにすぎませんからねえ。ところで、少し監視人
から聞いたと申しましたが、何かとりたててわるいことがあつた

とは、申せません。そんなことはありませんでした。逮捕されたと言いましても、泥棒なんかで逮捕されるのとはちがいますものねえ。泥棒のように逮捕されるんなら、わるいことですが、あなたの逮捕は——。そう、何か学問めいた感じですわ。もし何かばかげたことを申上げたなら、おゆるしください。私には何か学問めいた感じですわ、もちろん私にはよくわかりませんし、誰もわかるはずがないんですけれど」

「おっしゃつたことはばかげたことじやありませんよ、グルウバツハさん。少なくとも私も部分的にはあなたと同じ考え方です。だが私はこのことをあなたよりも鋭く判断しますから、私は簡単にそれを何か学問めいたことなどとは少しも考えないで、およそ無

意味なことだと考えるんです。私は急に襲われたつていうわけです。もし眼がさめたらすぐ、アンナが来ないことなどに惑わされずに起き上がり、邪魔にはいる人間なんかに眼もくrezにあなたのところへ行き、今朝は番外に台所ででも朝飯を食べ、着物はあなたに私の部屋から持ってきていただいたら、つまり理性的に振舞っていたなら、それ以上のことは何も起らず、起るはずのいつさいのことが防がれたことでしょう。でも心構えが全然できていなかつたんです。たとえば銀行でなら心構えもできており、こんなことは起りようもないんです。自分の小使がいるし、外線と社内との電話が眼の前の机の上にあるし、顧客や行員がひつきりなしにやってきます。そのうえ、何よりも肝心なことですが、銀

行ではいつも仕事とつながりがあり、そのためいつも頭が働いていて、こんな仕事の相手をさせられることは、まったく楽しみみたいなんです。だが、事はすんだのですし、私もまったくこれ以上あんなことについてお話ししたくはありません。ただ、あなたのご判断、物わかりのよいの方の判断というものをお聞きしたいと思つたのです。私たちの意見が一致したことによろこんでいます。では私に手をお出しください、こんなに意見が一致したからは、手を握り合つてその気持を強めなくてはなりますまい」

夫人は手を差出すだろうか？ 監督のやつは手を差出さなかつたが、とKは考え、夫人を前とは変つて探るようにじつと見つめた。彼が立ち上がつたので、彼女も立ち上がつたが、Kが言つた

ことが全部はのみこめなかつたので、少しこだわつてゐる様子だつた。このこだわりのため、彼女は、自分で少しも言おうとは思わなかつた、そしてその場にまつたくそぐわぬようなことを、口走つてしまつた。

「どうかそうむずかしくお考えにならないでください、Kさん」と、彼女は言い、泣き声になつて、もちろん握手などは忘れていた。

「私は何もむずかしくなぞ考えてはいないとりますが」と、Kは言い、突然疲れを感じ、この夫人の同意などは意味がないとうことをさとつたのだつた。

扉のところで彼はさらにたずねた。

「ビュルストナーさんはおりますか？」

「いらっしゃいません」と、グルウバツハ夫人は言い、この素つ
気ない返事に気づいて、おくればせながら物のわかつたような氣
持をこめて、微笑んでみせた。

「の方はお芝居ですわ。何かご用ですか？ 私からお伝えして
おきましょうか？」

「いや、ちよつとあの人とお話ししようと思つただけです」

「残念ですが、いつもお帰りかわかりませんわ。芝居にいらつしや
ると、いつもお帰りが遅いんでね」

「いや、どうでもいいんです」と、Kは言い、頭を垂れて扉のほ
うにくるりと向き、出ようとした。「あの人の部屋を今日使つた

ことをおわびしようと思つただけです」

「それにはおよびません、Kさん、あなたは氣を使いすぎますわ。あの人は何もご存じありませんし、朝早くから出かけているうちに、もうすっかり片づきました。ご自分でごらんになつてください」

そして、彼女はビュルストナー嬢の部屋の扉を開いた。

「結構です、よくわかっています」と、Kは言つたが、開いた扉のところまで行つていた。

月が静かに真つ暗な部屋のなかにさしこんでいた。見たところでは、実際、万事元のままで、ブラウスももう窓の把手^{とつて}にはかかるなかつた。ベッドの布団^{ふとん}が目だつて盛り上がりついて、一

部分が月光を浴びていた。

「あの人によく夜遅く帰つてきますね」と、Kは言い、その責任はあなたにある、というようにグルウバツハ夫人を見つめた。

「どうしても若い人たちはそうですわ！」と、グルウバツハ夫人は言い訳をするように言つた。

「確かにそうですね」と、Kは言つた。「でも極端になりがちですよ」

「そうですね」と、グルウバツハ夫人は言つた。「あなたのおつしやるとおりです、Kさん。おそらくこの人の場合もそうでしょう。ビュルストナーさんのことわるく言うつもりはほんとうにありません。あの人はよい、かわいい娘さんですし、親切で、き

ちんとし、時間もしまりがあり、よく働きますから、万事たいへん感心しているんですが、もつと自分に誇りを持ち、慎みがなくてはならないということだけはほんとうですわ。今月になつてもう二度も、場末の通りを男を変えて歩いているのを見ました。Kさん、あなただけに申しますが、私はほんとうにいやな気持がしました。けれど、そのうちあの人人に面と向つてこのことを言うことに、どうしてもなるでしょう。それに、私にあの人のことを見つめさせるのは、何もこのことだけではありませんわ」

「それはまったく見当ちがいですよ」と、怒つて、ほとんどそれを隠すのを忘れて、Kは言つた。「それにあなたは、私があの人のことについて言つたことを明らかに誤解なすつたようですね。

そんなつもりで言つたんじゃないんです。はつきり言つておきま
すが、あの人に何かそんなことを言つちやいけませんよ。あなた
は全然間違つておられる。私はあなたのことをよく知っています
が、あなたが言われたことはまつたく嘘うそです。まあ、どうもこれ
は言いすぎたかもしません。何もあなたの邪魔をするわけじや
ないですから、なんなりとあの人におつしやつたらいいでしょ
う。おやすみなさい」

「Kさん」と、グルウバツハ夫人は嘆願するように言つて、彼が
もうあけている扉のところまで、急いで追いかけてきた。「ほん
とうのところまだあの人には話を持ち出そうとは思つていません。
もちろん、その前にもつとよくあの人のことを見ようと思うんで

すけれど、私の知つていることをあなたにだけお打明けしたんです。結局のところ、こう考えるのは、自分の下宿をきれいにしておきたいと思う家主の誰でもの気持ちにちがいありません。そして私のつもりもそれとは少しもちがわないんですね

「きれいにだつて！」と、Kは扉の隙間すきまから叫んだ。「もし下宿をきれいにしておこうと思われるなら、まずこの私に立ちのきを言わなくちゃならないでしょう」

そして彼は扉をぴしやりとしめ、低いノックの音にはもうおかまいなしでいた。

だが、全然眠たくないのでも、まだ起きていて、ビュルストナー嬢が何時に帰つてくるかをこの機会に確かめよう、と決心した。

それからまた、あまりよいことではないが、またあの女と一言二言話すことも、おそらくできるだろう。窓ぎわで横になつて、疲れた眼を押えると、グルウバツハ夫人を罰してやろう、ビュルストナー嬢を説き伏せて、いつしよにこの家を出てやろう、ということさえ一瞬頭に浮ぶのだった。しかしすぐに、そんなことをするのはおそろしくやりすぎだと思われたし、今朝の出来事のために住居を変える気になつた自分というものに対して、疑念さえも覚えた。これよりも無意味で、ことに無益でばからしいことは、何もないだろう、と思うのだった。

人けのない通りをながめることに飽きたとき、この家にはいつてくる者がすぐソファから見えるように、控えの間の扉を少しあ

けてから、ソファの上に身を横たえた。およそ十一時まで、葉巻を一本ふかしながら、ソファの上に静かに横になっていた。それからあとは、もうそこにじつと待つてはいられなくなり、少し控えの間にはいった。こうすれば、ビュルストナー嬢の帰宅を早めることができるように思われたのだつた。特に彼女を求める気持はなかつたし、どんな格好の女だつたかけつして詳しく思い出せもしなかつたが、今は彼女と話がしたく、帰りが遅いため今日といふ日の終らぬうちに不安と混乱とを彼女がもたらしたことが、彼をいらつかせた。今晚の食事を食べもしないで、今晚に予定していたエルザを訪ねることもやめてしまつたについては、彼女にも責任があるのだ。もちろん、今からでもエルザの勤めている酒

場へ行けば、この二つのことは取返しがつく。それはもつと後で、
ビュルストナー嬢と話が終つてからにしよう、と思つた。

十一時半を過ぎたとき、誰かの足音が階段のところで聞えた。
考えに没頭し、自分の部屋でもあるかのように足音高く控えの
間をあちこち歩いていたKは、自分の部屋の扉の背後に逃げた。
やつてきたのは、ビュルストナー嬢だつた。寒気を覚えながら、
扉をしめるとき、絹のショールを細い肩に締めつけた。この機を
失すれば、彼女は自分の部屋にはいつてしまい、真夜中なので、
きつとKはそこへ押し入ることもできないだろう。そこで今こそ
声をかけるべきときだつたが、自分の部屋の電燈をつけておくこ
とを運わるく忘れていたので、暗闇から出てゆくことは、まる

くらやみ

で襲いでもするような格好になり、少なくとも相手を非常に驚かすことになつたにちがいなかつた。途方にくれ、また一刻の猶予もならなかつたので、彼は扉の隙間から小声で呼んだ。

「ビュルストナーさん」

それは呼びかけているのではなく、嘆願の調子だつた。

「どなたかいらつしやるの？」と、ビュルストナー嬢はたずね、大きな眼をしてあたりを見まわした。

「私です」と、Kは言つて、姿を現わした。

「ああ、Kさんでしたの！」と、ビュルストナー嬢は微笑みながら言つた。

「今晚は」と、彼女はKに手を差出した。

「あなたにちょっとお話ししたいことがあるんです、今でよろしいでしようか？」

「今ですか？」と、ビュルストナー嬢はたずねた。「今じゃなくちやいけませんの？ 少し変じやありません？」

「九時からお待ちしていたんです」

「でも、私は芝居に行つていました。あなたがお待ちだなんて少しも存じませんでしたわ」

「お話ししようということの動機になつているのは、今日初めて起つたことなんです」

「それじゃ、倒れるほど疲れてはいますけれど、それ以外にはどうしてもお断わりする理由もありませんから、ほんの少しだけ私

の部屋に来ていただきましょう。こんなところでは絶対にお話もできませんし、みなさんをお起ししてしまうでしょう。そうなつたらほかの人たちのためというより、私たちのため不愉快なことになりますわ。私の部屋の明りをつけますから、それまでここでお待ちになつてちょうだい。それからこここの明りを消してくださいね」

Kは言われるままにしたが、なおしばらく、ビュルストナー嬢が彼女の部屋からもう一度小声で、はいるようにと求めるまで待つていた。

「おかげください」と、彼女は言い、安楽椅子を示したが、彼女自身は、疲れていると言つたくせに、ベッドの枠^{わく}_{ばしら}柱^{ばしら}のところ

へ立つたままであつた。小さいが花をいっぱい飾つてある帽子も、けつして脱がない。

「で、どんなご用ですか？ ほんとうにお伺いしたいですわ」

彼女は軽く脚を組んだ。

「あなたはおそらく」と、Kは言い始めた。「事柄は今お話しせねばならぬほど差迫つたことでないとお思いかもしませんが、しかし——」

「前置きなどはいつも聞きすゞしますわ」と、ビュルストナー嬢は言つた。

「それなら私のほうも気が楽です」と、Kが言つた。「あなたの部屋が今朝けさ、いわば私の責任なんですが、少しかきまわされた

んです。私の知らない連中の手で私の意に逆らつてやられたことですが、申上げたように、私のためにやらされたのです。それでおわびを申上げようと思つたのでした」

「私の部屋がですって？」と、ビュルストナー嬢は言い、部屋を見るかわりに、Kをまじまじとながめた。

「そうなんです」と、Kは言つて、二人はここで初めて互いに視線を交わした。「どういうふうにしてそれが行われたか、ということは全然申上げる価値がありません」

「でもそれがほんとうに伺いたいことですわ」と、ビュルストナーレ嬢は言つた。

「いや」と、Kは言つた。

「それじゃあ」と、ビュルストナー嬢は言つた。「私は別に秘密に立ち入りたいとも思いませんし、おもしろくないとおっしゃるなら、何も異議は申上げません。あなたが求めていらっしゃるゆるしどうのは、よろこんで差上げますわ、別にかきまわした様子も全然見受けられませんもの」

平手を腰の辺へぴつたり当てたまま、彼女は部屋のなかを一まわりした。写真のあるマットのところで立ち止つた。

「まあごらんなさい！」と、彼女は叫んだ。「私の写真がほんとうにごちやごちやですわ。いやですこと。それじゃあやつぱり、誰かが私の部屋にはいりましたのね。失礼ですわ」

Kはうなずいてみせ、単調で無意味なはしゃぎかたをどうして

も抑えられないでいるあの行員のカミナーのことを、心ひそかに呪つた。

「変なことですわ」と、ビュルストナー嬢が言つた。「留守のあいだに私の部屋にはいつてはいけないなんて、あなたご自身がよくおわかりでしょうに、私から申上げねばならないなんて」

「いや、つまり私が申上げたのは」と、Kは言い、自分も写真のところへ行つた。「あなたのお写真に手をかけたのは、私じやなかつたということです。あなたはお信じにならないでしょから申上げますが、審理委員会が三人の銀行員を引っ張ってきたんです。そのうちの一人は、近い機会に銀行から追い出してやろうと思つていますが、そいつが写真を実際手に取つたのです。そうで

す、審理委員会がここで開かれました」と、女が物問いたげな眼まことに差^{ながし}で彼を見つめたので、彼は付け加えたのだつた。

「あなたのためでですか？」と、女がたずねた。

「そうです」と、Kが答えた。

「そんなことありませんわ」と、女は叫んで、笑い声をあげた。

「でも」と、Kは言つた。「それじゃあ私が無罪だと信じてください

さるんですか？」

「さあ、無罪つて……」と、女は言つた。「たぶんゆゆしい判断をそうすぐには申せませんわ、それに私もあなたのことによく存じておりますけれど、すぐに審理委員会に押しかけられるなんていうだけでも、重罪人にきまっています。でもあなたは自由で

いらっしゃるんですから——少なくともあなたの落着いたご様子を拝見して、あなたは牢獄ろうごくから逃げてきたんではないって判断できますけれど——そんな犯罪をおやりになるはずはありませんわ」

「そうです」と、Kは言つた。「でも審理委員会は、私が無罪だ、あるいは考えられたほど罪はないのだ、とさとつたかもしません」

「きっとそうですね」と、ビュルストナー嬢はきわめて慎重に言った。

「ねえ」と、Kは言つた。「あなたは裁判沙汰ざたのことはたいしてござ存じじやありませんね」

「ええ、存じません」と、ビュルストナー嬢は言つた。「そしてこれまでしばしば残念に思つていましたわ。なぜつて、私はなんでも知つておきたいんですし、裁判のことなんかは特に興味があるんですもの。裁判というのは独特の魅力がありますわね？」

でもこの方面で私の知識はきっと完全なものになりますわ、来月になれば事務員としてある弁護士事務所にはりますから」

「そりやあ、たいへん結構です」と、Kは言つた。「そうなればあなたに少しは私の審理にお力添えいただけましょう」

「もちろん、できますわ」と、ビュルストナー嬢が言つた。「なぜできないということがありましょう？ よろこんで私の知つていることをご用だてます」

「まじめで申上げているんですよ」と、Kは言つた。「あるいは少なくとも、あなたがおつしやつてているのと同じ程度に半ばまじめで言つているんですよ。弁護士を引っ張つてくるには、事は少々小さすぎますが、できれば忠告者をよく利用しなければなりません」

「そうですね、けれど私に忠告者になつてくれとおつしやるんでしょう、問題は、いつたい何なののかを知らなければなりません」「それがまさにむずかしいんです」と、Kは言つた。「私自身がわからぬんです」

「ああ、それじゃ私をからかつていらつしやつたのね」と、ひどく失望した様子でビュルストナー嬢が言つた。「そんなことのた

めにこんな夜遅くを選ぶなんて、あんまりばかげていますわ」

そして、それまでずっと二人いつしょに立っていた写真のところから離れてしまつた。

「いや、そうじやありません」と、Kは言つた。「ふざけてなんかいるんじやありませんよ。私の言うことをお信じにならないつておっしゃるんですか！　私にわかっていることは、すでにあなたに申上げました。いや、私にわかっている以上にです。というのは、審理委員会なんていうものじやなかつたのですが、ただ私がそう勝手に名づけたのです。どうもどう言つてよいのかわからなかつたものですから。審理などは全然行われませんでした、私はただ逮捕されただけなんです、けれどある委員会の手で行われ

たことだけは確かです」

ビュルストナー嬢は安楽椅子にすわつていたが、笑い声をたてた。

「で、逮捕はどんなふうにして行されましたの？」と、彼女はきいた。

「恐ろしいことでした」と、Kは言つたが、今はそんなことなどは考えていないで、ビュルストナー嬢の様子にすっかり心を奪われていた。彼女は片手で顔をきさえ、——肘は安楽椅子のクツシヨンにのせていた——もう一方の手がゆるやかに腰をなでているのだつた。

「それじやあんまり月並みで、なんのことやらわかりませんわ」

と、ビュルストナー嬢が言つた。

「何が月並みすぎるとおっしゃるんです？」と、Kはたずねたが、すぐに思い出して、たずねた。「あのときどういう有様だつたか、あなたに申上げろとおっしゃるんですね？」

彼は動こうとしたが、立ち去ろうとはしなかつた。

「もう疲れてしましましたわ」と、ビュルストナー嬢は言つた。

「お帰りが遅いんですよ」と、Kが言つた。

「どうどうあげくの果てが、お叱りしかを受けるということになりましたのね。でも自業自得ですわ、なにせこんな時間にはあなたに来ていただくべきではなかつたんですから。それに、これまでにもうわかつたように、来ていただく必要もなかつたんですわ」

「必要だったのです。それはすぐわかつていただけだと思います」と、Kは言った。

「夜間用の机をベッドのところからこつちへ持つてきてもよろしいですか？」

「なんということをお思いつきになつたのです？」と、ビユルストナー嬢は言つた。「もちろんそんなことをしていただいては困ります！」

「それじやあ、あなたにお見せできないじやありませんか」と、その言葉によつて測り知れない損害をこうむつたように興奮しながら、Kは言つた。

「そうね、もし説明してくださるのに必要なら、机をほんのそつ

と動かしてください」と、ビュルストナー嬢は言い、しばらくしてからかなり弱々しい声で付け加えた。「疲れていたので、つい度を越したことをさせてしまつたわ」

Kは机を部屋の真つ只中に置き、その後ろにすわった。

「人物の配置を正しくのみこんでいただきます。それはたいへんおもしろいんです。私が監督とします。そこのトランクの上には二人の監視人が腰かけており、写真のところには三人の若い男が立っています。窓の把手には、私はただついでに言つておくのですが、一枚の白いブラウスがかかっています。そして今や、審理が始まります。ああ、私は自分のことを忘れていました。最も重要な人物、つまりこの私は、こここの机の前に立っています。監督

は脚を組み、腕を椅子の背にこうやつてだらりと下げ、ひどくのんびりとすわっている。無類の不作法者です。そして今や、ほんとうに審理が始まります。監督は、まるで私の眼をさまさなくてはならないというように大声をあげ、真っ向からどなりつけます。あなたにおわかりねがうためには、恐縮ですが私もここでどなつてみなければなりません。ところで、彼がこうやつてどなるのは、ただ私の名前だけなんです」

笑いながら耳を傾けていたビュルストナー嬢は、Kがどなるのをさえぎるために、人差指を口もとにあてたが、時すでに遅かつた。Kはすっかり役柄に没頭していて、ゆっくりと叫んだ。

「ヨーゼフ・K！」

それでも彼がおどかしたほどは大声ではなかつたけれども、その叫び声は、突然口をついて吐き出されると、ゆつくりと部屋のなかでひろがつてゆくように思われた。

そのとき、二、三度隣室の扉をたたく音がした。力強く、短かな、規則正しいノックだつた。ビュルストナー嬢は蒼あおくなり、手を胸にあてた。Kはなおしばらくのあいだ、今朝の出来事と彼がそれを演じてみせている相手のこの女と以外のことを何も考えることができなかつただけに、特にひどく驚いたのであつた。気が落着くやいなや、ビュルストナー嬢のところへ飛んでゆき、彼女の手を取つた。

「何もこわがることはありません」と、彼はささやいた。「万事

は私にまかせておきなさい。人がいるはずはありませんよ。この隣は空部屋で、誰も寝てはいませんよ」

「でも」と、ビュルストナー嬢はKの耳もとでささやいた。「昨日からあそこにはグルウバツハさんの甥おいの大尉の人が寝ていますわ。ちょうどどの部屋もあいてはいませんのよ。私も忘れていました。それなのにあんなにどなつたりなさって！　そのため私は具合がわるいことになりますわ」

「そんなことは全然ありませんよ」と、Kは言い、彼女がクツシヨンに倒れかかると、その額に接吻せつぶんした。

「どいて、どいて」と、彼女は言い、急いでまた身を起した。

「帰つてください、お帰りになつて。どうしようというおつもり

ですの、あの人は扉のところで聞き耳をたてていますわ、すつかり聞えますわ。なんて私に面倒をおかけになるの！」

「私は帰りませんよ」と、Kは言った。「あなたがもう少し落着かれるまでは、部屋の向うの隅すみに行つてください、あすこなら私たちの話すことが聞えませんから」

彼女はそこまで連れてゆかれるままになつていた。彼は言った。

「なるほどあなたにとつて不都合なことではありますようが、全然危険というようなことじやない、ということをあなたはよく考えてくださいなくちやいけません。ご存じのように、このことの鍵かぎを握っているグルウバツハさんは、そして特に大尉があの人の甥でありますからなおさらそうなるわけですが、あの人はたいへ

ん私を尊敬し、私の言うことはなんでも無条件に信じて いるのです。あの人は そ うでなくとも私の厄介になつています。かなりの金を私から借りたことがあるからです。私たちが同室したことに対する釈明については、少しでも辻 棲^{つじづま}が合うことならどんなことでも、あなたの申し出をお引受けしましよう。そして、グルウバツハさんを動かして、ただ人々に対する釈明を信じさせるばかりでなく、ほんとうに心からそれを信じさせることができるのです。その場合あなたは、私をけつして いたわつてはなりません。

私があなたを襲つたのだ、とい う噂^{うわさ}を広めてしまひたいとお思いなら、グルウバツハさんをそういうふうに教えこむことはわけはありませんし、そう信じこんでも私に対する信頼を失いつこはあ

りません。それほどあの人は私に傾倒しているんです」

ビュルストナー嬢は、黙つて、少し崩れた姿勢で、じつと床を見ていた。

「私があなたを襲つたのだ、とグルウバツハさんが信じたつてかまわないじやありませんか?」と、Kは言葉を継いだ。

すぐ眼の前に、彼女の髪毛かみのけ、分けられ、少しふくらみをつけ、しつかりとくくつた、赤みがかつた髪毛が、見えた。彼女が自分に眼差まなざしを向けるものと彼は思つたが、彼女は姿勢を変えないで言つた。

「ごめんなさい、突然ノックが聞えたためすつかり驚いてしまつたので、大尉がいることから起るかもしれない結果を恐れたわけ

じゃないの。あなたがどなられたあとたいへん静かになつたのに、そこへノックの音が聞えたものですから、あんなに驚いてしました。また私は扉の近くにすわっていたのですから、ほとんどすぐそばにノックの音が聞えたの。あなたのお申し出はありがとうございますが、私は結構ですわ。私の部屋で起つたことはすべて、私が責任を持ちます。しかも誰が何を言つてきましてもそうしますわ。もちろん、あなたのご好意はよくわかりますが、それと並んで、どんな私に対する侮辱があなたのお申し出のなかに含まれているかをお気づきにならないなんて、ほんとうに不思議ですわ。でも、もうお帰りになつて、私をひとりにしておいてください。今はさつき以上にひとりでいることが必要ですの。ほん

の二、三分とおつしやつたのが、もう三十分かそれ以上にもなりましたわ」

Kは彼女の手をとらえ、次に手首をつかんだ。

「お気をわるくしたんじやありませんか？」と、彼は言つた。彼女はその手をはずして、答えた。

「いいえ、どういたしまして。私はいつでも、どなたに対しても、氣なんかわるくはいたしませんわ」

彼はふたたび彼女の手首をつかんだが、今度ははずしもせずに、そのまま彼を扉のところまで連れていつた。Kは、帰ろうとしつかと心をきめていた。ところが、扉の前まで来ると、こんなところに扉があるなんて思いもしなかつたというような顔で止つてしまふ。

まい、ビュルストナー嬢はこの瞬間を利用してKから逃れ、扉をあけ、控えの間に滑りこみ、そこからKに小声で言つた。

「ねえ、ちよつとこつちに来てちようだい。ごらんになつて」——
——彼女は大尉の扉を示したが、扉の下からは明りがもれていた——
——「あの人は明りをつけて、私たちの様子をおもしろがつて聞いていたんだわ」

「どれ」と、Kは言い、飛びこみ、女をひつとらえて、口に接吻し、それから顔じゅうに接吻したが、まるで渴いた獸が、とうとう見つけだした泉の水に舌で飛びかかるような有様だつた。ついに彼は、喉のあるあたりの頸に接吻し、そこに唇を長いあいだ押しあてていた。大尉の部屋から物音が聞えたので、彼は眼を上げ

た。

「もう帰ります」と、彼は言い、ビュルストナー嬢の洗礼名を呼ぼうとしたが、知らなかつた。彼女は物憂げにうなずき、すでに半分ほど身体をそむけ、彼が手に接吻するままに呆然ぼうぜんとしてまかせていたが、次に身体をかがめて部屋へ帰つていつた。間もなくKはベッドの中に横たわつた。すぐ眠りこんでしまつたが、眠りにはいる前に、ほんのしばらく自分の振舞いを考え、満足を感じたが、もつと満足していいことが不思議だつた。大尉がいるため、彼はビュルストナー嬢のことを真剣に心配したのだつた。

第二章 最初の審理

Kは電話で、次の日曜日に彼の件についてちよつとした審理が行われる、ということを伝えられた。この審理は、おそらく毎日曜日ではないが、次々に再三規則正しく行われるだろう、と彼の注意が喚起された。一方では、審理をすみやかに終えることは誰もの利益はあるが、他方、審理はあらゆる点で徹底的でなければならず、といつてそれと結びついている努力を考えると、けつしてあまり長すぎてもいけない。それゆえ、次々に続くが、それは短い審理をやるという逃げ道を選んだ。審理日を日曜日にきめたのは、Kの職業上の仕事の邪魔をしないためである。貴君も同意されたものと仮定するが、もしほかの日をお望みなら、で

きるだけそれにそうようにはする。審理はたとえば夜でもよろしいが、夜ではきっと貴君の頭が十分冴えていないだらう。ともかく、貴君に異存がないかぎり、日曜日ということにしておく。むろんのこと、からず出頭してもらわなければならぬ、この点はきつと念を押す必要もなかろう、ということだつた。出頭すべき家の番地が教えられたが、それは、Kがまだ一度も行つたことのない、離れた郊外の通りであつた。

この通知を受取つて、Kは返事もせずに、受話器をかけた。彼はすぐさま、日曜日に出かけることにきめた。行くことはどうしても必要で、審理が始まつたし、自分のほうもそれに対抗しなければならぬ。この審理でもう最初の最後にしてしまわなければな

らぬ。彼はまだ考へこんで電話のところに立つていたが、そのとき背後で支店長代理の声がした。電話をかけようとしたのだが、Kが通路をふさいでいたのだつた。

「よくない知らせですか？」と、支店長代理は軽く言つたが、別に何かを聞き取ろうというためではなく、Kを電話から退かせるためであつた。支店長代理は受話器を取ると、電話が通じるのを待ちながら、受話器越しに言つた。

「ちよつと、K君、日曜の朝、私のヨツトでのパーティーにいらつしやつてくれませんか？　かなりの集りになるはずで、きっと君のお知合いもそのなかにはいるでしよう。特にハステラ－検事ね。来てくださいますか？　どうかいらっしゃつてください！」

Kは、支店長代理の言うことに注意をはらおうとした。それは彼にとつてつまらぬことではなかつた。というのは、彼とけつしてよい関係にはなかつた支店長代理のこの招待は、相手のほうから^{ゆうわ}の宥和策を意味するものであつたし、彼が銀行でどんなに重んじられるようになつたか、彼の友情、あるいは少なくとも彼の公平さが銀行で二番目に偉い人間にどんなに重んすべきことに思われているか、を示す事実であつた。この招待は、ただ電話のつながるのを待つあいだ受話器越しに言われたのではあつたが、支店長代理の謙譲にほかならなかつた。だがKは、第二の謙譲をもつてそれに報いなければならなかつたのだ。彼は言つた。

「ありがとうございます！　でも残念ですが、日曜日は時間があ

りません、先約がありますので」

「残念です」と、支店長代理は言い、向き直つて、ちょうど通じた電話でしゃべりはじめた。

短かな話ではなかつたが、Kはぼんやりしてそのあいだじゅう電話のそばに立ち続けていた。支店長代理が受話器を下ろしたときになつて初めて、彼はぎくりとし、必要もないのに立つていたことを少し言い訳するため、言つた。

「今電話がかかってきて、どこそこまで来いということだつたのですが、時間を言うのを先方が忘れたものですから」

「もう一度かけてきいたらどうですか」と、支店長代理は言つた。「たいしたことじやないんです」と、Kは言つたが、それによつ

て前の、それだけでもすでに^{て、}態をなしていない言い訳をいよいよ
まずいものにした。支店長代理は、歩きながらなおほかのことを
しゃべり、Kは無理に答えようとしたが、平日には裁判はすべて
九時に始まるのだから、日曜日は午前九時に行くのがいちばんよ
ろしいだろう、そんなことをおもに考えていた。

日曜日は陰鬱^{いんうつ}な天気だつた。Kは前の晩遅くまで常連と飲ん
だり騒いだりで例の酒場にいたので、ひどく疲れており、ほとん
ど寝すごすところだつた。じつくり考え、この一週間のあいだ考
え抜いたさまざまなプランをまとめあげる時間もなく、取急いだ
まま、着物を着て、朝飯を食べずに、指定された郊外へ急いだ。
奇妙なことに、あたりを見まわす余裕などはなかつたのに、彼の

事件に関係した銀行員のラーベンシュタイナー、クリヒ、カミナードと出会った。この前の二人は、電車に乗って、Kの行く道を横切つたのだが、カミナーはあるカフェのテラスにすわつていて、Kが通り過ぎると、物珍しそうに手すりの上に身体からだを乗り出した。三人とも彼の後ろ姿をじつと見送り、自分らの上役が急いでゆくことをいぶかつていた。Kが車に乗ることをやめたのは、ある種の依怙地いこじさというものだつた。この自分の件で他人の助けを借りることは、たといどんな小さなのであってもいやだつたし、誰をも求めたくはないし、そうすることによつてどんな些細ささいな点までをもきれいにしておきたかつたのである。しかし結局のところ、あまりに厳格に時間を励行することで審理委員会に對してへりく

だろうというつもりは、全然なかつた。ともかく彼は、今は、けつして一定の時間を指定されたわけではなかつたが、できるだけ九時に到着したいと思って、急ぎ足で行つたのだつた。

建物は、自分でもはつきりと想像してみることはできないがともかくなんらかの特徴で遠くからでもわかるだろうし、あるいは入口の特別な人の動きで離れていても見分けがつくだろう、と考えていた。ところが、彼が行くことになつていたユリウス通りは、Kがそのとつつきのところで一瞬立ち止つてながめると、両側ともほとんどまつたく一様な家々、高い、灰色の、貧しい人々の住む貸家ばかりが並んでいた。日曜日の朝なので、たいていの窓には人がいて、腕まくりの男たちがそこによりかかり、煙草をふか

したり、小さな子供を窓ぎわに用心深く、やさしくさせたりしていた。ほかの窓々には寝具がいっぱいまつていて、その上にときどき女のもじやもじやな頭が現われた。人々は互いに街路を隔てて呼び合い、そんな呼び声がちょうどKの頭上で大きな笑い声を引起した。長い通りには一定の間隔をおいて、道路の高さよりも低いところにあつて二、三段降りると行き着く、さまざまに日用品を売る店が並んでいた。それらの店へ女たちが出入りをしたり、階段の上に腰かけてしゃべつたりしていた。品物を窓に向つて差出している果物屋くだものやがいたが、その男もKもついうつかりして、その手押車でKは危うく押し倒されるところだつた。ちょうどそのとき、もつと豊かな住居街で使い古した蓄音器が、ひ

どく鳴りはじめた。

Kは、ここまで来れば時間は十分ある、予審判事がどこかの窓から自分を見ていて、したがつて自分が現われたのを知つてゐる、というような格好で、ゆっくりと街路を奥へと進んでいった。九時少し過ぎであつた。建物はかなり遠くにあり、ほとんど尋常でないくらいに間口がのびていて、特に入口は高くて幅が広かつた。それは明らかにそれぞれの商品倉庫所属のトラックを通すためであり、それらの倉庫はこの時間ではまだしまつており、大きな中庭を取囲んでいて、さまざまな商会のマークをつけていたが、そのいくつかはKも銀行の業務上知つていた。いつもの習慣とはちがつて、こういうような様子をすべて詳しく胸に畳んでおこうと、

なおもしばらく中庭の入口のところに立ち止っていた。近くの箱の上に一人の裸足^{はだし}の男がすわり、新聞を読んでいた。一台の手押車を二人の子供が揺すつていた。ポンプの前に、寝巻ジヤケツ姿の、弱々しそうな若い娘がたたずんで、水がバケツに落ちるあいだ、Kのほうをながめていた。中庭の隅^{すみ}では、二つの窓のあいだに一本の綱が張られ、洗濯物がもう干してあつた。一人の男がその下に立ち、一言二言声をかけては仕事を指図^{さしづ}していた。

審理室に行こうとして、Kは階段のほうに向つたが、またじつと立ち止つてしまつた。この階段のほかに中庭にはまだ三つの別な階段の登り口があり、そのうえ中庭の奥の小さな通路は次の中庭へ通じているように見えたからである。部屋の位置をもつとよ

く教えてくれなかつたことに立腹したが、自分を取扱うやりかたが特別怠慢で投げやりであるし、このことは大いに声を大にしてはつきり言つてやろうと腹をきめた。しかし結局は階段を登つていつたが、裁判は罪によつて引寄せられるのだ、と言つた監視人のウイレムの言葉を思い出し、心のなかでその言葉を考えてみたけれども、それなら結局、審理室はKが偶然選ぶ階段の上にあるにちがいない、ということになるはずだつた。

登つてゆきながら、階段で遊んでいるたくさんの子供たちの邪魔をする結果になつたが、子供たちは、Kが彼らの列をかきわけてゆくと、悪意のある眼でじつと見るのだつた。

「この次またこの階段を登ることになつたら」と、彼は心ひそか

に思つた。「連中を買収する菓子を持つてくるか、連中をなぐるステッキを持つてくるかのどちらかにしなければなるまい」

もうすぐ二階というとき、ボールが行ききつてしまふまで、しばらくたたずんで待ちさえしなければならなかつた。大人のルンペンのようないやな顔つきをした二人の小さな子供が、そうやつてゐる彼のズボンにつかまつた。それを振切ろうとでもしようものなら、彼らを痛めつけないともかぎらず、また大声をあげられるのではないかと思つて、やめにした。

二階に来て、いよいよほんとうの部屋搜しが始まつた。審理委員会はどこですか、ときくわけにもいかないので、さしものし指物師のランツという名前を考えだし、——この名前を思いついたのは、グ

ルウバツハ夫人の甥の大尉がそういう名前だつたからだが——こ
こに指物師のランツという人が住んでいませんか、とどの部屋に
もきいてまわり、部屋のなかをのぞきこむことができるようにな
うと思った。しかし、それはたいてい造作なくできることがわ
かつた。ほとんどすべての扉が開いていて、子供たちがはいつた
り、出たりしていたからである。どれもきまつて、小さな、窓が
ひとつしかない部屋で、そこで炊事もするのだつた。幾人かの女
たちは腕に乳飲児ちのみごをかかえ、あいたほうの手でかまどの上で仕事
をしていた。年端としはのゆかぬ、見たところエプロンだけしかつけて
いない娘たちが、非常に忙しげにあちこちと走りまわつていた。
どの部屋でもベッドがまだふきがつていて、そこには病人やまだ

眠っている人々が横になっていたり、あるいは着物のまま身体を伸ばしている人々がいた。扉がしまつてある部屋では、Kはノックをして、ここに指物師のランツさんが住んではいませんか、とたずねた。たいてい女が扉とびらを開け、用件を聞くと、部屋の中のベッドから身体を起す誰かに向つて言うのだつた。

「指物師のランツつていう人がここにいませんかって」

「指物師のランツ？」と、ベッドの人がきく。

「そうです」と、Kは言うが、そこには疑いもなく審理委員会はないのだから、彼の用件はもうすんでいるのだつた。多くの人々は、Kが指物師のランツにどうしても会わなければならぬのだと思いこんで、長いあいだ考えては、指物師の名を言うが、それ

がランツというのとほんの少しばかり似ている名前であつたり、隣の人にくいてくれたり、あるいははずつと離れた部屋まで連れていつてくれたが、彼らの考へでは、そういう人がおそらく又貸して住んでいるかもしれないし、また自分たちよりも事情に明るい人がいる、というわけであつた。ついにはKはもはやほとんど自分でたずねる必要がなくなり、こんなふうにして各階を引っ張りまわされると、初めは非常に実際的に思われていた自分の計画も、残念に思えてきた。六階に登るところで、もう搜すのをやめようと決心し、彼をさらに上へ連れてゆこうとする親切な若い男と別れて、降りていった。ところがすぐ、こういうふうにやつてみたことがむだだつたことに腹がたち、もう一度引返して、六階のと

つつきの扉をノックした。その小さな部屋で彼の見た最初のものは、すでに十時を示している大きな壁時計だつた。

「指物師のランツさんはこちらにいらっしゃいましょうか？」と、
彼はたずねた。

「どうぞ」と、黒い輝く眼をした一人の若い女が言つたが、彼女
はちょうど^{たらい}盥で子供の下着を洗濯しており、ぬれた手で隣室の開
いた扉を示した。

Kは、何かの集りにはいったのだ、と思つた。おびただしい、
色とりどりの服を着た人々が——一人としてはいつてきた彼に注
意する者はなかつた——窓が二つある中くらいの部屋にいっぱい
で、部屋は、ほとんど天井の近くで回廊に取巻かれており、その

回廊がまた同じように完全に満員で、人々はただ身をかがめてやつと立つことができ、頭と背中とを天井にぶつけていた。空気があまり淀んでいるように感じたKは、また出てゆき、おそらく彼の言葉を勘違いしたらしい例の女に言つた。

「指物師のランツさんと申したのですが？」

「ええ」と、女は言つた。「どうぞお通りになつてください」もし女が彼のそばまで寄つてきて、扉の把手とつてをとり、「あなたがおはいりになつたら、しめなければなりません。もう誰もはいれません」と、言わなかつたならば、Kはおそらく女の後には続かなかつたであろう。

「それがいいですよ」と、Kは言つた。「しかし、もう超満員で

すよ」

それでも彼はまた中へはいった。

扉のすぐ近くのところで話していた二人の男のあいだを通り抜けると、——その一人は、大きくひろげた両手で金を勘定する動作をやつており、もう一方の男は彼の眼を鋭くのぞくのだつた——ひとつの手がKをつかんだ。それは、小柄な、頬^{ほお}の赤い若者だった。

「こちらです、こちらですよ」と、彼は言つた。Kは男に引かれるままになつて行つたが、ごちやごちやで沸きかえつている雑踏のなかにも狭い通路があいており、おそらくその通路で二つのグループに分れているらしい、ということがわかつた。このことは、

Kには左右の最前列にはほとんど一人として自分のほうに向いている顔が見あたらず、話と身振りとを自分のグループの連中にだけ向つてやつている人々の背中ばかりが見える、ということでもはつきりとした。たいていは黒服を着ており、古びた、長い、だらりと垂れ下がつた礼服姿であつた。この服装だけが確かにKを戸惑いさせたが、そのほかの点では、彼にはすべてが政治的な地区集会のように見える、と思つた。

Kが連れてゆかれた広間の向うの奥には、やはり人でいっぱいの非常に背の低い演壇の上に、横向きに置かれてひとつつの机が立つており、その背後、演壇の端に、一人の小柄な、肥つた、ふうふう鼻息をついている男がすわつていた。彼はちょうど、彼の背

後に立っている一人の男と——このほうは肘^{ひじ}を椅子の背につき、脚を組んでいたが——高笑いしながら話していた。何回となく腕を宙に振っているのは、誰かを野次つてまねているらしかった。Kを連れていった男は、報告するのに骨折つた。つまだ爪立ちながら、すでに二度ほど何かを言おうとしたが、上にいる男には気づかれなかつた。演壇の上のほかの連中の一人がその若者のこと注意すると、その男はやつと彼のほうを振り向き、身体をかがめてその低声の報告を聞きとつた。それから時計を引つ張り出し、ちらりとKのほうを見た。

「一時間と五分前に来なければいけなかつたのだ」と、彼は言つた。

Kは何か返答しようと思つたが、その余裕がなかつた。男がそう言うやいなや、広間の右側の半分でどつと不平のつぶやきが起つたからである。

「一時間と五分前に来なければならなかつたのだ」と、男は声をあげて繰返し、また素早く広間を見下ろした。すぐに不平の声も高まつたが、男がそれ以上何も言わなかつたので、それもやつと次第に消えていった。今では広間は、Kがはいつてきたときよりはずつと静かになつていていた。ただ回廊にいる連中だけが、人々に、何かしやべることをやめなかつた。上のほうの薄暗がりと煙と塵ぢりとのなかで見分けがつくかぎりでは、連中は下の人々よりは服装もわるかつた。多くの連中は布団ふとんを持つてきて、すりむかないと

めに、それを頭と部屋の天井とのあいだにおいていた。

Kは、話をするよりも観察してやろう、と腹をきめたので、表向きの遅刻の申し訳をすることをやめて、ただこう言つた。

「遅すぎたかはしませんが、ともかく今は來たわけです」

喝采^{かつさい}の音が、また右側の半分から起つた。御しやすい連中だな、とKは思つたが、ただ左側の半分が黙つてているのが気になつた。左側のほうはちょうど彼の背面になつており、そちらからはただきわめてまばらな拍手の音が起つただけだつた。全員を一度に、もしそれができる相談なら、少なくとも暫時左側の連中をも味方にするには、どう言つたらよかろうか、と考えてみた。

「なるほどね」と、男が言つた。「しかし、私は今となつてはも

う君を尋問する義務はないのだ」——また不平のつぶやきが起つたが、今度は誤解らしかつた。というのは、男は人々を手で制しておいて続けたからである——「しかし、今日のところは例外として、尋問しようと思う。こんな遅刻は二度と繰返してはいけない。では、前に出たまえ！」

誰かが演壇からとび降りたので、Kに余地ができ、彼は上へ登つた。彼は机にぎゅうぎゅう押しつけられて立つていたが、背後の群衆が非常に大勢なので、予審判事の机とおそらくは判事その人さえも演壇から突き落すまいと思うなら、群衆に抵抗しなければならないほどであった。

しかし予審判事はそんなことはいつこうおかまいなしで、いか

にもゆつたりと肘掛椅子にすわり、背後の男に何か終りの言葉を言うと、彼の机の上にある唯一の品物である小さなノートをつかった。それは学校ノートのようで、古びて、あんまりめぐりすぎたらしく、すっかり形がくずれていた。

「では」と、予審判事は言い、ノートをめくり、確かめる調子でKに向つて言つた。「室内画家だつたね？」

「ちがいます」と、Kは言つた。「ある大きな銀行の業務主任です」

こう答えると、下の右側のグループから笑い声がひとつ起り、それがあまりおかしそうだったので、Kもつりこまれて笑わないではいられなかつた。人々は両手を膝ひざの上に突つ張り、ひどい咳せき

の発作のときのように身体をゆするのだつた。回廊の上にいる何人かさえ笑つた。すつかり氣をわるくした予審判事は、下にいる連中に対しては権限が及ばぬらしく、回廊のほうでその償いをしようとして、とび上がり、回廊の連中をおどしつけるのだつたが、これまでほとんど目だたなかつた眉毛まゆげが、眼の上で、ふさふさと、黒く、大きく寄り合つた。

ところが、広間の左半分はまだ依然として静かであり、そこでは人々が列をつくつて並び、顔を演壇のほうに向け、壇上で交わされる言葉にも、片方のグループの喧騒けんそうにも、同じように平静に耳を傾け、自分たちの列からちらほら人が立つて別なグループとあちらこちらでいつしょに相談することをさえ、じつと見てい

る。左側のグループは、だいいち人数が少なかつたが、結局のところ右側のグループと同じようにたいしたものでないらしいのだけれども、その態度の平静さがいつそう意味ありげに見えさせるのであつた。Kがしやべりはじめると、確かに自分は左グループの心持でしゃべっているのだ、というような気がした。

「予審判事さん、私が室内画家かというお尋ねは——むしろ、あなたはきかれたのではなくて、頭ごなしに私に言われたのですが——私に対してなされている手続きの全貌ぜんぼうの特色を示すものであります。もともと手続きじゃないと異議を申されるかもしけませんが、そのあなたの異議はまったく正しいと言えます。なぜならば、私がそれを認めるときにだけ手続きだと言えるからです。

だが、今はしばらくそう認めておきましよう。そうするのは、いわば同情からです。およそこんな手続きを重んじようと思うときには、同情をもつて以外に対すべき道がありません。私はだらしない手続きだとは申しませんが、この言葉をあなたの自己認識のために申上げたわけです」

Kは語るのをやめて、広間を見下ろした。彼が言つたことは、鋭かつたし、彼の意図以上に鋭くはあつたが、しかし正しかつた。喝采があちこちで起らなければならぬところだつたが、全員黙つたままであり、人々は明らかに緊張して次に来るべきものを持つてゐる面持で、おそらくはその静けさのうちに爆発が用意されているのであつて、それは万事にけりをつけるにちがいなかつた。

ちょうど広間の入口の扉が開き、仕事を終えたらしい例の若い洗濯の女がはいってきて、十分気をつかつてているらしいのだが幾人の人々の視線を自分のほうに引きつけているのは、眼ざわりなことだつた。ただ予審判事だけがKを直接よろこばせたが、それは、Kの言つたことにすぐさま図星を当てられたらしいようになつたからであつた。Kの発言に驚かされたからであるが、判事はそれまで、回廊に向つて突つ立ちながら、そのままの姿勢で聞いていた。ところが今は、静かな間が生じたので、気づかれまいとするように、次第に腰をおろした。顔つきを抑えるためだろうが、ふたたび例のノートを取り上げた。

「そんなことをしたつて何の役にもたちませんよ」と、Kは続け

た。「予審判事さん、あなたのそのノートも、私が言うことを裏づけています」

自分の平静な言葉だけがこの見知らぬ集りのうちに響いていることにすっかり満足して、Kはそのうえ、ノートを無造作に予審判事から引つたくり、きたないものにさわりでもするかのように指先で中ほどの一枚をつまみ上げたので、ぎつしり文字のつまつた、しみだらけの、縁の黄色くなつたページが、両側にだらりと下がつた。

「これが予審判事の文書です」と、彼は言つて、ノートを机の上に落した。

「予審判事さん、どうかごゆつくりと先をお読みください。こん

な学校ノートなんか私は少しも恐くはありますよ。もつとも、私は二本の指でやつとつまめるだけで、手には取ろうとは思いましたから、中身は私にさっぱりわかりませんが」

予審判事は机の上に落ちたノートを取上げ、少し整理してから、またそれを読もうとしたが、このことは、深い屈従のしんでしかりえず、あるいは少なくともそう考えられるべきことであった。

最前列の人々の顔は非常に緊張してKに向けられたので、彼はしばらく彼らのほうを見下ろした。いずれもが相当な年配の人々で、幾人かは白鬚はくぜんであつた。おそらく彼らこそ、予審判事の屈従によつても、Kが話しあじめてから保つていたその落着きを失

わされなかつたこの集り全体に、影響を与える鍵を握つてゐる人物なのであろうか？

「私に起つたことは」と、Kは続けたが、今度は前よりもいくらか低目であり、絶えず最前列の顔をうかがつてゐるため、話にいくらか落着かぬ表情を与えた。「私に起つたことは、まつたくのところ個人的な事件にすぎず、私はそれをたいして深刻なものとは受取つていませんので、それ自体としてはさして重大ではありますんが、それは、多くの人々に対してなされてゐる手続きのよい例であります。これらの人々のためにこそ私はこうやつて立つてゐるのであり、自分一個のためではありません」

彼は思わず声を高めた。どこかで誰かが両手を高く上げて拍手

をし、叫んだ。

「異議なし！ そうだぞ。異議なし！ もう一度言うぞ、異議なし」

最前列の連中はあちこちで鬚ひげをしごいており、誰もその叫び声のほうに振向く者はなかつた。Kもその叫び声を問題にはしていなかつたが、それでも元気づけられた。満場の同意の喝采が起ることなどは今はもうまつたく必要とは思つておらず、全員がこのことについて反省しはじめ、ただときどき誰かがこの説得に同意してくれれば十分であつた。

「私はうまく話すなどということは望みません」と、Kはこうした確信から言つた。「また私はとうていそんなことはやれません。

予審判事さんのほうがおそらくずっと上手に話されましょ。それがご商売だからです。私が望んでいるのはただ、ある公然たる不正を公にしやべろうということです。どうか聞いてください。

私は約十日ばかり前から逮捕されています。逮捕という事実そのものがばかばかしいのですが、しかしそれは今ここで申上げるべきではありません。私は、朝、寝込みを襲われましたが、おそらくは——これは判事の言われたことからして否定できませんが——私と同様に無実な画家の誰かを逮捕せよ、という命令を受けたらしいのですが、この私が選ばれたのでした。隣室は二人の不合法な監視人に占領されました。たとい私が危険な強盗であつたとしても、これ以上の用心はできなかつたでしよう。そのうえ、こ

の監視人たちがけしからぬやつらで、つまらぬことを私の耳にしやべり散らし、賄賂わいろをもらおうとし、いろんな口実をつかつて下着や洋服を巻きあげようと思い、私の眼の前で私自身の朝飯を恥知らずにも平らげてから、私に朝飯を取ってきてやるからと称して金を求めました。それだけではありません。私は第三の部屋の監督の前に引出されました。それは、私がたいへん尊敬しているある婦人の部屋ですが、その部屋が、私のためとは言うものの、私には罪もないのに、監視人と監督とがいたためかなり荒されているのを見なければならなかつたのです。自分を抑えることは容易ではありませんでした。でもどうやらできましたので、監督にきわめて平静に——もし彼がここにいるなら、そのことを保証し

てくれるはずです——なぜ私は逮捕されたのか、とたずねました。さてこの監督は、ただいま申しましたご婦人の椅子にこの上なく愚劣な傲慢さを示しながらふんぞりかえつていたその有様が今も私の眼前に彷彿としているくらいですが、この男はなんと答えたでしょうか？ 諸君、彼は結局のところ何も返答しませんでしたし、おそらくほんとうはまったく何も知らなかつたのでしょうし、彼は私を逮捕して、それで我が事終れりという顔つきでした。この男はそのほかのことさえやりました。例の婦人の部屋に私の銀行の下級行員を連れてきておりましたが、この連中はその婦人の写真や持物に触れたり、ひつかきまわすのに一生懸命でした。これらの行員がいたことはもちろんほかにある目的があつた

のでして、私の部屋主や女中と同じように、私の逮捕のニュースを広め、私の公の名誉を毀損^{きそん}し、特に銀行で私の地位をぐらつかせることになつていたのです。ところがそれはほんの少しでも成功しませんでした。私の部屋主はまつたく淳^{じゅん}朴^{ぼく}な人で——私はここで彼女の名前を尊敬をこめて申上げておきますが、彼女はグルウバツハ夫人と言うのです——このグルウバツハ夫人さえも、こんな逮捕は躊躇^{しつけ}の十分でない子供が路地でやるわるさを出ないものだ、ということを見て取るだけの分別を備えておりました。繰返して申しますが、この出来事のすべては私に対しても不快としばしの腹だちとをいだかせただけですが、またいつそうわるい結果を生^うずることもありえたのではないでしようか?」

彼がここまで話して言葉を切り、黙りこんでいる予審判事のほうをうかがい見ると、この男がちょうど群衆のなかの誰かと眼で合図をしているのを認めたようと思えた。Kは微笑して、言つた。

「ちょうど今、この私のそばで予審判事さんは諸君の中の誰かとそつと合図をされたようです。これによつて見ると、諸君の中には、この演壇上から指図されている人がいるようです。今の合図が舌を鳴らして野次れというのか、喝采しろというのか、私にはわかりませんが、事が一足先に露見したからには、万事のみこんだうえで、合図の意味など知ろうとは思いません。それは私にはどうでもよいのであって、私は公然と予審判事さんに、こそこそした合図のかわりに、はつきりと口に出して、『今、舌打ちしろ

!』とか、次には『今、手をたたけ!』とかいうように命令して
いただいて結構だ、と申上げます』

当惑したのか、それともいろいろしてきたのか、予審判事は椅子の上であちこちと身動きした。すでにさつき彼と話していた背後の男は、また彼のほうに身をかがめたが、ただ普通に励ますためなのか、それとも彼に特別な策を授けるためなのか、であろう。下のほうでは人々が、低声でだがさかんにしゃべり合っていた。

これまで対立する意見を持つていたように見受けられた二つのグループがまじり合つて、ある者は指でKをさし、ほかの者は予審判事を指さすのだつた。室内の霧のような塵ぢりがひどく耐えがたく、遠くのほうに立つてゐる連中をよくながめることを妨げた。

特に回廊の客たちにはこれが邪魔であるにちがいなく、もちろんはばかりながら予審判事の顔色をうかがい、情勢を詳しく知るために、集会のメンバーたちにこつそりたずねないではいられなかつた。返答するほうも、口に手をあてて、同じように小声でするのだつた。

「もうじき終ります」と、Kは言い、打鈴だれいがなかつたので、拳こぶしで机をたたいた。それに驚いて、予審判事とその黒幕との頭が左右に分れた。

「万事は私とは縁が薄いことですから、私は平静に判断を下しますが、この名目上の裁判に諸君が関心がおありとして、もし私の申すことをお聞きくださいれば、大いに有益だと思います。私が申

上げることに對して諸君がお互いにお話し合いになることは、後のことにしていただきたいのです。時間がありませんし、私はもうすぐ帰りますから」

すぐに静かになつたが、Kはすでに、そんなにもこの集会をリードしていた。もう初めのころのように叫ぶ者もなく、賛成の拍手をする者もなかつたが、すでにKに納得されているか、あるいはもうほとんどそうなつてているかのように見受けられた。

「疑いもなく」と、Kはきわめて小声で言つた。集まつた全員が緊張して耳を傾けていることが彼をよろこばせ、この静けさのうちにひとつのどよめきが生れ、それは最も熱狂的な拍手よりも心をそそつたからである。

「疑いもなく、この法廷のあらゆる言動の背後には、したがつて私の場合で言えば逮捕と今日の審理との背後には、ひとつの大好きな組織があるので。この組織は、買収のきく監視人や蒙昧な監督、最もうまくいって謙遜な予審判事を使つてゐるばかりでなく、さらに、ともかく上級および最高の裁判官連をかかえ、それとともに、無数の広範な、廷丁^{ていてい}、書記、憲兵、その他の雇いたち、それにおそらくは、私はこう言うことをはばかりませんが、首斬り人の群れさえも従えております。そして、諸君、この大きな組織の意味はなんでしょうか？ それは、無実の人々が逮捕され、彼らに対しても無意味な、そしてたいていは私の場合のようにう得るところのない訴訟手続きが行われる、という点にあるのです。

万事がこのように無意味なのですから、役人連の極度の腐敗はどうして避けられましようか？ それはできない相談であり、最高の裁判官も独力ではなしとげることはけつしてできないでしよう。それだからこそ、監視人は逮捕された者たちから着物をはぎ取ろうとしますし、それだからこそ、監督は他人の住居に侵入しますし、それだからこそ、無実の人間が、尋問されるというよりはむしろ、集会の全員の前で侮辱されねばならないのです。監視人たちは、逮捕者たちの所有物が持つてゆかれる倉庫のことばかりいやべつておりますが、私は一度これらの倉庫を見たいと思います。その中で、逮捕者たちの苦労して稼ぎかせ取った財産は、泥棒に等しい倉庫役人たちに盗まれるのでなければ、むなしく朽ちてゆ

くのです」

Kは広間の隅すみの金切り声に話を中断され、そちらを見ることができるように、眼の上に手をかざした。曇つた日の光が塵煙じんえんを白っぽくし、眼をちかちかさせるからであつた。それは洗濯していた例の女だが、現われたときすぐにKには、これこそまつたくの邪魔物だ、という気がしたのだつた。今しがた音をたてた罪があるのはこの女か、この女ではないかは、わからなかつた。Kはただ、一人の男がこの女を扉のところの隅へ引っ張つてゆき、そこで抱きしめているのを見た。しかし、金切り声をたてたのは女ではなく、男のほうであり、口を大きくあけて天井をながめていた。二人のまわりには小さな人の輪ができ、その近くの回廊の

客たちも、Kによつてこの集会に持ちこまれた真剣味がこうして中断されたことに、歓喜している様子だつた。Kは最初の感じですぐに駆け寄ろうとし、また、そこの秩序を取り戻し、少なくともその二人を広間から追い出すことがすべての人々の関心事にちがいない、と思つたのだつたが、彼の前の最前列は頑^{がん}としたままで、誰一人身動きもせず、誰もKを通らせなかつた。むしろ彼を妨害する始末で、老人たちは腕を前に出し、誰かの手が——彼は振向く暇もなかつた——背後から襟^{えりくび}首をつかんだ。Kはもうまつたく例の二人のことは考えず、自分の自由が拘束されたのだ、という気持になり、人々は逮捕をまじめになつてやつているのだ、といふ氣持になり、前後を忘れて演壇からとび降りた。こうして彼は、群衆とぴたりと

向い合つた。人々のことを正しく判断しなかつたのではないか？

自分の話の効果を過信したのではないか？ 自分がしやべつて
いるあいだは人々は取繕つていたのであるが、結論に達した今と
なつては、その仮装に飽いてしまつたのだろうか？ 彼を取り囲ん
でいるのは、なんという顔ほおどもなのだろう！ 小さな黒い眼があ
ちこちと視線を配り、頬ほおは酔いどれたちのようにだらりと垂れ、
長い髯こわは剛くてまばらで、それに手を突つこむと、髯に手を突つ
こんだのではなく、ただ爪で引っかかるような感じだつた。と
ころが髯の下には——そしてこれがほんとうの発見だつたが——
さまざま大きさと色をした徽きしょう章えりが上着の襟についていた。見
られるかぎり、すべての人々がこの徽章をつけていた。見せかけ

の左右両グループはみんな同類だったのだ。そして彼が突然振向くと、両手を膝に置いて静かに見下ろしている予審判事の襟元にも、その同じ徽章を見た。

「ああ」と、彼は叫び、両手を高く上げたが、突然いつさいが氷解したという思いがそうさせたのだつた。

「君たちは実はみな役人なんだな、君たちはまつたく、私が攻撃したあの腐敗した徒党なんだ。聴衆と探偵とになつてここにつめかけ、見せかけだけのグループに分れて、私をためすために一方が喝采したのだ。罪のない人間をどうやつて引っ張りこむかを研究しようとしたのだ！　さて、おそらく諸君はここに来てむだではなかつた。ある男が無実の罪の弁護を君たちに期待した、とい

うことを大いに慰みにしたか、あるいは——寄つてくるな、さもないとなぐるぞ」と、Kは特に自分のほうへにじり寄つてきた、震えている一人の老人に言つた——「あるいはほんとうに何かを勉強したはずだ。そこで君たちの商売に対しても祝いを言つてやろう」

机の端にあつた自分の帽子を素早くつかんで、ともかく完全な驚きで等しく黙りこくつてしまつた静寂の中を、出口へと殺到していった。ところが予審判事のほうがKよりも早かつたらしく、扉のところで待ち受けていた。

「ちよつと待ちたまえ」と、彼は言つた。

Kは立ち止つたが、予審判事のほうは見ないで、彼がすでに把

手に手をかけていた扉を見ていた。

「断わつておくが」と、予審判事は言つた。「君は今日——君にはまだよくわかつていないらしいが——尋問というものが逮捕された者にいつでも与える利益を、放棄してしまつたのだ」

Kは扉に向つて笑つた。

「ルンペンドもめ」と、彼は叫んだ。「尋問なんかいつさい返上するよ」

そして扉を開け、階段を駆け降りた。背後では、またにぎやかになつて集りの騒音が沸き上がつたが、この出来事をおそらく研究者の態度で討議しはじめたのだった。

第三章 人けのない法廷で・

学生・裁判所事務局

Kは次の週のあいだ、改めて和解してくるのを毎日待っていた。尋問を拒絶すると言つたことを言葉どおりに取られたとは、信じられなかつた。ところが期待した和解の申し出が、実際、土曜日まで来なかつたので、何も言つてはこないが暗黙のうちにあの同じ家に同じ時間に来いというのだろう、と考えた。それで日曜日にまた出かけていつたが、今度はまつすぐ階段と廊下とを通り抜

けた。彼のことを見えていた何人かの人々は戸口で彼に挨拶し
たが、もう誰にもきく必要はなく、間もなく目ざす扉に來た。ノ
ックの音で扉が開かれ、扉のところに立ち止っている例の顔見知
りの女にはもう眼もくれずに、そのまま隣室にはいろいろとした。

「今日は法廷は開かれません」と、女が言つた。

「なぜ開かれないんです?」と、彼は言い、信じようとはしなかつた。ところが、女が隣室の扉を開けたので、彼も納得がいった。部屋はほんとうにからつぽで、からつぽなだけにこの前の日曜日よりもいつそうけちくさく見えた。相変らず演壇の上に立つている机には、二、三冊の書物がのつていた。

「あの本を見てもいいですか?」と、Kはたずねたが、特に興味

があつてのことではなく、この部屋にやつてきてまつたくむなし
い結果に終りたくないためだつた。

「いけません」と、女は言つて、また扉をしめた。「それは許さ
れていません。あれは予審判事さんの本です」

「ああ、そうですか」と、Kは言い、うなずいた。「きつと法律
書だが、罪がないだけでなく何も知らぬうちに判決を下されてしま
うというのが、この裁判所のやりかたなんだ」

「そうかもしれませんわ」と女は言つたが、彼の言うことがよく
はわかつていならしかつた。

「それじやあ、もう行こう」と、Kは言つた。

「何か予審判事さんにお伝えすることがありますか?」と、女が

言つた。

「あの人をご存じですか？」と、Kはたずねた。

「もちろんですとも」と、女は言つた。「主人が廷丁ですから」そう言われてはじめてKは、この前来たときは洗濯桶せんたくおけだけがあつたこの部屋が、今ではすっかり整つた居間になつていることに、気づいた。女は彼が驚くのを認めて、言つた。

「この部屋をただで借りているんですけど、開廷日には部屋をあけなければなりません。主人の身分ではいろいろと不便もありますわ」

「部屋のことではたいして驚いてもいませんが」と、Kは言い、

渋い顔で女を見つめた。「むしろご主人がおりだというのに驚

いているんです」

「私があなたのお話を邪魔してしまったこのあいだの裁判のことを見てこすつていらっしゃるんですか？」と、女がきいた。

「もちろんですよ」と、Kは言つた。「今日ではもう過ぎたことだし、ほとんど忘れてしまつたが、あのときはほんとうに腹がたちました。それがどうです、ご主人があると自分で言われるんですけどからね」

「お話を折られたことは、あなたのためにはわるいことではなかつたのよ。みなさんはあとで、あなたについてずいぶんわるい判断を下していました」

「そうでしようが」と、Kは話をそらしながら言つた。「でもそ

れでは言い訳にはなりませんよ」

「私を知つていてくれる人なら、誰でも私を許してくれますわ」と、女は言った。「あのとき私に抱きついた人は、ずっと前から私を追つかけていたんです。私、普通は男の人をひきつけなんかしないんでしょうが、あの人にはそうなんです。このことは隠れもないことで、主人ももうのみこんでいるんですわ。でも主人は地位を維持しようと思うなら、我慢しなきやならないんです。あの人は学生さんで、これから偉くなるんですもの。あの人はいつも私をつけまわして、あなたがいらつしやるほんの少し前に帰つていつたところですわ」

「ほかの連中もみんなそんなものですよ」と、Kは言った。「別

に驚きませんよ」

「あなたはきっと、ここで何かを改善しようと思つて いるのね？」
と、女はゆっくりと、探るように言つたが、自分にもKにも危ないことを何か言つて いるような様子だつた。

「それはあなたのお話からわかつていきましたわ。お話は私にはたいへん気に入りましたの。もちろんほんの一部分だけを伺つたのですけれど。初めのところは聞けませんでしたし、終りのところではあの学生といつしょに床の上にころがつていましたから。――ここはまつたくいやですわ」と、しばらく間をおいて女は言い、Kの手を握つた。「改善することができるとあなたは思つて いらっしゃるの？」

Kは微笑し、手を女の柔らかな両手の中で少し動かした。

「もともと」と、彼は言つた。「あなたの言うようにここを改善するなんていうことは、僕にできる立場じやないし、たとえばあなたがそんなことを予審判事に言おうものなら、きっと笑われるか、罰せられるかしますよ。事実僕は、自ら好んでこんなことに首を突つこむはずじやなかつたし、ここ裁判組織を改善する必要があつても、何も僕の眠りを妨げられるはずはないのです。ところが、僕が表向き逮捕されたということによつて、——つまり僕は逮捕されたのです——ここに首を突つこまざるをえなくなつたのですが、それも僕自身のためにですよ。それでもあなたに何かのお役にたつならば、もちろん大いによろこんでやりはします。

ただ隣人愛からといったようなことじやなくて、あなたのほうも僕を助けてくださることができるということがあるためです

「いつたいどうすればお助けできますの？」と、女がきいた。

「たとえばあの机の上の本を見せてくれればですよ」

「お安いご用ですわ」と、女は叫び、彼を急いで引っ張つていった。どれも古びた、すり切れた本で、厚表紙は真ん中でほとんどちぎれ、ただ紐だけでやつとくつついていた。

「ここのものはなんでもなんてよごれているんだろう」と、Kは頭を振りながら言い、女は、Kが本を手にする前に、エプロンで少なくとも表面だけは塵ぢりをぬぐいさつた。

Kはいちばん上の本を開いたが、いかがわしい絵が出てきた。

一組の男女が裸でソファにすわつており、画家の卑俗な意図がはつきりうかがえたが、そのまさか加減があまりにひどいので、結局は男と女とだけしか眼にははいらず、それがあまりに立体的に絵から浮び出て、ひどく固くなつてすわつており、遠近法が間違つているため、やつとこさ互いに向い合つていることがわかる始末だつた。Kはそれ以上めくるのをやめ、ただ一冊目の本の扉をあけると、『グレー^テが夫のハンスよりこうむらねばならなかつた苦しみ』という題名の小説だつた。

「これが、ここで研究されている法律書か」と、Kは言つた。
 「こんな人間に裁さばかれるなんて」
 「あなたの援助をしますわ」と、女は言つた。「よくつて？」

「ほんとうにできるんですか、あなた自身、危なくならないで？

あなたのご主人はなんでも上役の言うとおりだ、ときつきあなたはおつしやつたが

「それでも私はあなたをお助けしますわ」と、女は言つた。「こちらにいらつしやい。私たちは相談しなければなりません。私の危険のことなんかもうおつしやらないで。危険なんて、自分で恐ふわがろうとするときにだけ恐いんですね。さあ、こちらにいらつしやい」

女は演壇を指さし、彼女といつしよに階段に腰かけるようにすすめた。

「きれいな黒い眼をしているのね」と、二人がすわると、女は言

つて、下からKの顔を見上げた。

「私もきれいな眼をしているつて言われますわ。でもあなたのほうがずっときれいよ。あなたが初めてここにはいつていらつしゃつたときすぐに、気がつきました。それだからこそまた、^{あと}後からこの集会部屋にはいつてきたんだわ。いつもはそんなことはしないし、いわば禁じられておるんですけど」

ははあ、こういうわけなんだな、とKは思つた、彼女は身体をかうだ
おれに差出しておる、この女もこのまわりにあるあらゆるものと同様堕落しておるんだ、まつたく当然のことだが裁判所の役人には飽きてしまい、それなものだから気に入る他人に、眼がきれいだ、などとお世辞を言うのだ。Kは黙つて立ち上がつたが、自

分の思つてることをはつきりと言つてやり、それによつて女に自分の態度を明らかにしてやろう、という気構えだつた。

「あなたが僕を助けられるとは思いませんね」と、彼は言つた。

「僕をほんとうに助けてくれるためには、偉い役人たちとの関係が必要だ。ところがあなたはただ、ここで大勢うようよしている下つ端したばの連中だけを知つているんだ。こんな連中のことはきつとよくご存じだろうし、連中に頼んでまたさまざまなことをやつてもらえましよう。それは、僕も疑いませんが、あの連中に頼んでやつてもらうことなんかはどんなに大きくなつて、訴訟の最後の結末にはまつたくたいしたことではないでしよう。ところがあなたは、そのために二、三人の友達を取逃がすかもしけない。そう

なることを僕は望みませんね。まああなたは、連中に対することまでの関係をお続けになることですね。つまり、それはあなたには欠かせぬことだ、と僕には思われるんですよ。こんなことを言うのは残念でないこともないのです。あなたの世辞に何かお返しするとして、あなたも僕に気に入つたんですからね。特に、あなたが今のようにそうやつて、別に理由もないのに僕のことを悲しそうに見つめているときにはね。あなたは、僕が戦わなければならぬ仲間の人だ。ところがあなたはそれにすっかり安住して、学生なんかを愛している。愛してはいなくても、少なくともご主人よりは好きなのだ。そのことはあなたの話からすぐわかりますよ」

「いいえ」と、女は叫び、すわったままでKの手をとらえようと
したが、彼はその手を十分素早く引っこめることができなかつた。
「今すぐ行かないで。私に間違つた判断を下しておいて行つては
いけません！ほんとうにもうお帰りになるつもり？ほんの少
しここにいてくださるご親切をお持ちになれないくらい私つて
まらぬ女ですの？」

「あなたは誤解しているんですよ」と、Kは言つて腰をおろした。
「僕がここにいることがほんとうにあなたに望ましいのなら、よ
ろこんでいますよ。暇はあるんだが、今日は審理が行われると思
つて來たのでした。これまで言つたことで僕は、僕の訴訟につい
て何も僕のためにやつていただきたくない、ということをお願

いしたのです。けれども、訴訟の結果なんか僕にはどうでもよいのだし、有罪の判決だつてただ笑つてやるつもりでいるのだ、と
いうことをあなたがお考えになるなら、援助をお断わりしたこと
もあなたの気をわるくすることはないはずです。これも、およそ
裁判がほんとうに終るものと仮定してのことと、どうなるものか
はなはだあやしいと思います。むしろ僕は、役人たちが怠慢なた
めか、忘れっぽいためか、あるいは怖おじけ氣わいきを振つたためかで、手続
きはもう中止になつたか、次のときには中止になるかするものと
考えます。もちろんまた、何か相当な賄賂わいろうでも期待して訴訟を見
かけだけ続行するということも、ありうることはありうるが、今
から言つておきますが、まったくむだですね。僕は誰にも賄賂な

んかやらないんだから。あなたが予審判事か、あるいは重要なニュースを好んで言いふらして歩く誰かに、僕という人間には、どんなことがあつても、またあの連中がいろいろ知っているどんな術策によつても、賄賂なんか出させることはできないだろう、と言つてくださるならば、ともかくそれは、あなたが僕にやつてくださるご好意というものです。それはまったく見込みがないだろうということを、あなたはあの連中にはつきり言つてください結構です。そうでなくとも連中もおそらく自分ですでにこのことに気づいているでしょうし、気づいてはいなくても、今すぐ知つてもらう必要なんかたいして僕はないのです。そりゃあ知つていてもらえば、あの連中はむだな仕事をしないですむし、も

ちろん僕も不愉快な思いをいくらかしないですみますが、それだつて、もしそれが同時に他の連中に打撃を与えるとわかつたなら、よろこんで引受けますよ。そして、そうなることを、わざとやつてみようと思うくらいです。ほんとうに予審判事をご存じなんですか?」

「もちろんですとも」と、女は言つた。「あなたをお助けしようと言つたとき、まず第一にあの人のことを考えさえしたのですもの。あの人があの身分の低い役人かどうかは知りませんでしたが、あなたがそうおっしゃるんですから、おそらくそうなのでしょう。それでも、あの人があの上へ提出する報告はいつもいくらか有能力なものだ、と信じています。そしてずいぶん報告を書きますわ。

役人たちには急け者だ、とあなたはおっしゃいましたが、きっとみんなそうではないし、あの予審判事さんは特にそんなことがありますわ。あの人はたくさん書きますのよ。たとえばこの前の日曜日には、裁判が夕方ごろまで続きました。みなさんが帰つてしまつても、予審判事さんは広間に残つて、私はランプを持つてゆかねばなりませんでしたわ。家には小さな台所ランプしかなかつたのですが、それで満足してすぐ書き物を始めました。そうしていふうち、あの日曜日にちょうど休暇を取つていた主人も帰つてき、二人で家具を運びこみ、部屋を整え直しましたが、次にまた隣の人たちが来て、ろうそく蠟燭一本で話をしました。で結局、予審判事さんのことは忘れて、寝てしまいましたの。突然夜中に、もう夜ふ

けだつたにちがいないんですが、私が眼をさますと、ベッドのそばに予審判事さんが立つていて、主人に光がこぼれぬように、ランプを手でさえぎつていました。それは要らぬ心配でしたわ、主人はいつも、光がさしても起されぬくらい眠りこけているんですねから。私はとても驚いたものですから、ほとんど声をあげようとしましたが、予審判事さんはたいへんやさしくて、私に気をつけるように戒め、今まで書き物をしていました、今あなたのところのランプをお返しに来たのです、あなたが寝ているところを見た有様はけつして忘れないでしよう、とささやきましたの。こんなことをお知らせしたのも、ただあなたに、予審判事さんはほんとうにたくさんのお報告を書きますし、特にあなたについては書いて

いるつてことを言いたかつたんですね。なぜつて、あなたの尋問が確かにあの日曜日の裁判のおもな仕事のひとつでしたもの。ところでこんな長い報告書がまったく意味のないものであるはずがないませんわ。でもそのほかに、この出来事からあなたは、予審判事さんが私に想いをかけていること、あの人はおよそ今初めて私のことを気にしだしたにちがいありませんが、この今という最初のときこそ、私はあの人には大きな力を及ぼすことができるのだということ、をおわかりになれますわね。あの人気がたいへん私のことを気にかけているということには、今ではほかの証拠もありますの。あの人は昨日私に、あの人気がたいへん信頼して協力者にしている例の学生を通じて、絹の靴下を贈り物してくれまし

た。私が法廷を掃除してくれるという名目なんですけれど、それはただ口実にすぎませんわ。だつてこの仕事は私の義務にすぎませんし、そのために主人は俸給をもらつてているのですもの。きれいな靴下ですわ、ごらんなさい」——彼女は脚を伸ばして、スカートを膝まで引っ張り上げ、自分でも靴下をじつと見ていた、——「きれいな靴下ですわ、でもほんとうにあまりりっぱすぎて私は向かないわ」

突然女は話を折つて、Kを落着かせようとでもするように、彼の手の上に自分の手を置き、ささやいた。

「静かに、ベルトルトが私たちのほうを見ていますわ」

Kはゆっくりと眼を上げた。法廷の扉のところに一人の若い男

が立っていたが、小柄で、脚が少し曲つており、短く、薄い、赤みがかつた鬚^{ひげ}で威厳をつけようとしているのだが、その鬚の中に指を突つこんで絶えずひねくりまわしていた。Kは物珍しげにその男をながめたが、これは実に、彼がいわば实物でお目にかかるた最初の、法律学という得体の知れぬものを学んでいる学生であり、おそらくはいつか高い官職につくだろうと思われる男だつた。ところが学生のほうは、見たところまったくKなどは問題にしていないようであり、一瞬鬚から抜いた指で女に合図だけしておいて、窓のところへ行つたが、女はKのほうに身体を曲げて、言つた。

「気をわるくしないでちようだい。いいえ、むしろ、私のことを

わるい女だとは思わないようにお願いしますわ。あの人のところに行かなければなりませんの。いやな男ですわ、ちょっとあの曲つた脚を見てちようだい。でもすぐ戻つてくるわ、そしたら、もしあなたが連れていくてくださるなら、あなたと行くわね、どこへでもあなたのお望みのところへ行きますわ、私を好きなようにしてちようだい、私はここからできるだけ長く離れられたら、幸福でしょうし、もちろん、永久に離れられるのなら、いちばんいいわ』

女はなおもKの手をさすつていたが、とび上がつて、窓べに駆けていった。思わず知らずKは女の手を求めて空くうをつかんだ。女はほんとうに彼の心をそそつた。自分がなぜ女の誘惑にまいつて

はいけないのかいろいろ考えてみたけれども、はつきりとした理由は見あたらなかつた。女は裁判所のためにおれのことをとらえているのだ、という浅薄な理由を、彼は苦もなく払いのけた。どうして女はおれをとらえることなどできようか？　おれはまだ依然として、少なくとも自分に関するかぎりは、裁判所のいつさいをぶちこわしてしまえるだけ自由ではないか？　それに、援助しようという彼女の申し出も、誠実な響きがあつたし、おそらくは価値のないものではなかつた。そしておそらく、この女をやつらから奪い取つて自分のものにしてしまうことよりもよい、予審判事とその一味とに対する復讐^{ふくしゆう}はなかつた。そうなれば、予審判事がKに關する嘘^{うそ}つぱちの報告を苦心^{さん}惨憺^{たん}してでつちあげた

末、深夜に来てみると女のベッドが空であるというような場面も、いつか起りうるわけである。そして女のベッドが空なのは、女がおれのものであり、窓ぎわのあの女、粗くて重い布地の黒ずんだ着物を着た、あの豊満でしなやかで温かい肉体が、まつたくただおれのものであるからなのだ。

こうやつて女に対するさまざまな思いに打勝つてから、窓ぎわでの低声の会話が彼には長すぎるようと思われ、演壇を指の関節で、次には拳こぶしでさえたたいた。学生はちよつと女の肩越しにKのほうを見たが、いつこうおかまいなしで、女にぐいと身体を押しつけさえして、女を抱いた。女は、彼の言うことを熱心に聞いているかのように深く頭を垂れ、学生は、女がかがむと、話のほう

は中断もせずに首筋へ音をたてながら接吻^{せつぶん}した。Kはこのような有様をながめて、女が訴えたところによると学生が女に及ぼしているという横暴ぶりが裏づけられているのを見てとり、立ち上がりつて、部屋をあちこちと歩いた。学生の様子を盗み見しながら、どうやつたらいちばん早く追い払うことができるかを考えていたが、それだけに、すでにときどきどしんどしんどり大きな音をたてていた彼のぶらぶら歩きに明らかに邪魔された学生が、次のように言つたとき、Kにはまんざら歓迎すべきことでないわけでもなかつた。

「我慢ができなかつたら、帰つたらいいだろう。ずっと前に帰つていたつてよかつたんだ、君がいなくたつて誰も気にはかけない

からね。いや、それどころか帰らなきやいけなかつたんだ、つまり僕がはいつてきたときには、そしてできるだけ早くね」

こう言ううちにすべての怒りが爆発しているのだつたろうが、同時にその言葉のうちには、気に入らない被告に話しかける未來の法官の傲慢ごうまんさが含まれていた。Kは学生のすぐ近くに立つたままで、薄笑いを浮べながら言つた。

「我慢ができないというのはほんとうだが、このいらっしゃした気持は、君がわれわれを置いて帰つてくだされば、いちばん簡単に片づくんだ。だがもし君が法律の研究のためにここへ来ているとでもいうのなら——君が学生だつていうことは聞いたよ——よろこんで場所を明け渡し、その女の人と出てゆこう。ともかく君は、

裁判官になる前にはもつともつと勉強しなくちゃなるまいからね。君の研究している司法制度のことはまだよくは知らないが、確かにもう臆面おくめんもなくつぱにやつてのけることを心得ていなさるような乱暴な演説とは、関係がないものと考えていますよ」

「こんな男を自由にうろつかせておくべきじやなかつたんだ」と、Kの侮辱的な言葉に対する釈明を女に対しやりたいらしく、学生は言つた。「それは手落ちだつた。予審判事には言つたんだが、尋問中は少なくとも部屋にとどめておくべきだつた。予審判事はときどき合点がてんのゆかぬことをやるからな」

「くだらぬおしゃべりですよ」と、Kは言い、手を女のほうに伸ばした。「こつちへいらつしやい」

「おいでなすつたね」と、学生が言つた。「いや、いや、この人は君には渡さないよ」

そして、思いがけない力で女を片腕で抱き上げ、女をいとしそうにながめながら、背中を曲げて扉のほうに走つていつた。そのあいだもKに対する恐れは見逃すことができなかつたが、それにもかかわらず、あいた手で女をさすつたり押えたりして、さらにKの気持を高ぶらせようとするのだった。Kは、つかみかからう、事の次第では首を絞めてやろうという気構えで、学生と並んで二、三歩走つたが、女は言つた。

「むだだからおよしなさいな。予審判事が私を呼びによこしたの。私、あなたといつしょに行けないわ。このちっぽけないやらしい

人が」と、言いながら、手で学生の顔をなでまわしながら、「このちつぽけないやらしい人が私を放さないのよ」

「で君は、放されたくないんだろう！」と、Kは叫び、片手を学生の肩にかけたが、学生は歯でぱくりと食いつこうとした。

「いけないわ！」と、女はわめき、Kの両手を払いのけた。「いけない、いけないわ、そんなことしないで、なんということなさるの！　そんなことしたら私の身の破滅よ。放してあげて、ねえ、放してあげて。この人はほんとうにただ予審判事さんの命令どおりやつているんで、私を判事さんのところへ連れてゆくのよ」

「それじやあ行つてもいいよ、そして君にはもう二度と会いたくないね」と、Kは幻滅を感じさせられ憤激しながら言い、学生の

背中に一撃を与えたので、学生はすこしよろめいたが、すぐに倒れてしまわなかつたことをよろこんで、女をかかえていつそう高くとびはねた。Kはゆつくり彼らの後からついていったが、これがこの連中からこうむつた最初の文句なしの敗北だ、ということを見て取つたのだつた。それだからといって、恐れる理由はもちらんなかつた。戦うことを求めたればこそ敗北も喫したのだ。家にどどまつていて、あたりまえの生活をやつていれば、こんな連中の誰にでも優越し、一蹴り^けで自分の進路から放り出してしまえるのだ。そこで彼はきわめてばかげた光景を思い浮べてみるのだが、それはたとえば、この憐れむべき学生、この空威張りの坊や、脚の曲つた鬚の男が、エルザのベッドの前にひざまずき、手を合

わせて許しを乞うている情景だつた。この想像はKの気に入つたので、そうする機会がもしありさえしたら、学生を一度エルザのところへ連れていつてやろう、と決心した。

好奇心からKはさらに扉のところまで急いで行つた。女がどこへ連れてゆかれるかを見ようとしたのだったが、学生がまさかたとえば女を腕にかかえて街路を行くはずはなかろう、と思つた。

道は思つたよりはるかに近いということがわかつた。この居間のすぐ真向いに、狭い木造りの階段がおそらく屋根裏まで通じているらしく、それは曲つてるので、終りまでは見えなかつた。この階段を登つて学生は女を運んでいつたが、これまで走つたために弱つてしまい、すでにきわめてゆつくりと、あえぎながら登つ

ていた。女は手で下のKに合図をし、肩を上げ下げして、自分はこの誘拐^{ゆうかい}に何も罪がないのだ、ということを示そうとするのだが、この身振りにはたいして残念そうな気持も含まれてはいなかつた。Kは女を、赤の他人のように無表情にながめていたが、自分が幻滅を感じたことも、幻滅をたやすく克服できるということをも、表面に出したくはなかつたのだつた。

二人はすでに消えたが、Kはまだ戸口に立ち続けていた。女が自分を裏切つたばかりでなく、予審判事のところへ連れてゆかれることなどと言いたてて、自分をだましてもいるのだ、ということを認めざるをえなかつた。予審判事が屋根裏にすわつて待つてゐる、などということはありえようはずがないではないか。木の階段を

いつまでながめていても、何もわかりはしなかつた。そのときKは登り口に小さな札を見つけたので、近寄つてゆくと、子供じみた、下手な文字で、「裁判所事務局昇降口」と書いてあつた。それではこのアパートの屋根裏に裁判所事務局があつたのか？それは多くの尊敬をかちうる施設とはいえないが、それ自体初めから最も貧しい人々に属するこのアパートの住人たちがその不用ながらくたを投げこむような場所に事務局を持つているとすると、この裁判所もさだめし金が思うようにはならないのだろう、と考えてみると、被告にとつては気の軽くなることであつた。もちろん、金はたつぱりあるのだが、裁判上の目的に使う前に役人連が着服してしまうのだ、ということもありえぬことではなかつ

た。それはこれまでのKの経験に徴しても非常にありそうなことでさえあって、そうだとすれば裁判所のこうした堕落は被告にとつては品位を傷つけられることではあつたが、結局のところは、裁判所が貧乏である場合よりも気楽ではあつた。そこでまた、最初の尋問のときに被告を屋根裏に召喚することを恥じ、被告の住居を襲つて悩ますことのほうを選んだのだ、ということはKにも理解できた。Kは裁判官に対してなんという位置にいることだろう！ 裁判官は屋根裏にすわっているが、K自身は銀行で控えの間付きの大きな部屋を持ち、大きな窓ガラスを通して往来のはげしい町の広場を見下ろすことができるのだ。もちろん彼には、賄賂や横領による副収入はなく、小使に女を抱かせて事務室まで運

ばせることはできなかつた。しかしKは、少なくとも現在の生活にあつては、そんなことはよろこんであきらめきりたい気持だつた。

Kがまだ貼札^{はりふだ}の前に立つてゐると、一人の男が階段を登つてきて、開いた扉から居間をのぞきこんだが、そこからは法廷も見えるのだった。男は最後にKに、少し前にここで女を見かけなかつたか、とたずねた。

「君は廷丁さんですね、どうでしよう?」と、Kはたずねた。

「そうです」と、男は言つた。「ああそう、あなたは被告のKさんですね、やつと気がつきました、ようこそおいでで」

そして男はKに手を差出したが、Kはまつたく予期しなかつた

ことで驚いた。

「でも今日は法廷はお休みなんです」と、Kが黙つているのに、
廷丁は言つた。

「わかっています」と、Kは言い、廷丁の私服をながめたが、役
目の唯一のしるしとして、普通のボタン二、三個のほかに、将校
の古外套ふるがいとうから取つたらしい二個の金ボタンを見せていた。

「ほんの少し前に君の細君と話していたんだが、もういませんよ。
学生が予審判事のところへ連れていつたんです」

「（）らんのように」と、廷丁は言つた。「家内はいつでも連れて
ゆかれます。今日は日曜日なんで、私は仕事をしなくてもいいん
ですが、私をここから追い払うために、どう見たつて不用な用事

で外にやられました。しかもあまり遠くまでやられたわけじやないんと、大急ぎで行きさえすれば、まだ遅れないでもどれる見込みがあつたんです。だからできるだけ速く走つて、使いに出されたお役人に、伝言を扉の隙間すきまから相手には何を言つているのかわからぬくらい息もつかずにどなつて、また走つてもどつてきたんですけど、学生のほうが私よりもつと急いでやつてきたっていうわけです。もちろんあいつは道がずっと近くて、ただ屋根裏の階段を降りてきさえすればいいんですからねえ。私がもつと自由でさえあつたら、あの学生のやつをこの壁のところへ押えつけ、ぶつぶつしてやりますよ。こここの貼札のところへね。しょっちゅうそのことを夢で見るんです。ここんところへ、少し床から持ち上

げられてしつかと押えつけられ、腕を伸ばし、指をひろげ、曲つた脚を丸くひねつて、まわりには血しぶきがいっぱい。でもこれまでそれはただの夢なんです」

「ほかのやりかたがありませんか?」と、Kは微笑しながらきいた。

「どうもありませんや」と、廷丁は言つた。「今ではもつといやなことになつてきてるんです。これまでただあいつが家内を自分のところへ引っ張つていつただけですが、今ではもう、どうせそうなるものとずつと前から思つてはいたんですが、予審判事のところへまで連れてゆくんです」

「ところで君の細君のほうには罪はないのかね?」と、Kは言つ

たが、こうたずねないではいられなくなつたのであり、それほど彼も嫉妬しつとを覚えていたのであつた。

「どういたしまして」と、廷丁は言つた。「あれにいちばん罪があるくらいでさあ。家内はあいつに惚ほれてるんです。あの男と言えば、女と見れば誰でも追いかけます。この家でだけでももう、あいつが忍びこんだ五軒からおっぽり出されたんです。家内はもちろんこの家じゅうでいちばんの別嬪べっぴんというわけですから、まさに私はどう防ぎようもないんです」

「そういうこととなると、もちろんどうしようもないね」と、Kは言つた。

「どうしてどうしようもないんです?」と、廷丁はきいた。「あ

の学生は臆病者なんですから、家内にさわろうとしたら、一度、もう二度とはそんなことをやろうとはしなくなるようにぶちのめしてやらなきやなりません。でも私にはできることですし。ほかの人も私のためにやつてはくれません、誰でもあの男の権勢を恐れているんでね。ただあなたのような人だけができるんですよ」

「いつたいどうして僕が？」と、Kは驚いて言つた。

「でもあなたは告訴されていましたね」と、廷丁は言つた。

「そうなんだ」と、Kは言つた。「それに、あの男はおそらく訴訟の結末を左右する力は持たないとしても、予審にはそいつができそうなだけに、心配しなくちゃいけないんです」

「そうですねえ」と、Kの意見はまつたく自分自身のと同じよう

に正しいものといわんばかりに、廷丁は言つた。「でもここでは原則として、見込みのない訴訟はやられないことになつてゐるんですが」

「僕の意見はあなたのとはちがいますね」と、Kは言つた。「でもそれは別として、時にあの学生のやつを料理してやる必要はあると思いますね」

「あなたには大いに感謝しますよ」と、廷丁はいくらか儀礼的に言つたが、ほんとうは彼の最高の望みが実現できないものと信じこんでいるらしかつた。

「おそらくまた」と、Kは言葉を続けた。「君の上役のほかの連中も、一人残らず同じように料理してやるに値しますね」

「そうですとも」と、何か自明のことだというかのようすに廷丁は言つた。それから、これまで非常に親しげにしてはいたが見せなかつた、信じきつたような眼まなざし差をして、Kを見て、言葉を付け加えた。

「あいつらはしょつちゅう陰謀をやつてゐるんです」

しかし、こういう話が彼には少し不快になつたらしかつた。話を折つて、こう言つたからである。

「さて事務局に行かなくちゃなりません。いつしょにいらつしやいませんか？」

「何も用事はないんだけれどね」と、Kは言つた。

「事務局をごらんになれますよ。誰もあなたのことを気にはかけ

ますまい」

「見る値打ちがありますかね？」と、Kは躊躇しながらきいたが、いつしょに行つてみたいという欲望を大いに感じていた。

「そりやあ」と、廷丁は言つた。「きっとおもしろいですよ」「よし」と、Kはついに言つた。「いつしょに行きましょう」

そして、彼は廷丁よりも足早に階段を駆け登つた。

そこに踏み入ると、すんでのこととで倒れそうになつた。扉の後ろにもうひとつ階段があつたからである。

「公衆のためには氣をつかつていないようですね」と、彼は言つた。

「およそ少しでも氣なんかつかつていませんよ」と、廷丁は言つ

た。「ごらんなさい、ここが待合室です」

それは長い廊下で、そこから、立てつけのわるい扉をいくつか通つて、屋根裏のそれぞれの小部屋に通じているのだつた。

直接光のはいる口がなかつたけれども、真つ暗ではなかつた。

多くの小部屋は廊下に面して、一面の板仕切りのかわりに、むきだしだがともかく天井まで届いている木格子(きごうし)があり、それを通して光がさしこみ、またそれから、机にすわつて書き物をしたり、ちようど格子のところに立つて隙間越しに廊下の人々をながめている幾人かの役人が見えるのだつた。おそらくは日曜日であるため、廊下にはほんの少しあなた人影がなかつた。彼らはきわめて慎み深いという印象を与えた。ほとんど規則正しい距離をおいて、

廊下の両側に置かれた二列の長い木製ベンチに腰をおろしていた。みなかまわぬ身なりであつたが、たいていの人々は、顔の表情、物腰、鬚のつくり、そのほか多くのほとんどはつきりとは言えな細かい点から言つて、豊かな階級に属する人々であつた。洋服掛けがないので、誰かしらの例にならつているらしく、彼らは帽子をベンチの下に置いていた。扉のすぐ近くにすわっていた人々がKと廷丁との姿を見ると、挨拶あいさつのため立ち上がるのだつたが、そうすると次の人々もそれを見て、自分たちもやはり挨拶しなければいけないと想い、そこですべての人々が、二人の通つてゆくとき立ち上がつた。誰も完全にまっすぐ立ち上がる者はなく、背中は曲つており、膝もかがんで、往来の乞食こじきのような有様で立つ

ていた。Kは自分よりも少し遅れて歩いている廷丁を待つて、言った。

「あの人たちはどんなにか卑下しているんですね」

「そうです」と、廷丁は言つた。「あれは被告です、ここでござらんになるのはみな被告なんですね」

「そうですか!」と、Kは言つた。「それじゃあ僕の仲間っていうわけですね」

そして彼は、次の大柄で瘦形^{やせがた}な、すでにほとんど白毛^{しらが}まじりになつた頭髪をした男に向つて言つた。

「ここで何をお待ちですか?」と、Kは懇^{いん}懃^{ぎん}にたずねた。

ところがこんなふうに思いがけなく話しかけられて、その男は

すつかり取乱してしまつたが、それが明らかに、ほかのところでなら確かに自分も制御できるし、多くの人々に対しからえた優越感を容易には捨てさつてはいないうやうな、世故に長けた人であるだけに、その狼狽ろうぱいぶりは非常に痛ましく見えるのだつた。ところでこの場所では、こんな単純な質問にも答えることができず、ほかの人々のほうを見て、自分を助けてくれる義務があるし、そういうやつて助けてくれなければ誰も自分に返答を要求することはできぬ、というような有様だつた。すると廷丁は歩み寄つて、その男を落着かせ、元氣づけるために、言つた。

「この方はまつたくただ、何をお待ちですか、とおたずねになつただけなんですよ。どうぞお答えになつてください」

男は廷丁の声を聞きなれているらしく、そのためKがきくよりも効果があった。

「私が待っていますのは——」と、彼はしやべりはじめたが、すぐつかえてしまつた。明らかに彼は、質問にできるだけ詳しく答えるためにこう切り出すことを選んだのだつたが、その先が続かなくなつた。待つてゐる人たちの何人かが近づいてきて、この三人のグループを取巻いたので、廷丁は彼らに言つた。

「どいた、どいた、通路はあけなくちやいけない」

人々は少し退いたが、元いた場所へはもどらなかつた、そのうちに問われた男は氣を落着かせ、ちょっと微笑みさえもらしながら、答えた。

「一ヶ月前に、私の事件の証拠申請をしましてね、片づくのを待つていてるんです」

「まつたくたいへんお骨折りのようにお見受けできますね」と、Kが言った。

「ええ」と、男は言つた。「なにせ自分のことですからね」

「誰もがあなたのように考へるとはきまつていませんよ」と、Kは言つた。「たとえば私も告訴されてゐるんですが、ほんとうに心からうまくゆくようにと願つてはいますものの、証拠申請だとか、あるいはそのほかの何かそういうたぐいのこと企てたことがありません。いつたいあなたはそういうことを必要だとお考えですか？」

「私には詳しいことはわかりませんが」と、男はまたすつかりいやふやな態度になつて言つた。すなわち彼は明らかに、Kが自分をからかつてゐるのだ、と思つたのであり、そのため、何かまた失敗をやるのはないかという心配から、前の答えをそのまま繰返すのがいちばんよいと考えたらしかつたが、Kのいろいろしたような眼差を前にしてただこう言うのだつた。

「私としては、証拠申請をしたのです」

「私が告訴されているとは、きつと思つてはいらつしやらないのですね」と、Kはきいた。

「どういたしまして、そう思つております」と、男は言い、少しあきへ退いたが、返答の中には信頼ではなくて不安だけが現われ

ていた。

「それじや、あなたは私の言うことを信じないんですね？」と、Kは言い、その男の屈従的態度に思わず知らず刺激され、どうしても信じさせてやろうというように男の腕をとらえた。しかし何も苦痛を与えてやろうとしたわけではないので、ほんの軽くとらえただけだったが、それでも男は、Kに二本の指ではなく、真っ赤な火ばさみでつかまれたように、悲鳴をあげた。このばかばかしい悲鳴でKは男に厭気がさした。自分が告訴されていることを信じないのなら、ますます結構だ。おそらく自分のことを裁判官だとさえ思っているのだろう。そこで今度は別れの挨拶に本気で手をしつかと握り、ベンチに突きもどして、歩みを進めた。

「たいていの被告はああいうように神経質になつてゐるんです」と、廷丁が言つた。

彼らの背後では、もう悲鳴をあげることをやめた例の男のまわりに、ほとんどすべての待ち合せている人たちが集まり、この思わぬ出来事について詳しくきただしてゐるらしかつた。そこへ、Kに向つて監視人がやつてきたが、おもにそのサーベルでそれとわかつたのだけれども、少なくとも色から見ると、鞘^{さや}はアルミニウムでできているらしかつた。Kはそれに驚いて、手を出して握つてさえみた。悲鳴を聞きつけてやつてきた監視人は、何が起つたのか、とたずねた。廷丁は二言三言言つて彼を納得させようとしたが、監視人は、どうしても自分で調べる必要がある、と言ひ

きつて、会釈をし、非常に早くはあるがきわめて小刻みな、痛風のため堅苦しくなつてゐるらしい足取りで、出向いて行つた。

Kは監視人や廊下の仲間のことを長くは気にかけていなかつたが、およそ廊下の中ほどまで来ると、扉がなくてあいた場所になつており、右手に曲れそうになつてゐるのに気づいたので、彼らのことをもうすっかり忘れてしまつた。こちらに行つていいいのか、と廷丁にきいてみると、廷丁はうなずいたので、Kはそこでほんとうに右手へ曲つた。しそつちゅう一、二歩廷丁の先を歩かねばならぬことがわざらわしく、少なくともこの場所では、まるで自分が逮捕されて引きたてられてゆくような格好に見えることもあ

りえた。それでしばしば廷丁の追いつくのを待つたが、廷丁はすぐにはまたおくれてしまうのだった。ついにKは、自分の不快さにけりをつけるため、言つた。

「ここがどんなところか見てしまったから、もう帰ろうと思います」

「まだ全部ごらんじやありませんよ」と、廷丁は少しも動じないで言うのだった。

「全部が全部見たくもありませんね」と、ほんとうに疲れを感じてさえいるKは言つた。「もう帰りますよ、出口はどっちですか？」

「もうわからなくなつちまつたんですか?」と、廷丁は驚いて言

つた。「この端まで行つて、廊下を右へいらつしやればまっすぐ戸口に出ます」

「いつしょに来てください」と、Kは言つた。「道を教えてくれませんか、どうも間違いそうだ、ここにはたくさん道があるんですね」

「ひとつきりの道ですよ」と、もうとがめるような口調になつて廷丁は言つた。「あなたとまたもどつてゆくわけにはいきませんね、報告しにゆかねばなりませんし、そうでなくともあなたのためにだいぶ時間をつぶしましたからね」

「いつしょに来なさい！」と、Kはとうとう廷丁の不実さを突きとめたというように、鋭い口調で繰返した。

「そんなにどならないでください」と、廷丁はささやいた。「ここはどこも事務室ですから。ひとりでお帰りになりたくないなら、もう少し私といつしょに行くか、あるいは、報告をすませてくるまでここで待つてくださいませんか。そうすればよろこんでごいっしょに帰りますよ」

「だめだ、だめだ」と、Kは言つた。「待てはしないし、今いつしょに来たまえ」

Kはまだ、自分がいる場所をよく見まわしていなかつたが、その辺にぐるりとあるたくさんの木の扉のひとつが開いたときになつて初めて、眼をそちらに向けた。Kの大声を聞きつけたらしい一人の娘が現われて、たずねた。

「何かご用ですか？」

その背後に遠く、薄暗がりの中をさらに一人の男が近づいてくるのが見えた。Kは廷丁の顔をじつと見た。この男は、誰もあなたのことなど気にはかけない、と言ったのではなかつたか。ところがもうすでに二人がやつてきて、ほんの小人数でもたくさんだというわけだが、役人連が彼のことに注意を払うようになつたし、なぜここに来たのか、という釈明をきこうとするだろう。唯一の筋の通つた、認められうる釈明というのは、自分は被告であり、次の尋問の予定日をきこうと思つたのだ、というのであるが、彼としてはまさにこんな釈明こそしたくはない。特にこれは眞実でもないからであるが、偽りだというわけは、彼はただ好奇心で来

たのであり、あるいは、証明としてはやはり通りにくいのだが、この裁判制度の内部もその外部と同じようにいやなものだ、ということを確かめようとする要求からやつてきたのだからである。

そしてまつたく、自分のこういう臆測は正しいと思われたので、これ以上はいりこむつもりはなく、これまで見たことですつかり胸苦しくなつており、今この瞬間には、どの扉からもひよっこり現われてくるかもしれない高い地位の役人に対応するだけの心構えになつてもいないので、廷丁といつしよか、あるいはやむをえなければひとりででも帰りたかつた。

ところが、彼が黙つて立つていることが奇妙に思われたらしく、実際、娘も廷丁も、次の瞬間にはなんらかの大きな変化が彼に起

るにちがいないし、それを見ないでおきたくはない、とでもいう
ようにKを見つめるのだつた。そして戸口には、Kがさつき遠く
から認めた男が立つて、丈たけの低い鴨居かもいにしつかりと身をさせえて、
気短かげな観客のように、爪立ちながら少し身体を揺すつていた。
しかし娘はまず、Kのこんな態度は少し気分がわるいことに原因
があるので氣づき、椅子を持つてきて、きいた。

「おかげにななりません?」

Kはすぐすわり、もつとよい姿勢をとろうとして、肘ひじを椅子の
背にささえた。

「少しちまいがなさるんでしょう?」と、女は彼にきいた。娘の
顔が彼のすぐ眼の前にあつたが、多くの女がその女盛りに持つて

いるような強烈な表情を浮べていた。

「心配なさらないほうがいいですわ」と、娘は言つた。「ここでは珍しいことではありません。初めてここへ来ると、ほとんど誰でもこんな発作を起すのよ。ここは初めてですか？ そうね、それなら珍しいことじやないわ。太陽がこここの屋根板を照りつけますし、熱くなつた木が空気をうつとうしく、重苦しくするんです。ですからこの場所は事務室にはあまり向かないんです、もちろんそのほかの点ではいろいろ大きな利益があるにはあるんですけど。でも空気の点では、訴訟当事者が大勢行き来する日には、そしてそういうのはほとんど毎日ですけれど、ほとんど息もつけないくらいなんです。それから、ここにはまたいろいろ洗濯物が干

しにかけられるということをお考えになれば、——それを下宿人に全部が全部断わるわけにもいきませんものね——少しぐらい気分がおわるくなられても不思議でないとお思いでしよう。でも、しまいにはこの空気にすっかり慣れます。二度目か——あるいは三度目にいらっしゃるときには、ここでもう胸を押しつけるようなものをもうお感じにならなくなることでしょう。もうおよろしくはありません?」

Kは答えなかつた。こうして突然身体の具合がわるくなつてこの連中の手のうちにはいつたようになつていることがあまりにもつらいことだつたし、そのうえ、今自分の不調の原因を聞いたばつかりに、よくはならないで、むしろ少しわるくなつたのであ

つた。娘はそれにすぐ気づいて、Kの元気を回復させるために、壁に立てかけてあつた鉤付きの竿かぎさおをとり、ちょうどKの頭上に備えつけられた、戸外に通じる小さな通風窓をつついてあけた。だが煤すすがひどくたくさん落ちてきたので、娘はその通風窓をすぐまた引つ張つてしめ、ハンカチでKの両手の煤をはらわなければならなかつた。Kはあまりに疲れていて、それを自分で始末できなかつたからである。歩いてゆけるのに十分なだけ元気を回復するまでここにゆつくりとすわっていたかつたが、人々が彼のことなど気にかけることも少なければ少ないほど、なるたけ早く行かなければならなかつた。ところがそのうえ、娘が言つた。

「ここにはいらつしやれませんわ、通行の邪魔になりますもの——

——Kは、どんな通行の邪魔になるのか、と視線できいた——
「よろしかつたら、病室へお連れしましよう。あなた、手を貸してちようだい」と、娘は戸口の男に言つたが、男もすぐ近寄つてきた。

しかし、Kは病室へは行きたくなく、これ以上引きまわされることはまつぴらだつたし、行けば行くほど腹がたつにちがいなかつた。そこで、

「もう歩けます」と、言い、立ち上がつたが、気持よくすわつていだけに耐えられず、身体が震えるのだつた。ところが身体をまつすぐに立てることもできなかつた。

「どうもだめです」と、頭を振りながら言い、溜息ためいきをもらしな

がらまた腰をおろした。廷丁のことを思い出し、あの男ならそれでも簡単に連れ出してくれるだろうと思ったが、とつくにいなくなつてしまつたらしく、自分の前に立つている娘と男とのあいだを透かし見するのだが、廷丁は見あたらなかつた。

「私が思うのに」と、男が言つたが、ところで男は身だしなみがよく、特にその、二つの長いとがつた端に終つてゐる灰白のチヨツキで、目だつた。「この人が気持わるくなつたのはここの空気のせいだよ。だから、まず病室に連れてゆきなどしないで事務局から出でもらうのが、いちばんいいし、この人にもいちばん気持がいいんじゃないかな」

「そうですよ」と、Kは叫び、無性によろこんでほんと男の話

の中に割つてはいった、「きつとすぐよくなるでしようし、そんなに弱つているわけじやなく、ただ少し腋の下をささえてもらえばいいんです。たいしてお骨折りはかけませんし、道もそう遠くはありません。扉のところまで連れていていただけば、少し階段の上で休んで、すぐなおります。つまりこんな発作を起すことなんかないことで、自分でも驚いているんです。私も勤め人ですし、事務室の空気には慣れているんですが、ここは、あなたのおつしやるよう、少し空気がわるすぎるようですね。ですから、少し連れていってはいただけませんか。どうもめまいがして、ひとりで立ち上ると、気持がわるくなるのです」

そして、二人が彼の腕の下をとらえやすくするため、肩を上げ

た。

ところが男は求めに応じないで、両手を知らん顔でポケットに突つこんだまま、大声をあげて笑った。

「ごらん」と、男は娘に言つた。「やつぱり私の言つたとおりじゃないか。この人はどこででも気分がわるくなるんじゃなくて、この部屋に限つてわるくなるんだ」

娘も微笑んだが、男があえてKをあまりひどく弄つ^{なぶ}つてゐるとでもいうように、男の腕を軽く指先でたたいた。

「だつて君、どうだつていうんだ」と、男はなおも笑いながら言った。「そりやあ、この人を連れてはゆくさ」

「それならいいわ」と、格好のいい頭をしばらくかしげながら、

娘は言つた。

「この人が笑つてることをあまり気にされなくていいんですのよ」と、娘はKに言つたが、Kはまた憂鬱ゆううつになつていて、ぽんやり前を見つめ、釈明などいらない、というふうだつた。「この人は——紹介してもいいでしよう？」（男は手振りで許しを与えた）——この人は案内係なんです。待つている訴訟当事者に求められる案内をなんでもするんですが、この裁判所のことは人々のあいだであまり知られていませんから、いろいろ案内が求められます。この人はどんな質問にも応じられますから、もし気がお進みでしたら、それをためしてごらんなさいな。でもそれはこの人のただひとつ特色ではなくて、第二の特色はあのスマートな

身なりなんです。私たち、つまり役人は、しょっちゅう、しかも第一番目に訴訟当事者たちと接触する案内係は、第一印象をよくするために、身なりもスマートでなければならぬ、と同じように思っています。私たちほかの者は、私をごらんになればすぐおわかりと思いますが、残念ながらたいへん粗末で古風な身なりをしています。着物にお金をかけることなんか、たいして意味もありませんわ、だつて私たちはほとんどいつも事務局にて、ここに寝泊りまでするんですもの。でも、申上げたとおり、案内係はりっぱな着物がいる、と私たちは等しく思っています。ところがその着物は、この点でいくらか変なんですが、お役所からは支給されませんので、私たちはお金を集め——訴訟当事者にも寄付し

ていただき——この人にこんなきれいな着物やまたほかのやを買ったんだすわ。今では万事が整つて、よい印象を与えることもできるのに、この人つたら笑つてはまた台なしにしてしまい、人を驚かすんですよ」

「そりやあそりやあ」と、男はあざけるように言つた。「君、なぜこの人にわれわれの内幕を洗いざらいしゃべるのか、あるいは全然聞きたくもないのに無理に聞かせるのか、私にはわからないね。いいかい、この人は明らかに自分の用件があつてここに来ているんだからね」

Kは抗弁する気が全然なかつた。娘の意図は親切なものらしいし、おそらくKの気をまぎらせ、あるいは気分をまとめる機会を

彼に与えるためのものだつたのだが、手段が間違つていたのだつた。

「この人にあなたの笑つたわけを説明してあげなければいけなかつたんだわ」と、娘は言つた。「ほんと人にを侮辱するものだつたわ」

「最後に連れていくつてあげれば、もつとわるい侮辱だつてこの人は許しなさる、と私は思うね」

Kは何も言わず、一度も顔を上げないで、二人が自分についてまるで事件についてのように論じ合つているのを、我慢していた。それが彼にはいちばん好ましかつた。ところが突然、一方の腕に案内係の手、他方に娘の手を感じた。

「じゃあ立ちなさい、お弱いお方」と、案内係は言つた。

「お二人とも、ほんとうにすみません」と、よろこび驚きながらKは言い、ゆっくり立ち上がり、ささえをいちばん必要とする場所に自分のほうから他人の手を持つていった。

「私にはこう思われるんですけど」と、彼らが廊下に近づいたとき、娘は小声でKの耳にささやいた。「この案内係さんことをよく思つていただくようになることが、とりわけ、私の責任なんじやないかしら。信じていただいて結構なんですけれど、私はほんとうのことを言おうと思います。あの人は冷たい人じやないのよ。病気の訴訟当事者を連れ出すなんて、あの人の役目じやありませんのに、ごらんのように、あの人はしますのよ。きっと私た

ちの誰もが冷たくなんかないし、きっとみなよろこんで人を助けたいんですね。それでも裁判所の役人なものですから、私たちは冷たいし、誰も助けようなどとは思っていない、つていうように見えがちなんです。ほんとうにつらいわ」

「ここでちょっと休みませんか」と、案内係が言つたが、もう廊下に出て、Kがさつき話しかけた被告のちょうど前に来た。Kは、ほとんど自分を恥じていた。さつきはこの男の前にちゃんと立っていたのだが、今は二人がささえねばならず、帽子は案内係がひろげた指の上にのせており、髪形は乱れ、髪毛^{かみのけ}は汗ばんだ額の上に垂れていた。ところが被告はそんなことには気づかぬ模様で、自分を越えてあらぬ方をながめている案内人の前にうやうやしげ

に立ち、ただ自分がここにいることを弁解しようとするとのだった。

「今日はまだ」と、彼は言つた。「私の申請が片づきはしない、ということをよく存じています。けれど、ここで待たしていただけるだろう、今日は日曜日だし、時間があるし、ここでお邪魔にはならない、と思つてまいりました」

「そんなに言い訳をおつしやらなくたつてよろしいですよ」と、案内係は言つた。「そんなに気をつかつていただくのはまつたく恐縮です。あなたはここで余計な場所ふきぎをしておられるが、私の面倒にならないかぎりは、あなたの事件の進行を逐一たどられるのを妨げはしませんよ。自分の義務をおろそかにしている人たちばかり見ていると、あなたのような人たちのことは我慢する

ようになります。どうぞおかげください』

「訴訟当事者を相手にすることをなんて心得ていることでしょう」と、娘は言い、Kもうなずいたが、すぐ、案内人が彼にまたきたので、とび上がった。

「ここで腰かけませんか?」

「いや」と、Kは言つた。「休みたくはありません」

できるだけきつぱりとそう言つたのだが、実際は、腰かけることが彼には気持よかつたにちがいなかつた。まるで船酔いのようだつた。難航中の船に乗つているように思われた。水が板壁の上に落ちかかり、廊下の奥からはかぶさる水のような轟ごうごう々という音が聞え、廊下は横ざまに振れ、両側に待つてゐる訴訟当事者た

ちは下がつたり、上がつたりしているように思われるのだつた。

それだけに、自分を連れてゆく娘と男との落着きはらつた様子がわからなかつた。自分は彼らに引渡されたのであり、彼らが自分を手放すなら、木片のように倒れるにちがいなかつた。二人の小さな眼からは、鋭い視線があちこちと走り、彼らの規則正しい足取りをKは感じるのだが、ほとんど一步一歩彼らに運ばれている有様なので、それに合わせることはできなかつた。ふと、二人が自分に何か言つていてことに気づいたが、何を言つているのかはわからず、ただ騒音だけが聞えてきた。その騒音はあたりにいっぱい、それを貫いて海の魔女^{サイレン}のような変化のない高い調子が響くのが聞えた。

「もつと大きな声で」と彼は頭を垂れたままさやいてから、恥じた。自分には聞き取れないけれど十分大きな声で言われたのだ、ということを知っていたからである。そのときとうとう、眼の前の壁に穴があいたように、さわやかな風が吹きつけてきた。そしてそばで言う言葉を聞いた。

「初めは行きたがるが、ここが出口だ、と何回でも言つてやればいい。そうすれば動かなくなるよ」

Kは、娘があけた出口の扉の前に立つていることに気づいた。

身体じゅうの力が一時に戻つてきたような気がし、自由の身の前味を味わうのだった。すぐに階段に一段足をかけ、そこから、自分のほうに身体をかがめている二人の道づれに別れを告げた。

「どうもありがとう」と、彼はまた言い、繰返し二人の手を握つたが、二人が事務局の空氣に慣れていて、階段からやつてくる比較的さわやかな空氣にも耐えがたそうなのを見てとつて、初めて立ち去つた。二人はほとんど返事もせず、もしKがきわめて素早く扉をしめてやらなかつたならば、娘はおそらく倒れたであろう。Kはしばらくじつと立ち止つていたが、懐中鏡で髪を直し、次の踊り場にころがつてゐる帽子を拾い上げ、——案内係がきつとそれを投げ出したのだつた——階段を降りていつたが、気持があまりにさつぱりし、あまりに大股おおまたで歩けたので、この変りかたにほとんど不安を覚えたくらいだつた。こんな驚きは、これまでのまつたくしつかりした健康状態のときにもまだ感じたことはなか

つた。肉体が革命を起そうとし、彼がこれまで古い肉体の働きに耐えてきたので、新しい働きを用意しようとしているのだろうか？できるだけ早い機会に医者のところへ行こうという考えをしりぞけはしなかつたが、いずれにせよ彼は、——そのことを彼は決心できただが——これから日曜日の午前はいつでも今日よりはよく使おう、と思うのだつた。

第四章 ビュルストナー嬢の女友達

最近Kは、ビュルストナー嬢とほんの少しでも話すことができなかつた。きわめてさまざまやりかたをしてみて、彼女に近づ

こうとしたが、彼女はいつもそれを逃れることを心得ていた。

のが

事務室からすぐ家に帰り、明りもつけずに部屋にこもり、長椅子の上にすわって、控えの間をながめること以外に何もしなかつた。たとえば女中が通り過ぎ、人のいらないらしいその部屋の扉とびらをしめてゆくと、彼はしばらくしてから立ち上がり、それをまたあけてみるのだった。朝はいつもより一時間ばかり早く起きたが、おそらくビュルストナー嬢が勤め先に出てゆくとき、彼女とだけ出会うためだつた。ところがこんな試みがどれもうまくやかなかつた。そこで、彼女に勤め先にも部屋あてにも手紙を書き、その中でもう一度自分の態度を弁明しようとし、どんな償いにも応じる旨を申し出、彼女が置こうと思うどんな限界もけつして踏み越えない

ことを約束し、一度会う機会を与えてほしいということだけを懇願し、あなたと相談しないうちにはグルウバツハ夫人ともどうしようもないのだから、特にそうしてほしい、と言つてやり、最後には、次の日曜日には一日じゅう部屋にいて、自分の懇請を聞きとどけてくださることを約束するような、あるいは少なくとも、何であつてもあなたのおっしゃることに応ずると約束しているのになぜ私の懇願をかなえていただけないのかを説明するような、なんらかの合図をお待ちしている、と言つてやつた。手紙はどれももどつてはこなかつたが、返事もまた来なかつた。ところが日曜日にひとつ徴候が見られ、それはつきりし加減は十分なほどだつた。その朝は早くから、鍵穴かぎあなを通してKは、控えの間に特別

な動きがあることを認めていたが、やがてそのわけがわかつた。フランス語の女教師、彼女はドイツ人でモンターケといい、弱々しく、顔色の蒼いあお、少し跛びつこの女で、これまで自分の部屋をとつて住んでいたが、ビュルストナー嬢の部屋に引っ越したのだつた。何時間も、彼女が控えの間を通つて足を引きずるのが見られた。しょっちゅう、下着類とかカバーとか本とかを忘れて、そのため取りにゆき、新しい部屋に運ばねばならないのだつた。

グルウバツハ夫人がKに朝飯を持つてきたとき——Kをひどく怒らせて以来、夫人はどんな小さなことも女中にはまかせなかつた——Kは、五日ぶりに初めて彼女に話しかけないでいられなくなつた。

「いつたい今日は、なぜ控えの間がこう騒がしいんですか？」と、コーヒーを注^つぎながらKはたずねた。「やめさせるわけにはいきませんか？　日曜日にわざわざ片づけなけりやあいけないんですか？」

Kはグルウバツハ夫人のほうを見なかつたが、彼女がほつとしあうに息をつくのがわかつた。Kのこのようなきびしい質問さえも、夫人は、許しあるいは許しの始まり、と考えたのだつた。「片づけているんじやありません、Kさん」と、夫人は言つた。「モンターケさんがビュルストナーさんのところへ移るだけのこととして、荷物を運んでいるんですねわ」

夫人はこれ以上は言わず、Kがどうそれをとり、話し続けるこ

とを許すかどうか、待ちかまえていた。だがKは夫人をためしたのだったで、考えこんだように匙^{さじ}でコーヒーをかきまわし、黙つていた。それから彼女のほうに顔を上げて言つた。

「ビュルストナーさんのことについてのあなたの前の疑いを、もう捨て去つてしまつたでしようね？」

「Kさん」と、この質問だけを待ちかまえていたグルウバツハ夫人は叫び、彼女の重ねた手をKのほうに差出した。

「あなたは、このあいだの何気ない話をむずかしくおとりになつたのですわ。私はちつとも、あなたなりほかのどなたかなりを傷つけようなどとは思いませんでした。Kさん、あなたはもう私は長年のお付合いですから、そのことを信じていただけるはずで

すわ。私がこの数日どんなに思い悩んだか、あなたにはおわかりになれませんわ！ 私が間借りの方の悪口を言うなんて！ そしてあなたは、Kさん、そう思つていらっしゃるんです！ そして、あなたのことを追い出すんだなんておっしゃったんだわ！ あなたのこと追い出すなんて！」

最後の言葉はもう涙でつまつてしまい、エプロンを顔にあてて、声をあげてすり泣きするのだつた。

「泣かないでください、グルウバツハさん」と、Kは言い、窓から外を見たが、ただビュルストナー嬢だけのことを考え、そして、彼女が見知らぬ娘を自分の部屋に迎え入れたことを考えていたのだった。

「泣かないでください」と、もう一度言つたが、振向くとグルウバツハ夫人はまだ泣いていた。

「実際あのときは私もそうわるい意味で言つたんじやありません。お互いに誤解していたんです。そういうことは旧友でも起りうることですよ」

グルウバツハ夫人はエプロンを眼の下までずらせて、Kがほんとうに仲直りしたのかを見た。

「ねえ、そういうわけだつたんですよ」と、Kは言い、グルウバツハ夫人の態度から判断するのに、例の大尉が何も暴露してはいないらしかつたので、あえてさらに言葉を足した。「よその娘のこととて私があなたと仲たがいするなんて、ほんとにそうお思いで

すか?」

「ほんとにはうですわね、Kさん」と、グルウバツハ夫人は言つたが、いくらか安心したように思つて早速まずいことを言つたのは、彼女の運のつきだつた。「しそつちゅう自分にきいてばかりいるんですよ。なぜKさんはあんなにビュルストナーさんのことばかり気にしているんだろう? あの方から何かいやな言葉を聞いたら私は眠れないつていうことをよくご存じなのに、あの人のことになぜ私といさかいなんかされるんだろう、つて。あのについては、ほんと自分的眼で見たことだけを申上げたんだわ」

Kはそれに対しても言わなかつた。最後の言葉で夫人を部屋

から放り出してやらねばならない、と思つたが、そうはせずにおいた。コーヒーを飲み、グルウバツハ夫人におしゃべりがすぎるということを気づかせてやるのにとどめた。室外ではまた、モンターグ嬢の、控えの間いっぱいを横切つてゆく引きずるような足音が聞えた。

「聞えますか？」と、Kはきき、手で扉のほうをさした。

「ええ」と、グルウバツハ夫人は言い、溜息ためいきをついた。「私も手伝い、女中をやつてお手伝いさせようとも思つたんですけど、あの人は片意地な人で、なんでも自分で片づけようと思つているんです。ビュルストナーさんもビュルストナーさんですわ。モンターグさんに部屋を貸しているだけでもいやになることがあるの

に、自分の部屋に呼びまするんですからねえ」

「そんなことはあなたの知つたことじやないですよ」と、Kは言
い、茶碗の中の砂糖の残りをつぶした。「いつたいそれで何かあ
なたの損害になるんですか?」

「いいえ」と、グルウバツハ夫人は言つた。「そのこと自体は私
にはほんとに願つたりですわ。それで部屋がひとつあき、そこへ
私の甥おいの大尉を入れることができるもの。最近あれをあな
たのおそばの部屋に住ませておいたので、お邪魔じやなかつたか、
とずつと前から心配していましたわ。あれはあんまり気のつくほ
うじやないものですから」

「なんていうことを考えられるんです!」と、Kは言い、立ち上

がつた。「そんなつもりじゃ全然ありませんよ。あのモンタークさんが歩いているのを——ああ、またもどつてきましたね——我慢できなきからといって、あなたは私のことをどうも神経過敏とお考えのようですね」

グルウバツハ夫人は、まつたく自分には手の施しようもないようと思つた。

「Kさん、引っ越しの残りを延ばすように申しましようか？ もしお望みなら、すぐそうしますけれど」

「いや、ビュルストナーさんのところへ移らせてやりなさい！」
と、Kは言つた。

「ええ」と、グルウバツハ夫人は言つたが、Kの言うことを理解

しきつてはいないようだつた。

「それじやあ」と、Kは言つた。「あの人荷物を運ばなくちゃいけない」

グルウバツハ夫人はただうなずいた。この口もきけないで当惑している有様は、表面上はただ傲慢さのようと思えて、Kをいつそういらつかせるのだった。彼は、部屋の中を窓ぎわから扉まであちこちと歩きはじめ、それによつてグルウバツハ夫人の引下がる機会を奪つてしまつたが、彼女はそういうことがなければきっと引下がつていたことであろう。

ちょうどKがまた扉のところまで来たとき扉をたたく音がした。それは女中で、モンターケ嬢がKさんと少しお話したいことが

あり、それゆえ食堂でお待ちしているから、おいでくださるよう
お願ひします、ということを伝えた。Kは女中の言うことを考え
こんだようにじつと聞いていたが、ほとんど嘲笑^{ちようしょう}的な眼差^{まなざし}
をして、驚いているグルウバツハ夫人のほうに振返った。この眼
差はKがすでにずっと前からモンターク嬢の招きを予想していた
のだし、それはまた、この日曜日の午前にグルウバツハ夫人の下
宿人たちによつて味わわされねばならなかつたわづらわしいこと
と大いに似合いのことだ、と言つてゐるように見えた。すぐまい
ります、という伝言を持つて女中を帰らせ、上着を換えるため洋
服箪笥^{だんす}のところへ行き、面倒な人だとぶつぶつこぼしてゐるグル
ウバツハ夫人に対する返答として、朝食の道具をもう持つていつ

てもらいたい、と頼んだだけだつた。

「ほんどのなんにも手をおつけになつていませんわ」と、グルウ
バツハ夫人は言つた。

「ああ、いいんですから持つていつてください！」と、Kは叫ん
だが、すべてのものにモンターク嬢が浸みこんでいるようであり、
いやな氣持だつた。

控えの間を通り抜けるとき、ビュルストナー嬢のしめきつた扉
をながめた。けれど、この部屋へ招かれたのではなく、食堂へだ
つた。彼は食堂の扉を、ノックもせずにあけた。

食堂は、奥行はきわめてあるのだが、間口は狭い、窓がひとつ
しかない部屋だった。その部屋には場所が大きいにあるにはあるの

で、扉側の片隅に戸棚を二つ斜めに置くことができていたが、ほかの場所は長い食卓ですっかり占められ、食卓は扉の近くから始まつて、大きな窓のすぐ近くまで達しており、そのため窓にはほとんど行かれないようになつていた。

もう食事の支度（したく）ができていて、しかも、日曜日にはほとんどすべての下宿人がここで中食をとるので、多人数の支度であつた。

Kが部屋にはいると、モンターク嬢は窓ぎわから食卓のそばに沿つてKのほうにやつてきた。二人は互いに、黙つたまま会釈をした。次に、いつもと同じように頭をひどくもたげたモンターク嬢が言つた。

「私のことをご存じかどうか知りませんが」

Kは、眼を狭めながら女を見つめた。

「よく存じています」と、彼は言つた。「だつてもうかなり長く
グルウバツハ夫人のところにお住いじゃありませんか」

「でも、私がお見かけしたところでは、下宿のことはあまり気に
かけていらっしゃらないようですが」と、モンターク嬢は言つた。
「そんなことはありません」と、Kは言つた。

「おかげになりませんか?」と、モンターク嬢は言つた。二人は、
黙つたまま、食卓の一番端にある椅子を二つ引出し、互いに向い
合つて腰をおろした。しかし、モンターク嬢はすぐまた立ち上が
つた。ハンドバッグを窓敷居に置き忘れ、それを取りにいったか
らである。部屋じゅうを擦るよう歩いていった。手提げを軽く

振りながらもどつてくると、彼女は言つた。

「私はただ友達に頼まれて、ちょっとお話ししたいのです。あの人は、自分で来ようと思つたのですが、今日は少し気分がわるいものですから。どうかあしからずお思いになつて、あの人のかわりに私の申上げることをお聞きくださいまし。あの人も、私があなたに申上げる以外のことは申上げられませんでしよう。反対に私は、あの人よりも申上げられるものと思ひますわ、私は比較的局外の立場にありますから。あなたもそうおいでございましょう？」

「いつたい、おっしゃることつてなんですか？」と、Kは言葉を返したが、モンターク嬢の眼が絶えず自分の唇くちびるに注がれているの

を見ているのに、疲れた。相手はそれによつて、彼がまず言おうとすることに対する支配力を我が物としようとするのだつた。

「私はビュルストナーさんご自身でお会いくださるようお願いいだしたのですが、それはご承知願えぬわけですね」

「そうです」と、モンターケ嬢は言つた。「あるいはむしろ、そ
うではありません、と申上げるべきかもしません。あなたは妙
にきつぱりとした物の言いかたをなさいますわね。一般に言つて、
お話しすることをお引受けしたわけでもなければ、またその反対
にお断わりしたわけでもありません。でも、お話しすることを不
必要と考える場合だつてありうるわけとして、ちょうど今の場合
がそうなんです。おっしゃることを伺つて、今は私、はつきりと

お話しできますわ。あなたは私のお友達に、手紙か口頭でお話しすることをお求めになりました。でもあの人は、これは私も少なくともそう考えなければならぬのです。このお話し合いがなんについてなのか知つております。そして、そのため、私にはわからない理由から、たといほんとうにお目にかかることになつても、それは誰のためにもならない、と確信しておりますのよ。そしてあの人は昨日になつてやつと私にそのことを話してくれましたが、ほんのちよつとだけでした。そしてそのとき言つたことは、お会いすることはたぶんKさんにもたいしたことじやないのでしょう、なぜならKさんもほんの偶然によつてそんなことをお考えになつたのであり、ご自分でもきつと、特別お話したさなくと

も、たとい今すぐではなくてもほんのすぐあとで、そんなことがみな無意味だということにお気づきになるでしょうから、ということでした。それに対しても私は、それはそうだがKさんにはつきりしたご返事をしてさしあげたほうが、事を完全にはつきりさせることには有益なことだと思う、と答えました。私はこの役目を引受けることを申出ましたが、少しためらつてから、あの人は私の言うことを承知しました。おそらく私はあなたのお望みのようにも振舞つたことと思いますが。なぜなら、どんなつまらぬ事柄においてでも、少しでもはつきりしないことがあれば心を悩ますものですし、今の場合のようにたやすく片づけることができるものなら、すぐしてしまつたほうがよろしいですからね」

「どうもありがとうございます」と、Kはすぐ言い、ゆっくりと立ち上がり、モンターケ嬢を見つめ、それから食卓の上、次に窓の外をながめ、——向う側の家は陽^ひを浴びていた——そして、扉のほうに行つた。モンターケ嬢は、彼の真意は全部が全部はわからないというように、二、三歩彼の後^{あと}を追つていつた。ところが、扉の前で二人は後に退^のかねばならなかつた。扉が開き、ランツ大尉がはいつてきたからである。Kはこの男を初めて間近に見たのだった。大柄な、およそ四十ばかりの男で、褐色^{かつしょく}に日焼けした、肉づきのいい顔をしていた。彼はちよつと会釈をし、それはKにも向けられたのだが、次にモンターケ嬢のところへ行き、うやうやしげに手に接吻^{せっぷん}した。その動作はなかなか物なれていた。

いんぎん

彼のモンターケ嬢に対する慇懃さは、Kの彼女に対する取扱いぶりとは目だつて著しい対照をなすものだつた。それでもモンターケ嬢は、別にKに対して気をわるくはしていないらしかつた。なぜなら、Kには彼女がそういう素振りを見せたように思えたが、自分を大尉に紹介しようとしたからである。しかしKは、紹介してもらいたくはなく、大尉にもモンターケ嬢にも少しどもうちとけることはできないようと思えたし、あの手へ接吻する有様を見ていると、Kには、この女がきわめて純真で無私であると見せながら、その実、自分をビュルストナー嬢から引離そうとする一味と結託しているように思われるのだつた。けれどもKは、そのことを見抜いたと信じたばかりでなく、モンターケ嬢がひとつの巧

妙な、確かに両刃とも言うべき手段を選んだことを、見抜いた。

（もろは）

この女はビュルストナー嬢と自分との関係の意味をおおげさに述べたて、特に頼まれた伝言の意味をおおげさに言つて、同時にそれを、万事を極端に考えるのは自分だ、というふうに持つてゆこうと試みているのだ。そうはうまくゆかぬぞ、自分は何もおおげさに考えようとなんかしていないし、ビュルストナー嬢なんかは高が知れたタイピストであり、自分には長くは抵抗できたものじやない、ということはわかつてゐるんだ、と考えた。その際彼は、グルウバツハ夫人からビュルストナー嬢について聞いたことは故意に計算には入れなかつた。彼はこんなことを考えながら、ほとんど挨拶もしないで部屋を立ち去つた。すぐ自分の部屋へ行こう

と思つたが、背後の食堂から聞えるモンターケ嬢の低い笑い声は、おそらく自分は大尉とモンターケ嬢との二人を驚かしてやつてもいいはずだ、という考えを彼にいだかせた。あたりを見まわし、まわりの部屋部屋のどれから邪魔がはいることが考えられるかもしれないと聞き耳をたてたが、どこも静かであり、ただ食堂の話し声が聞かれるだけで、それと、台所に通じる廊下からはグルウバツハ夫人の声が聞えてくるだけだつた。機会は絶好のように思われた。Kはビュルストナー嬢の部屋の扉へ行き、低くノックした。いつこうに物の気配がしないので、もう一度ノックしたが、依然として返事がなかつた。眠つているのだろうか？　あるいはほんとうに気分がわるいのだろうか？　あるいはまた、こんなに

低くノックするのはKにちがいないと気づいて、ただその理由から居留守をつかつてはいるのだろうか？ Kは、彼女が居留守をつかつているのだ、と考え、いつそう強くノックし、ノックに返事がないので、ついに扉を慎重に、何か正しくない、そのうえ無益なことをやつてはいるのだ、という感情がしないでもなかつたが、あけてみた。部屋の中には誰もいなかつた。そのうえ、Kが知つていた部屋の面影はほとんどなかつた。壁ぎわに二つのベッドが並んで置かれ、扉の近くの三脚の椅子には着物や下着類がうず高く積まれ、戸棚がひとつあけ放しになつてはいた。モンターケ嬢が食堂でKと話しこんでいるうちにビュルストナー嬢は出かけてしまつたらしかつた。それによつてKはたいして驚きもせず、ビ

ユルストナー嬢にそんなにたやすく会えるものとはもうほとんど期待してはいなかつたのであり、こんなことをやつてみたのも、ほとんどただモンターケ嬢に対する反抗の気持からであつた。しかしそれだけに、扉をふたたびしめながら、食堂のあいた扉のところでモンターケ嬢と大尉とが互いに話し合つているのを見たとき、彼にはつらい思いがしたのであつた。Kが扉を開けたときから、二人はおそらくそこに立つていたのであり、Kをながめているなどという様子は少しも見せないようにし、低声で話し合いながら、話のあいだにぼんやりあたりを見まわしているときのような格好で、視線でKの動作を追つてゐるだけだつた。しかし、この視線はKに重苦しくかぶさつてきて、彼は急いで壁に沿つて自

分の部屋へ帰つていつた。

第五章 答刑吏ちけいり

最近のある夕方、事務室と中央階段とを隔てる廊下をKが通る
と、——その晩は彼がほとんどいちばん後あとから家に帰ることにな
り、ただ発送室にだけまだ二人の小使が電燈ひとつの照らす光の
下で働いていたが——まだ一度も自分で見たことはなかつたが物
置部屋があるだけだとこれまで思つていた扉とびらの後ろで、うめき声
をあげてゐるのが聞えてきた。驚いて立ち止り、聞き違ひではな
いか確かめるため、もう一度聞き耳をたてた。——一瞬静かにな

つたが、次にまたうめき声が聞えた。——おそらく立会いが要ることだろうから、小使の一人を呼ぼうと思つたが、抑えがたい好奇心に駆られたため、扉をノックしたうえであけてみた。想像していたとおり、物置部屋だつた。戸口の後ろには、不用な古印刷物や投げ散らされた空の陶製のインク瓶^{から}_{びん}が、ごろごろしていた。ところが部屋の中には三人の男が立ち、この天井の低い部屋の中で背をかがめていた。棚^{たな}の上につけた蠟燭^{ろうそく}が彼らに光を投げていた。

「ここで何をやつているんだ?」と、興奮のためせきこんで、しかし高声ではなく、Kはきいた。明らかにほかの二人を牛耳^{ぎゅうじ}つているらしい一人の男がまず彼の眼をひいたが、一種の濃い色

の革服を着て、頸^{くび}から胸元深くまでと両腕全体とをむきだしにしていた。この男は黙っていた。ところが別の二人が叫んだ。

「あなたが予審判事にわれわれのことで苦情を言つたものだから、われわれは笞^{むち}で打たれなけりやあならないんです」

そう言われてやつとKが気がつくと、それはフランツとウイレムとであり、第三の男が、彼らを打つため、手に笞を持つていた。「ところが」と、Kは言い、男たちを見つめた。「何も苦情を言つたわけじやありませんよ。ただ、私の住居で起つたことを言つただけだ。そして君たちのほうも、けつして非の打ちどころのないように行動したわけじやないからね」

「でも」と、ウイレムが言つたが、一方フランツはその背後に隠

れて、明らかに身を守ろうとしているのだった。「われわれのサラリーナがどんなにわるいかご存じなら、われわれについてもつとよい判断を下してもらえるはずですよ。私は家族を養わなければなりませんし、このフランスは結婚しようと思っているんです。

よくあることですが、もつと金が楽になるようにとするんだけれど、ただ働くだけでは、どんなに一生懸命やつてみても、うまくゆきはしない。そこであんたのりっぱな下着類がわれわれを誘惑したわけで、もちろん、そんなことをするのは監視人には禁じられているし、不正にはちがいないんだけれど、下着は監視人のもの、というのはしきたりで、これまでいつもそうだつたんですよ、ほんとうに。それにまた、逮捕されるくらい運のわるい人間

にそんな物が何の役にたつかも、わかりきつたことじやありませんか？ もちろん、そんなことをあからさまに言い出されたんじや、罰が来るにきまつていますよ」

「君が今言つたことは、私も知らなかつたし、またけつして君たちを罰するよう requirement したわけじやないんだけれど、根本的なことを問題にしたんですよ」

「おいフランツ」と、ウイレムは別な監視人のほうを向いた。

「この人はおれたちの処罰なんか requirement しなかつた、とおれが言つたろう？ 今お前も聞いたとおり、この人はおれたちが罰せられなくちやならないつてことは知らなかつたつて言うんだ」

「こんな話に乗せられちゃだめだ」と、第三の男がKに言つた、

「罰は正当でもあるし、逃げられもしないものなんだ」

「そいつの言うことを聞いちやいけません」と、ウイレムは言い、答でびしやりとやられた手を素早く口に持つてゆくときにだけ、話をとぎらしたが、「われわれが罰せられるのは、ただあんたが密告したためなんですよ。そうでなければ、われわれのやつたことを聞かれたって、なんにも起りはしなかつたはずです。罰が正当だなんて言えるものですかね？ われわれ二人、ことに私のほうは、監視人として長いあいだりつぱにやつてきたんです。――あなただって、われわれが、役所の立場から言えば、よく監視しあつていうことは、白状しなけりやあならんはずだ。――われわれは、出世する見込みがあつたんだ。きつと間もなくこの人みた

いに笞刑吏になれたんだ。この人ときたら誰からも密告されない
つていういい身分なんですよ。なぜってこんな密告なんてほんと
うにほんのまれにしか起りませんからね。ところが今では万事お
しまいです。われわれの出世も止つたし、監視人の役よりはずつ
と下の仕事をやらなきやならないでしようし、そのうえ、今はこ
んな恐ろしく痛い笞を食う始末ですからね」

「笞はそんなに痛いんですか？」と、Kはきき、笞刑吏が彼の前
で振っている笞をよく見た。

「すっかり脱がされて裸にならなくちやなりませんからね」と、
ウイレムは言つた。

「そうなんですか」と、Kは言い、笞刑吏をよくながめたが、水

夫のように褐かつしょく色に日焼けして、野生的で元気のみなぎつた顔をしていた。

「二人の笞を助けてやる見込みはありませんか」と、彼は男にきいた。

「だめだね」と、笞刑吏は言い、にやにやしながら頭を振つた。
 「着物を脱ぐんだ!」と、男は監視人たちに命令した。そしてまた、Kに言つた。

「あいつらの言うことを全部信用しちゃいけませんぜ。なにせ笞が恐こわくて少し頭が変になつてゐるんだから。たとえば、こここのこの男が」——と、彼はウイレムのこと指さした——「自分の出世のことをしゃべつたが、あれなんかはまつたくばかげていまさ

あ。どうです、やつはなんて肥っているんだろう——笞で打つても最初は脂肪^{あぶら}のなかに消えてしまいそうだ——なんでこの男がみんなに肥つているかわかるかね？ 逮捕者の朝飯を平らげちやう癖があるからなんだ。あんたの朝飯を平らげちやわなかつたですかい？ ね、おれの言つたとおりだ。ところでこんな腹をした男は、こんりんざい笞刑吏にはなれっこない、まつたくなれっこありませんや」

「こういう腹の笞刑吏だっていますよ」と、ちようどバンドをゆるめていたウイレムが言い張つた。

「こら」と、笞刑吏は言い、笞で頸の上に一撃を加えたので、身^{からだ}をぴくぴく震わせた。「人の話なんか聞いていないで、着物を

脱ぐんだ

「この人たちを逃がしてくれたら、お礼はたっぷりしますよ」と、Kは言い、もう笞刑吏の顔は見ないで——こういう取引はお互に眼を伏せたまますませるのがいちばんいいのだ——紙入れを取出した。

「きっとお次は、おれのことも密告し」と、笞刑吏は言つた。

「そしておれにも笞を食わせようつていうんだろう。だめだ、だめだよ！」

「よく考えてごらんなさい」と、Kは言つた。「この二人が罰せられることを望んだのなら、いまさら金を出して助けてやるはずがないじゃないですか。ただこの戸をしめて、これ以上見たり聞

いたりしたくないつていうんで家に帰れば、それでもすむんです
よ。ところがそうはしない。むしろ、この人たちを逃がしてやり
たいつて真剣に考えているんです。二人が罰せられなきやあなら
ない、いやただ罰せられるかもしれない、とわかつたなら、この
二人の名前は言わなかつたでしよう。私はこの二人に罪があると
は全然思いませんね。罪があるのは組織なんだ、上の役人たちな
んだ」

「そのとおりですよ！」と、監視人たちは叫んだが、すぐ一撃を
すでに着物を脱いだ背中に食つた。

「もしここで君の答の下に高位の裁判官がいるのなら」と、Kは
言つて、そう言いながらすでに振上げられていた答を押えて下げ

させた、「君がなぐることをほんとうに邪魔はしませんよ。反対に、君がそういうことをやつてくれるのを元気づけるために、金をやってもいいくらいだ」

「あんたが言うことは、もつともらしく聞えるが」と、笞刑吏は言つた。「おれは賄賂わいろなんかでだまされないぜ。おれの役目は笞でなぐることだから、なぐるまでだ」

監視人のフランツは、おそらくKが割りこんできてよい結果になるものと期待しながらこれまでかなり控え目な態度でいたが、このとき、まだズボンだけははいたままで扉のところへ現われ、ひざまずいてKの腕に取りすがり、ささやいた。

「われわれ二人を助けていただけないなら、少なくとも私だけで

も逃がす算段をやつてみてください。ウイレムは私より年上で、あらゆる点で感じが鈍いですし、二年ばかり前に一度軽い笞刑を受けたことがあるんですが、私はまだそんな恥を受けたことはないし、ただウイレムに教えられたとおりにやつてているだけなんですね。あいつがよいにつけわるいにつけ、私の先生株としてね。階下たの、銀行の前では、私の 許いいなづけ婚婚が事の成行きを待つていて、まつたく恥ずかしくてたまらないくらいです。

彼はKの上着で、涙でびしょぬれの顔をふいた。

「もう待つてはやらないぞ」と、笞刑吏は言い、両手で笞をつかみ、フランスに打下おろしたが、一方ウイレムは、隅にうずくまつて、頭を動かそうともしないで、こつそり様子をうかがっていた。

そのとき悲鳴があがつたが、それはフランツのもらしたもので、とぎれず、変化のない叫びであり、まるで人間からではなく、拷問される機械からほどばしつたように思われるものだつた。廊下じゅうがその叫びで鳴りわたり、家全体がそれを聞いたにちがいなかつた。

「わめいちやいけない」と、Kは叫んだが、自分を抑えることができなかつたのだつた。そして、小使がやつてくるにちがいない方角を緊張して見つめながら、フランツを突くと、それはたいして強かつたわけではないが、それだけでもこの思慮を失つた男は倒れ、痙攣けいれんしながら両手で床をかきむしるのだつた。それでも殴打をのがることはできず、答は床の上にまで彼をつけまわし、

彼が笞の下でころがつてゐるあいだ、笞の先端は規則正しく上へ下へと飛んだ。そうしてゐるうちにも遠くに小使が一人現われ、その二、三歩後あとにはもう一人が現われた。Kは急いで扉をしめ、中庭に面した窓のひとつに歩み寄つて、それをあけた。叫び声はすっかりやんだ。小使を近づけないために、彼は叫んだ。

「私だよ！」

「今晩は、主任さん」と、返事が叫んだ。「どうかしたんですか

？」

「いや、なに」と、Kは答えた。「中庭で犬がほえてゐるだけなんだ」

それでも小使が動こうとはしないので、彼は言葉を足した。

「君たちは仕事をしていいんだよ」

小使たちと話をしなければならなくなる羽目にならぬように、窓から身体を乗り出した。しばらくしてまた廊下を見ると、小使たちはもう立ち去っていた。しかしKは窓ぎわにとどまつていて、物置部屋にはいろうともせず、家にもどりたくもなかつた。見下ろすと、小さな四角の中庭で、そのまわりはぐるりと事務室が取囲み、窓はもうみな暗くなつていたが、最上階の窓だけが月光の反射を受けていた。Kは視線をこらして、二、三台の手押車をごちゃごちゃ集めてある木材置場の片隅の暗闇くらやみのあたりを透かして見ようとした。笞刑を阻止することに成功しなかつたことが彼の心を苦しめるのだつたが、それがうまくやかなかつたのは彼の

責任ではなく、もしフランツがわめかなかつたら——確かにそれはひどく痛かつたにはちがいないが、決定的なせつなには自分を抑えなくてはならぬものだ——もし彼がわめかなかつたら、Kはまだ笞刑吏を説き伏せる手段を見つけだしたことだろうし、少なくともそれはきわめてありうべきことだつた。最下級の役人どもがみな無頼漢なら、最も非人間的な役目を受持つてゐる笞刑吏などはどうして例外であるはずがあろう。それにKは、あの男が紙幣を見て眼を輝かすさまをよく観察したし、男は明らかにただ賄わいろの金額をせり上げるために、大まじめで笞を振るう気配を見せたのだつた。そしてKは金を惜しまなかつたろう。監視人を逃がしてやることがほんとうに彼の関心事だつた。この裁判組織の腐

敗と戦うことを始めた以上、この方面からも手をつけるということは、当然なことだつた。ところがフランスがわめき始めた瞬間に、もちろん万事はおしまいになつてしまつた。小使たちや、おそらくはここにいるあらゆる人々がやつてきて、彼が物置部屋で連中と掛け合つてゐる場面を襲われることは、Kにも我慢ができないかねた。こんな犠牲はほんとうになにびとも自分に要求することはできないのだ。もし彼がやる氣があるのだったら、自分自身で着物を脱ぎ、笞刑吏に自分が監視人の身代りになると申出たほうが、実際事はほとんどいつそう簡単であつた。ところで笞刑吏はこの身代りをきつと受入れはしなかつただろう。なぜなら、そんなことをすれば、少しも利益にはならぬばかりか、彼の義務をひ

どくそこなうことになり、Kが訴訟手続中であるかぎり、裁判所のあらゆるメンバーに対しても手をかけることが禁じられているにちがいないから、おそらくは二重に義務をそこなうことになつたろう。もちろん、この場合には特別な規定が通用したかもしれない。いずれにもせよ、Kは扉をしめる以外にできることもなく、だからといってそれでKにとつてあらゆる危険がまったく除かれるというわけのものでなかつた。最後にフランツを突いたことは残念だが、興奮していたことだけで申し訳がたつというものだ。

遠くで小使たちの足音が聞えた。彼らに目だたぬように、窓をしめ、中央階段のほうに行つた。物置部屋の扉のところでしばら

く立ち止り、聞き耳をたてた。まったく静まりかえっていた。あの男が監視人たちをなぐり殺してしまったのかもしれない。実際、彼らはまったく男の手中に納まつたのだつた。Kは把手とつてに手を伸ばしかけたが、また引つこめた。もう誰も助けることはできないし、小使たちがすぐやつてくるにちがいなかつた。しかし、この事件をお持ち出し、ほんとうの罪人、つまり自分の前に誰も姿を見せようとはしない高位の役人たちを、自分の力のかぎり、それ相応に罰してやろう、と心に誓つた。銀行の表階段を降りながら、念入りに通行人たちを見たが、誰かを待つているような娘などはかなり広い範囲にわたつて見受けられなかつた。いいなづけ許いき婚なまけが待つてていると言つたフランスの言葉は、大いに同情をひこうとい

う目的のためだけであるような、もちろん許してやるべき偽りであつたことがわかつた。

次の日もまだ、監視人のことがKの念頭を離れなかつた。仕事をしていても気が散つて、無理にやつてしまおうと思つたので、前日よりもなお少し長く事務室に居残らなければならなかつた。帰りがけにまた物置部屋の前を通りかかり、習慣になつているかのように扉を開けてみた。真つ暗なはずと思つていたのに現実に見たものは、とうてい理解できなかつた。万事が、昨晩扉を開いたとき見たままで、少しも変つていなかつた。すぐ敷居の後ろまで来ている印刷物とインク瓶、笞を手にした笞刑吏、相變らずすつかり裸の監視人たち、棚の上の蠅燭、そして監視人たちは訴え、

叫びはじめるのだつた。

「ああ、あんた！」

すぐKは扉をしめ、しつかとしめでもするかのように、拳で扉をたたいた。ほとんど泣きださんばかりに小使たちのところへ走つてゆくと、彼らはのんびりと贋写版の仕事をしていたが、驚いて仕事の手を休めた。

「物置部屋を片づけちまつてくれないか！」と、彼は叫んだ。

「まつたく塵ちりの中に埋まつちまうよ！」

小使たちは、明日掃除をするつもりでいた、と言つたので、Kはうなずき、もう夜も遅くなつた今、自分が考えたとおり仕事を無理にさせるわけにもゆかなかつた。小使をしばらく身近におこ

うと思つて、しばらく腰をおろし、二、三枚の謄写をひつかきまわし、それで自分が謄写を調べているように見せかけることができたと思い、自分といつしょに小使たちが帰ろうとはしていないうを見てとつたので、疲れきつて、ぼんやりと、家へ帰つていつた。

第六章 叔父・レーニおじ

ある日の午後——ちょうど郵便締切日の前なのでKは非常に忙しかつたが、書類を持つてはいつてくる二人の小使のあいだを押しひけて、いなか田舎の小地主であるKの叔父のカールが部屋にはいつ

てきた。彼が叔父の姿を見かけてもたいして驚かなかつたのは、それよりかなり前に、叔父がやつてくるという知らせを受けてすっかり驚いていたからだつた。叔父がやつてくるということは、すでに約一ヶ月も前からKにはわかつていたことだつた。すでにそのとき、叔父が少し前かがみになり、左手にペしやんこになつたパナマ帽を持ち、右手を遠くのほうから自分に差出し、邪魔になるあらゆるものにぶつかりながら、あたりかまわぬ急ぎかたで机越しに手を握る有様が、Kには眼に見えるようだつた。叔父は絶えずせかせかしていたが、いつもただ一日しか滞京しないのに、そのあいだに計画してきたことをみんな片づけなければならぬ、そのうえ、たまたま生じた面会や用談や楽しみなども何ひとつ逃

すまい、という面倒な気持に追い立てられているからだつた。そういう場合にKは、昔自分の後見人になつてもらつたこともあり恩があるので、あらゆる事柄で世話もせねばならず、そのうえ、自分のところに泊めなくてはならなかつた。「田舎から来る幽霊」と、Kは曰ごろ叔父のことを呼んでいた。

挨拶あいさつをすませるとすぐ、——肘掛け椅子ひじかけいすにすわるようKはすすめだが、叔父はその余裕すらなかつた——二人だけで少し話したいことがある、とKに頼んだ。

「どうしても人払いが必要なんだ」と、叔父は苦しげに唾つばをのみこみながら言つた。「わしの安心のためにには必要なんだ」

Kはすぐさま、誰も部屋に入れてはいけないと命じて、小使た

ちを部屋から出した。

「いったいなんということをやつたのだ、ヨーゼフ？」と、二人きりになつたとき叔父は叫び、机の上にすわり、すわり心地をよくするためさまざまな書類を見境もなく尻の下に詰めこんだ。Kは黙つていた。なんの話かわかつてはいたが、夢中になつていた仕事の緊張を突然解かれたので、まず心地よい疲労に身をまかせ、窓越しに向う側の通りをながめていた。彼の席からは、ただ小さな三角形の部分、二つの陳列窓のあいだの何もない壁の部分が見えるだけだった。

「窓の外なんか見ている！」と、叔父は腕をあげて叫んだ。「後生だから答えてくれ、ヨーゼフ！ ほんとうなのか、いつたいあ

んなことがほんとうにありうることかね？」

「叔父さん」と、Kは言つて、ぼんやりしていた気持を振切つた、「なんのことやらさっぱりわかりませんが」

「ヨーゼフ」と、叔父はたしなめるように言つた。「わしの知るかぎり、お前はいつもほんとうのことを言つてきた。ところがお前の今の言葉を聞くと、どうもそれをわるいしるしととらなきやならんようだね？」

「ああ、叔父さんの用件がわかりましたよ」と、Kは素直に言つた、「きっと私の訴訟のことをお聞きになつたんですね」

「そうだよ」と、ゆっくりうなずきながら、叔父は答えた。「お前の訴訟のことを見いたんだ」

「いつたい誰からですか？」と、Kはきいた。

「エルナが手紙で言つてよこしたんだ」と、叔父は言つた。「あれはお前とは全然交渉がないし、残念ながらお前はたいしてあれのことを気にかけていない。それでもあれはそのことを聞いたんだぞ。今日あれの手紙をもらつて、もちろんすぐここへやつてきたんだ。別にほかの理由はなかつたが、これだけでも十分理由になるように思われるな。お前に関する手紙の個所を読んでやるぞ」

彼は紙入れから手紙を取出した。

「ここにある。こう書いてあるぞ。『ヨーゼフにはもうずっと会つておりません。先週一度銀行へまいりましたが、ヨーゼフはたいへん忙しく面会してもらえませんでした。ほとんど一時間ほど

も待ちましたが、ピアノのお稽古がありますので、家へ帰りました。あの人とお話ししたく思つておりますが、近く機会があることと思います。私の名付日にはあの人から大箱のチョコレートを贈つてもらいました。とてもかわいらしく、人目につきました。そのときお知らせすることを忘れておりましたが、お尋ねがあつたので今やつと、思い出しました。チョコレートは、寄宿舎ではすぐなくなつてしましますのよ。チョコレートを贈つてもらつたんだということを思い出すか出さないうちに、もうどこかへ行つていますわ。でもヨーゼフのことでは、もう少しお知らせしておきます。今書きましたとおり、銀行では、ちようどどなたかとお話ししているというので、面会できませんでした。しばらくじつ

と待つてから、お話はまだ続きましようか、と小使さんにきいてみました。そうしたら、きっとそうなるだろう、主任さんに対する起されている訴訟のことらしいから、という話でした。どんな訴訟なんですか、お間違いではないんですか、つて私はききました。すると、いや間違いじゃない、訴訟だし、しかも重要な訴訟だ、けれどこれ以上のことば自分にはわからない、ということでした。自分も主任さんをよろこんでお助けしたい、あの人はいい、正しい人だから、でもどうやつて始めたらしいのかわからぬい、ただ有力な人たちがあの人のことを取上げてくれるのを祈つているだけだ。きっとそうなるだろうし、結局はうまい決着がつくだろうけれど、主任さんの機嫌きげんから察するのに、さしあたりは

どうもあまりうまくはいっていられないらしい、ということでした。この話はもちろんたいして重要なものではないと思いましたし、単純そうな小使さんを慰めようと思つて、ほかの人々に向つてそのことをしゃべらぬように言いましたが、みんなおしゃべりにすぎないと考えております。でも、お父様、今度こちらにおいての節に、よくお調べになるなら、きっとためになることでしょうし、詳しいことをきき、またほんとうに必要ならば、お父様の大勢の有力なお知合いの方々の手を借りて事件に口をきくことは、お父様にはやさしいことでしょう。でも、そういうことが必要でないとしても、——そして必要でない場合がほんとうにいちばんありますなことだと思われるのですけれど——少なくともあなたの娘

にお父様を抱く機会を与えてくださるでしょうし、そうしたらうれしいと思います』——いい子だ」と、叔父は朗読をやめると、言つて、二、三滴の涙を眼からぬぐうのだつた。

Kはうなずいたが、最近のさまざまごたごたのためすっかりエルナのことを忘れ、彼女の誕生日のことも忘れていたので、チヨコレートの話は明らかにただ、自分のことを叔父と叔母とに対してもよく思わせてくれようとする心づかいから考えだしたものだつた。それは非常にいじらしく、これからはきちんと送つてやろうと思つた芝居の切符ではきっと十分に償いきれないものだつたけれども、寄宿舎を訪ねたず、ちっぽけな十八歳の女学生と話をするなどという気には今はなれなかつた。

「で、どうだね？」と、叔父はきいたが、手紙ですっかり、急いでいたこと、興奮していたこと、を忘れてしまい、もう一度手紙を読んでいるらしかった。

「ええ、叔父さん」と、Kは言つた。「ほんとうにそうなんですか」「ほんとうだつて？」と、叔父は叫んだ。「ほんとうつてどういうことなんだ？ そんなことがほんとうだなんて、ありうることかい？ どんな訴訟なんだ？ でも刑事訴訟じゃあるまいな？」
「刑事訴訟なんです」と、Kは答えた。

「で、お前はここに落着きはらつてすわつていながら、刑事訴訟を背負いこんでいるのか？」と、叔父は叫んだが、声がいよいよ大きくなつていつた。

「落着いていればいるほど、結果はいいんです」と、Kは疲れた
ように言つた。「心配しないでください」

「そんなことじや、わしのほうは安心できん！」と、叔父は叫んだ。
「ヨーゼフ、なあヨーゼフ、自分のこと、親戚のこと、わ
したちの家名のことを考えてごらん！　お前はこれまで一門の名
誉だつたし、これからも一門の恥となつてはいけないぞ。お前の
態度は」と、彼は頭を斜めにかしげてKをじつと見つめた。「わ
しの気に入らん。まだ元氣いっぱいでいる潔白な被告の態度じや
ないぞ。さあ早く言いなさい、何に関したことなんだ、わしはお
前を助けてやるから。もちろん、銀行に関したことなんだろう？」
「ちがいますよ」と、Kは言い、立ち上がつた。「叔父さんの声

は大きすぎますよ。きっと小使が扉のところに立つて、聞いています。それは不愉快ですからね。むしろ外に行きませんか。外出たら、何なりと叔父さんの質問にお答えしますよ。身内の人たちにも弁明しなけりやならないとは、重々わかっていますからね」「そうだ！」と、叔父は叫んだ。「まつたく言うとおりだ、さあ急ぐんだ、ヨーゼフ、急ぐんだ！」

「まだ少し言いつけておかねばならないことがありますから」と、Kは言い、電話で代理を呼んだが、代理はすぐやつてきた。興奮している叔父は、わざわざやらなくたつてきまりきつたことなのに、あなたを呼んだのはこの男だ、と代理に手でKのことをさしてりするのだつた。Kは机の前に立ち、低い声でいろいろな書類

を取上げながら、自分がいないあいだ今日のうちに片づけねばならないことをその若い男に説明したが、相手は冷やかな、しかし注意深い態度で聞いていた。叔父は、もちろん話を聞いているわけではないが、まず眼を丸くし、神経質そうに唇を噛みながらそばに立つて邪魔になつていたが、この様子だけでもすでに十分邪魔になるのだった。しかしちゃに、部屋のなかをあちこちと歩きまわり、窓の前とか絵の前とかに立ち止つては、しょつちゅう、

「わしにはまつたくわからん」とか、「いつたいこれからどういうことになるのか言つてみなさい」とかいうように、いろいろ叫び声をあげるのだった。若い男はそれが全然気にならぬようで、Kの頼むことを終りまで落着いて聞き、いくらかメモをとつて、

Kと叔父とに一礼してから、出ていったが、叔父はちょうど男に背を向け、窓から外をながめ、両手を伸ばしてカーテンを皺くちやにしていた。扉がしまるかしまらぬうちに、叔父は叫んだ。

「どうどう^{あやつ}操り人形が出ていった。今度はわしらが出てゆく番だ。さあ、これで出てゆける！」

ホールには二、三人の行員や小使があちこちに立つており、またちょうど支店長代理が横切つてゆくところだつたが、都合がわるいことに、訴訟についての質問をやめさせる手段がなかつた。

「で、ヨーゼフ」と、叔父はそのあたりに立つてゐる人々の挨拶に軽い会釈で答えながら、言い始めた。「もうはつきりと言つてくれ、どんな訴訟なんだ」

Kは何か口ごもりながら、少し笑いもし、階段のところへ来てからやつと、人がいるところではおおっぴらに話したくないのです、と叔父に説明した。

「ほんとうにそうだ」と、叔父は言つた。「だがもう話してもいいだろう」

頭をかしげて、葉巻を短く、せわしげにぱかぱかふかしながら、叔父は一心に聞いていた。

「叔父さん、まずお断わりしておきますが」と、Kは言つた。
「普通裁判所の訴訟じゃないんです」

「それはいかん」と、叔父は言つた。

「どうしてですか」と、Kは言い、叔父をじつと見つめた。

「それはいかん、つて言うのだ」と、叔父は繰返した。

二人は通りに通じる表階段の上にいた。門衛が聞き耳をたてているようなので、Kは叔父を引つ張りおろした。街路のにぎやかな往来が二人を迎えた。Kの腕にすがつた叔父は、もうあまりせきこんで訴訟のことをきかなくなり、しばらくは黙りさえして歩みを進めた。

「だがどういうことが起つたのだ?」と、ついに叔父がきいたが、突然立ち止つてしまつたので、その後ろを歩いていた人々は驚いて避けた。

「こんなことは突然起るものじやなし、ずっと前からじつくり起つてくるのだから、その徵候もあつたにちがいないのに、なぜ手

紙でそれを言つてよこさなかつたんだ？　お前も知つているとおり、わしはお前のためになんでもやつてきているし、今でもいわば後見人と言えるくらいで、わしは今日までそれを誇りにしてきた。もちろん今でもお前を助けてやるつもりだが、訴訟がもう始まつているとすると、どうもむずかしいぞ。ともかく、ここで少し休暇を取り、田舎のわしらのところへ来るのがいちばんいいだろう。それにお前は少し痩せ^やたぞ、どうもそう見える。田舎でお前は元気になるだろうし、そうなればよいことだ。なにしろこれから先も、きつといろいろと骨が折れようからな。それに、田舎へ行けば裁判所からもある程度逃げられる。ここではいろいろな権力手段があつて、それをかららず自動的にお前にも適用するだ

ろう。ところが田舎では、まずいろいろな機関を派遣するとか、
ただ手紙や電報や電話でお前に働きかけようとするくらいのもの
だ。それならもちろん、効果が減るし、お前を解放はしないにし
ても、息がつけるだろう」

「ここを離れることは禁じるかもしませんよ」と、叔父の話に
少し釣りこまれたKは言つた。

「そんなことをすることは、わしは思わん」と、叔父は考えこんだ
ように言つた。「お前が旅行に出たために役所の権力が減る面は、
そんなに大きくはあるまい」

「叔父さんは」と、Kは言い、叔父を立ち止させておかぬいよう
に腕を取つた、「私ほどこの事件に重きをおかないものと思つて

いましたが、ご自身でどうもむずかしく考えておられるようですね」

「ヨーゼフ」と、叔父は大声をあげ、立ち止めができるようにKから逃れようとしたり、「Kがそうはさせなかつた」「お前は変つたな。お前はいつも非常に考える力がしつかりしていたのに、今はどうもどこかへ置き忘れたようだぞ？」訴訟に敗けてもいいのか？　そうなつたらどうなるのか、知つているか？　そうなつたら、お前は簡単に抹殺まつさつされちゃうんだぞ。親戚全体が巻きこまれるか、少なくとも徹底的に辱はずかしめられるんだぞ。ヨーゼフ、しつかりしておくれ。お前のどうでもいいというような態度は、わしから正気を奪つてしまうほどだ。お前の様子を見ていると、

『こんな訴訟があるからは、もう負けたも同然だ』つていう諺を
ほとんど信じたくなるくらいだ』

「叔父さん」と、Kは言つた。「興奮は無用です。興奮している
のは叔父さんのほうだし、また私のほうもそうかもしません。
興奮したんでは訴訟に勝てませんからね。叔父さんのご経験は少
々私を驚かせますが、いつも、そして今でも大いに尊敬している
んですから、私の実地の経験も少しは認めてください。身内の者
まで訴訟によつてわざらわされるつて叔父さんがおつしやられる
んですから、——このことは私としてはまったく理解できません
が、まあそれは別なことだからやめましょ——よろこんでなん
でもおつしやることに従うつもりです。ただ田舎に滞在するとい

うことだけは、叔父さんのお考えの意味ででも利益になるとは思われませんね。そんなことをすりやあ、逃げたことになるし、罪を自覚していることになりますからね。それに、ここにいるといよいよ追いまわされはするものの、また自分でもつと事を動かすことでもできるんです」

「もつともだよ」と、叔父は、今はやつと互いに歩み寄りができた、というような調子で言つた。「わしがそういうことを言いだしたのはただ、お前がここにいると、事がお前の無関心な態度で危なくなるように思えたし、わしがお前のかわりに事をやればいつもそうよいと考えたからだ。だがもしお前が全力をあげて自分でやろうというのなら、もちろんはるかによいことだ」

「それじゃこの点で私たちは一致したわけです」と、Kは言つた。
「そこで、私がまずやらなきやあならないことについて、何かお
考えがありますか？」

「もちろん事柄をもつと考えてみなくちゃならん」と、叔父は言
つた。「お前もわかつてくれるだろうが、わしはもうこれで二十
年もほとんど田舎に居きりなので、こういう方面の勘が鈍つてしま
つたよ。こつちにいておそらく事情に明るい人たちとの、さま
ざまな肝心なつながりも、自然とゆるんでしまつた。お前もよく
知つているとおり、わしは田舎で少し見捨てられていたんだ。ほ
んとうにこんな事件にぶつかつてみて初めて、自分でもそれがわ
かる。奇妙なことにエルナの手紙を読んだだけでそういうことが

いくらかわかつたし、今日もお前の顔を見ただけで、ほとんどはつきりわかつたんだが、お前のこの事件は少々意外だつたな。だがそんなことはどうでもよろしい、今いちばん大切なのは、時を失わないということだ』

こう話しているうちにもう、爪立つまだちながら一台の自動車に合図して、運転手に行先をどなつてやりながら、Kを後ろ手で自動車に引つ張りこんだ。

「これからフルト弁護士のところへ行こう」と、彼は言つた。

「あの男はわしの同窓生だつた。お前も名前は知つているだろう？ 知らないか？ だが変だね。貧乏人の保護者で弁護士として、たいへん名声の高い人だ。だがわしは、人間としてのあの男に大

いに信頼をおいている」

「叔父さんのやられることは、なんでも私には結構ですよ」と、叔父が用件を取扱ういかにもせつかちな、押しつけがましいやりかたに不快を覚えさせられたが、Kは言つた。被告として貧民相手の弁護士のところへ行くことは、あまり愉快なことではなかつた。

「こんな事件にも弁護士を頼めるものとは知りませんでした」と、彼は言つた。

「もちろんだよ」と、叔父は言つた。「わかりきつたことじやないか。どうして頼めないなんていうことがある？」ところで、事件を詳しく知つておくため、わしにこれまで起つたことを話して

くれないか」

Kはすぐ話し始めたが、何も隠しだてはしなかつた。完全にぶちまけるということが、訴訟は大きな恥辱だ、という叔父の意見に対してもえてやれる唯一の抗議だつた。ビュルストナー嬢の名前はただ一度だけ、ほんのついでに口に出しただけだつたが、それは何も公明正大になんでも言うという態度を傷つけるものではなかつた。ビュルストナー嬢は訴訟とは何も関係がなかつたからである。話しながら窓越しにながめ、自分たちがちょうど裁判所事務局のあつた例の郊外に近づいているのを見てとり、叔父にそのことを注意したが、叔父はその偶然の一致をさして驚くべきこととは思わなかつた。車は一軒の暗い家の前に止つた。叔父は、

すぐ一階のとつつきの部屋の扉のベルを鳴らした。待ちながら、にやにやして大きな歯をむきだし、ささやいた。

「八時だ。訴訟のことを行くのには尋常じやない時間だな。しかしフルトはわしのことわるくは思うまい」

扉のぞき窓に、二つの大きな黒い眼が現われ、しばらく二人の客をじっと見つめて、消えた。ところが扉はあかなかつた。叔父とKとは互いに、二つの眼を見たという事実を確かめ合つた。

「新しい女中で、見知らぬ人間を恐がつてゐるんだろう」と、叔父は言い、もう一度ノックした。また眼が現われ、今度はほとんど悲しげに見えるのだつたが、おそらくはただ、二人の頭のすぐ上で強くじいじい音をたてて燃えてはいるがほとんど光を出して

はいない裸ガス燈の生みだした錯覚だつたかもしけなかつた。

「あけてくれ」と、叔父は叫んで、拳で扉をたたいた。「弁護士さんの友達なんだ！」

「弁護士さんは病気ですよ」と、彼らの後ろでささやく声がした。小さな廊下の向うの隅の扉に寝巻姿の紳士が立ち、きわめて低い声でこう知らせたのだつた。すでに長く待たされて腹のたつていた叔父は、ぐいと振向いて、叫んだ。

「病気？あの男が病気だつておっしゃるんですね？」そして、その紳士が病気そのものででもあるかのように、ほとんど挑みかかるような様子で男のほうに近づいていった。

「扉をもうあけましたよ」と、その紳士は言い、弁護士の扉を指

さし、寝巻をかき合せて、消えた。扉はほんとうに開かれており、一人の若い娘が——黒い、少し飛び出た、あの眼をKはふたたび認めた——長い白エプロン姿で控えの間に立ち、蠅燭を一本手にしていた。

「この次はもつと早くあけてください！」と、叔父は挨拶するかわりに言つたが、娘のほうは少し膝ひざをかがめて挨拶をした。

「おいで、ヨーゼフ」と、ゆっくりと娘のそばを通り過ぎるKに叔父は言つた。

「弁護士さんはご病氣です」と、叔父は止つていないでどんどん扉のほうに行くので、娘は言つた。

Kはまだぽかんと娘をながめていたが、娘のほうはすでに向き

直つて、入口の扉をまたしめにいった。人形のような格好の丸い顔で、蒼ざめた頬と頸とが丸みを帯びているばかりでなく、こめかみも額ぎわも丸みを帶びていた。

「ヨーゼフ！」と、叔父はまた叫び、娘にきいた。

「心臓病かね？」

「きっとそうだと思います」と、娘は言い、蠅燭を携えて先に立ち、部屋の扉をあける暇をとらえた。蠅燭の光がまだ届かない部屋の隅のベッドで、長い鬚の顔が身を起した。

「レーニ、誰が来たんだ？」と、蠅燭に眼がくらんで客の見分けがつかない弁護士がきいた。

「アルバート、君の旧友だよ」と、叔父は言つた。

「ああ、アルバートか」と、弁護士は言い、この訪問客には何も取繕うことは要らないというように、布団の上にぐつたりと倒れた。

「ほんとうにそんなにわるいのかい？」と、叔父は言い、ベッドの縁に腰をおろした。「わしはそとは思わんぞ。いつもの心臓病の発作だよ。いつもと同じようにすぐ直るよ」

「そうかもしれないが」と、弁護士は低い声で言つた。「でも今度はこれまでよりもわるいんだ。呼吸が苦しく、全然眠れないし、日ましに弱つてゆくんだ」

「そうか」と、叔父は言い、大きな手でパナマ帽をしつかと膝に押しつけた。

「そいつはわるい知らせだな。ところでちゃんと養生しているのか？ それにここはどうも陰氣で、暗いな。この前ここに来てからもうだいぶになるが、あのときはもつと親しみがあるよう思えたぞ。ここにいるお前の小娘もあまり陽気じやなさそうだし、どうもとりすましているな」

娘はまだ蠟燭を手にして、扉の近くに立っていた。どうもはつきりしない彼女の眼まなざし差から推しはかるのに、叔父が今自分のことを話しているのだからそのほうを見たらよさそうなものなのに、叔父よりもむしろKを見ていた。Kは、娘の近くまでずらしていつた椅子にもたれていた。

「おれのように病氣だと」と、弁護士は言つた。「安静にしなけ

ればならん。おれには別に陰気じやないよ」そして少し間を置いてから、言葉を足した。「それにレーニはよくおれを看病してくれるよ。いい娘だ」

しかし、その言葉に叔父は承服できず、明らかに看護婦に偏見をいだいているらしく、病人には何も言わなかつたが、看護婦がベッドのところへ行き、蠟燭を夜間用の小さな机の上に置き、病人の上に身をかがめて、布団を整えながら病人と小声で話すのを、きびしい眼つきで追つていた。ほんど病人への心づかいなどは忘れてしまい、立ち上がりつて看護婦の後にあちこちとついてまわり、たとい叔父が娘の首筋をとらえてベッドから引離したとしても、Kには不思議ではないように思われるのだつた。K自身は万

事を冷静にながめていたし、弁護士の病気はまつたくあつらえむ
きでないわけでもなかつた。叔父が自分の事件のためにやつてくる
てはいる熱心さには逆らうこともできなかつたので、別段自分が
手を加えもしないでその熱心さがこういうふうにそらされること
を、Kはよろこんで迎えたのだつた。そのとき叔父が言つたが、
おそらくただ看護婦を傷つけてやろうというつもりだけの言葉だ
つた。

「看護婦さん、しばらく二人だけにしてくれないかね。友達と個
人的な用件で話さねばならぬことがあるんだ」

まだ病人の上にずっと身体からだをかがめて、ちょうど壁ぎわの掛布
団を伸ばしていた看護婦は、頭だけを向けて非常に落着いて言つ

たが、それは、怒りのためにつまつてしまふかと思うとまた流れ出る叔父の話と、著しい対照をなしていた。

「ゞらんのとおりたいへん病気が重いのですから、どんな用件もお話しはできません」

看護婦は叔父の言葉をおそらくはただ億劫おつかうがつて繰返したにすぎなかつたのであろうが、ともかくそれは第三者から見てさえ嘲ちようしょう笑しようしているもののようにとられ、叔父はもちろん、ちくりとやられた者のように飛び上がつた。

「こん畜生」と、興奮のため喉のどを鳴らしはじめながら、まだ明瞭めいりょうに聞き取れはしない調子で言つたが、どうせそんなことになるだろうと予期していたKも仰天し、両手で口を押えてやろうと

いうはつきりとした意図をもつて叔父のところへ走り寄つていつた。しかし好都合なことに、娘の後ろで病人が身体をもたげ、叔父は、何かいやなものをのみこんだような苦い顔をしたが、次に少し落着いて言つた。

「もちろん、お互に理性を失つてしまつたわけじやない。わしの要求することができない相談なら、わしも無理には要求すまい。だがもう出ていつてくれないか！」

看護婦はベッドのそばにしつかと立ち、完全に叔父のほうを向き、Kにはそれが見られたように思えたのだが、片手で弁護士の手をさすつていた。

「レーニの前ならなんでも言えるよ」と、疑いもなく切に願うよ

うな調子で、病人は言つた。

「わしのことじやないんだ」と、叔父は言つた。「わしの秘密じやないんだ」

そして彼は向き直つてしまい、もう言い合いをやつてゐるつもりはないが、まあちよつと考へる余裕を与えてやろう、という様子だつた。

「いつたい誰のことなんだ?」と、消え入るような声で弁護士はきき、また身体を横にした。

「わしの甥おいなんだよ」と、叔父は言つた。「いつしょに連れてきたよ」そして、紹介した。「業務主任ヨーゼフ・K

「おお」と、病人はずつと元気になつて言い、Kに手を差伸べた。

「ごめんなさい、あなたには全然気がつきませんでした。レニー、あつちへ行きなさい」と、看護婦に言つたが、娘のほうも全然逆らわず、病人はまるで長い別れでもあるかのように彼女に手を差伸べた。

「それじや君は」と、病人はついに叔父に言つたが、叔父も気持が解け、彼のほうに近寄つた。

「見舞いに来てくれたんじやなくて、用事で来たんだね」

病気見舞いという考えがこれまで弁護士をうんざりさせていたかのようで、そこで今は元気づいたように見え、かなり骨の折れることであるのにちがいないのに、絶えず一方の肘で身体をさえたままの姿勢をとり、髪の真ん中あたりの一束をしょっちゅう

引つ張つていた。

「あの阿魔あまが出ていつてから」と、叔父は言つた。「君はすつかり元気になつたようだぞ」

ここで言葉を切り、さきやいた。

「請け合うが、あの女め立ち聞きしている！」

そして扉に飛びついて行つた。しかし、扉の背後には誰もいなかつたので、叔父はもどつてきたが、彼女が立ち聞きしていないことは叔父にはいつそう陰険なことに思われたので、少しも失望してはいなかつたけれども、確かに氣をわるくしてはいた。

「君はあれを誤解しているよ」と、弁護士は言つたが、それ以上看護婦のことをかばおうとはしなかつた。おそらくそれで、あの

娘はかばう必要がないのだ、ということを言い表わそうとしたのであろう。しかし、ずっと熱心な調子で彼は言葉を続けた。

「君の甥御さんのことだが、もしこのきわめてむずかしい問題にぶつかれる元気がわしにあるなら、もちろんわしもたいへん幸せだと思つてゐる。ただそれだけの元氣があるかどうか大いに心配なんだが、ともかくなんであろうとやつてみないで投げたくはないからね。もしわしで十分ではないなら、誰かほかの人を頼むこともできる。正直に言つて、この事件にはたいへん興味があるんで、思いきつてそれを手がけることをあきらめる気にはとうていなれない。もしわしの心臓がそれに耐えられないというのなら、少なくともここで、弁護士商売なんか完全に思いきる絶好の機会

が見つかるというものだ」

Kは、この話がさっぱりわからぬように思えて、説明を求めようとして叔父の顔を見つめたが、叔父のほうは蠅燭を手にして夜間用の机のそばにすわり、早速机から薬瓶くすりびんを絨毯じゅうたんの上にころがし落してみせ、弁護士の言うことのなんにでもうなずき、なんにでも同意しては、ときどきKにも同じような同意を促して彼の顔をうかがうのだつた。おそらく叔父はすでに前もつて弁護士に訴訟のことと言つておいたのだろうか？しかし、そんなことはありうるはずがなく、これまでここで起つたことはすべて、そんなことがないということを物語つているのだった。それゆえ、彼は言つた。

「私にはおつしやることがわかりませんが——」

「ほう、あなたのことと誤解しているとでも言われるんですかな？」と、弁護士のほうもKと同じように驚き、かつ当惑してたずねた。

「おそらく先走りしすぎたんでしょう。いつたいなんのことで私と相談なさろうと言われるんですか？　あなたの訴訟のことだとばかり思っていました」

「もちろんだよ」と、叔父は言い、次にKにたずねた。「いつた
い、どうしようつていうんだ？」

「そうなんですが、いつたい私のことや訴訟のこととどこからお聞きになつたんです？」と、Kはきいた。

「ああ、そのことですか」と、弁護士は微笑しながら言つた。

「わしは弁護士ですからね。裁判所の人たちと付合いもあるし、いろいろな訴訟、目だつ訴訟について話も出るわけだし、ことに友人の甥御さんのことともなれば、覚えてもらいますよ。それに不思議はないわけです」

「いつたいどうしようつていうんだ?」と、叔父はもう一度きいた。「お前はどうも落着きがないよ」

「あなたは裁判所の人たちと付き合つているんですね?」と、Kがきいた。

「そうですよ」と、弁護士が言つた。

「お前は子供のようなことをきくね?」と、叔父は言つた。

「自分の専門の人たちと付き合うんじゃなければ、いつたい誰と付き合うんでしよう?」と、弁護士が言い足した。

その言葉の響きは抗しがたいものがあつたので、Kは全然返事をしなかつた。

「でもあなたは大審院なんかの裁判で仕事をするんで、屋根裏なんかでするんじやないでしよう」と、彼は言おうと思つたが、でも思いきつてそれを実際言いだすことはできなかつた。

「あなたもよくわかつていてもらいたいが」と、何かわかりきつたことをついでにくどくど説明するような調子で、弁護士は言葉を続けた。「あなたもよくわかつていてもらいたいが、こういう付合いから弁護依頼人にとってのさまざま大きな利益を引出せ

るんでね。しかもいろいろな点でだ。もつともそのことは伏せておいてくださらぬと困るがね。もちろんわしは今、病氣のために少し思うようにゆかぬ点があるが、それでも裁判所のいい友達に見舞いに来てもらひ、少しほれに入れているんです。おそらく、ぴんぴんして一日じゅう裁判所で暮している多くの人たちよりもよけいに聞いていますよ。たとえばちようど今もありがたい訪問客に来てもらつてはいるんですよ」 そうして暗い部屋の隅を指さした。

「いつたいどこに？」と、驚いてしまつたKは荒々しくきいた。

彼はおろおろとあたりを見まわした。小さな蠅燭の光は向う側の壁まではとうてい届かなかつた。ところがほんとうにその片隅に、

何かが動きはじめた。そのとき叔父が高々と上げた蠅燭の光を浴びて、そこの小さな机のそばに一人の中年の紳士がすわっていた。その人物はきつと全然呼吸をしなかつたので、そんなに長いあいだ気づかれなかつたのだつたろう。自分に注意が向けられたことに明らかに不満らしく、その人物は大仰に立ち上がつた。短い翼のように両手を動かして、紹介や挨拶はいつさいお断わりと言おうとするかのようであり、どんなことがあつても自分が居合すことによつて他人の邪魔をしたくはない、どうかまた暗がりに置いて自分がいることなど忘れてもらいたい、と願つてゐるようであつた。しかしこうなつてはもうそんなわけにもゆかなかつた。

「あなたには驚かされましたよ」と、弁護士は説明じみた調子で

言い、同時にその紳士には促すようにこつちにいらっしゃいと合図をしたが、この人物はゆつくりと、ためらうようになたりを見まわしながら、しかし一種の品位をもつて近づいてきた。

「事務局長さん、——ああ、そうだ、ごめんください、ご紹介しませんでしたな、——こちらは友人のアルバート・K、こちらは甥御さんの業務主任ヨーゼフ・K、そしてこちらは事務局長さん。——で、事務局長さんはご親切にもおいでくださつたのだ。こんなご訪問の価値というものは、ほんとうはただ、事務局長さんがどんなに仕事でお忙しいかという消息に通じているものだけがわかるんだよ。さて、それにもかかわらずこの方はおいでくださつたので、もちろん、弱つているわしに許されるかぎり、いろいろ

お話ししていたんだ。訪問客があつたらお断わりしろ、とレニーには命じてはなかつたが、わしらだけで話そうという考えだつたのだ。ところが君が扉を拳こぶしでたたいたわけだ、アルバート、そこで事務局長さんは椅子と机とを持つて隅に引っこまれた。だがこうなると、できるだけ、つまりもしそうしようとする希望があるのなら、共通の用件について相談し合わなければならないし、うまく歩み寄りもできるということは、わかりきつたことだ。——では事務局長さん」と、弁護士は頭をかしげ、卑屈な薄笑いを浮べて言い、ベッドの近くの安楽椅子を示した。

「残念ながらもうほんの少ししかお邪魔しておられません」と、事務局長は親しげに言い、ゆつたりと安楽椅子にすわり、時計を

見るのがだつた。「用事に追われていてね。だがいずれにせよ、私の友人のお友達とお知合いになる機会は取逃がしたくはありませんからね」

彼は頭を軽く叔父のほうに曲げたが、叔父はこの新しい近づきに大いに満足しているように見えるものの、いつもの癖で敬意の心持を表現することができず、事務局長の言葉に対し、当惑したような、しかし大きな笑い声で調子を合わせるのだった。なんとも見苦しい光景だつた！ Kは落着いて皆を観察できた。誰も彼をかまう者はなかつたからである。事務局長は、どうもこれは彼のならわしらしかつたが、一度引っ張り出された以上、座談を進んで牛耳ぎゅうじつたし、弁護士は弁護士で、初め身体が弱つている

と言つたのはどうも新しい訪問客を追つ払うためのものだつたらしく、手を耳にあてて注意深く聞いていた。叔父は蠅燭持ちの役を勤め、——彼は蠅燭のバランスを膝の上でとり、弁護士はときどき心配そうにそれをちらちら見るのだつた——すぐに当惑の気持を忘れて、事務局長の話しぶりや、それに伴うしなやかな波を描くような手のこなしにすっかりよろこびきついていた。ベッドの柱によりかかっていたKは、事務局長によつてどうも故意にまったく無視されてしまつたらしく、ただ老紳士たちの聞き役にまわつていた。ところで、いつたいなんの話なのか、ほとんどわからず、あるいは例の看護婦と彼女が叔父からこうむつたひどい仕打ちとのことを考えたり、あるいは、この事務局長なる人物を一度

見たことがなかつたか、どうもあの最初の審理の集りのときじやなかつたかと考えたりしていた。あるいは見そこないかもしけないが、この事務局長はあの最前列の会衆、あのまばらな鬚をした老人たちのあいだにりつぱに仲間入りしていたにちがいないと思われた。

そのとき、陶器の割れるような騒音が控えの間から聞え、皆が聞き耳をたてた。

「どうしたのか、私が行つてみましょう」と、Kは言い、ほかの連中に自分を引止める機会を与えるかのように、ゆつくりと出ていった。控えの間にはいり、暗闇の中で見当をつけようとするかもしれないかのうちに、彼が扉にまだしつかと置いている手に、Kの

手よりもずっと小さい手が置かれ、扉を静かにしめた。ここで待ちかまえていたのは、例の看護婦だつた。

「なんでもなかつたのよ」と、彼女はささやいた。「お皿を一枚、壁に投げただけなのよ、あなたをこつちに呼ぼうと思つて」少しおどおどしながらKは言つた。

「僕もあなただと思いましたよ」

「それじゃ、いつそういうわ」と、看護婦は言つた。「こつちへいらつしやい」

二、三歩で曇りガラスの扉のところへ來たが、それを看護婦はKの前であけた。

「どうぞおはいりなさいな」と、女は言つた。

おそらく弁護士の仕事部屋であった。三つの大きな窓のそれぞれに面した床に小さな四角形を映してさしこんでいる月光を頼りにながめたかぎりでは、どつしりした古い家具類を並べた部屋だつた。

「こつちよ」と、看護婦は言い、木彫りのもたれのついた、黒ずんだ長持を示した。腰をおろしながらKは部屋を見まわしたが、天井の高い大きな部屋で、貧民相手のこの弁護士の依頼人たちは、この部屋に入れられては面くらつてしまふにちがいなかつた。客が堂々たる机の前に進み出てゆく小刻みの歩みが、Kには眼に見えるような気がした。だがもうこんなことも忘れてしまい、ぴつたりと彼に寄り添つて彼をほとんど長持の横のもたれに押しつけ

て いる看護婦だけに、眼を奪われていた。

「あたしは思つていたのよ」と、女は言つた。「あたしが呼ばなくたつて、あなたのほうから自分で来るだろうつて。でも変だつたわ。部屋にはいるなりずっとあたしを見つめて、それからあたしを待たせたりなんかして。あたしのことレーニつて呼んでね」と、早口でズバリと付け足したが、一瞬たりともこの会話をむなしくしてはならないとでもいうようだつた。

「いいですよ」と、Kは言つた。「だが、僕が変だつたといふことだが、レーニ、それはたやすく説明のつくことですよ。第一には、お年寄りたちのおしゃべりを聞かねばならなかつたんで、理由もなしに出てはこられなかつたし、二番目には、僕は厚かまし

くはなく、むしろ 瞳^{おくびよう} 病^病なほうだし、君だつて、レーニ、一思
いにこつちのものになつてくれそうにはほんとうに見えなかつた
からね」

「そうじやないわ」と、レーニは言い、腕を長持のもたれにかけ、
Kを見つめた。「あたしなんかあなたのお気に召さなかつたんだ
し、今でもきつとお気に召してはいないのよ」

「お気に召すつて、そりやあたいしたことはないけれどね」と、
Kは逃げを打ちながら言つた。

「まあ!」と、女は微笑^{ほほえ}みながら言い、Kの言葉とこの小さな叫
び声とである種の優越をかちえたのだつた。それゆえ、Kはしば
らく黙つていた。部屋の暗さにもすでに慣れたので、調度のさま

ざまな細かい点も見分けがつくようになつた。特に、扉の右側にかかっている一枚の大きな絵が彼の眼をひいたので、それをよく見るため、かがんだ。それは法服姿の一人の男を描いていた。^{たけ}の高いいかめしい椅子にすわっているが、その椅子の金色が、いろいろな点でその絵から浮び上がつていた。変つているのは、この裁判官が落着きと威厳とをもつてそこにすわつているのではなく、左腕をしつかと椅子の背と横のもたれとに押しつけ、右腕のほうはまったく自由にして、ただ手先で横のもたれを握つており、次の瞬間には、激しい、おそらくは憤りの身振りで飛び上がり、何か決定的なことを言うか、あるいは判決さえも下そうとしているかに見える、という点だつた。被告はきっと階段の下のところ

にいるものと思われたが、階段のいちばん上の、黄色の 絨^{じゆう}毯^{たん}

を敷いた一段目までは絵の上に出ていた。

「きっとこれは僕の裁判官だね」と、Kは言い、指でその絵をさした。

「その人は知つてますわ」と、レーニは言い、やはり絵を見上げた。「しそつちゅう、ここへ来るのよ。この絵は若いときのだつていうんだけれど、あの人はこの絵に似ていたはずがないわ。だつてあの人ほんどんぢんちくりんなんですもの。それでも、このみんなと同じように、ひとりでいい気になつて見栄坊^{みえぼう}なもんですから、絵では寸法を引延ばして描かせたのだわ。でもあたしも見栄坊だから、あなたのお気に召さないつていうんで、とても

不満なのよ」

女のこの言葉に返事をするかわり、Kはただレニーを抱き、ぐいと引寄せたが、女はじつと頭をKの肩にもたせかけていた。しかし、彼は付け加えて言つた。

「どんな身分の人なの？」

「予審判事よ」と、女は言い、自分を抱いているKの手をつかみ、指をもてあそんだ。

「また予審判事なのか」と、Kは失望して言つた。「身分の高い役人たちは隠れているんだ。でも、この人はいかめしい椅子にすわっているじゃないの」

「みんな作りごとよ」と、顔をKの手の上にかがめて、レニーは

言つた。

「ほんとうは、台所椅子の上に古い馬の鞍くらおお覆いをかけて、その上にすわっているのよ。でも、あなたはしょつちゅう訴訟のことばかり考えていなきやならないの？」と、女はゆつくり言い足した。

「ちがうよ、けつしてそんなことはないんだ」と、Kは言つた。

「どうもあんまり考えなさすぎるくらいなんだ」

「そのことがあなたのやつてる誤りじやないのよ」と、レニーは言つた。「あなたはあんまり強情すぎるっていう話だけれど」

「誰が言つたの？」と、Kはきいたが、女の身体を胸に感じ、その豊かな、黒い、しつかと卷いた髪毛を見下ろしていた。

「それを言つたら、おしゃべりしすぎるわ」と、レニーは言つた。

「名前はきかないでちようだい。でも、あなたの間違つていることは捨てて、もうあんまり強情にしないことよ。この裁判所には逆らうことはできなくて、結局白状しなければならないのよ。どうかこの次のときには白状してちようだい。そうしたら初めて、逃げる見込みができるのよ、そうしてから後のことよ。けれどそれだつて人の助けなしではできないけれど、この助力のことで心配しちゃだめ、あたしが自分でしてあげるわ」

「君はこの裁判所のことと、そこで必要な嘘のことを、よく知つているね」と、Kは言い、あまりに激しく迫つてくる女を膝の上に抱き上げた。

「これでいいわ」と、女は言い、スカートの皺^{しわ}を伸ばし、ブラウスを取繕いながら、膝の上で居ずまいを直した。それから両手で彼の頸^{くび}にぶら下がり、身体をのけぞらせて、長いあいだ彼を見つめた。

「で、もし僕が白状しなければ、君は僕を助けられないの?」と、Kはためすようにきいた。どうもおれには女の助力者が集まるな、と彼はほとんど不思議にさえ感じながら思つた。まずビュルストナー嬢、次は廷丁の細君で、最後はこの小さな看護婦だが、この女はおれに得体の知れない欲望をいだいているようだ。おれの膝の上にのつているこの様子はどうだ、まるでここがこの女の唯一の所を得た場所とでもいうみたいだ!

「ダメよ」と、レニーは答え、ゆっくりと頭を振った、「そしたらあたしはあなたを助けられないわ。でも、あなたはあたしの援助なんてほしくはないし、どうでもいいんでしょう、あなたは身勝手で、人の言うことなんか聞かないんだから」

「好きな人がいるのね?」と、しばらくして女が言つた。

「どんでもないよ」と、Kは言つた。

「おっしゃいよ」と、女が言つた。

「そうだね、まあ」と、Kは言つた。「いいかい、もう切れてしまったんだ。けれど写真まで机身につけているつてわけさ」

女にせがまれてエルザの写真を見せると、女は膝の上で丸くなつて、写真をしげしげと見た。それはスナップ写真で、エルザが

いつも酒場でよく踊る円舞のあとで、彼女を撮つたものだつた。

スカートはまだ旋回中の襞取りのままひろがつており、しまつた腰に両手をあて、頸をぐつと起し、笑いながら横を向いていた。誰に笑いかけているのかは、この写真ではわからなかつた。

「コルセットの紐ひもをきつく締めているのね」と、レーニは言い、彼女の考えによるとそう見える個所を示した。

「こんな女、きらいだわ。不器用で荒っぽいわ。でも、あなたには優しくて親切でしょう、それは写真で見てわかるわ。こんなに大柄でがつしりした女つて、優しくて親切な以外に取柄のないものよ。でも、あなたのために身を投げ出すことができるかしら？」
「できないね」と、Kは言つた。「優しくて親切でもないし、僕

のために身を投げ出すこともできないだろう。僕もまたこれまで、そのどつちだつて求めたことはなかつたさ。だが、僕は君ほどこの写真をよく見たことはなかつたよ」

「じゃ、この人のことたいして問題にしてはいないのね」と、レニーは言つた。「じゃ、あなたの恋人じやないわけだわ」

「でも」と、Kは言つた。「僕の言つたことを撤回はしないね」「それじゃ、あなたの恋人でもいいわ。でも、この人を失つたり、誰かほかの人、たとえばあたしと取替えても、たいして恋しがりはしないわけね」

「確かに」と、Kは微笑しながら言つた。「そういうことも考えられるが、この人は君に比べて大きな長所があるんだ。僕の訴訟

のことを何も知らないってことさ。そして、たとい知つても、そんなことを考えはしないだろうね。僕に折れて出るようになんてすすめはしないだろうよ」

「そんなこと長所じやないわよ」と、レーニは言つた。「ほかの長所がないんなら、あたしは勇気をなくさないわよ。何か身体に片輪のところあるの？」

「片輪のところ？」と、Kはきいた。

「そうよ」と、レーニは言つた。「あたしにはこんなちよつとした片輪のところがあるのよ、見てござらんなさい」

女は右手の中指と薬指とをひろげると、そのあいだには皮膜が、短い指のほどんど一番上の関節にまで達していた。Kは暗がりの

中で、女の見せようとするものがすぐにはわからなかつたが、そのため女は、Kがさわるように、彼の手を持つていつた。

「なんという自然の戯れだ」と、Kは言い、手全体をすっかり見てしまつてから、言葉を足した。「なんというかわいらしい距だ！」

レニーは一種の誇らしさをもつて、Kが讚嘆しながら自分の二本の指を何度も何度もあけたりすぼめたりする様子をながめていたが、最後にKはその指にさつと接吻せつふんして、放した。

「まあ！」と、女はすぐに叫んだ。「あなたはあたしに接吻したのね！」

口をあいたまま、素早く、女は膝ひざ_{がしら}頭で彼の膝の上ににじり

登つた。Kはほとんど呆然として女の顔を見上げていたが、女がここまで身近に来ると、胡椒のような、苦い、刺激的な香りが女から発散するのだつた。女は彼の頭をかかえ頭越しに身をかがめて、彼の頸を噛み^か、接吻し、髪毛の中まで噛んだ。

「あんたはあたしに取替えたんだわ！」と、女はときどき叫んだ。
「ごらんなさい、もうあたしに取替えたんだわ！」

そのとき女の膝がすべり、短い叫び声をあげてほとんど絨毯の上に倒れかかつた。Kは女をささえようとして抱いたが、女に引下ろされた。

「もうあんたはあたしのものよ」と、女が言つた。

「これ家の鍵よ、いつでも好きなときに来てちようだい」というのが、女の最後の言葉だつた。そして、帰りかけている彼の背中に、なんとはなしの接吻がされた。玄関から出ると、雨がぱらぱら落ちてきた。たぶんレニーをまだ窓ぎわに見ることができようと、街路の真ん中へ行こうとしたとき、Kはぼんやりして全然気がつかなかつたが、家の前に止つていた一台の自動車から、叔父が飛び出し、彼の腕をつかんで、玄関の扉へ彼を押しつけ、まるでそこへ釘づけにしようとでもいうかのような剣幕だつた。

「こら」と、彼は叫んだ。「なんだつてあんなことをやるんだ！せつかくうまくゆきそうちだつたお前の用件をめちゃめちゃにしちやつたじゃないか。ちつぽけなきたならしい女と、どろんをき

めこんだりなんかして。そのうえ、あいつは明らかに弁護士の情婦じやないか。そして一時間ぐらいも帰つてこないとは。言い訳をするでもなし、隠そうとするでもなし、公然と女のところへ走り、女にくつづいているんだ。そうやつているあいだ、お前のために骨折つているこの叔父、お前のために味方にしておかねばならない弁護士、それにまづ、今のところならお前の事件をまったく牛耳れるあのりっぱな事務局長、こうしてわしらは集まつたんだ。どうやつたらお前を助けられるか相談しようとし、わしは弁護士を慎重に扱わなければならん、弁護士は弁護士で事務局長をというわけだ。そこでお前には、少なくともわしを応援してくれる十分な理由があつたんだぞ。ところがそもそもしないで、お前は

消えていなくなつてはいるという始末だ。とうとう隠しきれなかつたが、あの人たちは慇懃^{いんぎん}な世なれた人たちだもんだから、そのことはしやべらず、わしをかばつてくれた。ところがとうとうある人たちももう我慢ができなくなり、事件のことが話せないもんだから、黙りこくつてしまつた。わしらは何分か黙つてすわつて、お前がもう帰つてこないかと、聞き耳をたてていたんだ。万事むだだつた。とうとう初めの予定よりもずつと長く居残つていた事務局長が立ち上がり、別れの挨拶をし、わしを助けることができないで残念だ、とはつきり言われ、なんとも言えないご親切さでなおしばらく扉のところで待たれたうえ、帰つてゆかれた。あの人が帰つていつたんで、わしはもちろんほつとした。わしはもう

息がつまりそうだつたからな。病人の弁護士には万事がもつとひどくこたえた。わしが別れを告げたときは、あのいいやつはもう全然口がきけなくなつていた。お前は確かにあの男の完全な破滅に手を貸し、お前が頼るよりほかない人間の死期を早めたんだぞ。そして、叔父のこのわしをこうやつて雨の中に——さわつてごらん、ズブぬれだ——何時間も待たせておき、心配で苦しみ抜かせているんだ」

第七章 弁護士・工場主・画家

冬のある午前のこと——戸外では陰鬱^{いんうつ}な光の中に雪が落ちて

いた——まだ時間も早いのだがすでに疲れきつてしまつたKは、事務室にすわつていた。少なくとも下役の連中を寄せつけないよう、大事な仕事をやつているのだから誰も入れてはならない、と小使に命じた。だが、仕事をするかわりに、椅子にすわつたままぐるりと向きを変え、ゆつくりと机の上の二、三の物をどかしてしまふと、思わず知らず腕を伸ばして机の上に置き、頭を垂れてじつとすわり続けていた。

訴訟のことが彼の頭を離れなかつた。弁護文書を作成して裁判所に提出することがよくはないかと、すでに何度となく考えたのだつた。その中で短い経歴を書き、比較的重要な事件のひとつひとつについて、どういう理由で自分はそういう行動をとつたのか、

そのような行動のしかたは現在判断してみるのに非難すべきか、是認すべきか、そして正しくなかつた、あるいは正しかつたとしてどんな理由をあげることができるのか、説明しようとした。どうも文句がないわけではないあの弁護士なんかの單なる弁護に比べて、このような弁護文書の利点は疑いもなかつた。Kはまつたくのところ、あの弁護士が何を企てているのか、全然知らなかつた。いずれにせよたいしたことではなさそうだつた。もう一ヶ月も自分で呼んでくれたことはないし、それより前に話したときにも、この男は自分のために多くのことをやつてくれる能力があるのだ、という印象を受けたことは一度もなかつた。何よりもまず、ほとんどまつたくKに問い合わせをしたことがなかつた。ところが

今の場合には質問すべきことがたくさんあつたのだ。質問こそおもな事柄であるはずだつた。自分自身で今の場合に必要な質問を並べたてることができ、という感じをKは持つたくらいだつた。ところが弁護士は、質問するかわりに、自分のほうでおしゃべりをするか、黙つて彼に向い合つてすわるかして、きつと耳が遠いからだろうが、少し机の上に前かがみになり、鬚ひげの中の一握りの束じゅうをしごき、絨じゅう毛たん毯たんの上に眼まなざし差さしを投げていたが、どうもちようどKがレーニといつしょにころがつた場所らしかつた。ときどきKに、子供に与えるような二、三の訓戒を与えるのだつた。役にもたたねば退屈でもあるおしゃべりで、Kは決着のついたときの謝礼では一文も払おうと思わなかつたようなものだつた。弁護

士は彼を十分へこたれさせたと思うと、今度はきまつて少し彼を元気づけようとした。自分はこれと似た多くの訴訟に、全般的にかかるいは部分的にでも勝つってきた、と言うのだった。それらの訴訟は、ほんとうはきっとこの訴訟ほどむずかしくはなかつたのだろうが、外見上ではもつと絶望的なものだつた。これらの訴訟の記録はこの引出しのなかにしまつてある、——こう言いながら机の引出しのどれかをたたいてみせた——残念ながら、これらの文書は職業上の秘密に関する事なので、お見せできない。しかしながら、今はもちろん、これらのすべての訴訟によつて自分が獲得した豊富な経験はあなたのため役だつのだ。自分はもちろんすぐに仕事を始めたし、最初の願書はすでにほとんどでき

あがつて いる。弁護側の与える第一印象はしばしば訴訟手続きの方向をすべて決定してしまるものであるから、この書類はきわめて重要なものだ。遺憾ながら、もちろんあなたは、最初の願書類が裁判所に全然読んでもらえないこともしばしばあるのだ、ということに注意してほしい。役所はそれらを単に書類のうちに加えるだけであつて、まず被告を尋問し観察することのほうがあらゆる書いたものよりも重要だ、ということを教えてくれる。そして、申請人がしつつこく願うと、役所は、あらゆる資料が蒐しゆう集しゆうさられるやいなや、決定の前に、もちろん全体との連関において、すべての書類、したがつてこの最初の願書も仔細しづさいに検討されるのだと付け加える。しかし遺憾ながら、これもたいていはほんとうで

なく、最初の願書は普通は置き忘れられるか、あるいはほとんど失われてしまうかして、たとい最後まで保存されたにしても、これは弁護士がもちろんただ噂うわさに聞いたことではあるが、読んではもらえない。こういうことはすべて悲しむべきことではあるが、まつたく正当な理由がないわけではない。あなたはどうか、手続きは公開さるべきものではなく、裁判所が必要と考えたときにだけ公開されうるのであるが、法律は別に公開すべきことを命じているわけではない、ということを忘れないでほしい。それゆえ、裁判所側の文書、ことに起訴状は被告および弁護人にはうかがいえないものであり、したがつて一般には、何をねらつて最初の願書を書くべきかということは全然わからないか、あるいは少なく

ともはつきりとはわからないし、そのため、事件に対しても重要性のあることを何か含めるということは、本来ただまぐれあたりにしかできないことだ。真に有効で論証力に富む願書というのは、後に被告の尋問をやっているうち個々の公訴事実とその理由とはつきりと浮び上がるか、あるいは推測できるようになつたときに初めて、作成できる。こういう事情の下にあつて、もちろん弁護人はきわめて不利で困難な立場にある。しかし、このこともあらかじめ定められている仕組みなのだ。すなわち、弁護人は本来法律では認められておらず、ただ默認の形なのであつて、当該の法律条文から少なくとも默認ということが解釈できるかどうか、という点に関してさえ、論争されているくらいだ。したがつて、

厳密に言うと、裁判所によつて公認された弁護士というものはいないのであり、この法廷の前に弁護士として現わるのは、すべて実は三百代言にすぎない。このことはもちろん、全然弁護士に對してきわめて不名誉な影響を与えてはいるのであり、あなたがこのつき裁判所事務局に行つたときには、一度このことを見ておくために、弁護士控室をごらんになるとよろしい。そこにとぐろを巻いている連中に、あなたはおそらく一驚されるだろう。彼らにあてがわれた狭い、天井の低い部屋からして、裁判所がこれらの人々に對していだいている軽蔑けいべつの念を示している。部屋はただ小さな天窓からだけ光を入れているが、この窓たるや非常に高いところにあるので、もし外を見ようと背中に乗せてくれる

仲間をまず捜さなくてはならず、おまけにそこではすぐ眼の前にある煙突の煙が鼻にはいつてきて、顔を真っ黒にしてしまう始末だ。この部屋の床には——もうひとつだけこういう状態の実例をあげるが——一年以上も前から穴がひとつあって、人間が落ちこむほど大きくはないが、片足をすっぽり入れてしまふには十分なほどの大きさがある。弁護士控室は屋根裏の二階にある。そこで誰かがはまりこむと、脚は屋根裏一階にぶら下がり、しかも訴訟当事者たちが待っている廊下へちょうど垂れることになる。弁護士連がこういう状態を不名誉きわまることだと言つても、言いすぎではないのだ。当局へ苦情を持ち出しても少しも効果はないし、部屋の中の何かを自費で変えることは、弁護士にはまったく嚴重

に禁じられている。しかし、このような弁護士に対する待遇にも理由があるのだ。弁護人をできるだけ排除しようとしているのであり、すべてが被告自身の手でやられなくてはならないのだ。根本においてはわるい考え方ではないのだけれども、このことから、この裁判所においては弁護士は被告にとつて不必要だ、といふことを結論することよりも間違つたことはないだろう。反対に、この裁判所におけるほどに弁護士を必要とするところはほかにはないのだ。すなわち、手続きは一般に、ただ公衆に対しても秘密にされているばかりではなく、被告に対しても秘密にされている。もちろん、秘密にことができるかぎりのことではしかないが、しかしきわめて広い範囲にわたつて秘密にすることはできるのだ。

すなわち、被告も裁判所の文書にはさっぱり通じておらず、尋問からそれの根拠となつてゐる文書のことを結論的に推察することはきわめてむずかしいし、ことに、当惑しきつてもいれば、氣を散らされるありとあらゆる心配も持つてゐる被告にとつては、とりわけむずかしい。そこでここに弁護のはいりこむ余地があるわけだ。普通は尋問には弁護人は立ち会えないのだから、尋問のすんだ^{あと}後で、しかもできたらまだ予審室の扉のところで待ち受け、被告から尋問のことを聞き取り、しばしばすでにきわめてぼやけているこうした報告から弁護に役だつことを取出さなくてはならない。しかし、これがいちばん大切なことなのではない。なぜなら、もちろんこういうやりかたでも有能な人間はほかの人たちよ

りは多くのものを聞きつけはするが、普通の場合、たいして物にすることができないからである。それでも、最も大切なものは弁護士の個人的なつながりであり、この点に弁護のおもな值打ちというものがあるのだ。ところできつとあなたは自分の経験からわかつたことだろうが、裁判所の最下層の組織は完璧^{かんぺき}とはゆかず、義務を忘れ買収されやすい役人を生んでいるので、そのため裁判所の厳重な箝口令^{かんこうれい}にも穴があくのだ。そこでこの点に大多数の弁護士がつけこみ、買収をやつたり、聞き込みをやつたり、また少なくとも以前には、書類を盗み出す場合さえも起つた。このようにして暫時のところは被告にとつて驚くほど有利な結果が獲られるということは否定できないし、これらの小弁護士たちはそれ

を得意になつて触れまわり、新しい顧客を誘うのだが、訴訟の先々の経過には全然役にたたないか、あるいはよい結果とはならない。ところでほんとうの値打ちがあるのは、正々堂々とした個人的なつながり、しかも高位の役人たちとのつながりだけである。もちろんこれは、高位の役人の中でも比較的低い地位の人たちのことと言つてはいるのだ。ただこのようなつながりによつてのみ、訴訟の進みに、初めはただ目だたぬくらいだが、後には次第につきりと、影響を及ぼすことができる。もちろん、そういうことができるのはほんの少数の弁護士に限られており、この点であなたの選択はきわめて有利だったのだ。このわし、フルト博士のようなつながりを持つているのは、おそらくただ一人か二人の弁護

士だけだろう。こういう弁護士になると、もちろん弁護士控室の仲間などは問題とせず、またなんらの関係もない。しかし、それだけに裁判所の役人との結びつきは固いわけだ。このわし、フルト博士は、裁判所へ行き、予審判事控室で判事が偶然現われるのを待ち、彼らの機嫌きげん次第でたいていはただ見せかけだけの成果をあげたり、あるいはそれすら手に入れられない、などという目にあう必要はない。そんな必要は全然ないのであって、あなた自身も見たように、役人たち、その中にはほんとうに高位にある人々もいるが、こうした役人のほうが自分でやつてき、はつきりとした、あるいは少なくとも容易に真相が解けるような情報を進んで与えてくれ、訴訟の今後の運びについても話し合い、そのうえ、

個々の場合について人の言うことを納得し、よろこんでこちらの意見も受入れてくれるのだ。もちろん、この後の点ではあまり信
用しすぎてはならないのであって、きわめて断固として彼らの新
しい、弁護にとつて有利な意見を発言してはくれても、おそらくまつすぐ事務局に帰つて、次の日には、まさしく昨日とは反対のことを行ふ、彼らがもうすっかり脱却したと主張した最初の見解よりは被告にとつておそらくずつときびしいような裁判上の決定を、発表することがある。もちろんこういうことは防ぐことはできぬ。なぜなら、二人だけのあいだで言つたことは結局ただ二人だけのあいだで言われたことにすぎず、弁護側がほかに努力のしかたがない場合であつても、裁判所の人々の恩恵にあずかると

いうことは、公の結論を下す場合に許されないことである。他面また、裁判所の人々が何かただ人間愛とか友情の気持とかいったものから弁護側、もちろん事情に通曉した弁護側、と結びついているのではない、ということも真実であつて、彼らはむしろある点では弁護側を頼りにしているのである。この点にまさしく、当初からすでに秘密裁判所を規定している裁判組織の欠陥が現われているのだ。役人たちには民衆とのつながりが欠けており、普通の中くらいの訴訟に対しては十分構えができるいて、こういう訴訟はおのずから軌道の上をころんでゆくし、ただときおり衝撃を与えるだけでよいのであるが、まったく単純な事件に対しては、特にむずかしい事件に対するのと同様、しばしば途方にくれてしま

まうのであつて、昼も夜も絶えず法律に拘束されきつているため、人間的なつながりというものに対する正しい感覚を持たず、こういう場合にはそのことに大いに不自由を感じるのだ。そこで彼らは助言を求めて弁護士を訪れ、その後からは小使が一人、たいていは非常に秘密にされている書類を持つてついてくるというわけだ。そこでこの窓ぎわには、まったく思いがけなかつたような多くの人々が現われたというわけで、彼らはまったく茫然として街路を見ており、一方弁護士のほうは、それに適切な助言を与えるため、机にすがつて書類を研究したのだ。そのうえ、まさにこういう機会にこそ、裁判所の人々が彼らの職務をどんなに真剣に考えているか、彼らの性格上どうしても克服できない障害について

てどんなに大きな絶望に陥っているか、ということを見ることができるのだ。役人の立場もけつして楽なものではなく、彼らを本当に評価して、彼らの立場が楽なものだなどと考えてはならないのだ。裁判所の身分の順序とか昇進とかいうものは無限であって、事情に明るい者にすらすつかり見通すことはできない。ところが法廷の手続きは一般には下層の役人にとつても秘密であり、そのため自分たちの関係している事件の先々の成行きについて完全に追求することは、ほとんどいつもできないし、したがつて裁判事件というものは、どこからやつてくるのかわからぬうちに彼らの視野に現われ、しばしばどこへ行くのかを知らぬままで進んでゆくのだ。それゆえ、個々の訴訟の段階、最後の決定、その理由な

どを研究して汲み取りうる教訓というものは、これらの役人の手にははいることがない。彼らはただ法律によつて彼らに規定されている訴訟の各部分にだけ携わるのであり、それ以上のこと、したがつて彼らの仕事の成果については、概してほとんど訴訟の最後まで被告との結びつきを持つてゐる弁護側ほどには知つていなのが通常の例である。それゆえ、この点においても、彼らは弁護側から多くの価値あることを聞くことができるのだ。こういうことをすべて念頭に置いたうえで、しばしば訴訟当事者たちに対して——誰でもこういう経験をするものだが——侮蔑的^{ぶべつ}なやりかたで示される役人たちの怒りっぽさというものを、あなたは不思議と思わなければならぬ。あらゆる役人は、平静らしく見える

ときでさえもいらいらしているのだ。もちろん、小弁護士たちは特に、こうした怒りっぽさに大いに悩まされなければならない。

たとえば次のような話があるが、大いにありうるように思われる。ある老役人が、善良で物静かな人物だったが、特に弁護士の願書でこんがらかつた裁判事件をまる一日一晩休みもなしに研究したのだつた、——こんな役人たちは実際、よそでは見られぬくらい勤勉なのだ。——さて朝になり、二十四時間の、おそらくはたいして収穫もあがらなかつた仕事の後、入口の扉のところへ行つて、そこに隠れ、はいろいろとする弁護士たちを階段へ突き落したのだつた。弁護士たちは下の踊り場に集まり、どうしたらよいか相談した。一面から言うと、入れてもらうことを要求する

権利がないのだから、その役人に對して合法的に何かを企てることはほとんどできないし、すでに言つたように、役人連を敵にまわすことは氣をつけなければならぬ。しかし他の一面、裁判所で過すのでなければその日はむだになつてしまふので、そこへはいりこむことが肝心でもあつた。とうとう、この老人を疲れさせてやろう、ということに話がきまつた。^{あと}後から後から弁護士を繰出し、階段を登つてゆき、できるだけの、もちろん消極的抵抗をやつて投げ落されると、そこで仲間に受止めもらつた。これがおよそ一時間ばかり続き、まつたくのところ徹夜仕事ですでに弱つていたその老人は、すっかり疲れきつて、事務局へ引下がつてしまつた。下の連中は初めはほんとうに引下がつたものとは全然

信じないで、まず一人をやつてみて、ほんとうに人がいなかどうかを扉の陰で偵察させた。それからやつと皆が繰りこんだが、おそらくは誰一人ぶつぶつ言おうとする者もいなかつた。というのは、弁護士にとつては、——最も微々たる者でもこういう事情は少なくとも一部分はわかつてているのだが——裁判所に何か改善を持ちこむなり、それをやつてみようとしているなどはまったく話の外のことだからである。ところが——これはきわめて特徴のあることだが——被告は誰でも、まつたく単純な連中さえ、訴訟に足を突つこむなりすぐに改善の提案などを考えはじめ、それでしばしば、ほかのことをやればもつとずっとよく使えるものを、時間と労力を空費するのだ。唯一の正しい道は、現状に満足す

るということだ。個々の細かな点は改善することができる場合でも、——だがこれがばかげた迷信なのだ——せいぜい未来のために少しは役だたせることはできようが、そのためしょっちゅう復讐くしゅうを求めている役人連の特別な注意をひいてしまうことになつて、測り知れぬくらい損害をこうむつてしまふのだ。ただ注意をひかぬようになると、いくら意にそむくようになつても、落着いた態度でいることだ。この巨大な裁判組織はいわば永遠に浮動し続けるのであり、そのうえで独自な立場で何かを変革しても、足下の地面を踏みはずして自分が墜落するだけのことであり、その大きな有機体のほうはちよつとした妨害に対しても容易にほかの場所で——いつさいが結びついているからだが——補いをつ

け、たどいそれが、これが実はありそなことでさえあるのだが、いつそう固く結合し、いつそう注意深く、いつそうきびしく、いつもそう悪意を持つようにならないとしても、少なくとも不変の状態を続けるのだ、ということをよく見抜こうと努めることだ。とにかく仕事は、それをかき乱したりせずに、弁護士にまかせることだ。いくらとがめだてをしたところでたいして役にたつものではなく、ことにその理由をすつかり理解することができないでいるときにはそうなのだが、それでも、あなたが事務局長に対する態度で自分の事件についてどんなに損をしているか、ということは言つておかなければならない。この有力な人物はもう、あなたのために何かやつてもらおうとする人たちのリストからはほとん

ど抹殺まつさつされなくてはならなくなつてしまつたのだ。この訴訟についてのほんのちよつとした話でも、彼はわざとそれを聞き逃すようになることだろう。まつたく役人たわいというのは、多くの点でまるで子供みたいなものだ。彼らはどんな他愛たわいもないこと、といつてももちろんKの態度は残念ながらその部類にははいらないものだつたが、そういうものによつてもひどく傷つけられ、親友とも話さなくなり、出会つてもそつぽを向き、ありとあらゆることにおいて邪魔をするようになるものだ。ところがやがて、格別の理由もなく不意に、万事がどうも見込み薄に思われるというだけの理由でやけつぱちでこちらが試みるちよつとした冗談で、笑いだし、すつかり機嫌きげんを直してしまうことがある。彼らと付き合うのは、

むずかしくもあればやさしくもあり、それに対する根本方針など
というのはどだいないのだ。こういう世界で相当の成功を収めな
がら仕事をやつてゆくことを心得るぐらいのことには、何もこみ
いつたことは要らないのであって、ほんの平凡な生活で十分な
だ、ということにはしばしば驚かされるほどである。もちろん、
誰にでもあるように、気のふきぐときもやつてはくる。そうなる
と、ほんの少しでもうまくいったことはないようと思っこむし、
初めからよい結果を生むときまつていた訴訟がうまくいったにす
ぎないし、別に手をかさなくてもそうなつただろう、と思われる
のだ。ところが一方ほかの訴訟はすべて、いろいろ奔走し骨を折
つたにもかかわらず、そしてちよつとした見かけの成功に大よろ

こびしたにもかかわらず、ことごとく失敗しているという目に会つてしまふ。こうなるともちろん、もう確信が持てず、その本質から言つてうまく運んでいる訴訟をまさによけいな手出しをすることで横道にそらしてしまつた、ときめつけられても、少しも否定する気持にはなれないだろう。これもまつたく一種の自信ではあろうが、こうなつたときわずかに残された唯一の氣の持ちかたというにすぎない。こういう発作は——これはもちろんただの発作にすぎないものであつて、それ以上ではないのだ——特に、十分に事を進めて満足のゆくようになつてきた訴訟が突然自分の手から奪われてしまうときに、弁護士に起るものだ。これがきっと、弁護士たる者に起りうるいちばん不快な事柄だろう。およそ被告

によつて弁護士から訴訟が奪われるというようなことはなく、そういうことはけつして起るものではないのであつて、一度一定の弁護士を選んだ被告は、何事が起ろうとその弁護士を離れてはいけない。一度助けを求めた以上、およそひとりでやつてゆくことなどどうしてできるものだろうか？ それゆえ、そういうことは起らぬのだが、確かにときどき、訴訟がどうもまづい方向をとり、弁護士がそれについてゆけないということは起る。訴訟も被告もいつさいが、弁護士から簡単に奪われてしまう。そうなると、役人との最もいいつながりももう役にはたちえない。役人たち自身が何も知らないからなのだ。こうなると訴訟はまさしくひとつ段階にはいつたのであり、そこではもういかなる助力もやれる

ものではなく、訴訟をやつているのは余人の近づきえない法廷であり、被告も弁護士の手には届かなくなってしまうのだ。そして、ある日、家に帰つてみると、机の上には、あらゆる努力とこの事件に対するきわめて明るい希望とをもつてつくつた多くの願書がすっかりのつていて。それらは、訴訟の新段階には持ちこむことが許されぬという理由で、差戻されたのであり、値打ちのない反古なのだ。それでも訴訟はまだ敗けと引きまつたわけではない。けつしてそんなことはなく、少なくとも訴訟が敗けたと認める決定的な理由はないのであつて、ただ、もう訴訟のことは全然わからぬいし、これからももうそれについて何もわかることはなかろう、というだけのことなのだ。ところでこういうような場合というの

は幸いに例外的なことであつて、たといあなたの訴訟がこういう場合のひとつであつても、今のところはこういう段階からはまだはるかに遠い。ここではまだ弁護士が腕を振うに十分な機会があるし、こちらも存分にそういう機会を利用するつもりだということは、あなたも安心してよろしい。すでに言つたように、願書はまだ提出してないが、それは急いではいけないのであつて、有力な役人たちと折衝を始めることのほうがずっと重要であり、そのことはすでにすませたのだ。はつきり申上げておかねばならないが、さまざまの成果があがつてゐる。あらかじめ逐一打明けておかぬほうがよろしかろう。それによつてあなたはただよからぬ影響を受けるだろうし、あまり有頂天にされるか、あまりに不安に

されるかするだろうからだ。ただ、ある人々は非常に有利だと言つてくれたし、また援助してくれる意志が大いにある旨を言つてくれたが、一方、他の人々はそれほど有利だとは言わなかつたが、けつして援助は拒みはしなかつた、ということだけは申上げておく。したがつて、成果は全体としてはきわめて上首尾ではあるが、予備折衝というのはすべてこういうようにして始まり、後日の発展を待つて初めてこの予備折衝の値打ちというものがわかるのであるから、今上首尾だということから特別の結論を引出してはいけない。ともあれ、まだけつして失敗したわけではなく、いろいろのことがあつたにせよ、例の事務局長を味方に引入れることに成功するならば、——このためにすでにいろいろなことを始めて

いるが——全体はいわゆる——外科医が言うところの——きれいな傷というやつであつて、安心して来るべきものきたを期待できると
いうものである。

こんなような話で、弁護士は尽きるところを知らなかつた。訪たずねると、いつでもこういう話が繰返された。いつでも進展してい
ると言つたが、この進展というのがどういう種類のものか教え
られることはなかつた。いつでも最初の願書の仕事をやつてゐ
るのだが、それはできあがつてはおらず、たいてい、この次いらつ
しやるときにはそれは大きな利点を明らかにしていることだろう、
なにぶんにもこの前のときには、どうも見通しがつかなかつたの
だけれども、提出するのにはなはだ都合がわるかつたもので、な

どということであつた。こういう話にすっかり疲れきつてしまつたKは、しばしば、いろいろ事情がむずかしいとはしても、事の運びがあまりにゆつくりしすぎていて、と言うのだったが、けつしてゆつくりしているわけではない、もつとももしかなたが時機を失せず弁護士に依頼していたら、すでにずつと事は運んでいたろうが、という返事だつた。ところが遺憾なことにあなたはそれを怠つたのであり、こういう怠慢はさらにさまざま不利をもたらすだろう、それは単に時間的な不利益ばかりではない、というのである。

こうした訪問をありがたいことに中断してくれる唯一のものは、レーニであった。彼女はいつも心得ていてくれて、Kがいるとき

弁護士に茶を運んでくるのだつた。そうするとKの背後に立ち、弁護士が一種のがつつきかたで茶碗^{ちゃわん}に深くかがみこみ、茶を注ぎ、飲むのをながめていると見せかけて、そつと手をKに握らせた。

完全な沈黙が支配していた。弁護士は飲んでいた。Kはレーニの手を握り、レーニはしばしば、Kの髪^{かみのけ}毛をやさしくなでるようなことをやつてのけた。

「お前まだいたのかい？」と、茶をすませると、弁護士はきいた。「茶道具を下げようと思つたのです」と、レーニは言い、最後にKの手をもう一度握ると、弁護士のほうは口をぬぐつて、元気を新たにしてKに説教しはじめるのだつた。

弁護士が手に入れようとしているのは、慰めだつたのか、絶望

だつたのか？　Kにはそれがわからなかつたが、自分の弁護がどうもあまり結構な人間の手中にあるのでないということは確かだ、と思つた。弁護士ができるだけ自分を前面に立てようとしていること、彼の言い草だとKの訴訟は大きなものだということだが、こんな大きな訴訟をやつたことはこれまでに一度もないということ、それは歴然としたことだつたけれども、Kは、弁護士の言うことはみなほんとうだらう、と考えた。ただ、彼が絶えず揚言する役人たちに対する個人的関係というのは、いつまでもうさんくさかつた。いつたいそういう連中がもつぱらKの利益のために利用し尽されるはずがあろうか？　ただ身分の低い役人たちのことであつて、したがつて訴訟のある転回がおそらく昇進に重要な意

味を持つてゐるようなきわめて従属的な地位にある役人たちなのだ、ということを弁護士はけつして言い忘れはしなかつた。おそらく彼らは弁護士を利用して、こういう、被告にとつてはもちろん不利にきまつてゐる転回をねらつてゐるのではなかろうか？おそらく彼らはこういうことをどの訴訟ででもやるのでないのであつて、確かに、そうしたことはありそうもないことだ。弁護士の名声を傷つけないようにしておくことが役人たちにとつても大いに大切であるため、訴訟の進行中に弁護士の仕事のために利益を譲歩するような訴訟の場合だつて確かにあるのだ。だが、ほんとうにそういう事情だとすれば、どういうふうにして彼らはKの訴訟、弁護士も言明したようにきわめてむずかしく、したがつ

て重要な訴訟であり、始まるとすぐ裁判所に大きな注意をひいたこの訴訟に、関与するつもりだろうか？ 彼らがやろうとすることは、たいして疑問の余地がありえなかつた。その徵候は実に、訴訟がすでに幾月も続いているのに最初の願書がまだ受理されていない点や、弁護士の申立てによると万事がやつと始まつたばかりの状態にあるという点に、すでに認められるのだつた。これはもちろん、被告を眠らせて無援の状態にしておき、次に突然決定を被告に突きつけるか、あるいは少なくとも被告の不利に終つた予審を上級官庁に送局するという知らせを突きつけるかするのに格好なことだつた。

Kが自分で乗り出すことが、絶対に必要だつた。いつさいがそ

うしようというつもりもなく彼の頭のなかを過ぎてゆくこの冬の日の午後のような、ひどい疲れの状態の真つ只中まことにで、こうした確信は避けられなかつた。これまで訴訟に對していだいていた軽蔑いべつは、もう通用しなかつた。もし自分だけがこの世にいるのであつたら、訴訟などは苦もなく無視できたであろうに、と思われたが、そうなれば訴訟などはおよそ成立しなかつたであろうといふことも、もちろん確かなことだつた。だが今では、叔父が彼をすでに弁護士のところへ引つ張つていつたので、身内のことを考えてやることも問題であつた。彼の立場はもう訴訟の経過から完全に離れきつてはおらず、彼自身軽率にも一種の説明のつかない満足をもつて知人たちに訴訟のことを言つたし、他の人々は、ど

うしてかわからぬが、訴訟のことを聞き知つており、ビュルストナー嬢との関係も訴訟に対応して動搖しているように見えた。――要するに、彼はもはや訴訟を受入れるか拒むかという選択権を持たず、その真っ只中に立ち、身を防がねばならなかつた。疲れれば、わるいにきまつていた。

もちろん、さしあたつてのところはあまりに心配しすぎる理由はなかつた。銀行では比較的短時日に現在の高い地位に登り、すべての人に認められてこの地位を守ることもできたのだから、今はただ、こういうことを可能ならしめた能力を少し訴訟に利用すればよいのであって、うまくゆくことは疑いがなかつた。何よりもまず、何か成功をなしとげるためには、自分に罪があるかもし

れないという考えをすべて払いのける必要があつた。罪などはないのだ。訴訟は大きな仕事以外のものではなく、そういうものを彼はしばしば銀行のためにやつて利益をあげてきたのであるが、その内部にはきまつてさまざまな危険がひそみ、まずそれを防がなければならぬよう仕事なのである。このためにはもちろん、何か罪があるなどという考え方をもてあそんでいてはならず、自分の利益に関しての考えをできるだけしつかりと保持していなければならぬ。この見地からすると、弁護士をできるだけ早く、できれば今晩のうちに断わつて、自分の弁護をやめてもらうことも、避けられないことだつた。弁護士の話によるとそういうことは前代未聞のことであり、おそらくは非常に侮辱的なことでもあろう

みもん

が、訴訟における自分の骨折りが、どうも自分自身の弁護士に原因するらしい妨害に出会うということは、Kには我慢がならなかつた。それで、弁護士を一度振切つてしまつたら、願書をすぐ提出し、できれば毎日、裁判所がそれを考慮してくれるようになんかせねばならないと思つた。このためにはもちろん、Kがほかの被告のように廊下にすわり、帽子をベンチの下に突つこんでいるだけでは十分でなかつた。K自身が女たちか、あるいは別な使いの者たちが毎日毎日役人をうるさく襲い、格子越しに廊下をながめてなどいないで自分たちの机にすわり、Kの願書を検討するようせきてねばならなかつた。こうした努力を捨ててはならないが、万事が組織化され監視されているにちがいないから、裁判所はき

つと、自分の権利を守ることを心得てゐる被告にぶつかつてくる
にちがいなかつた。

だが、Kはこうしたことすべてやりとげるだけの勇気はあつたが、願書を書くことのむずかしさは圧倒的であつた。前にも、つまり一週間ほども前には、こういう願書を自分でつくる必要に迫られた場合のことを、はじらいの感情をもつて想像できるだけだつたが、これがまたむずかしいものもあるということは、全然考へてもみなかつた。Kは思い出したが、ある午前のこと、ちょうど仕事で忙殺されていたとき、突然書類をみなわきへ押しのけて、用箋綴りを取上げ、試みにあの願書まがいの書きかたをして、それをあの鈍重な弁護士に見せてでもやろうと思つたが、

ちようどこの瞬間に支店長室の扉があき、支店長代理が高笑いをしながらはいつてきた。支店長代理はもちろん願書のことを知らぬのだから、それを笑つたのではなく、ちようど今聞いたばかりの洒落しゃれを笑つたのだつたが、Kはそのとき非常に不快な思いをした。その洒落は、のみこむためには図解が必要だつたので、支店長代理はKの机にすわりこみ、Kの手から取上げた鉛筆で、願書を書くことにきめていた用箋綴りの上にその絵を描きあげた。

今日ではKはもう恥のことは忘れ、願書はどうしてもつくりあげてしまわねばならない、と思つた。事務室ではそういう時間が見つからないとすれば、そしてそれはきわめてありそうなことであるが、そうなれば家で毎夜やらなければならぬ。夜でも十分

でなければ、休暇をとらなければならない。ただ中途半端なところにとどまつていないことである。それは仕事でばかりでなく、いつでも、またどんな場合でもいちばんばかげたことだ。もとより願書というのはほとんど際限のない仕事であつた。たいして心配性の人間ではなくとも、願書をいつか仕上げるというようなことはできない相談だ、というふうに思いこみやすかつた。弁護士の書類完成を妨げているような怠慢とか術策とかのためではなく、現在の告訴状もその今後の増補もわからぬままに、きわめて細かな行動や出来事にいたるまで全生活を記憶に呼びもどし、書き表わし、あらゆる角度から検討しなければならなかつたからである。そのうえ、こんな仕事はなんと憂鬱^{ゆううつ}だつたことだろう。そ

れはおそらく、恩給をもらつて退職した後あとでもうろくした精神を働かせ、長い毎日を暇つぶしする助けとしてやるのには格好の仕事だつた。だが今は、Kは思考をすべて仕事に集中し、まだ昇進中で、すでに支店長代理にとつて脅威となつており、一刻一刻がきわめてすみやかに流れてゆき、また短い夜を若い人間として享楽もしたいのに、この今こうした願書を書くことを始めなければならぬのだ。彼の思いはまた嘆きに走るのだった。ほとんど無意識に、ただこうした思いを片づけるために、彼は控えの間に通じている電鈴のボタンに指でさわつた。それを押しながら、時計を見上げた。十一時だつた。二時間、長い、貴重な時を彼はむなく費やし、もちろん、前よりもいつそう疲れていた。だが、値打

ちのある決心をしたわけだから、時を失つたわけでもなかつた。

小使たちが、さまざま郵便物のほかに二枚の名刺を持つてき、この方々はすでにかなり前からお待ちしています、と伝えてきた。それはまさしく銀行のきわめて大切な顧客で、ほんとうはどんなことがあつても待たせなどしてはならなかつたのだつた。なぜ彼らはこんなに都合のわるいときにやつてきたのだろうか、またなぜ——客のほうもまた閉じた扉の向うでそうきいているように思われた——勤勉なKとしたことが、私用でいちばん大切な執務時間^{とき}を空費したのだろうか？ これまでのことにも疲れ、また疲れきつて来るべきものを期待しながら、第一の客を迎えるためKは立ち上がりつた。

それは、小柄で元気のよい紳士で、Kがよく知つてゐるある工場主だつた。工場主は、Kの大切な仕事を邪魔したことをわび、Kのほうは、工場主をこんなに長く待たせたことをわびた。だが、このわびからして非常に機械的な調子、またはほとんど作りものを感じのする調子で言つたので、工場主がすつかり用件で夢中になつていなかつたならば、それに気がついたにちがいなかつた。

男は気づきもしないで、急いで計算書や表をありとあらゆるポケットから引出すと、Kの前にひろげ、いろいろな項目を説明し、

こうやつて、ざつと見渡してさえ気がついたちよつとした計算の誤りを訂正し、一年ほども前にKと結んだ同じような仕事のこと をKに思い出させ、ついでに、今度は別な銀行が莫ばくだい大な犠牲を

払つてもこの仕事を申込んでいる、と言い、最後に黙つて、Kの意見を聞こうとした。Kもまた事実、初めのうちは工場主の話をよくたどり、次に重要な仕事だという考えが彼の心をとらえもしたのだが、ただ残念なことに長続きがせず、間もなく話に耳を傾けることから気がそれてしまい、それでもしばらくは工場主の騒々しい叫び声に頭でうなずいてみせていたが、とうとうそれもやめ、ただ、禿げた、^は書類にかがみこんだ相手の頭をながめ、自分の話がすべて無益だと、いつ工場主が気づくだろうかと自問してみることだけにした。工場主が黙つてしまつたときに、Kはまず、自分はお話を伺うことができないと白状する機会を与えてくれるために相手が黙つたのだ、とほんとうに思いこんだのだつ

た。だが、明らかにあらゆる反対に身構えしている工場主の緊張した眼差しを見て、用談を続けなければならないのだ、と気づいたときは、ただ残念に思われるだけだつた。それで命令を受けるときのように頭を垂れ、鉛筆で書類の上をゆっくりとあちこちなでまわし、ときどき休んでは数字をじつと見つめた。工場主はKに異論があるのだと思い、おそらくは数字がまつたくはつきりとはしていないためか、おそらくは決定的なものでないためか、いずれにせよ工場主は手で書類を覆い、Kにぴったり寄り添つて、改めて仕事の一般的な説明を始めるのだつた。

「むずかしいですね」と、Kは言い、口もとに皺を寄せ、唯一のつかみどころである書類が覆われているので、ぐつたりと椅子の

肘掛けに崩れかかった。すっかり元気がなくなりさえして眼を上げると、ちょうど支店長室の扉があいて、ガーゼの幕の後ろにでもいるようにぼんやりと支店長代理の姿が、そこに現われた。Kはそれ以上支店長代理が現われたことを考えてはいないで、彼が現われたために生じた、自分にとつてきわめてよろこばしい直接の効果だけを追い求めるのだった。というのは、たちまち工場主は椅子からとび上がり、支店長代理のほうへ急ぎ足で飛んでいったからである。だがKは、支店長代理がまた消えてしまうのでないかと心配だつたので、工場主を十倍も足早に歩かせてやりたいくらいだつた。しかしそれは要らぬ心配で、二人はぶつかり、互いに握手を交わし、いつしょにKの机のところへやってきた。工

場主は、業務主任にはどうも仕事に対する熱意が見られない、と苦情を言い、支店長代理の視線の下で改めて書類の上にかがみこんだKを、指さした。それから二人が机にもたれ、工場主は今度は支店長代理を自分の手中に収めようと懸命になると、Kには、恐ろしく大きいように思われるこの二人が頭の上で自分自身のことを相談しているような気がした。慎重に上眼をつかいながらゆつくりりと、頭上で起つていることを見ようとし、書類の一枚を見もしないで机から取上げ、それを掌てのひらにのせて、自分自身も立ち上がりながら、その書類をそろそろと二人のほうに持ち上げた。こうしながら、格別どうしようということを考えたのではなく、自分がからまつたく面倒を除いてくれるの大仕掛けな願書を仕上げ

たときには、きつとこういう態度をとるにちがいない、という気持で振舞つただけだつた。すべての注意を注いで話に夢中だつた支店長代理は、ただちらりと書類を見ると、そうやつて差出されたものを全然読みもしなかつた。業務主任に大切なものも、彼にはなんでもないものだつたからである。そしてそれをKの手から取上げると、言つた。

「ありがとうございます、もうみんな承知しています」

そして、またそれを机にもどした。Kはむつとして彼を横から見つめた。だが支店長代理は全然気がつかないか、気がついたにしてもかえつてそれに元氣づけられるかして、しばしば高笑いし、一度ぬかりのない受けこたえで工場主を明らかに当惑させ、しか

しすぐ自分自身の言つたことに異論をはさんでみせて相手を当惑から解きほぐしてやり、最後に彼の事務室に来るよう誘い、そこでなら用件を終りまでやれるだろう、と言つた。

「これはたいへんむずかしい用件です」と、工場主に言つた。

「それはすっかりわかつていますから。そして業務主任さんには——こう言いながらもほんとうはただ工場主にだけ向つて話しかけるのだった——「われわれだけで片づけるほうがお気に召すでしょう。この用件は冷静に考えることが必要ですからね。ところがこの方は今日はとても忙しいらしく、もう一時間以上も幾人かの人人が控室で待っていますよ」

Kはまだ、支店長代理から向き直り、愛想よさそうではあるが

こわばつた微笑を工場主に対してしてみせるだけの落着きを辛うじて持っていたが、そのほかのことには全然手を下すことができず、少し前かがみになつて両手で机の上に身体をささえ、ちょうど机の後ろにいる売り子のような格好になり、二人が話を続けながら机から書類を取上げ、支店長室に消えてゆくのをながめていた。扉のところでなお工場主は振向き、これでお別れするのではなく、もちろん話の結果について業務主任さんにも報告するし、自分個人としてもまだほかにちょっとお話しすることがある、と言つた。

やつとKはひとりになつた。誰か別な客を迎えるとは全然考えず、部屋の外の人々は自分がまだ工場主と折衝中だと思いこみ、

このために誰も、そして小使さえも、自分のところへはいつてこないのは、なんと気持のよいことだろう、という考えが、ただ漠然と彼の意識に上つてくるのだつた。窓ぎわへ行き、手すりに腰をおろして、片手を把手^{とつて}にかけて身体^{からだ}をささえ、広場を見やつた。雪はまだ降つており、全然晴れあがつてはいなかつた。

いつたい何が自分を心配させるのかもわからぬまま、彼は長いあいだそうして腰かけていた。ただときどき少しげくりとして肩越しに控室のほうを見たが、空耳だが物音を聞いたように思つたからであつた。だが誰も来ないのでいくらか落着き、洗面台に行つて冷たい水で洗うと、さわやかな頭になつて窓べの場所にもどつてきた。弁護を自分の手で引受けようという決心が、初めに思

つたよりもいつそう重要なと思えた。弁護を弁護士にまかせていました。うちには、まだ根本的には訴訟にほとんど関係していなかつたも当然で、ただ遠くからながめていたのであつて、直接それから得るところはほとんどなかつたが、欲するなら自分の事件がどうなつているかを見ることができたりし、また望むならば頭を向け直すこともできたのだった。それに反して、今や弁護を自分でやることになれば、——少なくともしばらくは——すっかり裁判所に身をさらさなくてはならなくなり、その結果は、後になれば自分の身を完全に、また最後的に解放することになるはずではあるが、これをうまくやるためにには、どうしてもしばらくはこれまでよりも大きな危険を冒してゆかねばならなかつた。この点については彼

は疑わしく思つていたが、支店長代理と工場主と今日同席したことで十分確信させられたにちがいなかつた。自分を弁護するといふはつきりした決心をすつかりきめたのに、どうしてそこにすわつていたのか？ だが、これから先どうなることだろうか？ 自分の前にはどんな日々が立ちはだかつていることだろうか！ 万事を切り抜けて好ましい結果に通じる道を発見するだろうか？

きわめて慎重な弁護をやろうというのなら——そしてそれ以外のことはいつさい無意味なのだ——きわめて慎重な弁護をやろうと いうのなら、それには同時に、ほかのいつさいのことを除外してしまうことがどうしても必要ではないか？ うまくやりおおせられるだろうか？ そして、これをやりぬくことは銀行にありなが

らどうやつて成功するだろうか？ まつたくのところ單に願書の問題ではなくて、訴訟全体に関することなので、願書ならば、たとい休暇を願い出ることは今さしあたつてはたいへん思いきつたことではあつても、休暇を取ればきっと十分だろうが、この訴訟となるとどれほど続くかさっぱり見通しがきかぬのだ。なんという障害が突然おれの経歷に投げこまれたことだろうか！

そして今でも、銀行のために働かねばならぬのだろうか？——彼は机の上を見やつた。——今でも客を招き入れ、彼らと折衝をせねばならぬのだろうか？ 訴訟が進行し、あの屋根裏部屋では裁判所の役人たちがこの訴訟の文書をめぐつて集まつているのに、銀行の仕事にかまつていなければならぬのだろうか？ 仕事は

まるで、裁判所によつて公認され、訴訟と関連してそれにつきまとつてゐる拷問のようなものではないか？ およそ銀行の中にあつて、自分の仕事を評価するとともに、この特殊な状態を考慮してくれる人がいるだらうか？ そんなことをしてくれる人は全然ない。誰がどれくらいそれについて知つてゐるのかはまだまつたくはつきりとはしていないが、訴訟のことは全然知られていないわけではなかつた。だが支店長代理のところまでは噂はまだおそらく届いてはいないらしく、もしそうでなければ、この男がきつと同僚のよしみも人情もあつたものではなくそれを利用しつくす有様を、すでにはつきりと見なければならなかつたことだらう。そして支店長はどうだらう？ 確かに彼はおれに好意を持つてお

り、訴訟のことを聞けば、おそらくすぐにできるだけおれのために事を容易にしてやろうとしてくれるだろうが、きっとそういう態度を貫くことはできまい。なぜならば、おれがこれまで形成していたバランスが弱まりはじめたにつれて、支店長はいよいよ代理の影響に押されることとなり、代理はそのうえ支店長の苦しい立場を自分の勢力の増強のために利用しつづいているようなやつだからだ。それゆえ、おれは何を望むべきか？　おそらくこんなふうに考えることによつて抵抗力を弱めることになるだろうが、自分自身を欺かず、万事を現在としてできるだけはつきりと見ることもまた必要なことだ。

格別の理由もなかつたが、ただしばらくはまだ机に帰りたくは

なかつたので、窓を開けた。窓はなかなかあかず、両手で把手をまわさねばならなかつた。やつとあけると、窓の幅と高さとだけ、煤^{すす}の混じつた霧が部屋に流れこみ、かすかな焦げる匂^{にお}いで部屋をいっぱいにした。雪片もいくらか吹きこんできた。

「いやな秋ですね」と、Kの背後で工場主が言つたが、支店長代理のところからもどつて、気づかれずに部屋にはいつてきていたのだつた。Kはうなずき、不安げに工場主の書類入れを見つめた。その中から彼は今にも書類を引っ張り出し、支店長代理との交渉の結果をKに話しそうだつた。だが工場主はKの視線を追い、書類入れをたたき、それをあけないで言つた。

「どういうことになつたか、お聞きになりたいでしよう。書類入

れの中にはもう契約書がはいつているのも同然です。支店長代理さんは魅力のある人ですね。だがまつたく危険のない人じやないですか」

彼は笑つてKの手を握り、彼のことも笑わせようとした。ところがKには、工場主が書類を見せようとしないことがまたまたあやしく思われたので、工場主の言葉が少しもおかしくはなかつた。「きっと天氣病みでいらつしやるんですね？　今日はたいへんふさいでいらっしゃるようにお見受けしますが」

「そうです」と、Kは言い、両手でこめかみを押えた。「頭痛と家庭の心配です」

「まつたくです」と、せわしげな人間で、人の言うことは落着い

て聞けない工場主は、言つた。「誰でも十字架を負わなければならんのです」

工場主を送り出そうとするかのように、Kは思わず知らず扉のほうへ一歩進んだが、工場主は言つた。

「業務主任さん、あなたにもう少しお話しさることがあります。

こんな日に申上げてあなたをわざらわすことはたいへん恐縮ですが、最近二度もあなたのところへまいって、いつも忘れてしまつていたものですから。でもこれ以上延ばしますとおそらく完全に役にたたなくなりましようからね。そうなると残念ですかねえ。なぜつて私の話は根本においておそらく値打ちのないものではありませんからね」

Kが答える余裕もないうちに、工場主は彼のそばに歩み寄り、指の関節で彼の胸をたたき、低い声で言つた。

「あなたは訴訟にかかりあつていらつしやるんですつてね？」

Kは^{あと}後^{あと}ずさりして、すぐさま叫んだ。

「支店長代理があなたにお話ししたんですね！」

「いや、そうじやありません」と、工場主は言つた。「支店長代理が知つているわけがないでしよう？」

「ではあなたは？」と、Kはずつと落着きを取り戻して言つた。

「あちらこちらで裁判所のことは何かと聞きますんでね」と、工場主は言つた。「お話ししようと思うことも、まさにそのことなんです」

「たくさんな人が裁判所と関係を持つてゐるんですね！」と、Kは頭を垂れて言い、工場主を机のところへ連れていった。彼らは先ほどと同じようにすわつたが、工場主は言つた。

「お伝えすることができることがたいして詳しくはなくて残念です。しかし、こういう事柄ではほんの少しでもおろそかにしてはなりませんからね。それに、私の尽力はささやかなものであります。あなたをなんとかしてお助けいたしたい気持に駆られておりますので。私たちはこれまで仕事の上のよい友達でしたからねえ。ところで——」

Kは今日の相談のときの自分の態度のことわびようとしたが、工場主は黙つて話を中断させてはおらず、自分は急いでいるのだ

ということを示すために書類入れを腋の下に高く押しこみ、言葉を続けた。

「あなたの訴訟のことは、テイトレリという男から知りました。

画家として、テイトレリというのはただその男の雅号ですが、ほんとうの名前は全然知りません。この男は、数年来ときどき私の事務所にやつてきて、小さな絵を持つてくるんですが、——まるで乞食こじきみたいなもんですよ——私はいつでも一種の喜捨をやつています。ともかく好ましい絵として、荒野の風景とかそういうものなんです。このやりとりが——二人とももう慣れてしまったんですが——まったくスムーズにいつていきました。ところが、一度、こうやってやつてくるのがあまり頻繁ひんぱんに繰返されるので、

私は文句を言つてやつたところ、いろいろな話になり、ただ絵を描くことだけでどうやつて暮してゆけるのか、私も興味を覚えたんですが、驚いたことに彼のおもな収入源が肖像画だということを聞きました。『裁判所の仕事をしています』と言うんです。

『どんな裁判所だね』と、私がききました。すると裁判所のことをお話してくれました。どんなにこの話で私が驚いたことか、あなたはいちばんよくわかつてくださるでしょう。それ以来私は、この男が訪ねてくるたびごとに裁判所のニュースを何かと聞き、次第次第にそのことに関するある種の理解ができるようになります。もとよりティトレリはおしゃべりとして、私はしょっちゅう追い払わなければなりませんが、それはこの男が嘘うそをつくからば

かりでなく、何よりも、私のような商売人は自分の仕事の心配だけでもほとんどぶつぶれそうで、関係のない物事にはあまり気をつかっていられないためなんです。だがこれはただついでに申し上げたわけです。おそらくこれで——私は思うんですが——あなたはティトトレリのことが少しはおわかりのことと思いますが、この男は大勢の裁判官を知っていて、自分ではたいして力がないにしても、どうやつたらさままざまな有力者に近づけるかという助言はできましよう。そして、たといこういつた助言がそれ自体としては決定的なものでないにしても、私の考えるところでは、あなたがお持ちになればたいへん有益でありますよう。あなたはまったく弁護士みたいな方ですからね。私はいつも言っているんです

よ。業務主任のKさんは弁護士みたいな人だつてね。いや、私は何もあなたの訴訟のことでおいでになりません。ですが、ティトレリのところにおいでになりますんか？ 私がご紹介すれば、あの男はきっと、彼にできることをなんでもやるでしよう。あなたは行くべきだと私はほんとうに思いますね。もちろん今日でなくとも結構でして、いつかおついでのときでいいんです。もちろん、——これは申上げておきたいと思いますが——私がこうおすすめしたからといって、ほんとうにティトレリのところにどうしても行かねばならぬということは少しもありません。いや、もしティトレリなんかいなくたつてやつてゆけるとお思いでしたら、確かに、あの男をまったく無視されることがいつそうよろし

いでしよう。きっとあなたはとつぶに詳しいプランをお持ちでしょ
うし、それならティトレリなんかはその邪魔をするばかりか
もしません。いや、それならもちろん、けつしていらつしやら
なくて結構なんです！ それにきっと、こんな男から助言をもら
うとなると我慢も要りますからね。まあ、お気に召すようにして
ください。これが紹介状、これが住所です』

がつかりしてKはその手紙を受取り、それをポケットに押しこ
んだ。いちばんうまくいった場合でも、この紹介状のもたらす利
益などは、工場主が自分の訴訟について知つており、画家がその
ニュースをひろめてまわる、ということに含まれている損害に比
べれば、比較にならぬくらい小さなことだつた。もう扉のほうへ

行きかけている工場主に一言二言礼を言うことも、ほとんどやる気にはなれなかつた。

「行つてみますよ」と、扉のところで工場主と別れるとき、Kは言つた。「あるいは、今は非常に忙しいので、一度私の事務室のほうへ来てもらいたいと書くかもしません」

「あなたがいちばんいい策てを発見されるだらうということは、わかつていました」と、工場主は言つた。「もちろん私は、訴訟について話すためにこのティトレリのような人物を銀行へ呼ぶなどということは、あなたがむしろ避けたいと思つていらつしやるものとばかり思つていました。それに、手紙をこんな連中の手に渡すということは利益になるとばかりはかぎりませんからね。でも

あなたはさだめし万事を考え抜かれたことでしょうし、どうやつたらよいかは十分おわかりのことだと思います」

Kはうなずき、さらに控室を通つて工場主について行つた。だが、表面では平静を装つているものの、自分の言つたことに非常に驚いていた。ティトレリに手紙を書くだろうと言つたのは、もとよりただ工場主に対してなんとかして、紹介状はありがたく思つてゐる、ティトレリと会う機会のことはすぐ考える、ということを示そうと思つて言つたことにすぎないのだが、もしティトレリの味方が值打ちがあるものと見てとれば、ほんとうに手紙を書くことも躊躇ちゆううちよはしなかつただろう。ところが、その結果として起るかもしれない危険のことは、工場主の言葉で初めて気がつ

いたのだった。自分の悟性に対してほんとうにこんなにも信用できなくなつたのだろうか？ はつきりした手紙でうさんくさい男を銀行にまで呼び出し、支店長代理とは扉ひとつしか隔たつていない場所で自分の訴訟についての助言を求めるというようなことがありうるなら、もつとほかの危険も見逃^{みのが}しているし、そんな危険のなかに飛びこむこともあります。自分に警告してくれる人間がいつも自ことでさえなかろうか？ 自分に警告してくれることだし、大いにありそうな分のそばにいるものとばかりはかぎらない。そしてまさに今、全力を集中して歩み出なくてはならないときに、自分の用心深さに對するこれまで知らなかつたようなこんな疑惑が現われるとは？ 事務をやつているとき感じたあの困難が、今や訴訟においても

始まつたのだろうか？もちろん今ではもう、ティトレリに手紙を書き銀行に来てもらおうなどと思つたことがどうして可能だつたのか、彼にはわからなかつた。

そのことを考えてまだ頭を振つていると、小使がそばにやつてきて、この控室のベンチに腰かけていた三人の客に注意を向けさせた。彼らはすでに長いあいだKのところへ招かれるのを待つていた。小使がKと話すなり、立ち上がつて、好機をとらえて誰よりも先にKの前に行こうとした。銀行側が無礼にもこの待合室で時間を空費させたもので、彼らのほうももう遠慮をしようとはしなかつた。

「業務主任さん」と、早速一人が言つた。だがKは小使に外套がいとう

を持つてこさせ、小使の手を借りて着ながら、三人全部に向つて言つた。

「みなさんごめんなさい、今ちょうどお会いする時間がないんです。はなはだ恐縮ですがさし迫つた外での用事を片づけなければなりませんので、すぐ出かけなければなりません。ごらんのとおり、今たいへん長く引留められておりましたので。明日でも、あるいはいつなり改めておいでねがえませんか。なんなら用件を電話でお話しさることにしませんか？　または今手短かに何のご用件か伺つておいて、のちほど詳しく書面でお答えいたしましょう。もちろん、この次来ていただくのがいちばんよろしいのですけれど」

このKの提案は、完全にむなしく待たされたことになつた三人の客を非常に驚かせたので、黙つて顔を見合すばかりだつた。

「それじやあ、そうきまりましたね？」と、帽子を持つてきた小使のほうを振向いたKは、たずねた。Kの部屋のあけつ放しの扉からは、戸外で雪えりがたいへんひどくなつたのが見えた。そこでKは外套の襟えりを立てて、頸くびのすぐ下にボタンをかけた。

ちょうどそのとき、隣室から支店長代理が出てきて、外套を着たKが客たちと言い合つているのを微笑しながらながめ、こうきいた。

「もうお帰りですか、業務主任さん？」

「そうです」と、Kは言い、身体を正した。「用件で出かけなけ

ればなりませんので」

しかし支店長代理は、すでに客たちのほうを向いていた。

「で、この方々はどうなんですか？」と、きいた。「もうかなりお待ちのように思うんですけど」

「もう話がきまつたんです」と、Kは言つた。だが客たちはもう我慢ができなくなり、Kを取囲んで、用件が重要なものでなければ、一時間も待ちはしなかつたろう、そして今すぐ、それもどつくりと個人的に、話し合つてもらいたい、と述べたてた。支店長代理は彼らの言うことをしばらく聞いていたが、帽子を手に持ち、あちこち塵ぢりを払つているKのこともながめたうえで、言つた。

「みなさん、たいへん簡単な策てがあります。もし私でおよろしか

つたら、業務主任さんにかわってよろこんでお話を伺いましょう。みなさんのご用件はもちろんすぐお話ししてしまわなければなりません。私たちもみなさんのように商売人ですから、商売人の時間の大切なことはよくわかつております。こちらにいらっしゃいませんか？」

そして、自分の事務室に通じる扉を開いた。

Kが今やむなく放棄せねばならなかつたものを、支店長代理はすべて我が物としてしまうことをなんと心得ていたことか！しかしKは、絶対的に必要である以上のものを放棄しなかつたろうか？不確か、きわめて乏しいということを認めざるをえないような希望をいだきながら未知の画家のところへ行つてゐるあい

だに、銀行のほうでは彼の声望は取返しのつかぬような損害をこうむるのだった。外套をまた脱いで、まだ顔をそろえて待たされている二人の客だけでも取戻すほうが、ずっと賢明であつたろう。彼の本立てで我が物顔に何か搜している支店長代理をそのとき見つけなかつたなら、Kはおそらくそうしたかもしぬない。Kが憤慨して扉に近づいたとき、支店長代理が叫んだ。

「ああ、まだ出かけなかつたんですね」

Kのほうに顔を向け、すぐまた捜し始めるのだったが、その顔の数多くの鋭い皺^{しわ}は、老齢ではなくて、充実した気力を示しているように見えた。

「契約書を捜しているんですよ」と、彼は言つた。「あの商会の

社長さんが、君のところにあるはずだ、と言われるんだが。捜してくれませんか?」

Kが一步近づくと、支店長代理は言つた。

「いや、ありました」

そして、契約書だけではなく、きっとほかのものもたくさん入っているにちがいない大束の書類を持つて、また自分の部屋にもどつていつた。

「今のところはあいつは手には負えないが、おれの個人的な悶^{もんち}着^{やく}が片づいたら、きつといちばん先に痛い目にあわせてやるぞ、しかもできるだけひどくだ」こう考えて少し気を落着けたKは、ずっと前から廊下に出る扉を開けて待っていた小使に、用件で外

出したと折を見て支店長に伝えてくれと頼み、しばらくは自分の用事に完全に没頭できることにほとんど幸福を覚えながら、銀行を出た。

すぐ画家のところへ行つた。画家は郊外に住んでいるのだつたが、裁判所事務局のある例のところとは全然反対の方面であつた。もつとみすぼらしい界隈かいわいで、家々はもつと陰気くさく、小路は雪解けの上をゆつくりと漂つてゐる汚物でいっぱいだつた。画家の住む家では、大きな門の片方の扉だけがあいており、もう一方は下のほうの壁に穴があき、Kが近づいたとたん、気持のわるい黄色の臭におう液体がこぼれてきて、それを避けようとして鼠ねずみが一匹近くの溝みぞへ逃げこんだ。階段の下では子供が一人地面に腹ばいに

なつて泣いていたが、門の向う側のブリキ屋の仕事場から聞えてくる騒音がいつきいの物音を打消してしまって、子供の泣き声はほとんど聞えぬくらいだつた。仕事場の戸はあけ放しで、何か仕事を囲んで半円形に三人の職人が立ち、ハンマーでその上をたたいていた。壁にかかつた大きな一枚のブリキ板が蒼白あおじろい光を投げ、それが二人の職人のあいだを透とおして、彼らの顔と仕事用の前掛けとを照らしていた。Kはこうしたすべてを軽く一瞥いちべつし�ただけだつた。できるだけ早く用事をすまし、ほんの少し画家から話を聞いただけですぐ銀行にもどろうと思つた。もしここでほんのわずかでも成果をあげたならば、それは銀行での今日の仕事にもよい影響を及ぼすにちがいなかつた。四階では歩度をゆるめ

なければならなかつた。すつかり息切れがし、階段も各階も柵は
ずれに高かつたが、画家はまつたくてつぺんの屋根裏部屋に住んで
いるということだつた。空気もきわめてうつとうしく、踊り場
がなく、狭い階段が両側の壁にはさまれており、その壁にはほん
のところどころおそろしく上のほうに小さな窓がついていた。K
が少し立ち止つたとき、ちょうど二、三人ほどの少女がある部屋
から飛び出し、笑いながら階段を駆け上がつていつた。Kはその
後をゆつくりとつけ、つまずいてほかの子たちに取残された一人
の少女に追いつき、並んで登りながらきいてみた。

「絵描きのティトシリっていう人いる？」

十三になるかならぬかのいくらか佝僂せむしのその少女は、きかれ

と片かた肘ひじでKを突き、そばから彼の顔をじつと見た。その子の幼さも不具も、この子がすでにすっかり墮落してしまっているという事実を否定できるものではなかつた。少女はにこりともしないで、銳とがいうかがうような眼まなざし差でむきになつてKを見つめた。Kはその態度に気づかなかつたように装つて、きいた。

「絵描きのティトレリさんって知つている?」

少女はうなずくと、今度は彼女のほうからたずねた。

「あの人になんの用事なの?」

Kには、あらかじめ少しティトレリについて知つておくことが有益に思われた。

「おじさんのこと描いてもらおうと思うんだよ」と、彼は言つ

た。

「描いてもらうの？」と、少女はきき、やたらに大きく口を開け、Kが何か非常に驚くべきことかまずいことを言つたのである。かのように手で軽く彼をたたき、そうでなくとも短かすぎるスケートを両手でつまみ上げると、高いところで叫び声がもう聞き取れぬくらいになつてゐるほかの子供たちの後を追つて、できるだけ早く駆け上がつていつた。だが階段のその次の折り返しのところで、Kはまた少女たち全部といつしよになつた。明らかに佝僂の子にKの意図を教えられて、彼を待つていたのだつた。階段の両側に立ち、Kがうまく通るように壁に身体を押しつけ、手でエプロンの皺しわを伸ばしていた。どの顔つきといい、またこんな人垣

をつくることといい、子供らしさと堕落の味わいとの混じり合いを示していた。Kの後ろに笑いながら集まつた少女たちの先頭に立つたのは、案内を受けた例の佝僂だつた。Kはすぐ正しい道筋がわかつたのも、その子のおかげだつた。すなわち、まっすぐ登つてゆこうとしたのだが、ティトレリのところへ行くには分れた階段を選ばなくてはならぬということを、その子は教えてくれた。画家のところへ行く階段は特に狭く、きわめて長く、曲つてはいないのですつかり見通しがきき、登りつめると直接ティトレリの扉の前で終つていた。扉の斜め上にはまつた小さな天窓によつてほかの階段とはちがつて比較的明るく照らし出されているこの扉は、上塗りのしてない角材で組み上げられ、その上にはティ

トレリという名前が赤い色で肉太の筆書きをもつて書かれていた。子供たちを従えたKが階段の真ん中まで来るやいなや、明らかに大勢の足音に促されたからであろうが、上の扉が少しあけられ、寝巻一枚を着ているらしい一人の男が扉の隙間に現われた。

「おお！」と、一行がやつてくるのを見て、男は叫んだ。佝僂の少女はよろこんで手をたたき、ほかの少女たちは、Kをもつと早く追いたてようとして、彼の後ろから押すのだつた。

まだ登りつめないうちに、上では画家が扉を大きく開き、深く身体をかがめて、Kにはいるようにすすめた。少女たちのほうは追い払い、子供がどんなに頼んでも、また彼の許しがなければ無理にでも押し入ろうとどんなにやつてみても、一人でも入れよう

とはしなかつた。ただ佝僂の子だけが画家の伸ばした腕の下をくぐり抜けることに成功したが、彼はその子の後を追い、スカートをつかむと自分のまわりでぐるぐると引きまわし、扉の前のほかの子たちのところへ置いた。子供たちは、画家がそうして持場を離れているあいだ、それでも敷居を越してやろうとはしなかつた。Kはこういう有様をどう判断すればいいのかわからなかつた。すなわち、万事がまるで仲よく馴れ合い^なで行われてているように見受けられるのだつた。扉の子供たちは次々と頸^{くび}を伸ばし、Kにはわからないさまざまなふざけた言葉を叫びかけ、画家もまた、彼の手中の佝僂の子がほとんど飛ぶように逃げてゆくあいだ、笑つていた。次に扉をしめ、もう一度Kに会釈^{えしゃく}すると、手を差出し、

名乗りながら言つた。

「画家ティトレリです」

Kは、背後で少女たちがささやいている扉を指さして言つた。
「この家ではたいへん人気がおありのようですね」

「ああ、腕白たちでして」と、画家は言い、寝巻の頸のボタンをかけようとするのだがだめだつた。ところで画家は裸足^{はだし}で、だぶだぶの黄ばんだズボンをはいているだけだが、ズボンは紐^{ひも}で締められ、その長い端がぶらぶら揺れていた。

「この腕白たちにはほんとうに困っています」と、言葉を続けながら、いちばん上のボタンがちよどちぎれてしまつた寝巻から手を出し、椅子をひとつ持ってきて、Kにかけるようにすすめた。

「前に、あの連中の一人を——その子は今日はいなかつたですが
 ——描かいてやつたことがありましたが、それからというものの、み
 な私の後を追いかくるんです。私がここにおりますと、いいと言
 うときだけはいつてきますが、一度出かけようものなら、いつで
 も少なくとも一人ははいりこんでいます。私の部屋の鍵をつくら
 せて、互いに貸し合つてているんですよ。いやわざらわしいつたら、
 人様にはほとんど想像もつきますまい。たとえば、私が描くこと
 になつてゐるご婦人と帰つてきて、鍵で戸を開けると、筆で唇を
 真つ赤に塗つた佝僂の子がそこの机のところに立ち、その子がお
 守りをしなきやならない小さな妹たちは暴れまわつて、部屋の隅す
 もみずみ々までよごしているというような有様なんです。また、つい昨

日起^{のう}つたことですが、夜遅く帰つてきて、——どうかそのことをお考えくださいって、私のこんな格好や部屋の乱雑なことはお許しねがいます——で、夜遅く帰つてきて、ベッドにはいろいろとすると、誰か私の脚をつねるやつがある。私はベッドの下をのぞいて、一人引つ張り出すつていうようなわけです。どうして私のところにこう押しかけるのか、私にはわかりませんが、私のほうから誘いをかけたのでないことは、あなたも今ちようどごらんになつたとおりです。もちろんこれには仕事の邪魔もされるというものです。このアトリエが無料で借りられるのでなければ、とつくに引つ越していたでしょう」

そのときちょうど、扉の向うでやさしい、おどおどしたような

声が叫んだ。

「ティトレリさん、もうはいつてもいい？」

「いけないよ」と、画家は答えた。

「あたしだけでもいけない？」と、声がまたきいた。

「いけないね」と、画家は言い、扉のところへ行き鍵をかけた。

Kはそのあいだに部屋を見まわした。このひどい小さな部屋がアトリエと呼ばれるかどうかは、言わなければひとりで思いつくものではなかつた。奥行、間口ともにここでは、おおまた大股で二歩以上は、歩けそうもなかつた。床、壁、天井、みな木造で、角材のあいだには細い隙間が見られた。Kの反対側の壁ぎわにベッドが置かれ、色とりどりの寝具が積み上げられていた。部屋の真ん

中の画架には一枚の絵がのり、シャツがかぶせてあつて、その袖そでが床までぶらさがっていた。Kの後ろには窓があり、窓からは霧を透して雪で覆おおわれた隣家の屋根が見えるだけだつた。

鍵をまわしてしめる音は、Kに、すぐ帰るつもりだつたことを思い出させた。そこで工場主の手紙をポケットから取り出し、画家に渡して言つた。

「あなたのお知合いのこの方からあなたのこと伺い、そのおすすめでまいったのです」

画家はさつと手紙を通読し、それをベッドの上に投げた。もし工場主がきわめてきつぱりと、ティトレリは自分の知合いで、自分の喜捨に頼ってきた貧しい人間だ、と言つたのでなかつたら、

この有様を見ては、ティトレリが工場主のことを知らないか、あるいは少なくとも彼のことを思い出すことができないのだ、とほんとうに考えることもできたろう。そのうえ、画家はこうきくのだった。

「絵をお買いになりたいんですか、それとも肖像を描けとおつしやるんですか？」

Kはびっくりして画家を見つめた。いつたい手紙には何が書いてあるんだろう？　自分がここに来たのはほかならない訴訟について問い合わせようと思うからだ、と工場主が手紙で画家に告げているものだとばかりKは考えていた。あんまりあわてすぎ、よくも考えてみないで駆けつけたようだ！　だが、こうなつてはなん

とか画家に答えなければならないので、画架に一瞥いちべつを投げながら言つた。

「ちょうど絵のお仕事ですね？」

「そうです」と、画家は言い、画架の上にかかつっていたシャツを、ベッドの手紙のほうに投げた。

「肖像画です。いい仕事ですが、まだすっかりできあがつてはいません」

偶然がKに幸いし、裁判所のことを話すきっかけが、はつきりと彼に与えられたのだつた。というのは、それは明らかに裁判官の肖像だつたからである。ところでそれは、弁護士の事務室の絵にひどく似ていた。もちろんこれは全然別な裁判官であつて、頬ほお

の側にまで達している黒いもじやもじやの一面の鬚を生やした肥
つた男だつたし、あの絵は油絵だつたが、これはパステルでさつ
とぼかしてあつた。だがそのほかの点では似ていた。この絵でも
やはり、ちょうど裁判官が肘掛けをしつかと握つて、いかめしい
椅子から威嚇的いかく
ひかく的な態度で立ち上がるうとしていたからである。

「裁判官ですね」と、Kはすぐ言おうとしたが、しばらくはまだ
控えて、細部をよく見ようと/orするかのように絵に近づいた。椅子
の背の真ん中にある大きな像がなんであるか彼にはわからなかつ
たので、画家にそれをきいてみた。これはもう少し手を加えなく
ちやならないんです、と画家は答え、小さな机からパステルを一
本持つてくると、それで少しその像の輪郭をなすつたが、そうし

てもKにははつきりとはわからなかつた。

「正義の女神なんです」と、画家は最後に言つた。

「もうわかりましたよ」と、Kは言つた。「ここに眼隠しの布があるし、ここに秤^{はかり}がある。だが、踵^{かかと}に翼^{かね}が生えていて、飛んでいるんじやありませんか?」

「そうなんです」と、画家は言つた。「頼まれてこう描かなくちやならなかつたんですが、ほんとうは正義の女神と勝利の女神とをひとつにしたんです」

「どうもあまりうまい取合せじやありませんね」と、Kは微笑しながら言つた。「正義はじつとしていなくちやいけませんね。そういうでないと秤が揺れて、正しい判決ができませんからね」

「その点は依頼主の注文に従つたんです」と、画家は言つた。

「きっとそうでしようね」と、自分の言葉で誰も傷つけまいとしたKは、言つた。

「この像は、ほんとうに椅子にすわっているままを描かれたんですね」

「いや」と、画家は言つた。「私はその像も椅子も見ませんでした。いつさい考案ですが、描くべきものは注文をつけてもらいました」

「えつ、なんですつて?」と、画家の言うことがよくわからないというようにわざと装いながら、Kは言つた。「でもこれは、裁判官の椅子にすわっている裁判官でしょう?」

「そうですが」と、画家は言つた。「でも高い地位の裁判官じゃなくて、こんなりつぱな椅子にすわつたことなんかないんです」「それなのにこんないかめしい物腰で描いてもらうんですか？まるで裁判所の長官のようにすわっていますね」

「そうです、この人たちは虚榮心が強いんですよ」と、画家は言った。「だが、こういうふうにして描いてもらつていいという、上のほうの許可を受けているんです。誰もが、どう描いてもらつていいのかきめられているんですよ。ただこの絵では服装や椅子の細部が見分けられませんね。パステルはこういう表現には不向きです」

「そう」と、Kは言つた。「パステルで描かれているのは変です

ね」

「裁判官がそう望まれたんです」と、画家は言つた。「これはあるご婦人にあげることになつています」

絵をながめていることが、彼に仕事をしようとする欲求を起させたらしく、シャツの袖をたくし上げ、二、三本パステルを手に取つた。そしてKは、そのパステルの震える尖端せんたんの下で、裁判官の頭にしつくりとはまりながら赤みを帯びた陰影ができあがり、それが画面の縁に向つて放射線状に消えてゆくのを、ながめていた。この陰影の戯れは次第に、飾りか高い名誉のしるしかでもあるように、頭を取巻いた。だが正義の女神の姿のまわりでは、ほとんど気づかれないような色調を除いて色が明るく、この明るさ

のうちに姿がことに浮び上がつてくるように思われ、もうほとんど正義の女神も、勝利の女神をも思い出させず、今ではむしろ、すっかり狩獵の女神のように見えた。画家の仕事は、思つたよりもKをひきつけた。しかしついに、自分はもうこんなにここにいるのに、根本において自分自身のことをまだやつていなかつた、と気づいて我が身をとがめるのだった。

「この裁判官はなんという人ですか？」と、彼は突然きいた。

「それは言えません」と、画家は答え、絵に深くかがみこんで、初めはあんなにも敬意をこめて迎えた客を明らかに無視するのだった。Kはそれを気まぐれと考え、それに腹を立てたが、こんなことで時間をむだにしたからであった。

「あなたはきっと裁判所どご懇意なんですね」と、彼はきいた。

画家はすぐパステルをそばに置き、身体を起し、両手をこすつて、にやにやしながらKを見つめた。

「いつも、すぐに真相を言えとばかりおっしゃるんですね」と、彼は言つた、「紹介状にも書いてありますぐ、あなたは裁判所のことが聞きたいのに、私の気をひこうとしてまず私の絵のことを話されたのですね。だが、私はそれをわるくはとりませんが、そんなことは私の場合適当じやないつてことをど存じなかつたんです。いや、結構ですよ！」と、Kが何か異議をさしはさもうとすると、画家は鋭くさえぎりながら言つた。そして次にこう言葉を続けた。

「ところでおつしやつたことは完全に正しいのとして、私は裁判所に信用が厚いのです」

Kにこの事実で満足する時間を与えようとするかのように、画家はちよつと間^まを置いた。また扉の向うで少女たちの声が聞えた。彼らは鍵穴のまわりにひしめいているらしく、おそらく隙間からでも部屋の中がのぞけるらしかった。Kはなんとかわびを言うのはやめにした。画家の気持をそらしたくはなかつたが、画家があまりに高いところへ上つてしまい、こんなふうにしていわば人の手の及ばぬところに身を置いてしまうことを、確かに好まなかつたからであつた。それゆえ、彼はきいてみた。

「それは公に認められた地位なんですか？」

「いや」と、Kの言葉で先の話が腰を折られたように、画家は手短かに言つた。しかしKは、相手を黙らせてしまうことを望まず、言つた。

「で、そういうような認められていない地位のほうが認められているのよりも有力なことが、往々ありますね」

「それはまさしく私の場合がそうですね」と、画家は額に皺しわを寄せてうなずいた。

「私は昨日工場主とあなたの事件について話しましたが、あの方
が私に、あなたのことをお助けする気はあるか、とききましたの
で、『その方は一度私のところへ来ていただくといいんですが』
と、お答えしました。で、あなたがこんなに早く来てくださいって、

うれしいことです。事柄はあなたをたいへん悲しませているようですが、それについては私ももちろん不思議とは思いません。ま
ず外套でもお脱ぎになつたらどうですか？」

Kはただほんの少しだけここにとどまるつもりだつたが、画家のこのすすめは大いにありがたかつた。部屋の空気が彼には次第にうつとうしくなつてきたが、もうこれまでに何回か不思議に思
いながら、部屋の隅すみにある小さな、疑いもなく火のはいつていな
い鉄ストーヴを見ていたので、部屋の中のこの蒸し暑さは解げしか
ねた。Kが外套を脱ぎ、上着のボタンもはずしていると、画家は弁解しながら言つた。

「私は暖かくなけりやいけないんです。だがここはたいへん気持

がよろしいでしよう？ 部屋はこの点、実に場所がいいんです」

それに対してもKは何も言わなかつたが、彼を不快にしたのはほんとうは暖かさではなく、むしろこもつた、息苦しくさせられるような空気のためであり、部屋はずつと前から換気されていないにちがいなかつた。Kのこの気分のわるさは、画家が自分ではこの部屋で唯一の椅子にすわつて画架の前に構えていながら、Kにはベッドの上にすわるようすすめたので、いよいよ強まつたのだった。そればかりではなく、Kがベッドのほんの端にすわつている理由を画家は誤解したらしく、かえつてKに、どうかお楽にしてくださいとすすめ、Kが^{ちゅうちょ}躊躇しているので自分で出かけ、Kをベッドと布団のほうに深く押しこんだ。それからまた自分の

椅子にもどり、ついに最初の具体的な質問を切り出したが、それはKにはほかのすべてのこと忘れさせたのだつた。

「あなたは潔白ですか？」と、彼はきいた。

「そうです」と、Kは言つた。

この質問への返事はKを心からよろこばせた。ことにそれが、一人の私人に対して、したがつてなんらの責任もなく言えたためであつた。まだ誰も彼にこんなにあけすけにたずねたものはなかつた。このよろこびを味わいつくすために、彼は言葉を足した。

「私はまったく潔白なのです」

「そうですか」と、画家は言い、頭を垂れて、考えこむ面持だつた。突然また頭をもたげると、言つた。

「もし潔白なら、事はきわめて簡単です」

Kの眼差は曇つた。この裁判所に信用が厚いと称する男は、無邪気な子供みたいなことを言う、と思つた。

「私が潔白だからといって、事は簡単にはならないでしよう」と、Kは言つた。それでも微笑せずにはおられず、ゆっくりと頭を振つた。「裁判所が没頭しているたくさんの細かいことと関係がありますからね。ところで結局、本来は全然何もなかつたはずなのに、どこからか大きな罪が出てくるのですよ」

「そう、そう、確かに」と、まるでKが自分の考へてゐることに要らぬ邪魔をするとでもいうように、画家は言つた。

「でもあなたは潔白ですね？」

「そりやそうですよ」と、Kが言つた。

「それがいちばん大切なことですからね」と、画家が言つた。

反駁^{はんぱく}などには影響される男でなかつた。ただ、いかにも断固としてはいるものの、確信からそう言うのか、あるいはただ冷淡な気持から言うのがが、どうもはつきりとしなかつた。Kはまずそのことを確かめようとし、そのため言つた。

「あなたは確かに裁判所のことを私よりずつとよくご存じですし、私は、もちろんさまざまの人からですが、それについて聞いたこと以上にはほとんど知つていません。だがすべての人々の言うことは、軽率な告訴などは提起されないし、裁判所は一度告訴したことなると、被告の罪について固く確信し、この確信を取除くこと

は容易でない、ということではみな一致していますよ」

「容易でないですって？」と、画家はきき返し、片手を高く振つた。

「いやけつして裁判所はそういう確信を取除かれませんね。この部屋で一枚のキャンバスの上にすべての裁判官を並べて描き、あなたがそのキャンバスの前で自分を弁護されたほうが、現実の裁判所でよりもずっと効果をあげられますよ」

「そうでしょう」と、Kはつぶやき、自分は画家をただちよつと探つてみようとしたのだつたということを忘れていた。

扉の向うでは、また一人の少女がききはじめた。

「ティトレリさん、お客様はすぐ帰らないの？」

「みんな黙つていな！」と、画家は扉のほうに向つて叫んだ。

「お客様とお話中だつていうことがわからないのか？」

しかし、少女はこの返事では満足せず、またきいた。

「おじさん、その人のこと描くのか？」そして画家が答えなかつた

ので、さらに言つた。「ねえ、描かないでよ、そんないやなやつ」

それに続いて、はつきりとはしない、賛成するような呼びが入

り乱れて聞えた。画家は扉に飛んでゆき、ほんの少しだけ隙間すきまを開けた——嘆願するように差出された、合わさつた少女たちの

手が見えた——言つた。

「静かにしないと、みんな階段から投げおろしてやるぞ。この階段にすわって、おとなしくしていなさい」

おそらく子供たちはすぐには聞かなかつたようで、画家は命令しなければならなかつた。

「階段にすわるんだ！」

するとやつと、静かになつた。

「ごめんなさい」と、Kのところへまたもどつてくると、画家は言つた。

Kは扉のほうにはほとんど向かず、相手が自分を守ろうと思つているのか、またどうやつて守るつもりなのか、完全に画家にまかせていた。彼は今度もほとんど身動きせずにいたが、画家が彼のほうに身をかがめ、室外には聞かれないようにして彼の耳にささやいた。

「この女の子たちも裁判所に属しているんです」

「なんですか？」と、Kはきき、頭をわきに退けて、画家をじつと見つめた。ところが画家のほうはまた椅子にすわり、半ば冗談、半ば説明のために、言つた。

「まつたくすべてが裁判所に属していますからねえ」

「そいつはまだ気がつきませんでした」と、Kは手短かに言つた。画家の一般的な言い方たは、少女たちについてのヒントから不安な点をいつさい取除いていた。それでもKはしばらく扉のほうを見ていたが、その向うでは子供たちは今度は静かにして階段にすわっていた。ただ一人だけが、角材のあいだの裂目から一本の藁わらを突き出して、ゆっくりと上下に動かしていた。

「裁判所についての大要をまだご存じないようですね」と、画家は言い、両脚を大きくひろげ、爪先で床の上をぱちっと打つた。
「でもあなたは潔白なんだから、そんなものは必要としないでしょ。私ひとりであなたを助け出しますよ」

「どうやろうとおつしやるんですか?」と、Kがきいた。「どんな論拠も裁判所にはむだだ、とほんの少し前ご自分で言われたばかりじやありませんか」

「裁判所に持ち出されるような論拠だけがだめなんですよ」と、画家は言い、Kが微妙なある相違に気づいていないというように、人差指を上げた。「でも、この点について公の裁判所の背後、しがつて評議室や廊下や、あるいはたとえばこのアトリエで試み

ることは、それとは事情が別なんです」

画家の今言つたことは、Kにはもはやそれほど信じられぬことのようには思われず、それはむしろ、Kがほかの人々からも聞いたことと多くの一致を示していた。まつたく、大いに有望でさえあつた。裁判官がほんとうに、弁護士が言つたように容易に個人的な関係によつて動かされるものならば、虚榮心の強い裁判官たちに対する画家の関係は特に重要であり、いずれにせよ過小に評価はできなかつた。それからこの画家は、Kが次第に自分の身のまわりに集めた一群の援助者のうちでも、大いに板についていた。一度銀行で彼の組織力がほめられたことがあつたが、まつたくひとりになつて自分だけに頼らなければならぬ今では、それを極たよ

度にためしてみる絶好の機会を示すものだつた。画家は、自分の説明がKに与えた効果を観察していたが、やがて少し不安らしい様子で言つた。

「私がほとんど法律家のようにお話しすることを変にお思いじやありませんか？ 私がこんなに影響を受けているのは、裁判所の方々としょっちゅうお付合いをしているからなんです。もちろん、その利益もたくさんありますが、芸術的高揚は大部分消えてしまいますね」

「いつたいどうやつて初めて裁判官たちと結びつくようになられたのです？」と、Kは言つたが、画家をすつかり自分の仕事で使う前に、まずその信用を獲得しようと思つたのだつた。

「非常に簡単なんですよ」と、画家は言つた。「この結びつきは親譲りなんです。私の父がすでに裁判所の画家でした。それは、代から代へと伝えられてゆく地位なんです。このために新しい人間は使うことができません。すなわち、さまざまな役人の階級を描くためには、非常に多種多様な、そして何よりもまず秘密な規則が立てられているため、それらの規則はおよそある一定の家以外にはわかっていないのです。たとえば、あそこの引出しの中に父の手記がありますが、私は誰にも見せません。ところがそれを知つている者だけが、裁判官を描くことができるのです。けれど、私がこの手記をなくしても、私だけが自分の頭に畳んでいるたくさんの方の規則がありますので、誰も私の地位を私と争うことはでき

やしません。どんな裁判官も、昔の偉大な裁判官が描かれている
ように描かれたいでして、それができるのは私だけです

「それは羨ましいかぎりですね」と、自分の銀行における地位を
考えたKは、言つた。「ではあなたの地位は微動もしないのです
ね？」

「そうです、微動もしません」と、画家は言い、誇らしげに肩を
そびやかした。「それだからこそ、訴訟にひつかかっている哀れ
な男をそこここで助けてやろうという氣にもなれるんですよ」

「で、どうやつてそれができるんですか?」と、画家が今哀れな
男と言つたのは自分ではないかのように、Kは言つた。しかし画
家は、話を脇道にそらさせてはいないで、言つた。

「たとえばあなたの場合なら、あなたは完全に潔白なんだから、次のようなことをやってみようと思います」

自分が潔白であることを繰返して言われることが、Kにはすつかりわざらわしくなっていた。こんなことを言つて画家は訴訟がうまく片づくことを自分の援助の前提にしているが、もちろんそんなことでは援助も崩れてしまうだろうと、Kにはときどき思われるのだった。しかしこういう疑念があるにもかかわらず、Kは自分を抑おさえて、画家の話すのをさえぎらなかつた。画家の援助をはねつけるつもりはなく、援助してもらうことに決心していたのだつたが、またこの援助のほうが弁護士のよりも危なげが少ないようと思われた。このほうが悪気がなく、あけすけであるだけに、

はるかに好ましかつた。

画家は椅子をベッドに近寄せて、声を低めて語り続けた。

「どんな種類の釈放を望まれるのか、まずお聞きしておくのをす
っかり忘れていました。三つの可能性があつて、ほんとうの無罪、
外見上の無罪、それから引延ばし、となっています。もちろん、
ほんとうの無罪がいちばんいいわけですが、ただ私にはこの種の
解決をやれる力は少しもないのです。私の考えでは、ほんとうの
無罪に持つてゆける力のある人は、およそ一人もいないと思いま
す。この場合に決定力を持つているのはおそらく被告が潔白なこ
とでしよう。あなたは潔白なのですから、おひとりであなたの潔
白なことを頼りにすることも、実際できるわけです。それならあ

なたは私も^い要らなければ、ほかのなんらの援助も要らないことになりますね」

この整然たる言いかたは、初めはKを^{あぜん}畳然とさせたが、次に彼は画家と同様声を低めて言つた。

「あなたは矛盾に陥つておられる、と思^いますね」

「なぜですか？」と、画家は我慢強くきき、にやにやしながら椅子にもたれかかつた。この薄笑いがKに、画家の言葉の中にではなく、裁判手続きそのものの中に矛盾を見いだすことに今や取りかかっているのだ、という感情をいだかせた。それでもたじろいでおらずに、言つた。

「あなたは初めには、裁判所にはどんな論拠も歯がたたないと言

われ、次に、ただしこれは公開の裁判の場合だけのこと。裏には
裏があるのだ、と言われたが、今度は、潔白な者は裁判所に対し
てなんらの援助も要らない、とさえ言われるのです。この中にす
でに矛盾があります。そのうえ、裁判官には個人的に働きかける
ことができる、と前には言われたのに、今度は前言を否定して、
あなたの言われるほんとうの無罪はどうてい個人的な働きかけで
手に入れることができないものだ、と言つておられる。その点に
第二の矛盾があります」

「そんな矛盾はたやすく説明できますよ」と、画家が言つた。

「ここでは二つのちがつた事柄が話に出てるので、法律に書い
てあることと、私が個人的に経験したことと、それを混同しちゃ

いけませんよ。法律には、もつとも私は読んだことはありませんが、もちろん一面では、罪のないものは無罪とされる、と書いてあるが、他面、裁判官は手を使えば動かせる、とは書いてないでしよう。ところが私はその全然反対を経験したのでした。ほんとうの無罪宣告なんかひとつも知らないが、裁判官を動かした例はたくさん知っています。もちろん、私の知っている事件には無罪の場合がなかつたのだ、ということもあります。でもそんなことはありそうもないことじやありませんか？　あんなにたくさんの事件にただのひとつも無罪もないものでしょうか？　すでに子供のときに、父親が家で訴訟のことを話すのを聞きましたし、父のアトリエにやつてくる裁判官たちも、裁判のことを話したもの

です。私たちのサークルでは、およそほかのことなんか話さないのです。自分で裁判所に行く機会があるようになるとすぐ、私はそういう機会をいつも利用しつくし、無数の訴訟を重要な段階で傍聴し、眼で見ることのできるかぎりはそれを追つかけてきました。それなのに——私は告白しなければなりませんが——ほんとうの無罪宣告なんか出会つたためしがないのです

「ただの一度も無罪宣告に出会つたことがないというわけですね」と、自分自身と自分の希望とに言い聞かすように、Kは言つた。

「ですがそのことは、裁判所について私がすでにいだいていた考えを裏書きするものです。ですから裁判所は、この面からも無用なわけですね。ただ一人の首斬り人がいれば裁判所全体のかわり

をすることでしょうよ」

「そう一般的な言い方をしちゃいけません」と、画家は不満げに言つた。「私はただ自分の経験のことを言つたんですから」

「でもそれで十分ですよ」と、Kは言つた。「それとも以前に無罪宣告があつたことを聞かれたことがあるんですか？」

「そういう無罪宣告は」と、画家は答えた。「もちろんあつたはずです。ただ、それを確かめることがむずかしいだけです。裁判所の終局の決定は公開されませんし、それは裁判官にも近づきがたいものなので、そのため昔の判例についてはただ伝説が残つてゐるだけなんです。こうした伝説はもちろんほんとうの無罪宣告を多数含んでさえて、信じることはできましようが、証明する

ことはできないのです。それでも全然無視することはできないのです。ある種の真実は確かに含んでいますし、またたいへん美しいので、私自身も、このような伝説を内容としているいくつかの絵を描いたようなわけです」

「单なる伝説じや私の意見を変えられませんね」と、Kは言つた。
「きっと裁判所の前に出たら、こういう伝説を引合いに出すわけにもいきますまいしね？」

画家は笑つた。

「そう、それはできませんね」と、彼は言つた。

「それじや、そんなことについてしゃべるのも無益なわけです」と、Kは言い、画家の意見がありそうもないことだと思われ、ま

たほかの意見と矛盾している場合でも、まずしばらくはみな受入れておこうと思った。画家が言つたことすべてを真相かどうか確かめたり、あるいは全然反駁はんぱくし去る時間は彼にはなかつたし、たとい決定的ではないにせよなんらかのしかたで自分を援助するよう画家を動かしたことで、上々のことだつた。そこで彼は言った。

「それじゃほんとうの無罪宣告のことは除外するとして、もう二つの別な可能性のことを話すとしましょう」

「外見上の無罪宣告と引延ばし作戦とです。それだけが問題になりますね」と、画家は言つた。「だが、その話をする前に、上着をお脱ぎになりませんか？ きっとお暑いでしょう」

「そうですね」と、Kは言つたが、これまで画家の説明だけにしか気を配つていなかつたのに、今は暑さを思い出させたため、ひどい汗が額の上ににじみ出てきた。「ほとんど耐えられませんね」

画家は、いかにもKの不快がよくわかるというようにうなづいた。

「窓を開けてはいけませんか」と、Kがきいた。

「ダメです」と、画家が言つた。「ただガラス板をしつかりはめてあるだけですから、あけられないのです」

Kはそこでやつと、画家が自分が突然窓ぎわに行き、窓を開け放つという場合のこと今までずっと期待していたのだ、という

ことに気がついた。実は、霧でも口いっぱいに吸いこもうと待ちかまえていたのだつた。この部屋で空氣から完全に遮断しゃだんされているという氣持が、彼に眩暈めまいを覚えさせた。自分のそばの羽根布団の上を軽く手でたたき、弱々しそうな声で言つた。

「これじやまつたく気分もわるいし、健康にもわるいでしようね」「いや、そんなことはありません」と、画家は自分の窓を弁護するためになつた。「窓があかないため、ただのガラス一枚だけなんですが、この部屋では二重窓よりもよく暖かさが保たれます。たいして必要じやないんですが、換氣をしようと思えば、材木の隙間のどこからでも空氣がはいってきますんで、扉をひとつか、あるいは両方でもあければいいんです」

Kはこの説明で少し安心させられ、画家の言う第二の扉はどこにあるかと、あたりを見まわした。画家はその有様に気づき、言った。

「扉はあなたの後ろにありますが、ベッドでふきがなけりやならなかつたんです」

今やつとKは壁の小さな扉を見た。

「この部屋ではすべてがアトリエにしちゃあんまり小さすぎるんです」と、Kの非難に先まわりしようとするよう、画家が言った。

「できるだけうまく配置をしなけりやならなかつたんです。扉の前にベッドじや、もちろんたいへんまずい場所にあるわけです。

たとえば、私が今描いている裁判官なども、いつもベッドのそばの扉からはいつてきます。そしてこの扉の鍵も渡してありますので、我が家にいなくとも、このアトリエにはいつて私を待てるわけです。ところが彼は、たいてい私がまだ寝ているうちに朝早くやつてくるんです。ベッドのそばの扉があけば、もちろんぐつすり寝込んでいても起されてしましますよ。朝早く私のベッドに乗る裁判官を迎えるときの私の悪口ざんまい三昧をお聞きになれば、あなたは裁判官に対する畏敬いけいの念などなくしてしまうことでしょう。もちろん鍵を取上げることはできましようが、そうすりやいつそ不快な目にあうだけです。なにしろこの部屋じや、どんな扉もほんの少し手を下すだけでわけなく蝶番ちょうづがいからはずせますから

ね」

この話のあいだじゅう、上着を脱ぐべきかどうか、Kは考えていたが、もしそうしなければ、この部屋にこれ以上とどまることはできない、とどうとう見てとつたので、上着を脱いだが、用談が終つたらまた着ることができるように、膝ひざの上にのせた。上着を脱ぐやいなや、少女たちの一人が叫んだ。

「上着を脱いじやつたわよ！」そして、この見ものを自分でも見ようとして、子供たちはみな隙間にひしめき集まつた。

「子供たちはつまり」と、画家が言つた。「私があなたのこと描くので、あなたが上着を脱がれたのだ、と思いつこんでいるんです」

「そうですか」と、Kは言つたが、腕まくりになつてすわつているものの、前よりたいして気持がよくならないので、相手の言葉をほとんどおもしろいとも思わなかつた。まるでぶつぶつ言うよう、彼は言つた。

「ほかの二つの可能性というのはなんでしたつけね？」

その言いかたをまたもう忘れていたのだつた。

「外見上の無罪宣告と引延ばし作戦とです」と、画家は言つた。

「どちらを選ぶかは、あなた次第です。いずれにせよ私が援助すればできることですが、もちろん骨が折れぬわけじやありません。この点のちがいというのは、外見上の無罪宣告のほうは一時に集中した努力が必要ですし、引延ばしのほうはずつと少ないが、長

く続く努力が必要だ、ということにあります。そこでまず外見上の無罪宣告のほうです。あなたがこれを有望みと言われるなら、私は全紙一枚にあなたの潔白なるゆえんの証明書をあげます。こういう証明書の型は父から伝えられていて、全然文句をつけられないものです。ところでこの証明書を持つて、私の知つている裁判官のところをまわり歩くんです。そこでたとえば、今描いている裁判官が今晚モデルになりにここへ来たときに、その証明書を見せてやる、ということから始めるんです。私は彼にその証明書を見せ、あなたが無罪だということを言明し、あなたの無罪を保証してやります。だがそいつは、単に外面的ではなくて、ほんとうの、拘束力のある保証なんですよ」

画家の眼つきの中には、Kが自分にこんな保証をするという重荷を負わせようとしているのだ、と言わんばかりの非難めいたものが浮んでいた。

「まつたく大いにありがたいことです」と、Kは言つた。「で、裁判官があなたを信じても、私にはほんとうの無罪を宣告してくれないんじやありませんか？」

「すでに申しましたように」と、画家は答えた。「もとより、どの裁判官も私を信じてくれるかどうかはまつたく確実なわけではなく、たとえば多くの裁判官は、あなたご自身をお連れすることを要求するでしょう。そうしたらあなたには一度ごいっしょに行つていただかなければなりません。もちろんこうなれば事はすでに

半ばはうまくいったようなものです。ことに私はもちろん、問題の裁判官のところでどう振舞わなければならぬかっていうようなことは、前もつて詳しくお教えしておきますからね。それよりまずいのは、——これも起るかもしないんですけど——私のことを初めから受けつけてくれない裁判官たちの場合です。こういう連中は、もちろん私はいろいろやつてはみますが、あきらめることで、なに、そうやっても大丈夫なんです。なにしろ個々の裁判官が事を決定するわけじやありませんからね。さてこの証明書に十分な数の裁判官の署名をもらつたら、この証明書を携えて、まさにあなたの訴訟をやつている裁判官のところへ行きます。おそらくその署名ももらえましようが、そうなれば万事はそれまでよ

り少しは早く運んでゆくというものです。だがこうなればもう一般にはたいして妨害もなく、被告たちにとつていちばん確信の持てる時期なんです。変ではありますがほんとうのところ、人々はこの時期のほうが無罪宣告の後^{あと}よりもいつそう確信が持てるものです。今やもう特別の骨折りなんか要りません。裁判官は証明書に相当数の裁判官たちの保証を得たわけですし、心配なくあなたに無罪を宣告できますし、もちろんさまざまな形式を踏んでからのことですが、私やほかの知人たちにもありがたいことに、疑いもなく無罪宣告をすることでしょう。ところであなたは裁判所を出て、自由というわけです」

「そうなれば自由というわけですね」と、Kは躊躇しながら

言つた。

「そうです」と、画家は言つた。「しかしただ外見上だけ自由、あるいはいつそういうまく言えば、しばらくのあいだの自由なんです。つまり、私の知人であるいちばん下のほうの裁判官たちは、最終的に無罪を宣告する権限がなく、そういう権限はただいちばん上の、あなたにも私にも、私たちすべてにとつてまつたく手の届かない裁判所だけが握つているのです。そこがどういうものかは、私たちにはわかりませんし、ついでに申しておけば、知ろうとも思わないんです。そこで、告訴から解放する大きな権限は私たちの裁判官も持つていませんが、彼らは確かに、告訴からゆるめる権限は持つているんです。すなわち、あなたがこういうふう

にして無罪を宣告されると、あなたは一時告訴から離れますが、告訴はその後もあなたの上に漂つていて、上からの命令があり次第、すぐに効力を発生するんです。私は裁判所と非常に深い結びつきにありますから、またあなたに申上げられます。裁判所事務局に対する規定中には、ほんとうの無罪宣告と外見上のとの区別は、純粹に外面的に示されているだけです。ほんとうの無罪宣告の場合には、訴訟文書は完全に廃棄され、手続きからすっかり姿を消し、告訴だけでなく、訴訟も、無罪宣告も取消され、いつさいが取消されるのです。外見上の無罪宣告となるのと別です。

文書について言うと、無罪の証明、無罪の宣告、そして無罪宣告の理由についていよいよ文書がふえるという以外の変化は起らな

いのです。ところで文書は依然として手続き中ですから、裁判所事務局間の絶え間のない交渉によつて要求されるままに上級各裁判所に送りこまれ、下級裁判所に差戻しになり、大小の振れ、長短の滯りによつて上下に揺れるわけです。これらの道程は予測がつきません。外側から見ると、ときどきは、いつさいがずつと前から忘れられ、文書は紛失し、無罪宣告は完全なもののように見えます。だが、事情に明るい人間ならば、そんなことは信じません。文書は紛失したわけではなく、裁判所が忘れるなどありえません、いつか——誰もそれを期待しないわけですが——裁判官の誰かが文書を注意深く手に取り、この事件においては告訴がまだ生きていることを認め、即時逮捕を手配します。ここで私は、

外見上の無罪宣告と新しい逮捕とのあいだには長時間が経過することを認めただけでして、それはありうることで、私もそういう場合をいろいろ知つてはおりますが、無罪を宣告された者が裁判所から家に帰つてみると、彼をまた逮捕するという命令を受けた人間が家で待つてゐる、ということも同じようにありうることなんです。こうなればもちろん、自由な生活は終りです」「そして訴訟は改めて始まるんですか？」と、Kはほとんど信じられないできいた。

「もちろん」と、画家は言つた。「訴訟は改めて始まるんですが、また前と同様に外見上の無罪宣告を受ける可能性があるわけです。また全力を集中すべきで、けつして降参してはいけません」

最後の言葉を画家が言つたのは、おそらく、少しげつそりしてしまつたKが彼に与えた印象を考慮に入れてのことであつた。

「ですが」と、画家が何か暴露することに先まわりするかのように、Kはきいた。「第二の無罪宣告を受けることは、最初の場合のよりもむずかしいんじやありませんか？」

「この点では」と、画家が答えた。「なんともはつきりしたことは言えません。あなたはきっと、裁判官たちが第二の逮捕といふんで、被告のために判決でなんらかの影響を受けるのではないか、とおつしやるんでしょう？　そういうことはありません。裁判官たちはすでに最初の無罪宣告の際にこの逮捕を予見していたのです。ですからこういう状態はほとんど影響力を持つことはあります。

せん。しかし、そのほかの無数の理由から、裁判官たちの気持や事件に対する法律的判断が別になつてゐる場合もありますし、第二の無罪宣告のための努力は、変化した情況に適合させられなければなりませんし、一般的に言つて、最初の無罪宣告の前と同じように力を尽してやられなくてはなりません」

「でも、この第二の無罪宣告もまた、終りというわけじやないんでしようね」と、Kは言い、それを拒むかのように頭をめぐらした。

「もちろんそうじやありません」と、画家は言つた。「第二の無罪宣告には第三の逮捕が続き、第三の無罪宣告の次には第四の逮捕と続いてゆきます。そのことは外見上の無罪宣告という言葉の

中に含まれているわけです」

Kは黙っていた。

「外見上の無罪宣告は、あなたには明らかに有利でないよう見えますね」と、画家が言つた。「おそらくあなたには引延ばしのほうがいつそうよくあてはまるでしょう。引延ばしなるもののは本質を説明してさしあげましようか?」

Kはうなずいた。画家はゆつたりと椅子によりかかり、寝巻のシャツをはだけ、片手をその中に差しこんで、それで胸と脇腹わきばらとをなでていた。

「引延ばしというのは」と、画家は言い、完全に適切な説明を捜しているようにしばらく前方を見つめるのだつた。「引延ばしと

いうのは、訴訟が引続いていちばん低い訴訟段階に引留められることを言うのです。これを行うまくやるには、被告と援助者、特に援助者のほうが、裁判所と絶えず個人的な接触を保つことが必要です。繰返して申上げますが、この場合には外見上の無罪宣告を受けるときのような労力は必要ではありませんが、もつとずっと注意力が必要です。訴訟を絶えず眼から離さぬようにし、担当裁判官のところへ規則的に時間を隔て、またさらに特別なことのあるときには出向き、こういうふうにして親しみを持たせるようにならなければなりません。裁判官と個人的に知り合っていなければ、知合いの裁判官を通じて圧力をかけてやるとともに、そちらからといって直接の話し合いをあきらめてしまわないことです。

この点を怠らなければ、訴訟は最初の段階を超えて進むことはないということを、十分確實に認めることができます。訴訟は終るわけではありませんが、被告は自由な場合とほとんど同じように有罪判決を受ける心配がありません。外見上の無罪宣告に比べて、引延ばしには、被告の将来がずっと安定しているという長所があります。つまり突然の逮捕に驚かされるというようなことがなく、ほかの形勢がきわめて不利のような場合であっても、外見上の無罪宣告を受ける場合につきもののさまざまな努力や焦慮を引受けねばならないと心配する必要はありません。もちろん引延ばしも被告にとつて過小には考えられないところのある種の短所を持つています。こう言つても、被告がけつして自由にならないという

ことを考へてゐるのではありません。それは外見上の無罪宣告の場合にもほんとうのところでは同じだからです。私の言ふのは、別な短所なのです。少なくとも外見的な理由がなければ、訴訟は停滞することはできません。それゆえ、訴訟において外面に向つて何事かが起らなくてはなりません。それでときどきさまざまな指令が発せられなくてはなりませんし、被告が尋問され、審理が行われるとか、そのほかのことがなされなければならぬんです。そこで訴訟はしよつちゅう、人為的に閉じこめられた小さな範囲で引きまわされなければなりません。これはもちろん、被告にある不快を伴うものではあります、それもまたあなたはあまり思ひすごしされてはいけません。実のところ万事はただ外見的なも

のでして、たとえば尋問もまつたく簡単なものにすぎず、出かけてゆく暇や気持がなければ、断わることもできますし、ある裁判官たちの場合には、長い時期にわたつてのさまざまな指示をあらかじめ相談してきめることもでき、本質的にはただ、被告なんだからときどき裁判官のところへ出向かなければならぬ、ということだけのことです」

最後の言葉がまだ語られているうちに、Kは上着を腕にかけて、立ち上がった。

「立っちゃつたわよ！」と、すぐさま扉の外で叫び声がした。

「もうお帰りですか？」と、自分も立ち上がつた画家が言つた。

「きっと空氣のせいで部屋にはいたたまれなくなられたんでしょ

う。たいへん残念なことです。まだたくさんお話しせねばならなかつたのに。もつと手短かに申上げねばならないところでした。でも、おそらくおわかりになつていただけたものと思います」

「ええ、そうですとも」と、Kは言つたが、聞くために無理にしていた努力で、頭が痛かつた。こう保証してやつたのに、画家は、帰路のKに慰めを与えてやろうとするよう、これまで言つたことをみなもう一度取りまとめるため、言うのだつた。

「二つの方法には、被告の有罪判決を妨げるという共通点があります」

「しかし、ほんとうの無罪宣告というのも妨げてしましますね」と、自分がそれに気づいたことを恥じるように、Kは低い声で言

つた。

「あなたは事の核心を握られました」と、画家は早口に言つた。

Kは外套がいとうに手をかけたが、着る決心がつきかねていた。みんな引つつかんで、新鮮な空気の中へ駆けてゆくことがいちばんしつく思われた。子供は早まつて、あのおじさんが着物を着る、と互いに叫び合っていたけれども、Kに着物を着させるにはいたらなかつた。Kの気持をなんとか解釈することが画家には大切だったので、言つた。

「私の提案についてまだ決心されていらっしゃらないようにお見受けします。それはごもつともだと思います。私も、すぐ決心することはなさらぬようにとさえ、おすすめしたのですからね。長

所と短所とが紙一重なんです。万事詳しく見積つてみなければなりません。もちろんあまり時間を失うことはできませんが」「またすぐまいります」と、Kは言い、急に決心して上着を着、外套を肩の上にひっかけ、扉のほうに急いだが、扉の後ろでは子供たちが叫びはじめた。Kには、叫んでいる少女たちが扉を通じて見えるような気がした。

「だがお約束は守つていただきます」と、Kを送つてついては来なかつたが、画家は言つた。「でないと、自分から伺いに銀行に行きますよ」

「どうか扉を開けてください」と、Kは言い、把手を引つ張つたが、手ごたえを感じたので、少女たちが外でしつかと押えている

のがわかつた。

「子供たちがうるさいですが、いいですか？」と、画家はきいた。
「むしろこの出口をお使いになつたらどうですか」と、ベッドの
後ろの扉を示した。

Kは合点とばかりベッドまで飛んでもどつてきた。ところがそ
この扉をあけもしないで、画家はベッドの下にもぐりこみ、下か
らきいた。

「もうちよつとお待ちください。絵をひとつ見ていただけません
か？ なんならあなたにお譲りしてもいいですよ」

Kは、無愛想にもできない、と思つた。なにしろ画家は自分の
ことを引受けてくれ、今後も援助すると約束もしてくれたのだが、

自分が忘れっぽいため援助に対する報酬のことをも全然言つてはなかつたし、無下には断われなかつた。そこで、アトリエから出ようと落着かずにはうずうずしてはいたが、絵を見せてもらうことにした。画家はベッドの下から一束の額縁のない絵を取出したが、ひどく埃ほこりが積つていて、画家がいちばん上の絵から埃を吹き払おうとすると、しばらくは埃が眼の前にもうもうと立つて息もつけなかつた。

「荒野の風景です」と、画家は言い、Kにその絵を手渡した。二本の弱々しげな樹が描かれていて、はるかな距離をおいて黒ずんだ草の中に立つていた。背景は多彩な日没の光景だった。

「いいですね」と、Kは言つた。「いただきましよう」

Kは考えもなしにひどく手短かに言つたが、画家がその言葉を別にわるくもとらず、二番目の絵を床から取上げたので、ほつとしたのだった。

「これはその絵とは反対傾向の作品です」と、画家が言つた。反対傾向の作品のつもりだつたのだろうが、最初の絵に比べて少しのちがいも認められず、ここには樹々があり、ここには草があり、そこには日没がある、というようなものだつた。だがKにはそんなことはどうでもよかつた。

「美しい風景ですね」と、彼は言つた。「両方いただき、事務室にかけましよう」

「モチーフが気に入られたようですね」と、画家は言い、第三の

絵を持ち出し、「幸いなことに、ここにも同じような絵があります」

ところが同じようなどこでなく、むしろ完全に同じ荒野の風景だった。画家は、古い絵を売るこの機会を存分に利用したのだった。

「これもいただきましょう」と、Kは言つた。「三枚でいかほどでしょう？」

「ま、その話はこの次にしましよう」と、画家は言つた。「お急ぎのようですし、私たちはどうせ連絡があるわけですからね。ともかく、絵が気に入られてうれしいことです。ここのある絵をみな差上げましょ。みな荒野の風景ばかりですが、もうこれ

までにたくさん荒野の風景を描きました。多くの人は、陰鬱いんうつ

なのでこんな絵はいやだ、と拒ますが、でもほかの人々には、あなたもその一人ですが、その陰鬱いんうつなのをこそ好かれます

しかし、Kは乞食画家の職業体験などには全然興味がなかつた。「みんな包んでください！」と、画家の話をさえぎつて、彼は叫んだ。「明日小使が来て、持つていきますから」

「いや、それにはおよびません」と、画家が言つた。「おそらく、すぐあなたと行つてくれる運び手をご用だてできるでしょう」

そしてついにベッドの上に身をかがめると、扉を開いた。

「ご遠慮なくベッドの上にお乗りください」と、画家は言つた。「ここに来る人は誰でもそうするんですから」

こうすすめられなくともKも遠慮をするつもりはなく、片足を羽根布団の真ん中に置いていたが、あいた扉を通して向うを見て、足をまた引っこめた。

「あれはなんですか？」と、彼は画家にきいた。

「何を驚いておられるんです？」と、画家のほうもKの有様に驚いて、きいた。「あれは裁判所事務局ですよ。ここに裁判所事務局があることをご存じなかつたんですね？」裁判所事務局はほとんどどの屋根裏にもありますから、どうしてここにだけあつてはならないということがありましょ？ 私のアトリエもほんとうは裁判所事務局のものなんですが、裁判所が私に用だしてくれているんです」

ここに裁判所事務局を見つけたことにKはたいして驚きはしなかつたが、主として自分自身、自分の迂闊さに驚いたのだつた。しよつちゅう心構えをしていて、けつして驚かされたりしないで、左手には裁判官が自分のすぐそばに立つてゐるのに、ぼんやり右手をながめたりしないというのが、被告の態度の根本原則だ、と彼は思つていたが、——まさにこの根本原則にしよつちゅう抵触するのだった。彼の前には長い廊下が延びており、そこから風が吹いてくるが、それに比べるとアトリエの空気のほうがまだしさわやかに思われた。ベンチが廊下の両側に置かれ、Kの関係している事務局の待合室とそつくりそのまま同じだつた。事務局の配置には細かな規定があるようと思われた。今のところここでは、

訴訟当事者たちの往来はたいしてしげくはなかつた。一人の男がベンチの上で半ば横になり、顔をベンチの上に置いた両腕に埋め、眠つてゐるらしかつた。もう一人の男が廊下の奥の薄暗がりの中に立つていた。Kはベッドを乗り越えたが、画家は絵を持つて彼に続いた。間もなく一人の廷^{ていてい}丁に出会つたが、——Kは今では、私服の普通のボタンに混じつてついている金ボタンですぐどんな廷丁でもそれとわかるのだつた。——画家はその男に、絵を持つてこの方にお供するよう、と頼んだ。歩いてゆくと、Kは次第に頭がぐらぐらしてきて、ハンカチを口に押し当てていた。出口のすぐそばまで来たとき、少女たちが彼らに向つて殺到してきたが、これで見るとこの連中にかかるはやはりKも免れることができ

できなかつたのだつた。子供たちは明らかにアトリエの第二の扉があけられたのを見て、こちら側からはいりこもうとしてまわり道をしたのだつた。

「もうお供できませんよ！」と、子供たちに押しつけられて笑いながら、画家が叫んだ。

「さようなら！　あまり長く考えこんでいないようにしてくださ
い！」

Kは二度と画家のほうを振向かなかつた。

小路に出て、出会つた最初の馬車に乗つた。廷丁を追い払うことが彼には問題だつた。普通ならばおそらく誰にも目だつような男ではないが、廷丁の金ボタンが絶えず眼にはいつてたまらなか

つた。いかにも職務大事といわんばかりに、廷丁は御者台にすわろうとした。だがKは彼を追い払つておろした。Kが銀行の前に着いたときは、正午はもうとつくに過ぎていた。絵は車の中にほつぽらかしにしたかつたが、いつかの機会に画家に向つて、この絵を持つて帰れと言う必要に迫られることがあろうか、と思つた。そこでそれを事務室に持ちこませ、少なくともここ数日は支店長代理の眼を逃れることができるよう、机の一番下の引出しに鍵をかけて入れた。

第八章 商人ブロツク・弁護士の解約

ついにKは、弁護士に自分の代理をさせることをやめる決心をした。こういうふうに振舞うことが果して正しいだろうか、という疑念は根絶できなかつたが、それが必要であるという確信が勝ちを占めた。弁護士のところへ行こうという日になつて、その决心は彼から仕事する能力を大いに奪い、ことに遅い仕事の運びのため、きわめて遅くまで事務室に居残らなければならず、やつと弁護士の扉の前に立つたときは、もう十時を過ぎていた。ベルを鳴らす前に、電報か手紙で解約するほうがよくはないか、面談するとなるときつと非常につらいだろう、と考えてみた。それでもKはついに面談をやめようとは思わなかつた。ほかの形で解約すれば、それはただ黙つてか、あるいはごくわずかな形式的な言葉

で受入れられるだろうし、レニーにいくらかでも探つてもらわなければ、弁護士がどうやつてこの解約を受取つたか、またまんざらつまらぬものでもない弁護士の意見によれば、この解約がどんな結果を生じるか、知りようがなかつたからである。ところが弁護士がKに向い合つてすわつて解約を不意に聞くとなれば、たとい弁護士がたいして心中を打明けなくとも、その顔つきや態度から自分の欲するすべてのこと最容易に推量することができるだろう。さらに、弁護士に弁護をまかせ、自分の解約を引下げるほうがよいと確信させられる場合もないとは言えなかつた。

弁護士の扉のベルを鳴らしても、最初は例のごとくむなしかつた。

「レーニのやつ、もつと早くできようものを」と、Kは考えた。

それでも、寝巻姿の男かあるいはほかの誰かが自分をわざらわすことになるのであれ、いつものようにほかの依頼人がはいりこむのでなければ、それだけでもまだましだった。Kは二度目にボタンを押しながらもうひとつ扉を振向いてみると、今日はこれもしまつたままだった。ついに弁護士の扉のぞき窓に二つの眼が現われたが、レーニの眼ではなかつた。誰かが扉を開けたが、しばらくはまだ扉を押えていて、居間のほうに向つて叫んだ。

「あの人だよ！」

そして、それからやつと完全にあけた。Kは、その背後のほかの居間の扉で鍵^{かぎ}があわててしめられるのを聞きつけたので、扉に

ぶつかつていつた。そこで扉がついにあくと、まっすぐに控室に飛びこみ、部屋のあいだに通じている廊下をレニーが下着姿で逃げてゆく有様を見た。扉を開けた男の警告が向けられたのは、彼女にだつたのだ。しばらくその後ろ姿を見ていたが、やがて戸を開けた男のほうに向き直つた。あごほお顎も頬もひげ一面の小柄な瘦せた男で、手に蠅^{ろうそく}燭を持っていた。

「ここに雇われているんですか？」と、Kはきいた。

「いや」と、男は答えた。「この家の者ではありません。弁護士さんは私の代理人として、ある法律問題のためにここに来ているんです」

「上着も着ておられませんが？」と、Kはきき、手振りでその男

のしどけない身なりを指さした。

「ああ、お許しください！」と、男は言い、彼自身初めて自分の格好をながめるように、蠟燭で自分を照らした。

「レーニはあなたの恋人ですか？」と、Kは手短かにきいた。両脚を少し開き、帽子を持った両手を背後で組んでいた。^{がいとう} 積^{がんじょう}丈^{じよ}な外套^{がいとう}を着ているだけで、この痩せた小男には大いに優越しているように感じられた。

「どんでもないことです」と、相手は言い、驚いて身を守るように手を顔の前にあげた。「どうして、どうして、いつたい何を考えておられるんですか？」

「まあ信用しておきましょう」と、Kはにやにやしながら言つた。

「それはそうとして——いらっしゃい」

彼は帽子で男に合図をし、先に立つてゆかせた。

「なんというお名前ですか？」と、歩きながらKはきいた。
「ブロツク、商人のブロツクです」と、小男は言い、こう名乗りながらKのほうに向直つたが、Kは相手を立ち止らせてはおかなかつた。

「ほんとうのお名前ですか？」と、Kはきいた。

「そうですとも」というのが返事だつた。「どうしてお^{うたぐ}疑りにな
るんですか？」

「お名前をお隠しになる理由がおありだろうと思ひましたんでね」と、Kは言つた。

彼はきわめて自由な気分だつたが、こんなふうになれるのは、普通ならばただ、見知らぬ土地で卑しい連中と話していく、自身に関することはいつさい自分の胸に納めておき、ただ落着ちはらつて他人の利害のことをしやべり、それによつて相手をおだて上げたり、また思いのままに突き落すことができるときにだけやれることである。弁護士の事務室の扉のところでは立ち止り、扉を開け、おとなしくついてきた商人に向つて叫んだ。

「そんなに急がないでください！ ここを照らしてくれませんか？」

Kは、レニーがこの部屋に隠れていまいかと思い、商人に隅々まで捜させたが、部屋はからつぽだつた。裁判官の絵の前で

Kは、商人の後ろからズボンつりをつかんで押しとどめた。

「あれを知っていますか？」と、彼はきき、人差指で高いところを示した。

商人は蠅燭を掲げ、眼をぱちくりさせながら見上げて、言つた。

「裁判官です」

「位の高い裁判官ですか？」と、Kはきき、その絵が商人に与えた印象を観察するため、商人の側にまわつた。商人は感嘆しながら見上げていた。

「位の高い裁判官ですね」と、彼は言つた。

「あなたもたいして眼がきかないですね」と、Kは言つた。「位の低い予審判事のうちでもいちばん低いやつですよ」

「ああ、思い出しました」と、商人は言い、蠅燭を下げ、「私もそんなことを聞きましたつけ」

「そりやあもちろんね」と、Kは叫んだ。「すっかり忘れていました、もちろんあなたもお聞きになつているにちがいありませんね」

「だが、なぜもちろんなんですか、いつたいなぜ?」と、Kに両手で追い立てられて扉のところまで動いてゆきながら、商人はきいた。廊下に出て、Kは言つた。

「どこにレーニが隠れているかご存じでしよう?」

「隠れているですって?」と商人は言つた。「そんなことはわからませんが、台所に行つて、弁護士さんにスープをつくつている

のでしよう」

「なぜすぐおっしゃつてくださいらないのです？」と、Kがきいた。
「あなたをお連れしようと思つたのに、私のことを呼びもどされたものですから」と、矛盾する命令に混乱させられてしまつたよううに商人は答えた。

「きっとうまくやつたと思つてゐるんでしょう」と、Kは言つた。
「とにかく連れていくつてください！」

台所にKは行つたことはなかつたが、驚くほど大きく、設備が整つていた。炉だけでも普通の炉の三倍も大きかつたが、入口のところにかかつてゐる小さなランプだけで台所が照らされているので、ほかのものは細かなところがわからなかつた。炉のそばに

レーニは例のごとく白いエプロン姿で立ち、アルコールランプの上にかかっている鍋なべに卵を流しこんでいた。

「今晚は、ヨーゼフ」と、横眼を使いながら彼女は言つた。

「今晚は」と、Kは言い、片手でわきにある椅子を示し、商人にするように合図をすると、彼は言われるままにすわつた。だがKはレーニのすぐ後ろに行き、肩の上に身をかがめ、きいた。

「あの男は誰なの？」

レーニは片手でKを抱き、もう片方の手でステープをかきまぜながら、彼を引きつけて、言つた。

「ブロツクっていう、かわいそうな人で、貧弱な商人なのよ。まああの人を見てごらんなさい」

二人は振返つた。商人はKに示された椅子にすわり、もう要らなくなつた蠟燭の光を吹き消し、煙を防ごうと指で燈心を押えていた。

「君は下着姿だつたぜ」と、Kは言い、手で女の頭をまた炉のほうに向けた。女は黙つていた。

「恋人なのかい?」と、Kがきいた。女はスープ鍋をつかもうとしたが、Kはその両手を取つて、言つた。

「返事をするんだ!」

「事務室へいらつしやいよ、みんなお話ししてあげるわ」と、女は言つた。

「いや」と、Kは言つた。「ここで話してもらいたいね」

女は彼にしがみつき、接吻^{せつぶん}しようとした。だがKはそれを払

いのけると、言つた。

「今、接吻なんかしてもらいたくはない」

「ヨーゼフ」と、レーニは言い、懇願するようだが真っ向からKの眼を見た。「ブロツクにやきもちなんか焼いちやいけないわ。——ルーデイ」と、商人のほうを向いて言うのだつた、「あたしを助けてちようだい。ねえ、あたし疑られているのよ、蠅燭なんか置いて」

商人は氣をつけていなかつたと思われるのだつたが、まつたくよく事情をのみこんでいた。

「なぜあなたがやきもちなんか焼くのか、私にもわかりませんね」

と、ほんと刃向う様子もなく言つた。

「私にもほんとうはわかりませんよ」と、Kは言い、微笑しながら商人を見つめた。

レーニは高笑いして、Kが気がつかないでいるのを利用して、彼の腕の中にはいりこみ、ささやいた。

「もうあんな人放つておきなさいな。どんな人かごらんになつたでしょう。あたしが少しある人の面倒を見るのは、弁護士の大顧客くいだからで、ほかの理由なんかないわ。ところであなたは？」

今日弁護士さんとお話しになるつもり？　今日はたいへんおわるいんだけど、もし会いたいというんなら、取次ぎますわ。でも今晩はずっとあたしのところにいてよ、ねえいいでしよう。も

うずつとここにはいらつしやらないんだもの。弁護士さんさえあなたのことときいたわ。訴訟のことを粗末にしちゃだめよ。あたしも、聞いたことをいろいろお話しするわよ。でもまず最初に外がいとう套をお脱ぎなさいつてば！」

彼が外套を脱ぐのを助け、彼から帽子を取り上げ、それを持つて控室に駆けてゆき、駆けてくると、スープを見た。

「あなたのことを先に取次ごうかしら、それとも先にスープを弁護士さんのところへ持つてゆこうかしら？」

「まず取次いでくれたまえ」と、Kは言つた。

彼は腹をたてていた。ほんとうは、自分のこと、ことに疑問がある解約のことをレー二と詳しく相談しようと思つていたのだつ

たが、商人がいるのでそんなことをする気がなくなってしまった。しかし、こんな微々たる商人にすっかり邪魔にはいられるにはあまりに自分の問題は重要なように思われたので、もう廊下に出ていたレーニを呼びもどした。

「やつぱりまずスープを持つていいてくれたまえ」と、彼は言った。「僕と話すためにも元気をつけておかなきやいけないし、きっとほしいんだろう」

「あなたも弁護士さんの依頼人でいらっしゃるんですね」と、確かめるように商人は部屋の隅から小声で言つた、だが、それはKによくは取られなかつた。

「あなたとなんの関係があるんです?」と、Kが言うと、レーニ

も言つた。

「あんたは黙つていらつしやい。——じゃ、最初にスープを持つてゆくわ」と、レニーはKに言い、スープを皿に注^ついた。「でも心配だわ、すぐ眠つてしまふのよ。食事がすむと、すぐ眠つてしまうの」

「僕があの人に言うことを聞いてくれれば、眠りはしないさ」と、Kは言い、何か重大なことを弁護士と折衝するつもりであることを見抜かせようとし、いつたい何なのか、レニーにたずねさせ、そこで初めて彼女の助言を求めようと思つた。ところが女は、ただ言われた命令をきちんと果しただけだつた。盆を持って彼のそばを通り過ぎるとき、故意に軽く彼にぶつかり、ささやいた。

「スープを飲み終つたら、できるだけ早くあなたを取返せるように、あなたのことを取次ぐわ」

「行きたまえ」と、Kは言つた。「行きたまえ」

「もつと親切にするものよ」と、女は言い、盆を持ったまま扉のところでもう一度、すっかりこちらを向いた。

Kは女の後ろ姿を見送つた。弁護士を断わるという決心が、今は最後的にきまつた。あらかじめレーニとそれについて話すことがもうできなかつたことも、きつとかえつてよかつただろう。女には事柄の全体に対する十分な見通しがほとんどついていないので、きつとやめるようにはすすめたことだろうし、おそらくはKも今回はほんとうに解約を思いとどまつたことだろう。そして依然

として疑惑と不安とにどまるうことになり、しかもこの決心はあまりに動かせないものなので、結局はしばらくしてこの決心を実行することになつただろう。しかし、決心が実行されるのが早ければ早いほど、損害は避けられるわけだつた。ところで商人もおそらくそれについて何か意見があるかもしれない。

Kは振返つたが、商人はそれに気づくやいなや、すぐ立ち上がろうとした。

「どうかそのままにしてください」と、Kは言い、椅子をひとつ商人のそばに置いた。

「ずっと前から弁護士さんに依頼なすつていらつしやるんですか？」と、Kはきいた。

「そうです」と、商人は言つた。「古くからの依頼人です」「何年ぐらい、あの人に弁護をやつてもらつてあるんです?」と、Kはきいた。

「どういう意味かわかりかねますが」と、商人は言つた。「商売上の法律事件では——私は穀物商をやつていますんで——あの弁護士さんに、商売を始めたときから弁護をやつてもらっています。それでおよそ二十年来のことですが、私自身の訴訟のほうは、あなたはきっとこちらのことをおつしやつてあるんでしょうが、やつぱり初めからのことです、もう五年以上にもなります。そうです、五年はたつぱり越えました」

そして古い紙入れを取出して、言葉を続けた。

「ここに全部書きつけてあります。お望みなら、はつきりした日付を申上げましよう。全部が全部覚えていることはむずかしいですからね。私の訴訟はどうももつと前から続いています。妻が死んですぐ始まつたのですからね。で、もう五年以上にもなります」Kは商人のほうに寄つていった。

「それじゃあ、弁護士さんは普通の法律事件も引受けるんですねか？」と、彼はきいた。裁判所と法律学とがこういうふうに結びついているということは、Kには非常に安心に思われた。

「こういう法律事件でのほうがほかの事件でよりも有能だとさえ言われています」しかし、言つたことを後悔しているらしく、片手をKの肩に置いて、言つた。

「どうか私の言つたことは内密にお願いします」

Kは安心させるように男の腿ももをたたいて、言つた。

「いや、私は裏切り者じやないですから大丈夫ですよ」

「つまりあの人は執念深いもんですからねえ」と、商人は言つた。
 「でも、あなたのような忠実な依頼人には、あの人もきつと変なまねはしないでしよう」と、Kは言つた。

「どんでもない」と、商人は言つた。「興奮すると見境がありませんし、それに私もほんとうはあの人に忠実なわけでもないんでしてね」

「どうしてなんですか?」と、Kはきいた。

「そのことをあなたにお話ししなくちやいけませんか?」と、商

人は思い惑うように言つた。

「してくださいさつてもかまわないでしよう」と、Kは言つた。
「それでは」と、商人は言つた。「一部だけ申上げますが、私たち二人が弁護士に対しても言わないという約束をしつかりと守るよう、あなたも私に秘密なことを打明けてくださるんですよ」「あなたはたいへん用心深いな」と、Kは言つた。「だが、あなたを完全に安心させるにちがいない秘密をひとつ申上げましよう。ところで、弁護士に対するあなたの不実というのはいつたいどういうことです?」

「実は」と、商人はためらいながら、何か面目ないことを白状するような調子で言つた。「の人のほかにほかの弁護士たちもいる

るんです

「そんなことなら、たいしてわるいことじやありませんよ」と、少しがつかりして、Kは言つた。

「ところがここじやあ」と、白状しはじめてから苦しそうな息をついた商人は、Kの言葉でいつそううちとけて、言つた。「それが許されないんです。そして、いわゆる弁護士のほかに三百代言を頼むことはことに許されていません。ところがまさにそのことを私はやつてているんで、三百代言が五人いるんです」

「五人ですか！」と、Kは叫んだが、まずこの数に驚かされたのだった、「このほかに弁護士を五人もですか？」

商人はうなずいた。

「今ちょうど六人目と交渉中なんです」

「だが、どうしてそんなにたくさん弁護士が要るんです?」と、

Kはきいた。

「みな要るんです」と、商人は言つた。

「そのわけを説明してくれませんか?」と、Kがきいた。

「いいですとも」と、商人は言つた。「まず、訴訟に敗けたくないからです。これはむろんのことです、そのためには、利用できるものはなんでも見逃すわけにはゆきません。ある場合、役につく見込みがまつたく少ないときでも、投げてしまうわけにはゆきません。それゆえ私は、自分の持つているものをみな訴訟につかつてしましました。たとえば、商売から金を全部注ぎ込みました

し、前には私の店の事務室はある建物のほとんど一階全部にまたがっていたのですが、今では裏のほうの小さな部屋ひとつで十分で、そこで小僧と二人きりで働いているようなわけです。こうさびれた原因となつたものは、もちろん、金の蕩尽とうじんばかりでなく、むしろ仕事の精力の蕩尽なのです。訴訟のために何かをやろうとすれば、ほかのことには、ほんの少しあかわつてはいられませんからね」

「それじゃあなたご自身も裁判所で仕事をやられるんですか？」
と、Kはきいた。「まさにそのことについて伺いたいものです」「その点については、ほとんどお話しすることがありません」と、商人は言つた。「初めのうちは確かにそうもしようとしたのです

が、すぐやめにしてしまいました。あまりに疲れて、たいして効果がないんです。裁判所で自分で仕事をやり、交渉をることは、少なくとも私には全然できることだとわかりました。そこではただすわって待つことだけで、たいへんな骨折り仕事です。あなたご自身も、事務局のあの重苦しい空気はご存じのはずですね」「僕が事務局に行つたということを、どうして知っているんですか？」と、Kはきいた。

「あなたが通つてゆかれたとき、ちょうど待合室にいたんです」「なんという偶然でしょう！」と、すっかり夢中になり、これまでの商人の滑稽さも忘れて、Kは叫んだ。「それじゃあ私をごらんになつたわけだ！　私が通つていつたとき、あなたは待合室

におられたのですね。そう、一度通つたことが確かにあります」

「たいした偶然じやありませんよ」と、商人は言つた。「私はほとんど毎日のようにあそこにいるんですから」

「私もこれからおそらくしばしば行かなきやなりませんが」と、Kは言つた。「きつともうあのときはどうやうやしく迎えられることはないでしようね。みなが起立しましたからねえ。きつと、私のことを裁判官だと思つたのでしよう」

「いや」と、商人は言つた。「あのときは廷丁に挨拶あいさつしたのですよ。あなたが被告だということは、私たちは知つていました。こんな噂うわさはすぐ広まりますからね」

「じゃあ知つていたんですね。だがそうなると、私の態度はきつ

と傲慢ごうまんに見えたことでしたろう。そのことをとやかく言つてはいませんでしたか?」

「いや」と、商人は言つた。「それどころか。でもつまらぬことですよ」

「つまらぬことつて、どんなことです?」と、Kがきいた。

「なぜそんなことをおききになるんですか?」と、商人は腹立たしげに言つた。「あなたはあそこの連中のことをよくはご存じでないらしく、おそらく事情を誤解していらつしやるのでしょうか。あなたはよくお考えにならなけりやなりませんが、この手続きではしょつちゅういろいろな事柄はが口の端に上りますが、そんなことはもう常識で間に合うものではなく、誰もがただ疲れ果て、い

ろんなことに気をそらされていて、その穴埋めに迷信に没頭することになるんですよ。他人のことを言つているわけですが、私自身だつてたいしてまともじやありません。こんな迷信のひとつは、たとえば、多くの人たちが被告の顔、ことに唇くちびるの格好から、訴訟の成行きを読み取ろうとすることです。そこでこの連中は、あなたの唇の格好から判断すると、きっとすぐにあなたに有罪の判決が下されるだろう、と主張していました。繰返して申上げますが、ばかばかしい迷信でして、たいていの場合は事実とも完全に相反するのですが、あんな仲間の中にいると、こんな考え方からなかなか脱けられないのです。まあ思つてもごらんなさい、こうした迷信は激しい力を持つているのですよ。あなたはあそこで一人の男

に言葉をおかけになりましたね？ ところがその男はあなたにはほとんど一言も答えられなかつた。そりやあ、あそこでは頭が混乱するたくさんの中の理由がありますが、ひとつにはあなたの唇を見たこともそれなんです。あの男が後で話してくれたところでは、あなたの口の上にあの男自身の有罪判決を見たように思つたということです」

「私の唇ですか？」と、Kはきき、懐中鏡を取出して、じつと見た。「私の唇に別に変つたところは見えませんけれどね。で、あなたはどうですか？」

「私もそう思いますね」と、商人は言つた。「全然そんなことはありませんよ」

「あの連中はなんて迷信深いんでしよう！」と、Kは叫んだ。

「だからそう申上げたでしよう？」と、商人がきいた。

「いつたいあの人たちはそんなに行き来をし、意見を交換し合っているんですか？」と、Kは言つた。「私はこれまで全然仲間からはずれていましたよ」

「一般には互いに行き来してはいません」と、商人は言つた、

「それはできないでしよう、なにしろ人数が多いですからね。それに共通の利害もほとんどないんです。ときどきはあるグループで共通の利害という信念が浮び出ることもあるんですが、すぐに間違いだということがわかつてしまします。裁判所に対しても共同でやられることなど、何もありません。各事件も単独に調べられ、

まつたく慎重きわまる裁判所というものですよ。それで共同で何もやることはできないんです。ただ個人が何かこつそりうまくやつたことはときどきあります。それが成功したときにやつとほかの人々が聞くというわけですから、どういうふうにしてやられたか誰にもわかりません。それで共同一致ということではなく、待合室のあちこちで寄り合うことがあっても、そこで相談はほとんどされていません。迷信深い考え方というのは昔からあって、確かにおのずとふえています」

「あの待合室に待つている人たちを見ましたが」と、Kは言つた。
「まつたく無益なことに思われましたよ」

「待つことは無益じやありません」と、商人は言つた。「無益な

のは自分で手出しをすることです。すでに申上げたように、私は今、この弁護士のほかに五人頼んでいます。彼らに事を完全にまかせることができるだろうと、人は思うでしよう。私自身からして初めはそう思いました。しかし、それはまったく間違っているんです。ただ一人に頼んでいるときよりもまかしておけないくらいです。このことはおわかりでないでしよう?」

「ええ」と、Kは言い、商人があまり早くしゃべるのを妨げるために、なだめるように自分の手を相手の手の上に置いた。「どうかもつとゆっくりお話ししてください。どれもみな私にとつて大切な事柄ですが、どうもあなたのお話についてゆけません」「それをおっしゃってください結構でした」と、商人は言つた。

「で、あなたはまだ新米で、末輩です。あなたの訴訟は半年ばかりでしたね？ そう、そのことは伺いました。そんなに新しい訴訟だなんて！ ところが私はこうした事柄をもう数限りなく考え抜いてきましたので、世の中でいちばんわかりきつたことなんですよ」

「あなたの訴訟がもうそんなに進んでいるのを、きっとよろこんでおられるでしよう？」と、Kはきいたが、商人の事件がどういう状態にあるのかあけすけにたずねようとは思わなかつた。ところが相手からも、はつきりした返事は得られなかつた。

「そうです、訴訟は五年間もころがしてきました」と、商人は言い、頭を垂れた。「簡単な仕事じやありませんよ」

それからしばらく黙った。Kは、レニーがもう来ないか、と耳を澄ました。一面では、彼女が来なければと思った。まだまだ聞きたいことはあるし、商人とこうしてうちとけて話しているときレニーに邪魔されたくはなかつたからである。だがその反面、自分が来ているのにこんなに長く弁護士のところにいることに腹をたて、スープを持つてゆくだけならこんなに長くかかるわけはない、と思つた。

「私は今でもまだ」と、商人がまたしゃべりはじめたので、Kはすぐ注意を集中した。「私の訴訟が今のあるのと同じように新しかつたときのことを覚えていてます。あのときはここに弁護士さんだけでしたが、大いに安心していたわけじやなかつたんです」

これでなんでも聞きこめるぞ、とKは考え、勢いよくうなずいたが、それによつて商人をけしかけて、知る値打ちのあることをなんでも言わせることができる、というような様子だつた。

「私の訴訟は」と、商人は続けた。「さつぱり進みませんでした。それでも審理は行われ、私もそのたびごとに出向き、材料を集め、帳簿を全部裁判所に提出しましたが、これは後で聞いたところによると、全然必要じやなかつたそうです。しょつちゅう弁護士さんとのところへ行き、弁護士さんもいろいろな願書を出してくれました——」

「いろいろな願書ですつて？」と、Kはきいた。

「そうです」と、商人が言つた。

「それは私には大切なことです」と、Kは言つた。「私の事件の場合、あの人は今でもまだ最初の願書を書いてばかりいるんです。まだ何もやつてはいません。これでわかりましたが、あの人は破廉恥にも私のことを無視しているんだ」

「願書がまだ完成しないということは、きっといろいろ理由があるんでしょう」と、商人は言つた。「ところで、私の願書がまったく値打ちのないものだということが、後になつてわかりました。ある裁判所の役人の親切でそのひとつを自分で読んだことさえあります。それは大いに学者ぶつたものでしたが、ほんとうは中身がからつぽでした。まず、私にはわからないひどくたくさんの中身語、次に数ページにわたる裁判所に対する一般的な嘆願、そ

れから、はつきり名前はあげてはないが事情に通じた者ならかな
らずわかるにちがいない一人一人の役人に対するお世辞文句、そ
れから次に、まさしく犬のように裁判所にへりくだつてゐる調子
の弁護士の自贊、そして最後に、私のと似てるという以前の法律
事件の吟味、というわけです。これらの吟味は、もちろん、私が
たどれたかぎりでは、きわめて慎重にできていました。こうした
ことで弁護士の仕事に判断を下そうとは思いませんし、私が読ん
だ願書もたくさんもののうちのひとつでしかなかつたわけです
が、ともかく当時訴訟になんらの発展が見られなかつたというこ
とだけは、今申上げておきたいと思います」

「それじゃ、どんな発展を望まれたんですか?」と、Kはきいた。

「おたずねはごもつともです」と、商人は微笑しながら言つた。
 「この手続きでは発展はほんのまれにしか望めないんです。ところがその当時はこのことが私にはわかつていませんでした。私は商人ですが、当時は今よりもっとずっと商人でしたので、はつきりとした発展というものがほしくて、全体が結末に近づくとか、あるいは少なくとも規則正しく上昇の経過をたどるとかしてもらいたかつたのです。ところがそうはゆかずに、あるものはただ、たいてい同じ内容を持つ尋問ばかりでした。返答はもうまるで連れんとう祷の文句みたいに覚えこんでしまいました。週に何回も裁判所の使いが、店や、住居や、そのほか私に会えるどこにでもやつてきます。それはもちろんわざらわしいことでした。（今では少

なくともこの点、ずっとよくなりました。電話の呼び出しだすからずつと面倒がありませんのでね）そして、私の商売仲間や特に親戚のあいだでは私の訴訟の噂うわさが広まりはじめますし、そのためあらゆる方面からの中傷が起りましたが、最初の審理が近く行われるだろうという徴候さえもさっぱり見えません。そこで弁護士さんのところへ行き、苦情を言いました。すると長々と言い訳を聞かせてくれはしたのですが、私の思うようなことを何かやることとはきっぱりと拒絶し、審理日の確定を左右する力はないにびとも持たない、願書でそのことをしつつこく迫るのは——私はそれを要求したわけですが——まつたく前代未聞のことだし、そんなことをしたら私もある人も破滅してしまうだろう、と言う

のでした。この弁護士がしようとしているのか、あるいはできないのかのいずれかで、ほかの人ならしてくれる気にもなろうし、またできもしよう、と考えました。そこでほかの弁護士を物色してみました。ところが、私は少し先まわりして申上げますが、それからの弁護士は一人として本審理の日限の確定を要求しませんし、やつてもくれませんでした。それはもちろん、これから申上げようと思いますが、ある条件のためにできることです。それゆえ、この点についてはこここの弁護士さんの言うことはまんざら嘘うそじやなかつたわけです。ところで、ほかの弁護士たちに頼んだことは、私は少しも残念に思うことはありませんでした。あなたもきっとフルト博士からとつぐに三百代言についてさまざまなお話を聞

きでしょうし、たぶん彼らのことを見事に軽蔑して言つたことでしょうが、それは確かにほんとうのことです。もつとも、博士が三百代言たちのことを語つて自分や自分の同僚たちのことを彼らと比較するときはいつも、ある誤謬^{ごびゆう}がはいりこむんでして、ついでにこのことをあなたにご注意申上げておこうと思います。

つまり博士はそういうときに、しょっちゅう自分の仲間の弁護士を区別するため、『大弁護士』と呼びます。これが間違いで、もちろん誰でも気に入るなら自分を『大』と称することはできますが、この場合に決定力を持つてているのはただ裁判所の慣習だけのはずです。それによると、三百代言のほかにさらに大小の弁護士があるんです。しかし、ここの大弁護士さんとその仲間の人たちは

小弁護士にすぎず、大弁護士というのは私はただ噂に聞いただけで一度も見たことがありませんが、小弁護士があの軽蔑される三百代言たちの上にあるのと比較にならないくらい、小弁護士よりも高いところにいるんです」

「大弁護士ですね？」と、Kはきいた。「いつたいどういう人たちなんですか？　どうしたら会えるんですか？」

「ははあ、あなたはまだ彼らのことをお聞きになつていないんですね」と、商人は言つた。「彼らのことを聞かされたあとで、しばらく彼らのことを夢に見ないような被告というのは一人もありません。だがあなたは、むしろそんな誘惑にかかりてはなりません。大弁護士が何者かは、私は知りませんし、彼らのところへ近

づくことはきつと誰にもできないのです。彼らが手がけたとはつきり言えるような事件を、私は知りません。かなりの被告を弁護はするんですが、被告の意志ではどうにもならないし、彼らが弁護しようと思う者たちだけを弁護するんです。だが、彼らが引受けた事件というのは、きつと下級裁判所を超えたものにちがいありません。ともかく、彼らのことを考えないほうがよいでしょう。そうでないとほかの弁護士との話や彼らの忠告や尽力というものがきわめていとわしく、無益なものと思われるからです。いつさい投げ出してしまって、家でベッドに寝ころび、何も聞かないでいるのがいちばんいいと思うようになるつていうことは、私自身経験すみです。しかし、これもまたもちろんばかげたこととして、

ベッドに寝ていていつまでも安閑とできるもんじやありません」「それじやあ、あなたはその当時大弁護士のことは考えなかつたんですか？」と、Kはきいた。

「長くは考えませんでしたが」と、商人は言い、また薄笑いした。
「残念ながらすっかり忘れるることはできませんし、ことに夜にはこんな考えがとかく浮んできましてね。しかし、当時私は即効をあげることを望みましたんで、三百代言のところへ行つたんです」「まあ、こんなところにくつづいてすわって！」と、盆を手にしてもどつてきて、扉のところに立つたレニーが、言つた。

確かに二人はひどくくつついですわり、少し身体からだの向きを変えても頭をぶつつけ合つたにちがいなく、もともと小柄なところへ

もつてきて背中を曲げている商人は、Kにも、すべてを聞き取ろうとすると、身体を深くかがめさせるのだった。

「もう少し待つて！」と、Kはレーニに拒むように叫び返したが、まだ依然として商人の手の上に置いていた手を、いらだたしそうにぴくぴくさせた。

「この方が私の訴訟の話を聞こうとおっしゃるんだよ」と、商人はレーニに言つた。

「さあお話しなさい、お話しなさい」と、女は言つた。女は商人と愛情をこめて話すが、また見下された様子が見られ、これがKの気にさわった。今ではわかつたのだが、この男はやはりある値打ちがあるし、少なくも経験を持ち合せており、それをうまく話す

ことができるのだ。レニーはどうもこの男を不当に判断している、そう思つた。彼は、商人が長いあいだしつかと持つていた蠅燭ろうそくをレニーが商人の手から取上げ、エプロンで手をふいてやり、蠅燭からズボンに垂れたいくらかの蠅をかき取つてやるために商人のそばにひざまずくさまを、腹だたしげに見ていた。

「三百代言のことをおっしゃつてくださろうとしたところでしたね」と、Kは言い、それ以上何も言わずに、レニーの手を押しやつた。

「何をするのよ?」と、レニーはきき、軽くKをたたき、蠅を落す仕事を続けた。

「そうです、三百代言のことでした」と、商人は言い、考えこむ

ように額に手をやつた。Kは助け舟を出そうとして、言つた。

「あなたは即効をあげようと思われ、三百代言のところへ行かれたのです」

「そう、そのとおりでしたね」と、商人は言つたが、話を続けなかつた。

「きっとレーニの前ではそのことを言いたくないんだな」と、Kは思つて、先をすぐ今聞きたいといういらだたしさを抑え、もうこれ以上催促はしなかつた。

「僕のことは通じてくれた?」と、彼はレーニに言つた。

「もちろんよ」と、女は言つた。「あなたのことをお待ちかねよ。もうブロツクはやめにしなさいな。ブロツクはまだここにいます

から後あとでもお話あわせできてよ」

彼はまだ躊躇ちゆうちよした。

「ここにいらつしやいますか？」と、商人にきいたが、商人自身の返事が聞きたく、レーニが商人のことをまるでいない者のように言うのが気に入らず、今日はレーニに対して心ひそかに大いに腹をたてていた。ところがまた、レーニが返答しただけだつた。

「この人はここによく泊るのよ」

「ここに泊るつて？」と、Kは叫んだ。商人には自分が弁護士との話を手早く片づけるあいだけ待つてもらうが、すんだらいつしょに出かけて、すべてを徹底的に、誰にも邪魔されずに語り合つつもりだつた。

「そうよ」と、レニーは言つた。「誰でもあなたみたいに好きなときにやつてきて、弁護士さんに会わせてもらえはしないわ、ヨーゼフ。弁護士さんが病氣なのに、夜の十一時にもなつて会つてくださるのを、あなたつてば全然ありがたいとも思つていよいうね。あなたのためにお友達がやつてくれることを、まるで当たり前のことだぐらいにしか考えていないのね。でもあなたのお友達、少なくともあたしは、よろこんでやつてあげてよ。なんにもお礼なんか要らないわ、ただあたしを可愛いがつてくれればそれでいいの」

「お前をかわいがるつて?」と、Kは最初の瞬間に考えたが、それから次に頭の中をかすめる考えがあつた。「そうだ、実際おれ

はこの女を愛しているのだ」それにもかかわらず、彼はほかのことをいつさい無視して、言つた。

「私は依頼人だから、会つてくれるのは当たり前さ。もし会つてもらうためにも他人の助力が必要だというなら、一歩行くごとにしよつちゅう乞食のよう^{こじき}に頼んだり、ありがとうを言つたりしなくちやならないだろうよ」

「この人つたら今日はなんて機嫌^{きげん}がわるいんでしょう、ねえ？」と、レーニは商人にきいた。

「今度はおれがいないも同然だ」と、Kは思い、商人がレーニの不^{ぶしつけ}羈^{つけ}を引取つて次のように言つたとき、ほとんど商人に対しさえ気をわるくしていた。

「弁護士さんがこの方を迎えるのにはほかのいろいろな理由があるんだよ。つまり、この方の事件は私のよりも興味があるんだ。そのうえ、この方の訴訟は始まつたばかりで、したがつて手続きもたいして進行はしていないうらしかから、弁護士さんはまだよろこんでこの方のこととかかりあつてているんだ。けれども後ではきっと変つてくるよ」

「そう、そうね」と、レーニは言い、高笑いしながら商人を見た。「この人はなんておしゃべりなんでしょう！　あなたはこの人のことなんか」と、ここで女はKに向つた。「少しでも信用しちゃだめよ。いい人なんだけれど、おしゃべりなの。おそらくそのために弁護士さんもこの人のこと我慢ができないのよ。ともかく、

気が向かなければこの人なんかに会わないわ。そんなことやめさせようつて、あたしもずいぶん骨を折つたけれど、できないのよ。いい、何度もブロツクが来たつてお伝えするのに、三日目になつてやつと会うような始末なの。でも呼ばれたちようどそのときにはブロツクがその場にいないと、みんなだめになり、また改めてお伝えしなけりやならないのよ。それであたしはブロツクにここに泊ることを許してあげたの。弁護士さんが夜中でもこの人のことを呼ぼうとベルを鳴らすことも、これまでにあつたことだわ。それで今ではブロツクは夜中でも用意しているの。もちろん今度はまたブロツクがいるつてことがわかると、弁護士さんはこの方をお通してくれつて頼んだことをときどきやめにしてしまうこと

もあるわ」

Kは、問い合わせるように商人のほうを見た。商人はうなずき、さつきKと話し合っていたのと同じように率直に言つたが、羞恥のためにおそらく混乱しているのだつた。

「そう、あなたもそのうち弁護士さんの言うことをよく聞くようになりますよ」

「この人はただ見せかけに苦情を言つているのよ」と、レーニは言つた。「ここに泊るのはうれしいって、あたしにもう何べんも白状したわ」

彼女は小さな扉のところへ行き、それを押しあけた。

「あなたこの人の寝室をごらんになる?」と、女はきいた。

Kはそちらへ出かけ、敷居のところから、幅の狭いベッド一つでいっぱいになつてゐる天井の低い、窓のない部屋をのぞきこんだ。このベッドに乗るにはベッドの枠柱わくばしらを越えなくてはならないはずだつた。ベッドの枕もとには壁の中にくぼみがあつて、そこには、一本の蠟燭、インク壺つぼ、ペンおよび訴訟文書らしい一束の紙が、ひどくきちんと置いてあつた。

「女中部屋でお休みになるんですね？」と、Kはきき、商人のほうを振返つた。

「レーニが空けてくれたんですよ」と、商人が答えた。「とても便利ですよ」

Kは長く商人の顔を見つめていた。彼が商人から受けた第一印

象は、おそらく正しかつたのだ。訴訟がもう長いあいだ続いたので、経験を持つているにはちがいないが、これらの経験に高価な代償を払つたのだつた。突然Kは商人のこの有様に耐えられなくなつた。

「この人をベッドに連れてゆきたまえ！」と、彼はレーニに叫んだが、女は彼の言つことが全然わからないらしかつた。だがおれ自身は弁護士のところへ行こう、解約を通告して、ただ弁護士からばかりでなくレーニと商人とからも縁を切ろう、と思つた。ところが扉のところまで行くか行かないかのうちに、商人が低い声で言葉をかけた。

「業務主任さん」

Kは機嫌のわるそうな顔つきで振返つた。

「あなたは約束をお忘れになりましたね」と、商人は言い、椅子から懇願するように身体を伸ばした。「私にも秘密をおつしやつてくださることでござつたが」

「そうでした」と、Kは言い、自分をまじまじと見つめるレーニにも一瞥いちべつを投げた。「それじや聞いてください。もちろんほどんど秘密というほどのものじやないんです。これから弁護士のところへ行つて、解約するんですよ」

「この人は弁護士を解約するんだ!」と、商人は叫び、椅子から飛び上がって、腕を振上げて台所じゆうを走りまわつた。何度も繰返して叫ぶのだつた。「この人は弁護士を解約するんだ!」

レニーはすぐKに飛びかかつていったが、商人が邪魔にはいると、両手の拳^{こぶし}で一撃を加えた。なおも拳を握つてKの背後を追いかけたが、Kのほうはかなり逃げていた。もう弁護士の部屋に足を入れていたが、そこでレニーが追いついた。扉をほとんどしめたが、足で扉を食い止めたレニーは、彼の腕をつかみ、引戻そうとした。ところが女の手首を強く圧^おしたので、女はうめき声をあげて手を放さねばならなかつた。女はこれ以上部屋の中に踏みこむことはしなかつたが、Kは扉に鍵^{かぎ}をかけた。

「たいへんお待ちしていましたよ」と、弁護士はベッドから言い、蠅燭の光で読んでいた文書を夜間用の机の上に置き、眼鏡をかけると、Kを鋭く見つめた。Kはわびもせずに、言つた。

「すぐに帰りますから」
わびではなかつたので、弁護士はKのこの言葉を相手にせずに
やりすごし、言つた。

「この次はもうこんな遅くはお会いしませんからね」
「それは願つたりです」と、Kは言つた。

弁護士は、いぶかしげにKの顔を見た。

「まあおかげください」と、言つた。

「ではお言葉どおり」と、Kは言い、椅子を夜間用の机のそばに
引寄せ、すわつた。

「扉の鍵をおかけになつたようですね」と、弁護士は言つた。
「そうです」と、Kは言つた。「レーニのためでした」

彼は、誰でも容赦するつもりはなかつた。ところが弁護士はきいた。

「あれがまたしつつこいことをしましたか？」

「しつつこいですって？」と、Kはきいた。

「そうです」と、弁護士は言つて笑つたが、咳の発作を起し、それが止ると、また笑いはじめた。

「きつとあれのしつつこいことをごらんになつたでしようね？」と、きき、Kがぼんやりと夜間用の机の上についていた手をたたいたので、Kは素早くその手を引つこめた。

「あなたはそのことをたいして問題にしておられぬようだが」と、Kが黙つているので弁護士は言つた。「そのほうがよろしい。さ

もないとわしがおそらくあなたにおわびしなければなりませんからな。それがレーニの奇妙なところとしてね。わしは前からそれを大目に見てますし、あなたがたつた今扉をおしめにならなかつたら、お話もいたさなかつたでしよう。この奇妙なところというのは、もちろんあなたにご説明するまでもないんですが、あなたは私のことを驚いてごらんになるので申上げておきますけれど、それは、レーニがたいていの被告の人々を美しいと思いこむことなんですよ。あれは誰にでもくつつき、誰にでもほれますし、もちろん誰からも愛されもします。その後で、私がよいと言えば、わしを興がらせるため、ときどきそれについて話してくれます。お見かけしたところだいぶ驚いていらっしゃるようですが、わし

はこのことにたいして驚きはしませんね。見分ける眼力がありさえすれば、被告の人々はほんとうに美しいと見えることがしょっちゅうあるものですよ。これは確かに、奇妙な、いわば自然科学的と言える現象なんです。もちろん、告訴の結果何かはつきりとした、詳細に規定できるような容貌^{ようぼう}上の変化が起るわけじやありません。ほかの裁判事件の場合とはちがつて、たいていの被告は普通の生活を続け、事件の世話をしてくれるいい弁護士がついていさえすれば、訴訟に少しもわざらわされません。それにもかかわらず、経験のある人々は、大勢の人々の中から被告を一人一人見分けることができます。どういう点でか、とあなたはおたずねになるでしょう。わしの返事はあなたを満足させるわけにゆかない

ぬかもしません。つまり、被告の人々はまさしくいちばん美しいんです。彼らを美しくするものは罪ではありません。なぜなら——わしは少なくとも弁護士としてこう申上げなくてはなりませんが——すべての被告が罪があるとはかぎらないのですからね。また、彼らを今から美しくしているのは、正しい処罰というものでもありません。被告はみな処罰されるとはかぎつていなかっています。それゆえ、なんらかの形で彼らにつきまとっている、彼らに対して提起された訴訟手続きというものにあるにちがいありません。もちろん、美しい人たちのうちにも特に美しい人というのあります。でもみな美しいことは確かであって、あのみじめな虫けらのようなブロツクでさえ美しいんです」

Kは、弁護士が語り終えたとき、すっかり気を落着け、最後の言葉には目だつほどにうなずきさえしたが、そうすることによつて前々からの自分の見解にみずから裏打ちを与えるのであつた。その見解によるとこの弁護士は、いつも、そして今度も、事の本質には触れていない一般的なことばかり伝えては自分の気をそらし、いつたい自分のために実際に仕事をして何かをやつてくれたか、という根本問題は、避けよう避けようとばかりしているように思われるのだった。弁護士は確かに、Kがこれまでよりも自分に対して抵抗していることに気づいたらしかつた。というのは、弁護士は黙つてしまい、Kのほうが話しだす機会を与えたからである。ところが、Kがいつまでも黙つているので、きいた。

「今晚は何かきまつたご意図を持つていらっしゃったのですか？」
「そうです」と、Kは言い、弁護士をもつとよく見るため、片手で少し蠟燭の光をさえぎつた。「今日をかぎりあなたには私の弁護をやめていただきたい、と申上げようと思います」

「なんですと」と、弁護士は言い、ベッドの中で半身をもたげ、片手で布団^{ふとん}の上に身体をささえた。

「おわかりいただけたと思います」と、Kは身体をこわばらせできちつと立ち、相手の出方に身構えするようにすわっていた。

「では、そのプランについてお話しすることもできますね」と、しばらくの後、弁護士は言つた。

「もうプランなんていうものじゃありませんよ」と、Kが言つた。

「そりやあそかもせんが」と、弁護士は言つた。「でもわしらは何事もあわてすぎたくはありませんね」

弁護士は「わしら」という言葉を使って、Kを手放す気は毛頭ないし、たとい代理人ではありえなくとも、少なくとも引続いて忠告者ではありたいというような素振りだつた。

「あわてているわけじやありません」と、Kは言い、ゆっくりと立ち上がり、自分の椅子の後ろに行つた。「十分に考えましたし、おそらくあまり長く考えさえしたようです。決心はもうきまつています」

「それではもう少し言わせてください」と、弁護士は言い、羽根布団を退け、ベッドの縁に腰かけた。むきだしの白毛の脚は、寒

さで震えていた。彼はKに、長椅子から毛布を取ってくれ、と頼んだ。Kは毛布を持ってきて、言つた。

「そんなに冷えるようなことをなさる必要は全然ありませんよ」「事はなかなか重大です」と、弁護士は言いながら、羽根布団で上半身を包み、それから両脚を毛布に突つこんだ。「あなたの叔父さんはわしの友人だし、あなたもまた時のたつにつれわしにとつて親しいものとなつた。そのことを率直に申上げます。こう申上げても恥じる必要はないと思います」

老人のこういう感傷的な話は、Kにはきわめてありがたくなかつた。というのは、避けたいようなくだくだしい説明にどうしてもなつたし、そのうえ、もちろん彼の決心をけつして翻することは

できなかつたが、率直に白状するとそれをいろいろと迷わしたからである。

「（ご）親切に（ご）心配いただいてありがとうございます」と、彼は言った、「あなたが私の事件をできるだけ、そして私にとつて有利だとお考えのかぎりお引受けくだすつたということも、よく存じております。しかし、最近、それは十分でないという確信を持つにいたりました。もちろん私は、あなたのようなたいへん年長で経験に富んだ方に、私の考えに従つていただくようにしようとはけつして思いません。もし私がときどき思わず知らずにそんなことをしようといたしましたなら、どうかお許しぬがわなければなりませんが、事はあなたご自身のおつしやられるようになかなか

重大ですし、私の確信によりますと、訴訟に対してこれまでやつた以上に強力に手を出すことが必要だと思われます」「よくわかりましたが」と、弁護士は言つた、「あなたは短気ですね」

「私は短気なんじやありません」と、Kは少し興奮して言い、もうたいして自分の言葉に気を使わないことにした。「私が叔父といつしょにあなたのところへ初めて伺つたとき、私には訴訟なんかたいして問題ではなかつたということは、あなたもご存じでしょうし、いわば力ずくで思い出させられるのでなかつたなら、私は訴訟のことは完全に忘れていたのでした。ところが叔父が、あなたに弁護をお願いしろと言い張るものですから、叔父の気を損

じないためにそうしました。それで、弁護士に弁護をおまかせするのには訴訟の重荷を少しでも避けるためなんだから、これで私の訴訟も前よりは気軽になるものとばかり思っていたわけです。ところが事実はまったく反対です。それまでは、あなたにお願いしてからほど訴訟のために心配させられるということは、なかつたのです。私ひとりのときには、自分の事件については何も手を出しませんでしたが、それを心配することもほとんどなかつたのでした。ところが今では、代理人もおられるし、何事が起つても万端の用意が整えられていて、ひつきりなしに緊張してあなたが手を下してくださいとのを待つていたわけですが、さっぱりでした。もちろん、おそらくはほかの人からはもらえそうにもないさまざま

まな裁判所についての情報を、あなたからいただきはしました。

しかし、訴訟が確かに私の気づかぬうちにだんだんと身に迫つてきている今となつては、それでは十分ではなくなつたのです」

Kは椅子を突きのけて、両手を上着のポケットに突つこんだまま立ち上がつた。

「訴訟をやつて いるうちの、ある時期には」と、弁護士は低い声で落着いて言つた。「本質的に新たな事態というものが起らなくなるのです。あなたと同じような訴訟の段階にある大勢の依頼人の方々が、これまでわしの前に立つて、あなたと同じようなことを言つたものですよ!」

「そうだとすると」と、Kは言つた。「そういう同じような依頼

人たちは、私と同じように当然な理由があつたのです。それだからそんなことは全然私に対する反駁にはなりやしない」

はんぱく

「何もあなたに反駁しようとは思いません」と、弁護士は言つた。
「だがわしが申上げておきたいと思うのは、あなたにはほかの人々よりも判断力というものを期待していたということです。ことにあなたには、ほかの依頼人に對してやる以上に、裁判組織とわしの仕事とについて詳しくお教えしておいたんですからね。ところが今は、こんなにしてさしあげているのにあなたはわしを十分ご信用にならない、ということを見なければならぬというわけです。あまりわしのことを軽く考えてくださいては困りますね」
弁護士はKに対してなんと卑屈な態度をとつたことか！ 確か

に今においてこそいちばん感じやすくなつてゐるにちがいない自分の身分に関する体面というものを全然忘れてしまつてゐるのだ。なぜこういう態度をとるのか？ 見かけたところ仕事の多い弁護士で、そのうえ金もあるらしいし、もうけがなくなることも一人ぐらいの依頼人を失うことももともとたいしたことではないはずだ。そのうえ、病身だし、仕事を減らすこと自分でも考えたほうがよいのだ。それにもかかわらずKのことをこんなに引きとらえているなどとは！ なぜだろうか？ 叔父に対する個人的な友^{ゆき}誼^{うぎ}なのだろうか、あるいはKの訴訟をきわめて風変りなものと認めて、Kに対してか、あるいは——こういう可能性もけつしてなきにしもあらずだが——裁判所の友人たちに対して、自分の腕を

見せようと望んでいるのだろうか？ 遠慮なくKはためつすがめつして弁護士の顔を見るのだったが、相手そのものには何も変つたところが認められなかつた。わざと無口のような顔つきをして自分の言葉の効果を待つてゐるのだ、とほとんど考へることができる有様だつた。しかし、彼は明らかにKの沈黙を自分にとつてきわめて好意的に解釈したことが、次のように言葉を続けたことでわかつた。

「いずれおわかりのことと思ひますが、わしは大きな事務室を持つてはいますが、助手は一人も使つてはいません。以前はそれとちがい、二、三人の若い法律家がわしのために働いてくれていたときもあつたのですが、今ではわしひとりでやつています。その

理由は、わしが自分の専門を変え、だんだんあなたのケースのような法律事件だけをやるようにならためでもあります、また一部はこの種の法律事件によつていよいよ認識を深めたためです。わしの依頼人の方々や、わしが引受けた課題というものに對して罪を犯したくないと思うならば、こういう仕事は誰にもまかせられない、ということをきとつたのです。しかし、仕事も全部自分でやろうと決心したについては、それ相応の結果を生じました。すなわち弁護の依頼をほとんどすべてお断わりせねばなりませんでしたし、わしと特に親しい人々の言うことだけしかきけませんでした。——ところで、わしが投げ捨てた屑くずのひとつひとつに飛びつくやつらもたくさんいますし、しかもほんの身近にさえいる

始末です。そしてそのうえ、わしは過労で病気になつてしまいま
した。けれども、わしは自分の決心を後悔はしていませんが、わ
しが実際にやつたよりももつと弁護の仕事をお断わりすべきだつ
たのかかもしれません。しかし、お引受けした仕事にすっかり没頭
するということは、絶対に必要であるということがわかりもしま
したし、またよい結果で報いられました。わしはかつてある
書き物の中で、普通の法律事件の弁護とこういう法律事件の弁護
とのあいだの相違がきわめて巧みに表現されているのを見たこと
があります。そこにはこう書いてありました。つまり、普通の弁
護士は依頼人を細い糸で判決にまで導くが、別の弁護士は依頼人
をすぐ肩にかついで、それをおろしたりしないで、判決まで、さ

らにはそれを超えたかなたにまで連れてゆく、というのです。そのとおりですね。ですが、わしがこんな大仕事で全然後悔しないなんて言えば、一から十まで正しいとは言えませんね。たとえばあなたの場合のように、わしの仕事が完全に誤解されるとなると、わしもほとんど後悔しますよ」

Kはこんな談義で、納得させられるというよりは、むしろいらいらしてきた。弁護士の口調からなんとはなしに、自分を待つているものがなんであるか聞き取れるような気がした。いま譲るとなると、また例の慰め文句が始まるのだろう。願書が進捗^{しんちょく}しているということ、裁判所の役人たちの機嫌がよくなつたこと、だが仕事にはさまざま大きな困難が直面していること、要する

にそうしたいやになるほど知っているいつさいのことが持ち出され、またもや自分にはつきりとしない希望をいだかせたり、はつきりしない脅威で自分を苦しめたりしようとするのだ。そんなことはもう最終的に食い止めなくてはならない、と思ったので、彼は言つた。

「弁護をお続けになる場合、私の事件について何をやつてくださろうというのですか？」

弁護士はこの侮辱的な質問にさえ乗つてきて、答えるのだつた。「あなたのためにしてやつてまいつたことを、続行するんです」「そのことならまつたくわかっています」と、Kは言つた。「ですが今はもうそれ以上おつしやるにはおよびません」

「もう一回やつてみようと思うんです」と、Kを興奮させた事柄はKに関係があるのでなく自分に関係あることなのだ、とでもいうかのように弁護士は言つた。

「つまりわしはこう思うんだが、あなたはわしの法律顧問としての地位を間違つて判断されているばかりではなく、そのほかにも妙な態度をとられているが、そんな態度をとられるのは、あなたが被告であるのにおまりにいい待遇を受けていられる、あるいはもつと正しく言つて、どうでもいいというふうに、少なくとも外見上どうでもいいというふうに取扱われている、ということのわるい結果ですね。このどうでもいいというふうに取扱つ正在いることにも理由があるんですよ。つまり、自由であるよりも鎖

につながれているほうがいいということもしばしばあるもんじてね。だが、ほかの被告がどういうふうに取扱われているかということをあなたにお教えしたいと思いますが、そうすればおそらくあなたはそれから教訓を引出すこともできますよ。そこでこれからブロツク呼びますから、扉を開けてこここの夜間用の机のそばにおかけになつてください！」

「かしこまりました」と、Kは言い、弁護士が要求したとおりにした。いつでも学ぼうという心構えであつた。しかし、どんな場合に対しても安全な処置をとつておこうと思つて、彼はきいた。

「ですが、私があなたの弁護はお断わりしているということは、わかつていただけましたね？」

「わかりました」と、弁護士は言つた。「しかし今晚のうちにもあとほど後戻りされることがありますね」

彼はまたベッドに横になり、羽根布団を顎まで引寄せ、壁のほうに向き直つた。それからベルを鳴らした。

ベルの合図とほとんど同時にレーニが現われた。素早くあたりを見て、何が起つたのかを知ろうとした。ところがKが落着いて弁護士のベッドのそばにすわつていたので、ほつとした様子だつた。自分をじつと見つめているKに、微笑みながらうなずいてみせた。

「ブロックを連れておいで」と、弁護士は言つた。ところが彼女は、ブロックを連れてくるかわりに、ただ扉の前まで出て、叫ん

だ。

「ブロック！ 弁護士さんのところへいらっしゃって！」

それから、弁護士が壁のほうを向いたままで何も問題にしてはいないからであろうが、Kの椅子の後ろにこつそりとまわりこんだ。そうしてから、椅子のもたれの上に身体を曲げてきたり、もちろんきわめてやさしげに、また注意深げにだが、両手を彼の髪^{みのけ}毛^かの中に入れたり、頬をなでたりして、彼をうるさがらせるのだった。最後にKは、女の手をつかんでそんなことをさせまいとした。女はしばらく逆らつたが、やがて手を彼にまかせた。

ブロックは呼ばれてすぐやつてきたが、扉の前で立ち止り、はいつたものかどうかと考えている様子だつた。眉毛^{まゆげ}をつり上げ、

弁護士のところに来いという命令が繰返されまいかと聞き耳を立てているかのように、頭をかしげていた。Kははいるように彼を勇気づけてもよかつたが、ただ弁護士とばかりでなく、この家にあるいっさいのものと最後的に手を切ることに心をきめていたので、じつとしていた。レーニも黙っていた。少なくとも自分を追い払う者は誰もないとブロツクは見てとり、顔を緊張させ、後ろにまわした両手を痙攣けいれんさせながら、爪立つまだちではいってきた。扉は、退却してゆく場合のことを考えて、あけ放しにしておいた。

Kは彼の顔を全然見ずに、うず高い羽根布団を依然として見ていたが、弁護士はその布団にくるまつて壁ぎわまで身体を寄せていたので、姿が全然見えなかつた。しかし、その声だけは聞えた。

「ブロツクは来たかね？」と、彼がきいた。この問いは、すでにかなりな距離に進んでいたブロツクの胸に明らかに一撃を与える。次にまた一撃を背中に与えたので、彼はよろめき、背中を深く曲げて立ち止つて、言つた。

「おります」

「なんだと言うのだね？」と、弁護士は言つた。「都合のわるいときに入るんだね」

「お呼びではありませんでしたか？」と、ブロツクは弁護士にと いうよりは自分自身にきいてみて、身を防ぐように両手を前に出し、逃げてゆく身構えをした。

「呼びはしたんだが」と、弁護士は言つた。「都合のわるいとき

に来るんだね」

そしてしばらく間まをおいて、言葉を足した。

「君はいつも都合のわるいときにばかり来るね」

弁護士がしやべつてからは、ブロックはもうベッドのほうを見ず、むしろ部屋の隅すみのどこかを見つめ、話し手の視線があまりまぶしすぎて耐えられないというように、ただ耳を傾けるだけだった。だが、弁護士は壁に向つてしまへり、しかも声が低く口早なので、聞き取ることもむずかしかつた。

「帰つたほうがよろしいでしようか？」と、ブロックがきいた。

「もう来ちゃつたんだから」と、弁護士は言つた。「いなさい！」

弁護士はブロックの望みをかなえてやつたのではなくて、答むちで

打つぞとでもいうようにおどしたのだ、と思えそうだつた。今や

ブロツクがほんとうに震えはじめたからである。

「きのう昨日わしは」と、弁護士が言つた。「友人の第三席裁判官のところに行つたんだが、話がだんだん君のことになつた。彼が言つたことを聞きたいかね?」

「ぜひどうぞ!」と、ブロツクが言つた。

弁護士がすぐには返事をせぬので、ブロツクはもう一度懇願を繰返し、ほとんどひざまずかんばかりに身体をかがめた。ところがそのとき、Kが彼に囁かみついていつた。

「君はなんていうことをするんだ?」と、Kは叫んだ。

レーニが彼の叫ぶのを妨げようとしたので、彼は女のもう一方

の手もつかんだ。彼が女をしつかとつかんでいるものは、愛情の握りかたではなかつたし、女も繰返し溜息ためいきをして、両手をもぎ取ろうとした。ところが、Kが叫んだおかげでブロツクが罰を食つた。弁護士がこうきいたからである。

「君の弁護士はいつたい誰かね？」

「あなたです」と、ブロツクは言つた。

「で、わしのほかには？」と、弁護士がきいた。

「あなたのほかには誰もいません」と、ブロツクが言つた。

「それじゃ、ほかの人の言うこともきかないことだね」と、弁護士は言つた。

ブロツクは弁護士の言うことをすつかりのみこみ、悪意のこも

つた眼差しでKをじろじろながめ、彼に対して激しく頭を振つた。この動作を言葉に翻訳すれば、乱暴な罵倒ばとうだつたにちがいない。こんな連中とKは親しげに自分の事柄を語り合うつもりでいたのだ！

「もう邪魔はしませんよ」と、Kは椅子にもたれて言つた。「ひざまずいたり、四つばいになつたり、なんでも好きなようになさい」

ところがブロツクにも、少なくともKに対しては見栄みえというものがあつた。というのは、拳を振りまわしながらKに迫つてきて、弁護士の威をかりてその身近でだけやれるような大声で叫んだからである。

「あなたは私に対してもんなふうな口をきいてはいけません。それはよろしくありませんよ。なぜ私を侮辱なさるんです？ しかもこの弁護士さんの前で、なぜなさるんです？ ここでは、あなたと私の二人は、ただお慈悲で我慢していただいているんですよ。あなただつて告訴されていて訴訟にかかりあつているんですよ。あなたが紳士だというなら、あなたよりりつぱなどいうわけじやないけれども、私もあなたと同様紳士ですよ。そして、ことにあなたからは紳士として口をきいていただきたいですね。あなたはここで腰をかけ、落着いて話を聞いているのに、私のほうはあなたの言いかただと四つばいになつてているというので、あなたは優越感

を持つていらっしやるのなら、私は昔の判例のことと申しますよ。それは、容疑者にとつては静かにしているよりも動くほうがよろしい、なぜなら静かにしている者は、知らぬ間に秤^{ばかり}の上に乗り、罪を量られることにいつでもなるからだ、というんです」

Kは何も言わずに、ただこの混乱した男をまじろぎもせずにじつと見つめていた。ほんのこの数秒のうちになんという変化が起つたのであろう！ この男をあちらこちらと投げ出し、敵も味方も区別できなくさせているのは、訴訟なのだろうか？ 弁護士はわざとこの男を侮辱し、今はただKの前で自分の権力をを見せつけ、それによっておそらくはKのことも服従させようということだけをもくろんでいることが、この男にはわからないのだろうか？

だがブロツクがそういうことをざとることができず、あるいはさとつていても弁護士を非常に恐れているので何の役にもたたないのだとしても、それではどうして、弁護士をだまして、彼のほかにおほかの弁護士にやつてもらっているということを隠しているほど、狡猾こうかつで大胆なのだろうか？ またどうして、Kがすぐにも自分の秘密を暴露できるというのに、Kに食つてかかるというようなことをあえてやるのか？ ところが男はそれ以上のことをあえてやるのだった。弁護士のところへ行き、今度はそこでもKの苦情を言いはじめたのだった。

「弁護士さん」と、彼は言つた。「この男が私に口をきくのをお聞きになりましたか？ まだこの男の訴訟なんていうものは時間

で数えることができるくらいなのに、五年も訴訟をやつている私
のような者に、いいことを教えてやろうって言うんです。そのう
え私をののしりさえします。何も知らぬくせに、作法や義務や裁
判所の慣習が要求するところを微力ながらできるだけ詳しく勉強
してきた私というものを、ののしつたりするんです」

「人のことなんか心配するんじやないよ」と、弁護士が言つた。

「そして、君が正しいと思うことをやるんだ」

「おっしゃるとおりです」と、自分自身を勇気づけるように言い、
ちらと横眼を使いながらベッドのすぐそばにひざまずいた。

「このとおりひざまずいています、弁護士さん」と、彼は言つた。
だが弁護士は黙つていた。ブロツクは片手で控え目に羽根布団

をなでた。この場を支配している静けさの中で、レニーはKの両手から離れると、言つた。

「痛いわよ。放してちょうだい。あたしはブロツクのところへ行くわ」

女はそちちへ行き、ベッドの縁に腰をおろした。ブロツクは女が来たことを大いによろこんで、すぐさまかんな、しかし言葉には出さないしぐさで、弁護士に自分のことを取りなしてくれと頼むのだった。彼は明らかに弁護士の知らせを切に求めていたが、おそらくはただ、こうした知らせをほかの弁護士たちに利用しつくさせるという目的だけのためだった。レニーは、どうやつたら弁護士に取入れるかを、詳しく知つているようだつた。弁護士の

手を示して、接吻^{せつぶん}するように唇^{くちびる}をとがらせてみせた。すぐブロツクは手への接吻をやつてのけ、レニーのすすめるままに、さらに二度もそれを繰返した。ところが弁護士はまだ依然として黙りこくっていた。するとレニーは弁護士の上にしなだれかかつたが、このように身体を伸ばすと、彼女の美しく発育した身体がはつきりと見えるのだつた。そして、弁護士の顔のほうに深くかがみこんで、その長い、白毛の髪毛をなでた。これで彼は返事を一言言わざるをえなくなつた。

「どうもそれをこの男に話すことは躊躇^{ちゆううちよ}するんだが」と、弁護士は言い、頭を少し振るのが見られたが、おそらくそれはレニーの手の感触にもつとあずかるためにちがいなかつた。ブロツク

は、頭を少し振るが見られたが、おそらくそれはレニーの手の感触にもつとあずかるためにちがいなかつた。ブロツク

は、まるでこうやつて聞くことは命を犯すことでもあるかのよう、頭をうなだれて聞いていた。

「なぜ躊躇なさるんですの？」と、レニーはきいた。

Kは、すでにしばしば繰返された、そしてこれからもしばしば繰返されるにちがいない、ただブロツクにとつてだけ新鮮味を失わないような、よく覚えこまれた会話を聞くような気がした。

「あの男は今日はどんなふうだつた？」と、弁護士は答えるかわりに、きいた。レニーはそれについて述べる前に、ブロツクのほうを見下し、この男が両手を彼女のほうにあげて懇願しながらすり合せる有様をしばらくながめていた。最後に彼女は真顔でうなづき、弁護士のほうに向き直り、言つた。

「おとなしくして一生懸命でしたわ」

長い鬚を生やした老商人が、若い娘に有利な証言を嘆願するのだった。その場合に何か下心があるとしても、同じような立場にある一人の人間の眼にとつて、是認されることは何ひとつなかつた。弁護士がこんな見世場をやつて自分を手に入れようなどどうして考えることができるのか、Kには全然氣持がわからなかつた。自分をこれまで追いかけていたけれども、こんな場面を見せつけては今度こそ自分を離れさせることになるだろうに。弁護士はこの場に居合す者をほとんど侮辱しているのだつた。それゆえ、弁護士のやり口というのは、幸いにもKはたいして長いあいだその思いどおりにならなくてすんだのだが、依頼人が

ついに世の中のことすべて忘れ、ただ訴訟の終るまでこのよう
な迷いの道の上に身体を引きずつてゆくことを望むというように
させるものだつた。もう依頼人ではなく、弁護士の犬だつた。も
し弁護士が、まるで犬小屋の中にはい入るようにベッドの下には
い入つて、そこからほえてみろ、と命じたならば、この男はきつ
とよろこんでそうしたにちがいなかつた。ここで語られているす
べてを詳細に自分の胸に納めておいて、上級の場所でそのことを
訴え、報告することを任務とするもののように、Kは確かめ考え
こむようにじつと聞いていた。

「一日じゅうあの男は何をやつていたのかね？」と、弁護士はき
いた。

「あたしはあの人のことを」と、レニーは言つた。「あたしの仕事の邪魔をされないように、いつもいる女中部屋の中に閉じこめておきましたわ。隙間^{すきま}越しに、何をやつているかときどき見ることができましたの。いつもベッドの上にひざまずいて、あなたがお貸しになつた書類を羽根布団の上に開き、それを読んでいました。それはあたしにいい印象を与えましたわ。だって窓は通風孔に続いているだけで、光なんてささないんですもの。それなのにブロツクが読んでいるなんて、なんて従順な人だろう、と思いましたわ」

「そう聞いて、うれしいよ」と、弁護士は言つた。「だがちゃんとわかつて読んでいたのかね」

こんな会話が交わされるあいだ、ブロツクは絶えず唇を動かしていたが、明らかにレニーに言つてもらいたい返事をつぶやいてみているのだつた。

「もちろんそんなことは」と、レニーは言つた。「はつきりとはお答えできませんわ。とにかくあたしは、この人が徹底的に読んでいるのを見ましたの。一日じゅう同じページを読んでいて、読みながら指で一行一行たどつていましたわ。この人のほうをのぞきこむといつでも、読むことがひどく苦労なように溜息をついていました。この人にお貸しになつた書類は、きっとわかりにくいものなんですね」

「そうだよ」と、弁護士は言つた。「それはもちろんむずかしい

よ。わしはこの男にそれがいくらかでもわかつたとは思わないね。あの書類はただ、わしがこの男の弁護のためにやつてある闘いがどんなにむずかしいか、少しでも感じ取らせてやればよいのだ。

そしてこのむずかしい闘いを、わしはいつたい誰のためにやつているんだ？ それは——言うのもばかばかしいが——ブロツクのためなんだ。これが何を意味するかも、わしはこの男にわからせてやるよ。ひつきりなしに勉強していたかね？」

「ほんとひつきりなしでしたわ」と、レーニは答えた。「ただ一度だけ水が飲みたってあたしに頼みました。それで通風窓からコップ一杯渡してやりましたわ。それから八時にこの人を出してやつて、食物をあげました」

今ここでほめられているのは自分のことなのだ、そしてそれはKには印象を与えただろう、とブロツクは横眼でちらとKを見た。今は大いに有望と思っているらしく、身のこなしもいつそう伸び伸びとし、膝ひざであちこちと動いていた。それだけに、弁護士に次のように言われて凝然としてしまったのも、はつきりと見てとれるのであつた。

「お前はこの男をほめているね」と、弁護士が言つた。「しかし、そんなことをやると、まさにそのためにわしは話しくくなるんだよ。つまり裁判官は、ブロツクという男についても、それの訴訟についても、あまりよくは言わなかつたんだよ」

「よくは言わなかつたんですつて?」と、レニーはきいた。「ど

うしてそんなことがあるんですの?』

ブロツクは、今はとつぐに言われてしまつた裁判官の言葉を自分の都合のいいように曲げる力をこの女が持つていると信じているかのように、緊張した眼つきで女を見つめた。

『よくはなかつたね』と、弁護士は言つた。『わしがブロツクのこと話をはじめたら、不快そうになつた。『ブロツクのことはやめたまえ』と、言つたよ。そこで、『私の依頼人です』と、わしは言つた。『あなたはいいように使われているんだ』と、彼が言う。そこでわしは、『彼の事件はまだだめにはなつていないと、相手が繰返した。『そうは思いませんが』と、わしは言つて

やつた。『プロツクは訴訟に熱心で、いつも自分の事件を追いかけています。私の家に住み込みも同然になつて、いつでも情報に通じていようとしているのです。こんな熱心さは珍しいですよ。

確かに個人的には愉快なやつではないし、作法はなつていなくて、きたならしいけれど、訴訟の点では非の打ちどころがありません』とな。わしも非の打ちどころなくしゃべつたんだが、わざと誇張してやつたんだ。そしたら彼はこう言うんだ。『プロツクはするいだけだ。あの男はたくさん聞き込みをかき集めて、訴訟を引延ばすことを知っている。けれどあれの無知のほうがずるさよりもずっと大きいくらいだ。あれの訴訟なんか全然始まつていないとすることを聞いたら、そして、訴訟開始の鐘の合図も全然鳴ら

されたことがないと言つてやつたら、それに対してどう言うだろ
うか』brook、おとなしくするんだ」と、弁護士は言つた。ブ
ロックがよろよろする膝で立ち上がり、明らかに説明を求めよう
とする気配を示したからである。

弁護士がはつきりした言葉でずばりとbrookに向つて言つて
のけたのは、これが初めてだつた。疲れた眼で半ばはどこともな
く、半ばはbrookのほうを見下したが、brookはこの眼差を
見て、またへなへなとひざまずいてしまつた。

「裁判官のこんな言葉は、君には全然意味を持たないんだよ」と、
弁護士は言つた。「どうか一言ごとに驚かないでもらいたいね。
そんなことが繰返されると、もう全然打明けられないよ。一言話

しはじめるに、今こそ最終判決が下されるのだというような顔つきで見つめられるんだからねえ。ここにはわしの依頼人もいらっしゃるんだから、少しは恥を知つてもらいたい！　この方がわしにおいてくださつてある信用というのも台なしにしてしまうよ。

いつたい、どうしてくれつていうんだい？　まだ君は生きているし、まだわしの後楯うしろだてつていうものがあるんだ。つまらぬ心配というものだよ！　最終判決は多くの場合、思いがけずに、任意の人の口から任意な時に下される、ということを君はどこかで読んだはずだ。いろいろな留保条件はあるが、それはもちろんほんとうだ。だが、君の心配はわしに不愉快だし、わしはその中にわたしに対する必要な信頼の欠如というものを見る、ということもほ

んどうだ。いつたいわしが何を言つたかね？ ある裁判官の言つたことをそのまま伝えただけだよ。君も知つてはいるとおり、さまざまな見方が手続きの周囲に積み重なつて、見通すことができないほどになつてゐるんだ。たとえばこの裁判官は手続きの始まりというものを見方は別な時期において考へてはいるんだよ。見解の相違というもので、何もそれ以上のものじやないよ。訴訟のある段階において、昔からのしきたりで鐘が鳴らされる。この裁判官の見方によると、それで訴訟が始まるというんだ。それとちがう意見を今全部君に言つて聞かせることはできないし、聞いたところで君はそうしたものを見るのはしないだろうが、それとちがう意見はたくさんあるというだけで君には十分だ」

ブロツクは当惑して下にうずくまり、ベッドの前に敷いてある小絨じゅうたんの毛を指でさすつていた。裁判官の言つたことが気がかりで、弁護士に対する自分の従順さもしばらくは忘れてしまい、ただ自分のことだけを考え、裁判官の言葉をあらゆる方向にこねまわしていた。

「ブロツク」と、レーニはたしなめる調子で言い、上着の襟えりを引つとらえて少し上へ引つ張つた。

「もう毛なんかなでのをやめて、弁護士さんのおつしやることを聞きなさいな」

(編集者マックス・ブロート注 本章未完)

第九章

伽藍がらんで

Kは、銀行にとつてたいへん大切な、そして初めてこの町に滞在したあるイタリア人の顧客にいくつかの芸術上の旧跡を見せるよう、という命を受けた。この命令は、ほかのときならばきっと名譽に感じたでもあろうが、今では、大いに努力してやつと銀行での信用を保てるという有様なので渋々引受けた。事務室から引離される一刻一刻が、彼を心配させた。事務室にいる時間はとつくにもう以前のように利用できなくなつていたし、多くの時間はただほんとうに仕事をしているようにやつと見せかけて過すのだつたが、それだけに、事務室にいないと心配が大きかつた。出

かけるとなると、しょつちゅう自分をうかがつていた支店長代理がときどき自分の事務室にやつてきて、自分の机にすわり、書類をくまなく探し、多年この自分とほとんど友達同然になつている顧客に応接し、自分と疎隔させ、そればかりでなくさまざま失策さえも暴露する有様が、眼に見えるように思えてしかたがなかつた。そういう失策にはKは今では仕事をしているあいだしよつちゆう四方八方から脅やかされていることがわかつていたが、もう避けることができなくなつていた。そのため、こんな晴れがましい場合であつても、商用外出やちょっとした出張旅行を命じられる——またこんな命令が最近たまたまたび重なつたのだが——しばらく自分を事務室から遠ざけて自分の仕事を調べあげるつ

もりなのだろうとか、あるいは少なくとも、自分は事務室ではいなくてもちつとも困らぬと思われているのだ、という想像をいつも持ちやすかつた。こういう命令の多くは苦もなく断われるのであつたが、あえて断わる気にはなれなかつた。たとい恐れはほとんどまつたく根拠がないものであるにせよ、命令を断わることは自分の不安な心持を告白することになるからであつた。こうした理由から、このような命令を見かけはさりげなく受け、骨の折れる二日がかりの出張をしなければならなかつたときも、よくない風邪^{かぜ}のことを黙つてさえいた。このごろの雨模様の秋の時候を引合いに出されて出張をとめられる危険にさらされたくはない、というだけのためにだつた。この出張から激しい頭痛をこらえて帰

つてきたとき、次の日にはイタリア人の顧客のお供をするようきめられている、ということを聞き知った。少なくともこの一回だけは断わろうという誘惑は非常に大きかつたし、何よりも、この場合自身に命じられることになつていることは、直接商売とは関係のない仕事だし、顧客に対してもういう社交的な義務を果すことはそれだけでは疑いもなく十分大切なことなのだが、Kにとつては大切なことではなかつた。彼は、仕事の成果によつて自分の地位を保つてゆけるのであつて、それがうまくゆかなければ、このイタリア人を思いがけずほれこませることになつてもまつたく価値はないのだ、ということをよく知っていたのである。彼は一日でも職場から追い出されたくなかった。もうもどしてはもらえ

ないのであるまいかという恐怖があまりに大きかつたからであるが、その恐怖は、思いすごしだと非常によくわかつていたが、彼の心をしめつけるものだつた。もちろんこの場合には、うまい口実を設けることはほとんど不可能だつた。Kのイタリア語の知識はたいして多くなかつたが、ともかく役にたつ程度だつた。しかし決定的なことは、Kが前からいくらか美術史の知識を持つているということだつた。そのことは、Kがしばらく、もつともただ商売上の理由からだけだつたのだが、この町の美術遺跡保存会のメンバーであつたために、きわめて誇大に銀行に知れわたつていたのだった。ところがさて、噂に聞くとそのイタリア人は美術愛好家だということであり、それゆえ、Kがその案内役に選ばれ

たのは当然のことであつた。

雨の激しい、荒れ模様の朝だつたけれども、Kはこれから控えている一日のことに腹をたてながら、七時にはすでに事務室に行つたが、イタリア人の訪問にかかりきりにさせられるまえに少なくともいくらかの仕事を片づけるためであつた。少し準備しておこうとして、半夜をイタリア語の文法の勉強に過したので、非常に疲れていた。最近ではあまり頻繁^{ひんぱん}に窓ぎわにすわりすぎることになつて、その窓のほうが今朝も机よりも彼をいつそう誘うのだつたけれども、そんな気持に抗して仕事するために腰をおろした。ところが残念なことにちようど小使がはいつてきて、業務主任さんはもういらつしていなか見てくるように、支店長

さんが自分をよこしたのだ、と言つた。もしいらつしやるなら、恐縮だが応接室に来ていただきたい、イタリア人の方はもう来ておられる、ということだつた。

「すぐ行くよ」と、Kは言い、小さな辞書をポケットに入れ、外国人のために用意されている町の名所のアルバムを腕にかかえ、支店長代理の事務室を抜けて支店長室にはいつていつた。誰もきっとまじめには期待していなかつたはずだが、こんなに早く事務室にやつてきて、すぐに求めに応じられることを彼はよろこんでいた。支店長代理の部屋はもちろんまだ深夜のようにがらんとしており、きっと小使は代理のことも呼ぶように命じられたのであらうが、それは果せなかつたのだつた。Kが応接室にはいつてゆ

くと、二人の紳士は深い肘掛け椅子から身体を起した。支店長は親しげに微笑し、Kが来たことを大いによろこんでいて、すぐに紹介の労をとつたが、イタリア人はKの手を力強く握り、微笑しながら誰かのことを早起きだと言うのだつた。Kは誰のことを言つているのかはつきりはわからず、そのうえそれは特別な言葉だつたので、その意味はしばらくしてやつとわかつた始末だつた。彼は二、三のお世辞文句で応対したが、それをイタリア人はまた大きく笑いながら受取り、同時に何回か神経質そうな手で灰青色のもじやもじやな鬚ひげをなでていた。この鬚は明らかに香水が振つてあり、近づいて嗅かぎたいという誘惑を感じさせられた。三人が腰をおろし、ちょっとした前口上が始まつたとき、Kは、イタリア

人の言うことは自分には切れ切れにしかわからないと気づいて、
大いに不快になつた。まつたくゆつくりと話してくれればほとん
ど完全にわかつたが、そんなことはただまれな例外の場合であつ
て、たいていはこの男の口から話がわき出てきて、それを興がる
ように頭を振るのだつた。ところがこんな話をしているうちに周
期的にどこかの方言に巻きこまれ、それはKにはもう全然イタリ
ア語とは思えなかつたが、支店長はそれがわかるばかりでなく、
しやべりさえした。それは、そのイタリア人が支店長も二、三年
いたことのある南イタリア出身だつたので、Kももちろん予想で
きることだつた。ともかくKは、自分からはイタリア人と理解し
合う可能性が大部分奪われてしまつたことを、思い知つたのだつ

た。この男のフランス語もまつたくわかりにくく、唇の動きを見ればおそらく理解に役だつたことだろうが、それも鬚に隠れて見えなかつたからである。Kは、いろいろ不都合なことがこれから起ることを予想しはじめ、イタリア人の言うことをわからうとすることはあらかじめあきらめてしまい、——相手の言うことがきわめて容易にわかる支店長の前では、そんなことは無益な努力と思われた——不快げにイタリア人の様子を観察するだけにきめた。イタリア人は、深々と、しかし気楽げに肘掛椅子におさまり、短い、きりつとした仕立ての上着を何回となく引っ張り、一度は腕を上げ、関節でぐらぐら動く両手で何かを描いてみせようとするのだつた。Kは、前に乗り出してその両手を眼から離さなかつた

けれども、そのジエスチャ―の意味はわからなかつた。話のやりとりを機械的に視線で追うだけで、そのほかはまったく手持ちぶきたなKに、ついには前からの疲れが力を振いはじめ、ぼんやりしてまさに立ち上がり、向き直つて立ち去ろうとするところで、はつと気づき、びっくりしたが、幸いにもまだ間に合つた。とうとうイタリア人は時計を見て、とび上がつた。支店長に別れを告げてから、Kのそばに押しかけてきたが、しかもあまりに身近にまでやつてきたので、Kは身動きするためには自分の肘掛椅子を後ろへずらさなければならなかつた。支店長は、Kの眼を見てこのイタリア語にぶつかつてすつかり困り抜いているのをきつとさとつたのであろうか、二人の対話に割りこんできたが、しかもそ

れがきわめて聰明^{そうめい}で纖細なしかたであつたので、外見上はただ
ちよつとした助言を添えているように見えながら、実は、疲れる
ことなく彼の言葉をさえぎつてしゃべりかけるイタリア人の言う
ことを、きわめて手短かにKにわからせてくれるのだった。支店
長からKが聞いたところによると、イタリア人はまだいくらかの
仕事をあらかじめやらなければならぬし、また残念なことに全
体を通じてきわめてわずかしか時間がない、また自分としても急
いで名所を全部駆けまわつて見ようというつもりは全然なく、む
しろ——といつてもちろん、Kが賛成してくれるかぎりにおいて
であつて、その決定はただKの意見にだけかかっているが——た
だ伽藍^{がらん}だけを、しかしこれは徹底的に見物することに決心した。

こんな学問もあり親切でもある方に——それはKのことを言つて
いるのだが、Kはただイタリア人の言うことを聞きもらして、支
店長の言葉を素早くつかみ取ることだけしかやつてはいないので
つた——ご案内いただいてこの見物を企てることを非常によろこ
んでいるが、もし時間がおよろしければ、二時間後、およそ十時
に伽藍のほうにどうかお出ましねがいたい。自分はそのときには
かならずそこに行けると思う、ということだつた。Kは適当なこ
とをいくらか答えたが、イタリア人はまず支店長と握手し、次に
Kと握手し、もう一度支店長の手を握つて、二人に見送られながら、
半分だけ彼らに身体を向けるだけだが、おしゃべりは依然と
してやめずに、扉のほうに行つた。その後、Kはなおしばらく支

店長といつしょだつたが、支店長は今日は特に傷心の様子だつた。Kになんとかわびねばならぬと思ひこんでいるらしく、——二人は親しげに身体を寄せていつしょに立つていた——初めは自分でイタリア人のお供をするつもりだつたが、次に——詳しい理由は言つて聞かせなかつた——むしろKに行つてもらおうと決心した、と言つた。イタリア人の言つことが初めからすぐわかるくとも、それに呆然ぼうぜんとしてしまう必要はないのだ、ほんのすぐにわかるようになるし、またといたいしてわからないとしても、そんなにわるいことではない、なぜならイタリア人にとっては相手にわかつてもらうことはそういうにして重要なことではないのだから。ところであなたのイタリア語は驚くほど上手だし、きつと用事を

見事にすますことだろう、と言うのだった。

それでKは支店長と別れた。まだ残つてゐる時間は、伽藍への案内に必要な、日常語ではない言葉を辞書から書き抜いて過した。これはきわめて厄介な仕事だつた。小使たちが郵便物を持つてくるし、行員がいろいろ問い合わせに来て、Kが仕事をしてゐるのを見つけて、扉のところで立ち止るが、Kが聞いてやるまでは立ち去ろうとしなかつた。支店長代理はKの邪魔をしないではおらず、たびたびはいつてきては彼から辞書を取上げ、明らかに全然意味もないのにそれをめくつて見るのだった。扉があくと、控室の薄暗がりの中には顧客たちさえ浮び上がり、ちゆううちよ 躊躇しながら会釈をして見せた——彼らはKの注意をひこうとするのだが、見てもら

つて いるかどうか自信がないのだつた。—— こういうことのいつ
さいが、Kを中心としての ように彼のまわりで動いており、彼そ
の人のほうは必要な言葉を組み立ててみて、次には辞書で言葉を
捜し、書き抜き、また発音をやつてみたり、最後には暗記しようと
試みるのだつた。ところが彼の昔のよい記憶力はすっかり彼を
見捨てたらしく、自分にこんな骨折りをかけるイタリア人には何
度も非常な憤りを覚えたので、もう準備などはすまいと固く心を
きめて辞書を書類の中に埋めたが、次には、イタリア人と連れ立
つて伽藍の中で美術品の前を黙りこくつてあちこちと歩くわけにも
ゆくまいとさとつて、いよいよ憤慨しながら辞書をまた取出す
のだつた。

ちようど九時半に、彼が出かけようとすると、電話の呼び出しがあつて、レーニがお早うを言い、どうしているかときいてきたので、Kは急いでありがとうございましたと、伽藍へ行かねばならないので、今は話しているわけにはゆかないと言つた。

「伽藍にですつて？」と、レーニはきいた。

「そうだよ、伽藍に行くんだ」

「なぜ伽藍になんか行くの？」と、レーニは言つた。

Kは手短かに説明しようとしたが、それを始めるか始めないかのうちに、レーニが突然言つた。

「あなたは追い立てられているのよ」

自分が求めもせず、期待もしていなかつたこんな同情は、Kに

は我慢がなならず、たつた二言三言ばかりで別れの挨拶あいさつをしたが、受話器をその場所にかけながら、半ばは自分自身に、半ばはもう聞いてはいない遠くの娘に言うのだつた。

「そうだ、おれは追い立てられているのだ」

だがもう遅くなつてしまい、約束の時間に間に合うように到着できないという危険がすでにあつた。自動車で行つたが、出かけらまぎわにアルバムのことを思い出し、さつきそれを渡す機会がなかつたので、今度持つてゆくことにした。膝ひざの上にのせ、車中ずっと落着きなくその上をたたいていた。雨は弱まつたが、湿っぽく、寒くて暗かつたので、伽藍の中はほとんど見られないだらうが、きっとそこで、冷たい敷石の上に長いあいだ立たねばなら

ないため、自分の風邪はきわめて悪化するだろう、と思われた。

伽藍の前の広場は全然人けがなく、小さな子供のときすでに、この狭い広場の家々はいつもほとんどすべての窓掛けがおりてている。ということは眼についたものだつたのを、思い出した。今日のようない天気の場合には、それはもちろん、平生よりは理解できることがだつた。伽藍の中も人けがないらしかつたが、こんなときにやつてこようという気に誰もならないのは当たり前のことだつた。両側の内陣を通つたが、暖かい布にくるまつてマリアの像の前にひざまずき、それを見上げている老婆ただ一人に出会つただけだつた。次に、もう一人の跛の寺男が壁の扉に消えてゆくのを遠くから見た。Kは時間きつかりに来て、ちようどはいつたとき十時が

打つたのだが、イタリア人はまだ来ていなかつた。Kは正面口にもどつて、決心がつきかねてそこにしばらく立つていたが、イタリア人がきつとどこかの横手の入口のところで待つているのではないか見ようとして、雨の中を伽藍のまわりを一まわりした。相手はどこにも見あたらなかつた。支店長が時間の約束を取違えたのだろうか？　だがおよそ誰であつてもあんな人間の言うことを正しく理解できるものだろうか？　だがそれはどうあらうと、ともかくKは少なくとも半時間は彼のことを持たねばならなかつた。疲れていたので、すわろうと思い、また伽藍にはいつてゆき、階段の上に小さな絨毯じゅうたんの端切れのようなものを見つけて、爪先でそれを近くの長椅子まで引つ張つてゆき、外套がいとうにしつかり

とくるまつて襟えりを高く立て、すわった。気晴しのためアルバムを開き、少しちゃくつてみたが、非常に暗くて、眼を上げても身近の内陣の中の細かなところがほとんどひとつとして見分けることができないくらいなので、すぐやめなければならなかつた。

はるかかなたの主祭壇の上には、大きな三角形を形づくつた蠟燭ろうそくの火が燃えていた。さつきすでにそれを見たかどうかは、K ははつきりと断言はできなかつた。おそらく今初めてつけられたものらしかつた。寺男たちは商売柄忍び歩きの名人で、人に気づかれないものだ。K が偶然振向くと、自分の背後の程遠からぬところで、背の高い、太い、柱に取りつけの蠟燭が同じように燃えているのを見た。これはきれいだつたが、多く側祭壇の暗がりの

中にかかつてゐる祭壇画を照らすにはまつたく不十分であり、むしろ暗さを増してゐるようなものだつた。イタリア人がやつてこなかつたのは、無礼でもあるがしかし道理にかなつた振舞いでもあつたわけで、たといやつてきたところで何も見られなかつただろうし、Kの懷中電燈で二、三の絵を一インチぐらいずつ探つて見ることで満足せねばならなかつたことだろう。そうやつてどのくらいのことができるものかためそうとして、Kは近くの側礼拝堂へ行き、低い大理石の手すりまで、二、三段の階段を登り、それから身体を乗り出して、懷中電燈で祭壇の絵を照らした。万年燈が眼前にちらついて邪魔になつた。Kが見て、一部分何だかわかつた最初のものは、絵のいちばん端に描かれている、大柄な、

かつちゅう
甲胄

を着けた騎士であつた。——眼前の裸の地面に——ただ二、三本の草の茎がそこここに生えていただけだつた——突き立てた剣に、身体からだをささえていた。眼前に演じられている事件を注意深く観察していいる様子だつた。そうやつて立ち止り、近づいてゆかないのは、不思議だつた。おそらく、見張りをするよう命じられてはいるのであろう。すでに久しく絵を見ていなかつたKは、

懐中電燈の青い光が耐えられないで、しょつちゅうまたたきをしなければならなかつたが、その騎士の像をかなり長いあいだ見ていた。次に光を絵のほかの部分の上にかすめさせると、ありふれた解釈に基づいたキリスト埋葬図であり、そのうえそれは、比較的新しい絵であつた。彼は懐中電燈をしまつて、また元の場所

へ帰つた。

イタリア人を待つことは今はもう不必要と思われたが、外は豪雨にちがいないし、この場所もKが予期したほど寒くはなかつたので、しばらくここにいることに決心した。すぐ身近なところに大きな説教壇があり、その小さな、円い天蓋には、半ば横になつて二つの黄金の素の十字架がつけられてあり、そのいちばん尖端で相交わっていた。手すりの外側の壁と、それが支柱へつながる部分とは、緑の葉形模様でつくられていて、小さな天使たちがあるいは元気よく、あるいは静かに憩いながら、その葉をつかんでいた。Kは説教壇の前に歩み寄つて、八方から観察してみると、石の細工はきわめて念入りであり、葉形模様のあいだとその

背後とには深い暗黒が、まるではめこまれ取りつけられたように見え、Kはこうした隙間すきまのひとつに手を置き、次に石に用心深くさわつてみたが、この説教壇の存在はこれまで知らなかつたのだった。そのとき、すぐ近くの椅子の並びの後ろに、一人の寺男が偶然見えた。だらりとした、襞ひだの多い、真つ黒な上着を着て、左手には嗅かぎ煙草入れを持ち、Kをじつとながめていた。あの男はどうしようというのだろう、とKは思つた。おれはあの男にうさんくさく見えるのだろうか？　酒代さかででももらいたいのか？　ところが、寺男はKに見られているのに気がつくと、右手で、その二本の指にはまだ一つまみの煙草を押えていたが、どこか漠然とした方向をさした。その挙動はほとんど不可解なので、Kはなお

しばらく待つてみたが、寺男は手で何かを示すことをやめず、そのうえうなずいてそれを裏づけるのだつた。

「いつたいどうしろというのだろう？」と、Kは低い声で言つたが、ここで叫ぶことはやらなかつた。次に財布を取り出し、いちばん近くのベンチを通り抜けてその男のところへ行つた。ところが男はすぐ手で拒絶の動作を示し、肩をすくめると、跛びっこで逃げだした。Kは子供のとき、この急ぎ足の跛と同じような歩きかたをしては、馬に乗る格好をまねようとしたものだつた。

「子供みたいなやつだ」と、Kは考えた。「あの馬の頭では寺男の役目でも十分には勤まるまい。あの男はなんという格好で、おれが立ち止ると自分も立ち止り、おれが行こうとすると、様子を

うかがつて いるんだろう」

微笑しながらKはその老人に続き、内陣をすっかり通り抜けて祭壇の上にまで登つていったが、老人は何かを指さすことをやめず、Kは、その合図は自分を老人の足跡からそらそうという以外の目的がないと思われる所以で、わざと振向かなかつた。ついにはほんとうに追いかけることをやめたが、相手をあまり恐ろしがらせたくはなかつたし、イタリア人が万一來た場合のために、この化け物をすっかり追つ払つてしまいたくはなかつたからだつた。

アルバムを置き忘れた場所を捜しに内陣の中央にはいつてゆくと、祭壇合唱隊用のベンチにほとんどくつついているひとつの柱に、きわめて簡単に、飾りけのない蒼ざめた石でできた小さな副あお

説教壇を見つけた。それは非常に小さいので、遠くからは聖人像を納めることになつていて、空の壁龕のように見えた。説教者は手すりからまる一歩とさがれないにちがいなかつた。そのうえ、説教壇の石の円天井は異常に低いところから始まり、装飾は全然ついてはいないがきわめて彎曲して上へ昇つてゐるため、中くらいの男でもそこにはまつすぐには立てず、しょっちゅう手すりの前に身体を乗り出していなければならぬほどだつた。すべてがまるで説教者を苦しめるためにつくつたようなもので、ほかなり大きな、りつぱに飾つた説教壇が使えるのだから、この壇をなんのために必要とするのかわからなかつた。

説教の直前に用意することになつてゐるランプが上のほうにつ

いていなかつたなら、Kはこの小さな説教壇にもきつと気づかなかつたことだろう。これで見ると今から説教でも行われるのだろうか？ こんなからっぽの教会でやるのか？ Kは階段を見下ろしたが、それは柱にからみつきながら説教壇へと続いており、非常に狭いので、人間が通るためではなく、ただ柱の装飾に使われているようだつた。ところが説教壇の下のほうに、ほんとうに僧が立つていたので、Kは驚いて薄笑いしてしまつたが、僧は登壇する身構えで手すりに手をかけ、Kのほうを見ていた。それから軽く頭でうなずいたので、Kは十字を切り、身体をかがめたが、そんなことはもつと前にやらなければならなかつたのだ。僧はちよつととび上がつて、短い、足早な歩みで説教壇を登つていつた。

ほんとうに説教が始まるのだろうか？ きっと寺男は思つたほど頭がないわけではなく、Kを説教者のところへ狩り出そうとしたのだろうか？ これはもちろん、からっぽの教会ではきわめて必要なことだつたわけだ。さらにどこかのマリアの像の前に老婆がいたから、それも来なければならぬだろう。そして、ほんとうに説教だというなら、オルガンの序奏がなくてよいだろうか？ しかしオルガンは静まりかえつて、その見上げるようには高い暗闇の中から、ただぼんやりとのぞいているだけだつた。

今のうちできるだけ早く出てしまうべきではないか、とKは考えた。今そうしなければ、説教のあいだに出てゆける見込みはなかつたし、そうなると説教の続くかぎり居残らねばならない。イ

タリア人を待つために事務室でもかなりの時間を失つたし、もうとつくに自分の義務はないはずだ。時計を見ると、十一時だつた。だがいつたい、ほんとうに説教がやられるものだろうか？ Kだけが聴衆となるわけだろうか？ もし自分がただ教会を見物しようとするだけの外国人だつたら、どうなのだろうか？ 根本的には自分もそれと大差はないのだ。今は十一時で、ウイークデー、こんなすさまじい天氣だというのに、説教があろうなどと考へることはばかげていた。僧は――疑いもなく僧だつたが、平べつたい、いんうつ陰鬱な顔をした若い男だつた――誤つてつけられたランプを消そうとして登壇したにすぎぬことは明らかだ、と思われた。ところがそうではなく、僧はむしろランプを調べて、さらに燈

心を少しねじり上げ、ゆっくりと手すりのほうに向き直つて、角ばつた前方の縁を両手で握つた。そうやつてしばらく立ち、頭は動かさずにあたりを見まわした。Kは相当の距離とびすさつて、肘^{ひじ}で一番前列の礼拝席ベンチに身をさえた。不安定な眼差し^{まなざし}で、場所をはつきりと見定めることはできないがどこかに例の寺男が、背を曲げ、もちろん仕事を終えたとでもいうような格好で、かがんでいるのを見た。なんという静けさが今の伽藍の中には支配していることだろう！しかし、Kはその静けさをかき乱さねばならなかつた。ここに居続けようというつもりがなかつたからである。きまつた時間には、状況などはいつさいおかまいなしに説教するのが僧の義務であるならば、そうすればよいのだし、Kの助

力などがなくともりっぱにできるはずで、またKがいるからといって格別効果が高まるはずのものでもなかつた。それゆえ、Kは歩きだし、爪立ちでベンチに沿つて手探りで行き、広い中央通路まで来て、そこでも全然邪魔されずに歩いていつたが、ただどんなに足音を殺してみても石造の床が響き、円天井は、かすかに、しかし絶え間なく、積み重なつてゆく規則正しい歩みに合わせて、こだまするのだった。おそらく僧に見守られ、人けのないベンチのあいだをただひとり通り抜けてゆくとき、Kは少し見捨てられたような感じを味わい、また彼には、伽藍の大きさがまさしく人間にとつてまだ耐えうるもの限界にあるように思われた。さつきの場所に来ると、それ以上どどまることもせずに、まつしぐら

にそこにあつたアルバムにつかみかかり、それを取上げた。彼がベンチのあたりを離れ、それと出口とのあいだにある空いた場所に近づくか近づかないかのうちに、初めて僧の声を聞いた。力強い、磨きのかかつた声である。その声は、それを受取る用意のできた伽藍になんと響き渡つたことだろうか！　ところが僧が呼びかけたのは聴衆ではなく、それはまつたくはつきりとしていて、もう逃げ道は全然なかつた。彼は叫んだのだつた。

「ヨーゼフ・K！」

Kはぴたりと立ち止り、眼前の床を見つめた。まだしばらくは自由であり、まだ歩み続け、彼のところから程遠からぬ三つの小さな黒ずんだ木の扉のどれかを通つて逃げることもできた。そう

すれば、それはまさに、自分には言うことがわからなかつた、あるいは言うことは聞き取つたがそんなことを問題にはしたくない、という意味を表わすことになつただろう。しかし、もし振返つたならば、言うことはよくわかつたし、自分はほんとうに呼びかけられた本人であつて、言うことに従う、ということを告白したことになるのだから、しつかりとつかまれてしまふ。僧がもう一度叫んだなら、Kはきつと立ち去つてしまつただろうが、Kが待つてゐるのにいつさいが静かなままなので、僧が今何をやつてゐるのかを見ようとして、少し頭を向けた。僧はさつきと同じように落着いて説教壇上に立つていたが、Kの頭の動きを認めたことはつきりとわかつた。こうなつてはKが完全に振向いてしまわな

いと、子供じみた隠れん坊遊びになつてしまふだろう。Kは振返ると、僧に指の合図で、近くに来るよう呼び寄せられた。もはやいつさいは公然となつたので、Kは——そうしたのは好奇心からでもあり、また用事を手短かにすませるためだつたが——大股おおまたで飛ぶように説教壇に向つて駆け寄つた。最前列のベンチのところで立ち止つたが、僧には距離がまだ遠すぎるようと思われるらしく、手を伸ばし、人差指を銳く下に曲げて説教壇のすぐ前の場所を示した。Kもそのとおりにしたが、この場所では、僧を見るためには頭をよほど後ろへ曲げねばならなかつた。

「君はヨーゼフ・Kだね」と、僧は言い、片手を漠然たる動作で手すりに上げた。

「そうです」と、Kは言つたが、以前にはいつも自分の名前をなんと公然と言えたことだろうかと思つた。最近ではこの名前が重荷であつて、今では初めて出会う人々さえも自分の名前を知つてゐる。まず自己紹介をし、それから初めて知合いとなるのは、なんといふことだろう、と考えるのだった。

「君は告訴されているね」と、僧はことさら低い声で言つた。

「そうです」と、Kは言つた。「そう言われました」

「それじや、君が私の捜していいた人だ」と、僧が言つた。「私は
教誨師きょうかいしだ」

「ああ、そうですか」と、Kは言つた。

「君と話すために」と、僧が言つた。「君をここまで呼ばせたの

だ

「それは知りませんでした」と、Kは言つた。「私がここへ来たのは、あるイタリア人に伽藍を案内するためです」

「よけいなことは言わぬよう」と、僧は言つた。「手に持つているのはなんだ？」
祈禱書きとうしょかね？」

「いいえ」と、Kは答えた。「町の名所アルバムです」

「手から離しなさい」と、僧が言つた。

Kはアルバムを非常に激しく投げ捨てたので、それはぱらぱらと開き、ページがくしゃくしゃになつて床の上を少しきべつた。

「君の訴訟は旗色がわるいが、知つてゐるかね？」と、僧はきいた。

「私にもそう思われます」と、Kは言つた。「できるだけの努力をしてきましたが、これまで効果がありません。確かに、願書をまだ仕上げておりません」

「結局どうなると思うかね?」と、僧がきいた。

「前にはきっとうまく片づくだろうと思つていましたが」と、Kは言つた。「今ではときどき自分でもどうかと思います。どうなるかはさっぱりわかりません。あなたはおわかりですか?」

「いや」と、僧は言つた。「しかし、おそらくうまくはゆくまい。人は君のことを罪があると考えているぞ。君の訴訟はおそらく下級裁判所を全然脱しえまい。人は、少なくともしばらくは、君の罪は立証されたものと考えていてるぞ」

「でも私には罪はないのです」と、Kは言つた。「それは間違いです。いったいどうして、およそ一人の人が有罪だなんてことがありえましょうか？ここにいる私たちとは、あなただつて私だけて、みんな人間です」

「それはそうだが」と、僧は言つた。「罪のある連中はいつでもそういうふうに言うものだ」

「あなたもまた私に対して偏見を持っているんですか？」と、Kがたずねた。

「偏見なんか持つてはいない」と、僧は言つた。

「それありがたいですが」と、Kは言つた。「手続きに関係している人々はみな、私に対して偏見を持っているんです。彼らは

またそれを関係のない人々にも吹きこむんです。私の立場はいよいよむずかしくなるばかりです」

「君は事実を見誤つているんだ」と、僧は言つた。「判決は一時に下るものではなく、手続きがだんだんに判決に移り変つてゆくんだ」

「それじゃ、そうですかね」と、Kは言い、頭を垂れた。

「さしあたつて君の事件についてどうしようと思うのかね?」

「もつと助けを捜そうと思います」と、Kは言い、僧がそれをどう判断するか見ようとして、頭を上げた。「私が利用しつくしていないある種の可能性がまだあるんです」

「君はあまり他人の援助を求めすぎる」と、僧は不機嫌^{ふきげん}そうに言

つた。「そして特に女にだ。いつたい、そんものはあてにならぬ援助だということがわからないのかね？」

「ときどきは、いやしばしば、あなたのおっしゃるとおりです」と、Kは言った。「しかし、いつもそうだと申せません。女たちは大きな力を持つています。もし私が、自分の知っている二、三人の女たちを動かして、協力して私のために働くたら、私は間違いなくやり抜くことでしょう。ことにこの裁判所ではそうです。ほとんど女の尻しりを追いかけまわす連中ばかりから成り立っていますよ」

僧は頭を手すりのほうに曲げたが、今やつと説教壇の天蓋が彼を抑えつけはじめたようだつた。外はどんな荒天だろうか？ もう陰鬱な日中ではなく、すでに夜もふけていた。いくつもの大窓のガラス絵は、暗い壁にほんの一筋の淡い光でも投げかけることはできなかつた。そしてちょうど今、寺男は主祭壇の蠟燭をひとつひとつ消しはじめた。

「気をわるくされたんですか？」と、Kは僧にきいた。

返事がなかつた。

「どんな裁判所に勤めているか、あなたは知らないのです」と、

Kは言つた。

上ではなお依然として森閑としていた。

「私はあなたを侮辱するつもりはないんです」と、Kが言つた。

そのとき、僧が下のKに向つてどなつた。

「いつたい君は二歩前方が見えないか？」

怒りでどなつたが、同時にまた、誰かが倒れるのを見た人が、自分も驚いてしまつたので、不用意に、われ知らず叫んだようでもあつた。

二人は長いあいだ黙つていた。僧は下のほうを支配している暗闇の中でKをはつきりとは見られなかつたらしいが、Kのほうは僧を小さなランプの光の中にはつきりと見た。なぜ僧は降りてこなかつたのか？ 彼は説教はせずに、Kに二、三のことと述べただけだつたが、よく考えてみると、Kのためになるよりは害にな

るようなものに思われた。しかし、確かにKには僧の善意は疑いないように思われ、もし降りてきたら、意氣投合することも不可能ではなく、またたとえば、どうやつて訴訟は左右されるかというようなことではないが、どうやつて訴訟から逃れるか、どうやつてそれを避けるか、どうやつて訴訟の外に生活できるか、ということを示すような決定的で承認できる忠告をもらうことも不可能ではなかつた。こういう可能性はあるにちがいなく、Kは最近何回となくそのことを考えたのだつた。しかし、僧がもしこういう可能性のひとつを知つてゐるなら、彼自身裁判所の人間であるし、Kが裁判所を攻撃したときは、優しい本性を抑えつけてKをどなりつけはしたけれども、頼めばきつと明かしてもらえるはず

だ。

「降りてきませんか？」と、Kは言つた。「説教をなさるわけで
もないでしよう。降りていらつしやい」

「もう降りてもいい」と、僧は言つたが、おそらくどなつたこと
を後悔しているらしかつた。ランプを鉤かぎからはずしながら、彼は
言つた。

「初めは離れて君と話さなければならなかつたんだ。そうでない
とあまりに人に左右されやすくなつて、役目を忘れてしまうんで
ね」

Kは階段の下で僧を待つた。僧は降りてきながら階段の上のほ
うからもうKに手を差出した。

「私と話してくださる時間が少しありませんか？」と、Kはきいた。

「要るだけいくらでも」と、僧は言い、Kに持つてもらうため、小さなランプを渡した。近くにあつても、一種のいかめしさが彼の身体から消え去らなかつた。

「たいへんご親切なことです」と、Kは言い、二人は並んで、暗い内陣の中をあちこちと歩いた。

「裁判所の人たち全部のうちで、あなただけは例外だ。たくさんの人を知っていますが、あなたをほかの誰よりも信頼しますね。あなたとなら打明けて話ができる」

「早まつちやいけない」と、僧が言つた。

「早まるつてどういう点でですか?」と、Kがきいた。

「裁判所のことだよ」と、僧が言つた。「法律の入門書には、君の
のような惑いについてこう書いてある。——

おきて 捷の前に一人の門番が立つていた。この門番のところへ一人の
田舎の男がやつてきて、捷の中へ入れてくれと願つた。しかし門
番は、今ははいることを許せない、と言つた。男は考えていたが、
それでは後でならはいついいのか、ときいた。『それはできる』
と、門番は言つた、『だが今はだめだ』捷へはいる扉はいつもの
ようにあけ放しだし、門番は脇へ行つたので、男は身体をかが
めて、門越しに中をのぞこうとした。門番はそれを見て、笑つて
言つた。『そんなにはいりたいなら、わしの禁止にそむいて中へ

はいろいろとしてみるがいい。だがいいか。わしは力を持っている。
それでもいちばん下つ端したばの門番にすぎない。広間から広間へと門
番が立つていて、だんだん力が大きくなるばかりだ。三番目の門
番の顔を見ることだけでもわしにはもう我慢ができない』こんな
困難は田舎の男の予期しなかつたことだが、捷というのは誰にで
もいつでも近寄れるはずだ、と考えた。しかし、毛皮の外套を着
た門番、その大きな尖り鼻とが、長くて薄い、真っ黒な韁靼人風の
鬚ひげをよくよく見ているうち、はいる許可がもらえるまでむしろ待
とうと決心した。門番は男に床几しようぎを与え、扉の脇ですわらせた。
そこで何日も、何年も男はすわっていた。男は、入れてもらおう
とさまざまな試みをし、うるさく頼んで門番をうんざりさせた。

門番はときどき男をちよつと尋問し、男の故郷のことやそのほかさまざまなことをきいたが、いずれもお偉方のやるような無関心な質問で、最後にはいつもきまつて、まだ入れることはできない、と言うのだった。旅のためにたくさん準備を整えてきた男は、門番を買収しようと思い、どんなに貴重なものであろうとすべてつかい果した。門番のほうはなんでももらうにはもううが、『何か手を尽さなかつたと君が思わないように、もらつておこう』と言いうのだった。長年のあいだ、男はほとんど絶え間もなく門番を観察し続けた。ほかの門番のことなど忘れてしまい、この最初の門番こそ揃にはいる唯一の障害だと思うようになつた。初めの頃は声を大にして不運な偶然を呪つていたが、後に年をとつてゆくと、

ぶつぶつつぶやくだけであつた。子供のようになつてしまい、長年にわたつて門番を観察していた結果、その毛皮の襟に蚤たちがいることを知り、自分を助けてくれるように、そして門番を説き伏せてくれるよう、と蚤たちに頼んだりした。ついに視力が弱まり、自分の周りまわがほんとうに暗くなつたのか、それとも自分の眼が錯覚を起しているのか、わからなくなつた。しかし今や暗黒を通して、撻の幾重もの扉から消えることなくさし出てくる輝きをはつきりと認めた。もう長くは生きまい。死の前にあつて、彼の脳中には全生涯のあらゆる経験が相集まつて、これまで門番に投じたことのないひとつの質問となつた。硬直しつつある身体をもう起すことができないので、門番に目くばせの合図をした。門

番は深く身体をかがめなければならなかつた。なぜなら、背丈のちがいは、男のほうがずっと不利なように変つてしまつていたからである。『いつたい、いまさら何を知りたいんだ』と、門番はきいた、『お前はよく飽きもしないな』『誰でもみな撃を求めているのに』と、男は言つた、『私のほか誰も入れてくれと求める者がいなかつたというようなことに、どうしてなつたのですか？』門番は、男がすでに臨終にあるのを知り、薄らいでゆく聴力に届くように、大声でわめいた。『ここではほかの誰もが入れてもらえなかつたのさ。なぜなら、この入口はただお前のためときまつっていたからだ。どれ、わしも出かけよう。そして門をしめよう』「それじゃあ、門番は男をだましたんですね」と、その話に非常

に強くひきつけられたKは、すぐ言つた。

「先走つちやいけない」と、僧が言つた。「他人の意見を吟味しないで受取るもんじやない。わしは君に、この話を本に書いてあるとおりに話したんだ。だますとかいうようなことについては全然書いてない」

「でもそれは明瞭めいりょうですよ」と、Kは言つた。「そしてあなたの最初の解釈がまつたく正しかつたんです。門番は解決の言葉を、それがもう男には役にたたなくなつて初めて言い聞かせたんです」「門番はその前にはきかれなかつたんだ」と、僧は言つた。「またよく考えてもらいたいが、彼は門番にすぎないんだし、門番としては義務を果したわけだ」

「義務を果したつて、なぜそう思われるんですか?」と、Kはきいた。「果しはしませんね。彼の義務はおそらく、縁のない者はすべて追い払うということであつたのでしょうかが、その入口をはいることにきまつているその男は、入れてやるべきだつたのでしよう」

「君はこの書物に十分敬意をはらつておらず、話をつくり変えているんだ」と、僧は言つた。「この話は撻にはいるのを許すことについて、二つの重要な門番の言明を含んでいる。ひとつは冒頭、ひとつは結末にあるんだ。そのひとつの個所には、男に今ははいることを許せないと書いてあり、もう一個所には、この入口はお前だけのものだ、とある。この二つの言明のあいだに矛盾があれ

ば、君の言うことが正しいのであって、門番は男をだましたことになろう。ところが全然矛盾がないんだ。反対に、第一の説明は第二のを暗示さえしている。門番は、男に将来ははいることを許す可能性があるという見込みを与えることによつて、義務を逸脱したのだ、とほんと言つことができよう。そのころには男を追い払うというだけが彼の義務であつたらしく、事実この書物の多くの注釈者も、門番が厳密さというものを愛するように見え、厳格に自分の役目を守つているのに、およそそんな暗示をほのめかしたことについて、不思議に思つてゐる。多年のあいだ自分の持場を離れず、まったく最後というときになつて初めて門をしめるし、自分の役目の重大さというものをきわめて自覚してゐるんだ。

なぜなら、『わしには力がある』と言うからだ。上役に対する尊敬というものを知っている。『わしはただいちばん低い門番だ』と言うからだ。多年のあいだ、この本に書いてあるように『無関心な質問』を投げるだけだったのだから、おしゃべりでもないし、贈り物については『何か手を尽さなかつたと君が思わないように、もらつておこう』と言うのだから、賄賂わいろうのきくような男でもない。義務の遂行に関しては、動かされたり、泣き落しにかかつたりはない。なぜなら、この男について、『うるさく頼んで門番をうんざりさせた』と書いてあるからだ。最後に彼の外貌がいぼうもそのペダンチックな性格を暗示している。大きな尖り鼻、長くて薄い、真つ黒な韃靼人風の鬚とある。これより義務に忠実な門番はまた

とあるだろうか？さてところで、この門番にはさらに別の特徴もあつて、それははいることを求める人間にきわめて好都合なものであり、ああいうように将来の可能性などをほのめかして自分の義務をいくらか逸脱したということも、それによればともかくうなずけるというものだ。つまり、この男は少し単純であり、またそれと関連して少し己惚うねぼれが強い、ということは否定できない。自分の力、ほかの門番たちの力、それからそういう門番たちを見ると彼には我慢できないということ、そういうことについての彼の言い分は——わしは思うんだが、これらの言い分はみなそれ自体として正しくはあるが、彼がこうすることを持ち出すやりかたは、彼のとらえかたが単純さと思い上がりとによつて曇らされて

いるということを示すものだ。注釈者たちはこの点に関して、『ある事柄の正しい把握^{はあく}と同じ事柄の間違つた解釈とは互いに完全に排除し合うものではない』と言つてゐる。ともかく、あの單純さと思い上がりとは、おそらく微々たる現われかたしかしないのであれ、入口を守るという仕事を損じてゐることは認めないわけにはゆかず、それが門番の性格にある隙^{すき}なのだ。そのうえさらに、この門番は生れつき親切らしいということがある。彼はまつたくのところいつも役人になりきつていたとは言えないのだ。男に対してはつきりと断固たる禁止をしてゐるにもかかわらず、はいることをすすめてみるような冗談を、初めのころにやつているし、次に男を追い払うようなことをやらないので、この本の書い

ているところだと、床几を与え、扉の脇にすわらせている。多年を通じて男の懇願を我慢強く聞いてやつた忍耐、ちよつとした尋問の数々、贈り物を受取つたこと、ここに門番を配置した不運な偶然を男が自分のそばで大声で呪うのを許していた高貴さ——こういうものはすべて、同情を働かしたものと結論できる。どんな門番でもこんなふうに振舞うとはかぎらぬはずだ。そして最後にまだ男の合図を見て深く彼のほうに身体をかがめ、最後の質問の機会を与えてやるのだ。ただちよつとしたいらだたしさが——門番は実に、万事がおしまいだということを知つてゐるのだ——

『お前はよく飽きもしないな』という言葉に現われてゐるだけだ。多くの人はこの解釈のしかたをさらに押し進めさえして、『お前

はよく飽きもしないな』という言葉は、一種の親しみを含めた感嘆を表わすものであるとしているが、もちろんこの感嘆は卑下の気持が全然ないわけではないとしている。いずれにせよ、門番の全貌は君が思いこんでいるのとは、全然ちがうよう結論されるわけだ』

「そりやあ、あなたはこの話を私より詳しく知っているし、またずっと前から知っているんですからね」と、Kは言つた。

二人はしばらく黙つていた。やがてKが言つた。

「それじゃああなたは、男はだまされたんじやない、と思うんですか？」

「私の言うことを誤解しちゃいけない」と、僧が言つた。「わし

は君にただ、この話について行われているいろいろな意見を教えているだけだ。君はいろいろな意見をあまり尊重してはいけない。書物は不変であつて、いろいろな意見などはしばしばそれに対する絶望の表現にすぎないのだ。この場合についても、だまされたのはまさに門番のほうだ、とするような意見さえあるくらいだ」「それは極端な意見ですね」と、Kは言つた。「どういう根拠に基づいているんですか?」

「根拠は」と、僧は答えた。「門番の単純さというもののから出ている。門番は掟の内部を知らないのであつて、ただ道だけを知つてゐるのだが、その道も入口の前でいつもやめなくてはならない、というのだ。彼が内部について持つてゐるイメージは、子供らし

いものと考えられるし、男を恐れさせようとするものを自分でも恐れているのだ、と認められる。まつたく、彼のほうが男よりもそれを恐れているのだ。なぜならば、男は内部にいる恐ろしい門番たちの話を聞いてさえもただはいることだけを望んだのに、門番のほうははいろいろとは思わず、少なくともそれについては何事もわかつていなかである。ほかの注釈者は、捷に仕えるよう採用されたのであるし、こういうことはかならず内部でだけ行われるはずであるから、門番は内部にいたことがあるにちがいない、と言つてはいる。それに対して答えられることは、内部からの呼び声で門番に命じられたのかもしれないが、三番目の門番を見てもう我慢ができないくらいだから、少なくとも内部の奥深くまで

行つたことはありえないはずだ、ということだ。ところでそのうえ、多年のあいだに門番たちについて述べているほかに何か内部について語つたということが、書いてもない。それは禁じられたのかかもしれないが、その禁止についても語つてはいない。そういうことから結論されているのは、内部の有様や意味について何も知らないし、それについて錯覚している、ということだ。しかしました、田舎いなかの男に対しても錯覚していたにちがいない。なぜなら、この男に対して下位にありながら、それを知らないからである。男を自分よりも下位の人間として取扱つたことは、君もまだ覚えているだろうが、多くの点からわかることだ。ところが、門番のほうが実は下位にあるということは、この論者の意見によ

ると、同じようにはつきりと推論されるというのだ。何よりもまず、自由な人間というものは束縛された者よりも上位にあるものだ。さて、男のほうは事実自由であり、どこへでも行きたいところへ行けるし、ただ掟への入口だけが、彼には通行禁止になつているだけだが、そのうえ、門番というただ一人によつて禁じられているにすぎない。門の脇の床几に腰をかけて、そこに一生涯とどまつていたのも、自由意志でやつたことであり、この話はなんら強制ということを語つてはいない。それに反して門番はその役目によつて持場に縛られており、外に離れることもならず、どうもいくら欲しても内へも行くこともならぬらしいのだ。そのうえ、掟に仕えているとはいえ、ただこの入口のために仕えているので

あり、したがつてただこの入口ばかりからはいれることになつて
いるこの男だけのために仕えているわけだ。この理由からも門番
は男の下位にある。彼は多年にわたつて、壯年時代を通じてある
意味ではただむなしい役目を果していたにすぎないと言いうる。
なぜなら、一人の男がやつてきたと書いてあるのだから、壯年の
何者かが来たわけであり、したがつて門番はその目的が果される
まで長いあいだ待たねばならず、しかも自由意志でやつてきたそ
の男の気の向きよう次第で待たねばならなかつたからだ。ところ
がこの役目の終りもその男の生涯の終りに規定されていて、した
がつて最後まで男の下位に居続けるわけだ。そして、門番はそう

いうことについて何も知つてはいないうだ、ということが繰返

し強調されている。しかしその点に關してなんら著しく着目すべきことは見られない。なぜなら、この見解によると門番はもつとずっと重い錯覚にいたのであって、その錯覚は役目に關することなのだからである。すなわち最後に入口のことをしやべり、『わしも出かけよう。そして門をしめよう』と言つてゐるが、冒頭には、掟への門はいつものように開いてゐるとあり、もしいつも開いてゐるのなら、いつもというのはこの門からはいってゆくべき男の生涯には関係ないという意味だから、門番もその門をしめることはできぬわけだ。門番が門をしめようと言つて、ただ返答をしておこうというだけのものなのか、あるいは役目の義務を強調しようとしたのか、それともその男を最後の瞬間ににおいても後悔

と悲しみとにおどしいれようとしたのか、その点に関しては諸家の意見はいろいろに分れている。しかし、彼は門をしめることができないはずだ、という点では多くの人々は一致した意見である。これらの人々は、男が捷の入口からさしてくる輝きを見たのに、門番その人はきっと入口を背にして立つており、何か変化を認めたという素振りを全然示さなかつたのであるから、少なくとも最後のときにおいては、その知においても門番は男の下位にあつたのだ、とさえ信じている」

「りつぱに理由がつきましたね」と、僧の説明のところどころの個所を低声につぶやきながら繰返していたKは、言つた。「りつぱに理由がつきましたね。そして私も今では門番がだまされたも

のと信じます。けれど、そうだからといって私の以前の意見をやめてしまつたわけではありません。というのは、二つの意見は互いに部分的に重なり合うからです。門番がはつきり見ていたのか、あるいはだまされたのか、ということははつきりきまらないと思います。男はだまされた、と私は言いました。もし門番がはつきりと見てているのなら、それを疑つてみることもできましようが、門番がだまされたのだとすれば、その錯覚は必然的に男へ移つてゆかねばなりません。そうなると門番は欺瞞者ぎまんしゃではないけれども、非常に単純なのですぐに役目からおはらい箱にされなければならぬでしょう。門番の陥つている錯覚は彼を少しも害しはしなかつたが、男には千倍も害を与えたということを、あなたはよく

考るべきです」

「それにはこういう反対説があるんだ」と、僧は言つた。「つまり多くの人々は、この話は誰にも門番について批判を下す権利を与えていない、と言うんだ。門番がわれわれにとつてどう見えようとも、彼は捷に仕える者であり、したがつて捷に属し、したがつてまた人間の批判を超える。^こまた、門番は男の下位にある、といふことも信じてはならない。役目によつてただ捷の入口に縛られているということは、自由に世間で生活するよりも比較にならぬくらいよいことだ。男は初め捷のところへ来るのだが、門番はすでにそこにいる、彼は捷によつて役目につけられているのであり、その威厳を疑うことは、捷を疑うことを意味する」

「そんな意見に私は賛成しかねますね」と、Kは頭を振りながら言つた。「なぜなら、もしこの意見に賛成するならば、門番の言ったことをすべて真実と考えなくてはなりません。ところが、そういうことはありえないということを、あなた^ご自身詳しく理由づけたんですからね」

「いや」と、僧は言つた。「すべてを真実だなどと考えてはいけない、ただそれを必然だと考えなくてはならないのだ」

「憂鬱な意見ですね」と、Kは言つた。「虚偽が世界秩序にされているわけだ」

Kは結論的にそう言つたが、彼の終局の判断ではなかつた。あまりに疲れていて、その話のあらゆる結論をこと^ごとく見渡すこ

とができなかつたし、その話が彼を導いていったのは不慣れな思考法でもあつた。彼にというよりも裁判所の役人の一味の論議にふさわしいような、非現実的な事柄だつた。単純な話が形のゆがんだものとなつてしまい、そんなものを自分から振落してしまいたかつたが、今は大いに思いやりを見せるようになつた僧は、それを見逃してくれ、自分の意見とKの言葉とは確かに一致しないのだが、それを黙つて受入れるのだつた。

二人はしばらく黙つたまま歩み続け、どこにいるのかわからないま、僧のすぐそばにくつついていた。Kの手にしているランプはとつくに消えてしまつていた。一度、ちょうど彼の眼の前で聖人の銀の立像がただ銀の輝きだけできらめき、すぐまた暗闇へ

と消えていった。すっかり僧に頼りきりになつてゐるわけにもゆかないので、Kはきいた。

「もう正面入口の近くじゃありませんか？」

「いや」と、僧は言つた。「まだだいぶ遠い。もう帰りたいのか？」

Kはちょうどそのとき帰ることを考えていたわけではなかつたが、すぐ言つた。

「そうです、帰らなければなりません。私はある銀行の業務主任で、銀行では私を待つています。私がここにやつてきたのはただ、外国人の顧客に伽藍を案内するためです」

「それじゃあ」と、僧は言い、Kに手を差出した。「行きたまえ」

「でも真っ暗でひとりでは見当がつきかねるのですが」と、Kは言つた。

「左の壁のほうに行き」と、僧は言つた。「それから壁に沿つて壁を見失わないようにして行けば、出口が見つかるよ」

僧が二、三歩離れるか離れないかのうちに、Kはきわめて大声で叫んだ。

「どうか待つてください！」

「待つよ」と、僧が言つた。

「まだ何か私に用はありませんか？」と、Kがきいた。

「ない」と、僧が言つた。

「前はたいへん親切してくれ」と、Kは言つた。「私に万事を

説明してくれたのに、今はもう私のことなんかどうでもいいというように私を見捨ててしまうんですね」

「だが、君は帰らねばならないんだろう」と、僧は言つた。

「そうですが」と、Kは言つた。「今言つたことをよく考えてください」

「まず君は、わしが誰かをよく考へることだ」と、僧は言つた。

「教誨師です」と、Kは言い、僧のほうに近づいた。すぐ銀行に帰るということは、彼が言つたほど必要なことではなく、ここにとどまつていもいつこうにさしつかえなかつた。

「それだから私は裁判所の人間だ」と、僧は言つた。「そうだとしたらなぜ君に用事があろう。裁判所は君に何も求めはしない。

君が来れば迎え、行くなら去らせるまでだ」

第十章 終末

Kの三十一歳の誕生日の前夜——夜の九時頃で、街の静かになるときだつた——二人の紳士が彼の住居にやつてきた。フロツクコート姿で、蒼白くあおじろ、身体は肥つて、びくともしないようなシリクハツトをかぶつていた。初めての来訪なので家の玄関でちよつと儀礼じみたことをやつた後、Kの部屋の前では、同じ儀礼じみた動作をもつと大仕掛けに繰返した。来訪は告げられていなかつたが、Kは同じように黒の服装で、扉の近くの椅子にすわり、

指にぴったりと合う新しい手袋をゆつくりとはめていたが、まるで客を待っているような態度だつた。すぐ立ち上がり、紳士たちを物珍しげに見つめた。

「私のところに来るようきまつっていたのはあなたの方でしたか？」
と、彼はきいた。

紳士たちはうなずき、一人は手にしたシルクハットでもう一人のほうを示した。Kは、自分は別な訪問客を待つていたのだ、と思つた。窓ぎわへ行き、もう一度暗い通りをながめた。通りの向う側の窓々もほとんど全部もう暗くなつていて、多くの窓にはカーテンがおろされていた。二階の明りのついたひとつ窓では、格子の後ろで小さな子供たちが遊んでいたが、まだ自分の場所か

ら動くことができないで、小さな手で互いにさわり合っていた。

「老いぼれた、下つ端したばの役者をおれのところへよこしゃがつた」と、Kはつぶやき、もう一度そのことを確かめるために、振向いた。「手軽なやりかたで、おれのことを片づけようとしているんだ」

Kは突然、彼らのほうを向き、きいた。

「どこの劇場でやつておられるんですか？」

「劇場？」と、一人は口もとをぴくぴくさせながら、もう一人のほうに意見を求めた。もう一人のほうは、全然手の下しようのない生物体と闘っている唾おしのような身振りであつた。

「質問される心構えができるいいようだ」と、Kはつぶやき、

帽子を取りにいった。

階段の上で早速、二人はKの腕を取ろうとしたが、Kは言つた。
「通りに出てからにしてください。私は病気じやないんだから」
ところが門の前に来るとすぐ、Kがこれまで人と歩いたことの
ないようなやりかたで、Kの腕を取つた。二人は肩を彼の肩のす
ぐ後ろにくつつけ、腕を曲げないで、むしろそれを利用してまつ
すぐのままKの腕にからませ、下のほうでは、訓練の行き届いた、
慣れた、反抗できぬようなつかみかたで、Kの両手をとらえた。

Kは身体をこわばらせて二人のあいだにはさまれて歩いていった
が、今では三人が統一を形づくっているので、一人が倒されれば、
全部がめちゃめちゃにされてしまうほどだつた。ほとんどただ無

生物だけが形づくりうるような統一だつた。

街燈の下で、Kはしばしば、こんなにくつついているのでやるのはむずかしかつたが、自分の部屋の薄暗がりではできなかつたほどはつきりと、二人の連れを観察しようとした。

「きつとテノール歌手なんだろう」と、Kは二人の重々しい二重顎あごをながめて思つた。彼らの顔の清潔さが、Kをむかつかせた。
眼尻めじりをなで、上唇うわくちびるをこすり、顎の皺しわをかくきれいな手も、はつきりと見えた。

Kがそれに気づいて立ち止ると、そのためにほかの二人も立ち止つた。広々とした、人けのない、さまざまな施設で飾られた広場にいた。

「どうしてあんた方みたいな人をよこしたんだろう！」と、きく
というよりも叫んだ。

二人はどう返事をしていいかわからぬらしく、病人が休もうと
するときの看護人のように、腕を垂れたた、遊ばせたまま、待つてい
た。

「もう歩かない」と、Kはためしに言つてみた。二人はそんなこ
とに返答する必要はなく、つかみかたをゆるめず、Kをその場か
ら連れ去ろうとすれば十分だつたが、Kは抵抗した。

「もう大いに力を振うというどころでなく、根限りの力をつかつ
てみよう」と、彼は考えた。脚を引っ張られながら、
蠅取紙はえとりがみか
ら逃げようともがく蠅たちのことが思い出された。

「この連中もたいへんな仕事をやらねばなるまい」

そのとき彼らの眼前に、低くなっている小路から小さな階段を伝わつてビュルストナー嬢が広場へと登ってきた。その女がそうだということはまったく確かではなかつたが、もちろん似ていることは大いに似ていた。だが、それが確かにビュルストナー嬢であるかどうかはKにもたいした問題ではなく、ただ自分の抵抗の無意味さがすぐ彼の意識にのぼつてくるのだつた。抵抗し、今二人を大いにしてこずらせ、拒みながらも生の最後の輝きを味わおうと試みても、それはなんら英雄的なことではなかつた。彼は歩きだし、それによつて二人をよろこばせたことが、いくらか自分自身に報いられる結果になつた。Kが道をどの方角にとつても二人

は黙つてゐるので、彼は女が彼らの前で歩いてゆく道についてゆくことにきめた。何か女に追いつこうとか、できるだけ長く女を見ていたいとかいうためではなく、ただ女が彼にとつて意味する警告を忘れないためだつた。

「おれが今なしうる唯一のことば」と、彼はつぶやいたが、自分の歩みと二人の歩みとがぴつたり合つてゐることが彼の考えを裏づけるように思われた。「おれが今なしうる唯一のことばは、冷静に処理してゆく理性を最後まで保つことだ。おれはいつも二十本もの手を持つて世の中にとびこもうとしたのだつたが、そのうえあまり適当でない目的のためにだつたのだ。それは間違つていた。一年間の訴訟がおれに全然教えるところがなかつたということを、

おれは見せるべきだろうか？ 物わかりの鈍い人間として退場すべきだろうか？ 訴訟の初めにはそれを終えようと願つたのに、その大詰になつた今ではまた始めたいと思つてゐるなどと陰口を言われてよいものだろうか？ そんなことを言われたくない。この道中、おれに対してもこんな半分唾おしのような、物のわからぬ連中を付き添わせてくれたこと、そして勝手氣儘きままに必要なことをつぶやくままにさせておいてくれたこと、これはありがたいことだ』 そうしているうち、女は横町に曲つてしまつたが、Kはもう女には用はなく、同伴者たちにまかせきりになつていた。今や三人全部が完全にわかり合つて月光の中のある橋を渡つた。Kが示すどんな小さな身動きにも、男たちは今はよろこんで従い、Kが少

し欄干のほうに向うと、彼らもすっかりそちらを向いた。月光の中に輝き震えている水は、ひとつ小さな島で分れ、その島の上には、一まとめにされたように樹や灌木の葉簇が盛り上がり上がっていた。それらの葉簇の下には今は見えないが、快適なベンチのある砂利道^{じやりみち}が通つていて、それらのベンチにKは幾夏も身体を伸ばしたりしたものだつた。

「立ち止るつもりは全然なかつたんです」と、Kは同伴者たちに言い、彼らがいかにも自分の意のままにしてくれるのを恥ずかしく思つた。一人はもう一方の男に、Kの背後で、間違つて立ち止つたことについて軽くとがめているようだつた。それから彼らはまた歩いていった。

登り坂の小さな道をいくつか行つたが、そこにはあちらこちらに警官たちが立ち止つたり、歩いたりしていた。あるいは遠くのほうに、あるいはすぐ近くにいるのだつた。もじやもじやの鬚ひげを生やした一人の警官が、サーベルの柄に手をかけ、何かいわくありげに、まつたくうさんくさくないとは言いきれぬこの一行に近づいてきた。二人の男は立ち止り、警官が今にも口を開きそうに見えたとき、Kはぐいと二人を前へ引っ張つていつた。警官がついてきはしないか、と彼は幾度も振返つてみた。ところが彼らと警官とのあいだに少し距離が開いたとき、Kが走り始めたので、二人の男たちも息をはずませながらいつしょに走らなければならなかつた。

こうして彼らは大急ぎで町から出た。町はこの方角では、ほとんど変り目というものがなく、すぐ野原に続いていた。まだまったく町らしい趣をとどめている一軒の家のそばに、小さな石切場が、見捨てられ、荒涼として、横たわっていた。この場所が初めから彼らの目的地だつたのか、あるいはあまり疲れてもうこれ以上走れなくなつたからか、ここで二人は立ち止つた。そして、黙つたまま待ちかまえているKを手放し、シルクハットを脱ぎ、石切場を見まわしながら、額の汗をハンカチでぬぐつた。あたり一面に、ほかの光にはないような自然らしさと落着きとをもつて、月光がふり注いでいた。

さて次の仕事はどちらがやらねばならぬのかという点について

いくらか懲懲な応酬を交わして後——二人は分担をきめることなく任務を受けてきたらしかつた——一人がKに歩み寄り、彼ら上着、チョッキ、さてはシャツまでもはぎ取つた。Kは思わず知らず身震いすると、その男は軽く、なだめるようにKの背中をたたいた。それからそれらの着物を、今すぐではないが要ることもあるという品物のように、丁寧に取りまとめた。Kがじつとしていて冷たい夜氣にさらされ放しにならないよう、男はKの腕を取り、あちこちと少しばかり歩いたが、もう一人の男は石切場でどこか適当な場所を捜していた。それを見つけると合図をし、もう一人がKをそこへ連れていった。採掘石壁の近くで、そこには切られた石があつた。二人はKを地上に置き、その石にもたれ

させ、頭を上向きに寝かせた。彼らがいろいろ努力したにもかかわらず、またKが彼らの意にかなうことを行つてみせたにもかかわらず、Kの姿勢はきわめて窮屈で、信じられないようなものだつた。そこで一方の男は、Kを寝かすことをしばらく自分だけにまかせるようにと頼んだが、そうやつてみてもよくはならなかつた。とうとうKをひとつ姿勢に置いたのだが、けつしていちばん具合のよい準備完了の姿勢ではなかつた。次に一方の男がフロツクコートを開き、チョッキのまわりに締めた帶にかかる鞆^{さや}から、長くて薄い両刃の肉切庖^{ぼうちょう}丁^{とう}を取り出しそうかざして、月の光で刀を調べた。また例の不愉快な懃懃さが始まり、一方がKの頭越しに小刀をもう一人に渡し、その男はま

たそれをKの頭越しにもどした。Kは今やはつきりと、小刀が手から手へと自分の頭上で行き来しているとき、自らそれをつかみ、自分の身体をえぐるのが義務だろうということを、知つたのだつた。しかし、彼はそうはしないで、まだ自由な頸^{くび}を動かして、あたりを見まわした。完全に身のあかしをたてることはできず、役所からあらゆる仕事を取除くこともできなかつたが、この最後の失策に対する責任は、それに必要な力の残りをおれから拒んだやつが負うのだ。彼の眼^{まなざし}差は石切場に接した家のいちばん上の階に注がれた。明りがつくと、ひとつつの窓の扉が開き、はるかに高いところにいるので弱々しく、瘦^やせて見える一人の男が、ぐつと前に身体を乗り出し、腕をいつそう広くひろげた。いつたい誰だ

? 友人か？ いい人間か？ 関係している人間か？ 助けてくれようとする者か？ 一人だけなのだろうか？ たくさんの人間がいるのだろうか？ まだ助かる見込みはあるのか？ 忘れられていた異議があるのか？ きっとそんな異議があるはずだ。論理は揺るがしがたいが、生きようと欲する人間には、その論理も対抗することはできない。おれが見なかつた裁判官はどこにいるんだ？ おれがそこまでは行きつけなかつた上級裁判所はどこにあるのだ？ 彼は両手を上げ、指をことごとくひろげた。

しかし、Kの喉^{のど}には一人の男の両手が置かれ、もう一方の男のほうは小刀を彼の心臓深く突き刺し、二度そこをえぐつた。見えなくなつてゆく眼で、Kはなおも、二人の男が頬^{ほお}と頬とを寄せ合

つて自分の顔の前で決着をながめている有様を見た。

「まるで犬だ！」と、彼は言つたが、恥辱が生き残つてゆくよう
に思われた。

断章六編

エルザのもとで

ある日、Kが出かけようとしていた直前、電話で呼び出され、すぐ裁判所事務局に来るよう求められた。これに従わぬことのないよう念をおされた。彼が述べた前代未聞みもんの言葉、すなわち尋問は無益であつて、なんの効果もないし、またなんの効果もあげることはできないということ、もうけつして出頭はしないということ

こと、電話や文書で召喚されてもそんなものは問題にしないし、使いの者は扉とびらから放り出してやるということ、そういうことはすべて記録としてとつてあるし、すでにKにとつてきわめて不利なものになつた。なぜ命令に服したくないのか？ 時間と金とを惜しまず、裁判所は君のこみいつた事件を解決しようと努力してきたのでなかつたか？ 君はそれに気儘きまま勝手に水をさし、裁判所がこれまで君に対して猶予してきた強制処置をとらせようとするのか？ 今日の召喚は最後の試みである。君はどうであろうと好きなようにしてよろしいが、高級裁判所は嘲ちようろう弄ろうされて黙つてはいないということをよく胸に置んでおくべきだ、というのだつた。

ところでKは、その晩、エルザを訪問するよう言つてあつたので、この理由からだけでも裁判所には行けなかつた。それによつて裁判所に出頭しないことを理由づけることができることを彼はよろこんだが、もちろんこんな理由を使う気は全然なかつたし、この晩にほかの前約が全然なかつたとしても裁判所には行かないということはきわめてありうることだつた。ともかく、自分にはりつぱな権利があると思いながら、もし行かなかつたらどうなるか、と電話できいてみた。

「君をかならず見つけ出せるだろう」というのが返事だつた。

「で、進んでゆかなかつたというので、罰せられることはあるんですか？」と、Kはきき、きつと言うにちがいないと思われる言

葉を予想しながら微笑した。

「そんなことはない」という返事だつた。

「それは結構です」と、Kは言つた。「ですがそれなら、今日の召喚に従わなければならぬどんな理由があるというんです?」「わざわざ裁判所に強制手段をとらせるようなことはしないものだ」と、だんだん弱くなつて最後に消えてゆく声が言つた。

「そんなことをしたら、非常に軽率というものだ」と、Kは出てゆきながら考えた。「しかし強制手段というのはどういうものか、一度お目にかかる必要がある」

ためらうことなく、エルザのところへ出かけた。くつろいで車の隅すみによりかかり、両手を外套がいとうのポケットに突っこみ、——す

でに寒くなりはじめた——彼は往来の頻繁な通りをながめた。もし裁判所がほんとうに活動しているなら、少なからぬ面倒を裁判所に与えてやつたはずだ、と彼はある種の満足をもつて考えた。裁判所に行くとも、行かぬとも、はつきりと言つてはやらなかつた。したがつて裁判官は待つてゐるだらうし、おそらくは相当の人数の連中さえも待つてゐることだらうが、自分だけは現われず、傍聴席をことに失望されることだらう。裁判所に迷わされずに、自分の好きなところへ行くのだ。ところで、ふざけて御者に裁判所の番地を言わなかつただろうか、とちよつと不安になつたので、大声でエルザの番地を叫んでやつた。御者はうなづいたが、さつきも別にそれとちがう番地を言つたわけではなかつ

た。そのときからKは次第に裁判所のことを忘れ、銀行についてのさまざまな考えが、以前と同じようにまた彼の心を満たしはじめた。

母のもとへの旅行

昼食のとき、突然、母をたずねようと思いついた。今はもう新年もほとんど終りかけているから、母にこの前会つてから足かけ三年になる。母はあのとき、お前の誕生日には来るようとに頼んだので、彼もいろいろ支障はあつたがその頼みに応じ、誕生日のたびごとに母のもとで過すよう約束さえしたのだが、この約

束は確かにもう二度も破つたのだ。しかしそのかわりに今度は、誕生日はもう二週間ばかり後のことだが、それまでは待たずに行くこうと思つた。ちょうど今行かねばならぬ特別な理由は何もない、と自分に言い聞かせはした。それどころか、故郷の小さな町に一軒の商店を持つており、Kが母に送る金を管理してくれている一人の従兄いとこから、一月おきにきちんとと受けている知らせは、これまでのいつよりも安堵あんどできるものだつた。母の視力は消えようとしているが、そのことは医者たちの言うところからすでに何年も前から予期していた。その反面、ほかの点での健康状態はいつそうよくなり、老齢のさまざま不快は強まるどころか少なくなり、少なくともこぼすようなことはいつそう少なくなつ

た。従兄の意見によると、それはおそらく、ここ数年来——Kは、この前訪れたときすでにそれの軽い徵候を認めてほとんど不快を覚えたのだつたが——けた桁はずれに信心深くなつたことと関係がある、ということだつた。以前にはやつとの思いで身体からだを引きずつていつたこの老婆が、今では、日曜日に教会へ連れてゆくときには、自分の腕にすがつて実にしつかりと歩いてゆく、と従兄はある手紙であるで手にとるように書いてよこした。そしてKは従兄の言うことが十分信じられた。なぜならば、心配性の従兄はいつも報告中によいことよりもむしろわるいことを誇張するのがつねだつたからである。

しかし、そんなことはどうあろうとも、Kは今は行くことに心

をきめた。彼は最近では別な不快さのために一種の愚痴つぽさを身につけてしまった。自分のしたいと思うことになんにでも敗けてしまうという、ほとんど定見というもののない傾向である。——さて、今の場合にはこの悪徳は少なくともひとつよい目的に役だつわけだつた。

考えを少しまとめるために窓ぎわに行つたが、すぐに食事を片づけさせ、小使をグルウバツハ夫人のところへやつて、旅行に出る旨を知らせ、必要と思うものを夫人につめてもらつて手提鞄てさげかばんを持つてくるように命じた。次に、キューネ氏に対して自分が不在のあいだの二、三の商売上の用件を頼んだが、すでにならわしとなつた不羈ぶしつけな態度でキューネ氏が、自分はしなければならぬ

ことはよくわきまえている、こんな命令はただ儀礼上聞いてやつているのだ、というようにそっぽを向きながら聞いていることにも、今度だけはほとんど腹がたたなかつた。そして最後に支店長のところへ行つた。母のところへ行かねばならぬので二日ほど休みをいただきたい、と支店長に頼むと、もちろん支店長は、あなたのお母さんは病氣がわるいのか、ときいた。

「いいえ」と、Kは言つたが、それ以上の説明はしなかつた。

両手を背後に組み、部屋の真ん中に突つ立つていた。^{まゆ}眉をひそめて考えこんだ。どうも出発の準備を急ぎすぎたのではないか？ここにこのままいたほうがよかつたのではないか？故郷に帰つてどうしようというのだ？感傷などから行こうと思うの

だろうか？ そして感傷から、おそらくここで何か重大なこと、たとえば訴訟に手をかけるチャンスを逸してしまってはなかろうか？ そういうチャンスは、訴訟がこれでもう何週間も落着いてしまったように見え、ほとんど何ひとつはつきりした知らせがやつてこなくなつて以来、いつなんどきやつてくるかわからなかつた。そしてそのうえ、老いた母を驚かすことにならないか？

もちろんそんなつもりはないのだが、今では自分の意志に反してさまざまことが持ち上がる始末なのだから、意に反してそういうことはきわめてありそうなことだつた。それに母は、自分に来いとは全然言つてきてはいなかつた。以前には、従兄の手紙には母の切なる招きがきまつて繰返されていたのに、今はもうかなり

のあいだ、そういうことがなかつた。それゆえ母のために行くのではないことは、明瞭^{めいりょう}だつた。しかし、もし自分のなんらかの期待から行くのだとしたら、自分は完全に馬鹿者だし、きつと故郷では、窮極の絶望のうちに、自分のばかさ加減の報いを受けことになるだろう。だが、こうした疑惑のすべては自分のものではなく、他人たちが自分にもたらそうとしているものだ、とでもいうように、はつきりとした自覚を持ちながら、Kは行くといふ決心を変えなかつた。こんなことを考えているあいだ、支店長は、偶然なのか、それともこのほうがほんとうらしいが、Kに対する格別な思いやりからか、新聞の上にかがみこんでいたが、やがて眼を上げ、立ち上がりながらKに手を差出し、それ以上は何

もきかずに、元氣で旅行されるように、と言つた。

Kはそれからしばらく、事務室の中をあちこち歩きながら小使ひしを待つていたが、Kが旅行に出る理由を聞こうとして何回もやつてくる支店長代理には、ほとんど口もきかずに肘鉄砲ひじでつぱうを食わせ、ついに手提鞄が着くと、すでに前もつて命じておいた車へと急いで降りていった。彼が階段に行くやいなや、最後の瞬間に上のほうに行員のクリヒが現われ、書きかけの手紙を手にしていたが、明らかにKからそれについての指示を仰ごうとするものらしかつた。Kは相手に手で断わりの合図をしたのだつたが、このブロンドの大頭の男は物わかりがわるいので、その合図を間違つて取り、便箋びんせんを振りながら危なかしいほどのとびかたでKの後あとを追つて

きた。Kはそれに非常に怒つたので、クリヒが表階段で彼に追いつくと、その手紙を彼の手から奪い、引裂いた。次にKが車の中で振返ると、自分の失策がまだわからないらしいクリヒは同じ場所に立つて、走り去つて行く車を見送っていたが、彼に並んで門番が、改まつて帽子を^{まぶか}目に深にかぶり直していた。それではおれはまだ銀行の高級職員の一人なのだ。いくらおれがそれを否定しようとしても、門番がきつと^{はんぱく}反駁したことであろう。そして母は、いくらそうでないと説き聞かせても、おれのことを見た銀行の支店長だと思つており、しかもそれが数年来のことなのだ。そのほかのことでいくらおれの声望が傷つけられても、母の考えではおれの価値が下落することはないだろう。ちょうど出発の前に、裁判所

とつながりさえある行員の手から手紙を奪い取り、挨拶^{あいさつ}もなしに破つても、自分の両手が焼けもないというくらいの力をまだ依然として持っているのだ、と確信したことは、おそらくいいしるしにちがいなかつた。

(編者注 以下は抹消されている)

……もちろん、彼がいちばんやりたかつたことはやれなかつた。つまり、クリヒの蒼白^{あおじろ}い、丸い頬^{ほお}を二つばかり大きな音をたてなぐりつけることだ。一面から言うと、それはもちろん、大いによいことなのだ。なぜなら、Kはクリヒをきらい、クリヒばかりではなく、ラーベンシユタイナーとカミナーとをもきらつてい

るからである。Kは、ずっと前から彼らをきらつていた、と思つてゐる。ビュルストナー嬢の部屋に彼らが現われたことは、彼をして初めてこの男たちに注意をはらわせたのだつたが、彼の嫌悪はもつと前からのものである。そして最近では、Kはほとんどこの嫌悪に苦しめられている。この嫌悪を晴らすことができないからである。いざれも、まつたく取るに足りないいちばん下つ端の行員なので、彼らに近づくことはきわめてむずかしい。年功の力以外によつては彼らは昇進できないだろうし、この点でさえほかの誰よりも手間取つてゐるので、彼らの出世の邪魔をすることはほとんど不可能に近い。他人の手によつて加えられるどんな妨害も、クリヒの愚かさとラーベンシュタイナーの怠惰とカミナーの

いやらしいはいつくばるような卑屈さとほどには、大きいはずがない。彼らに對して企てうる唯一のことは、彼らを免職するよう手をまわすことだろうし、それはきわめて容易に実現できることであつて、支店長に對してKがほんの二言三言言えば事は足りるのだが、Kはそうすることをばかっている。公然もしくは秘密にKのきらうことならなんでもやろうとする支店長代理が三人の味方になるならば、Kはおそらくそうするだろうが、奇妙なことに今度は支店長代理が例外的な態度を示し、Kの欲することと同じように望んでいるのである。

検事

長年の銀行勤めで、Kは人を見る眼や世故に長けてはいたが、自分と同じ常連仲間は非常に尊敬すべきものに思われたし、このような仲間の一員であるのは自分にとつて大きな名誉だということを、自分自身に対してけつして否定したことはなかつた。ほとんどもつぱら裁判官、検事、弁護士から成る仲間で、二、三人のきわめて若い役人や弁護士見習も仲間入りを認められていたが、これらの若者たちはまったく末席にすわつていて、特別な質問が向けられたときにだけ論争に加わることが許されるのだつた。しかし、こうした質問はたいてい、ただ仲間を興がらすだけの目的を持つものであり、いつもKの隣にすわるハステラー検事が特に、

こうしたやりかたで若い人々を赤面させることが好きであった。

彼が大きな、毛のもじやもじや生えている手を机の真ん中でひろげ、末席のほうを向くと、もうみなが聞き耳をたてるのだつた。

そして、それから末席で誰かが質問を受けたものの、それをどうも解けないと、あるいははじつと考え方こんでビールを見つめるとか、あるいは口をきくかわりにただ顎あごでぱくつくとか、あるいは——これがいちばんみじめだが——止めどもない熱弁をふるつて間違つた意見か確認されない意見かをもらすとかすると、年配の紳士たちは微笑しながら自分たちの席に向き直り、やつと快適になつたという様子を見せるのだった。ほんとうにまじめな、専門的な話というのは、ただ彼らだけの仲間に取つておきであつた。

Kは、銀行の法律顧問であるある弁護士によつてこの仲間に連れこまれた。ひとところKはこの弁護士と銀行で夜遅くまで長い打ち合せをやらねばならぬときがあつて、そこでおのずと弁護士といつしょにその常連席で夕食をとり、仲間づきあいを大いに楽しむ、ということになつたのだつた。ここで見られるのは、ただ学問のある、声望の高い、ある意味では権力のある紳士たちばかりであつて、彼らの気晴らしというのは、むずかしい、人生とは関連の薄い問題を解こうと努め、この点で疲れるほどやるということになつた。K自身はもちろん、介入できることはほとんどなかつたが、遅かれ早かれ銀行でも役にたつようなたくさんのことを見聞く機会を手に入れた。そしてそのうえ、いつでも役にたつような個

人的な関係を裁判所と結ぶことができた。だがその仲間の人々も、彼のことによろこんで迎えるように見えた。間もなく実業の専門家として認められ、こういう事柄についての彼の意見は——その場合に事が全然皮肉などなしに運ぶということはなかつたが——何か反駁^{はんぱく}できないものとして通つていた。商法上の法律問題においてちがつた判断を持つてゐる二人の人物が、そういう事実についてのKの意見を求め、次にKの名前があらゆる話のやりとりにしよつちゆう現われ、ついにはもうとつくにKにはついてゆけないようなきわめて抽象的な検討に引つ張りこまれることもまれではなかつた。もちろん彼には多くのことがわかつてきた。ことに、ハステラー検事がそばについていてよい忠告者となつてくれ

たからである。そしてこの人物はまたKと親しい近づきとなつたのだった。しばしば夜分に家までついてくることさえあつた。しかし、自分のことを釣鐘マントの中に全然目だたぬように隠してしまうことのできるような大男のそばを手に手をとつて歩いてゆくことには、長いあいだなじめぬことだつた。

ところが時のたつにつれ、二人は非常にうまが合うようになつたので、教養や職業や年齢のちがいがすべて消えてしまうほどだつた。彼らは互いに交際したが、ずっと以前から互いに釣り合つた相手同士のようであり、その関係においてときどきは外見上一方がすぐれているように見えるときがあると、それはハステラーではなくてKのほうだつた。なぜならば、Kの実際的経験は裁判

所の机の上ではけつしてありえぬほど直接的に手に入れられたものなので、たいていはそれが物を言つたからである。

この友情はもちろん、その常連たちのあいだに間もなく広く知れ渡り、誰がKを仲間に連れこんだのかということは半分忘れられてしまい、Kと合うのはともかくハステラーだということになつた。Kがこの仲間にはいつている権利があるかどうかということが疑わしくなると、彼は十分の権利をもつてハステラーのことを見合いに出すことができるのだった。しかし、Kはそれによつてひとつの格別有利な立場を獲得した。なぜなら、ハステラーは声望も高かつたが、恐れられてもいたからである。彼の法律的な頭の力や巧みさというものはきわめて驚嘆すべきものではあつた

が、この点では多くの人々が少なくとも彼と同等であつた。だがしかし、彼が自説を守る荒々しさにはなにびとも匹敵できなかつた。ハステラーは相手を説き伏せることができないと、少なくとも相手を恐怖におとしいれるのだ、という印象をKは受けたが、彼が人差指を立てるだけで多くの人々は尻込みするのだった。相手の人は、自分が善良な知人や同僚たちの仲間に加わっているのだということ、ただ理論的な問題だけに関することであり、實際にはけつして何事も起るものではない、ということを忘れてしまふようであつて、——まつたく口をつぐみ、頭を振つて否定の気配を見せるだけでもすでに勇氣の要ることだつた。相手が遠く離れてすわつてるので、こんな距離では意見の一致はできるもの

でない、とハステラーが考え、食事の皿か何かを押しやつて立ち上がり、相手その人のところへ出かけてゆくのは、実にすさまじい光景であつた。近くにいる人々は頭をそらせて、検事の顔を見ようとした。もちろん、そういうことは比較的まれにしか起らない偶然的な事件であつて、何よりもまず彼を興奮におとしいれるのはただ法律的問題、しかも主として、彼自身が前にやつたか、あるいは現在やつているかする訴訟に関する問題、についてだけであつた。事がこんな問題でなければ、彼はうちとけ、落着いており、彼の高笑いは愛想があり、彼の情熱はもっぱら飲み食いに向けられていた。一同の会話には全然加わらず、Kのほうに向きつきりになり、Kの椅子の背に腕をかけ、小声で彼に銀行のこと

をきき、自分でも自身の仕事のことをしやべったり、裁判と同じくらい悩まされる女出入りのことも語つたりすることさえあつた。仲間のほかの誰とも彼がそんなふうに話しているのは見られなかつたし、事実またしばしば、ハステラーに折り入つて頼みたいことがあると、人々はまずKのところへ行き、彼に仲介を頼むし、彼のほうもいつもよろこんで気軽にやつてやるのだった。Kは、この点について自分とハステラーとの関係をうまく利用するといふようなことではなく、およそすべての人々に対しきわめて懇い懃ぎんで謙遜^{けんそん}であり、謙遜とか慇懃とかよりはいつそう大切なものが、紳士たちの身分のちがいを正しく区別し、各人をその身分に応じて扱うということを心得ていた。もちろん、この点では

ハステラーはしょつちゅうKに教えてくれた。これこそ、ハステラーがいくら興奮して論争しているときでも侵すことのない唯一の規則だった。そこで彼は、まだほとんどまつたく身分などは持っていない末席の若い人々に対しても、いつもただ一般的な話を持ちかけるのだつたが、相手は個々の人々ではなく、単に寄せ集められた群衆でもあるかのような態度であつた。ところがこの若い人々こそが、彼に対して最高の尊敬を示すのだつた。そして十一時ごろ彼が帰宅しようと立ち上がりると、すぐ一人は彼がどつしりした外套がいとうを着るのを助け、もう一人は大きく敬礼をして彼のために扉を開け、ハステラーの後からKが部屋を出てゆくと、もちろんそれまで扉を押えているのだつた。

初めのうちはKがハステラーに、あるいはまた検事のほうがKに、帰路を途中まで同伴してゆくのだつたが、後にはこんな夜々はきまつて、ハステラーがKに、自分といつしょに家まで来てしばらく自分のところにいてくれるようにと誘うことで終つた。そうすると二人はなお一時間も、ブランデーを飲んだり、葉巻をふかしたりして過すのだつた。こうした晩はハステラーにとつては非常に楽しいものだつたので、二、三週間ヘレー・ネという名の一人の婦人を彼のもとに住まわせていたときにも、こうしてKと過す夜々を捨てようとはしなかつた。肥つた、かなりな年配の婦人で、黄ばんだ膚をし、額のあたりに巻いている真つ黒な巻毛を持つていた。Kが初め彼女を見たときは、きまつてベッドにはいつ

ており、いつもそこにまつたく恥ずかしげもなく横になり、分冊の小説本を読むのをつねとしていて、検事とKとの談話などは気にもかけなかつた。夜も遅くなると、やつと身体を伸ばし、あくびをし、また、別なやりかたで注意を自分に向けることができないときには、読んでいる小説の一冊をハステラーに向つて投げた。すると検事はにやにやしながら立ち上がり、Kに別れを告げるのだつた。もちろん後には、ハステラーがヘレーネに飽き始めると、女は男二人が会うことを手きびしく邪魔した。そうなると彼女はいつも、完全に服装を整えて二人を待つのだつたが、しかもそれがきまつてあるひとつつの服であつて、それを女はきわめて高価な、似合うものと考えているらしかつたが、実は古ぼけた、けばけば

しい舞踏服で、飾りに垂らしている二、三列の長い総によつて特に不快な印象を強く与えるものだつた。Kはこの着物を見るこ^たとをいわば拒んで、何時間でも眼を伏せてすわつていたので、この着物の詳しい格好は知らなかつた。ところが女は、身体をゆすりながら部屋を通つて歩いたり、Kの身近にすわつたり、後に彼女の立場がいよいよ危な^{しつと}かしくなると、苦しまぎれにKの寵愛^{ちようあい}を得てハステラーに嫉妬させようと試みる始末だつた。丸みを帯びた肥つた背中をむきだしにして机によりかかり、顔をKに近づけ、そうやつてKに無理に眼を上げさせようとするのは、悪気ではなくて、ただ苦しまぎれのことだつた。女がこんなことをやつて手に入れたことと言えばただ、Kがその後ハステラーのところ

へ行くことを拒んだということだけであり、彼がしばらくしてまたそこへ行つたときには、ヘレーネはついに追い出されていた。Kはそのことを当然なこととして受取つた。彼ら二人はその晩はことに長時間同席し、ハステラーの発議で友愛を祝し、Kは帰路煙草と酒とで少し気が遠くなつてしまつていたくらいだつた。

ちようど次の朝、銀行で支店長は商売上の話のついでに、昨晩Kを見かけたように思う、と言つた。もし私の錯覚でなければ、あなたはハステラー検事と腕を取合つて歩いていた、ということだつた。支店長はこのことを非常に奇妙に感じているらしく、——もちろんこれはまたいつもの彼の几帳面きちょうどめんさにふさわしいことだつたが——教会の名をあげ、その泉の近くで一人に出会つた、

というのである。自分は蜃氣樓のことを話そうとしているのか
かもしれないが、自分の言うことに間違はないのだ、と言つた。
そこでKは支店長に、検事は自分の友人であり、実際、昨晩自分
たち二人は教会のそばを通つた、ということを説明した。支店長
は驚いたように微笑し、Kにするように求めた。それは、その
ために、Kが支店長に非常な愛情を覚えた瞬間、この弱々しい、
病身の、喘息ぜんそく持ちの、きわめて責任ある仕事をいっぱい負わさ
れた人物から、Kの幸福と未来についてのある憂慮が、はつきり
と現われてきた瞬間、そういつた瞬間のひとつであつた。そういう
憂慮というのは、支店長において同じようなことを体験したほ
かの行員たちの言い草ならば、もちろん冷たく外面的なものだと

も言いうるだらうし、二分間ばかりを犠牲にして有能な行員を多年自分にひきつけておくいい手段以外の何ものでもないはずだが——それはどうあろうとも、Kはこうした瞬間に支店長に胄かぶとを脱ぐのだった。おそらく支店長も、ほかの人たちとは少し別なようKと話すようだつた。すなわち、こんなふうにしてKと対等に話すために、自分の地位が上にあるということを忘れるようなことはなかつたが——そういうことはむしろきまつて普通の仕事の上の交渉でやるのだった——今の場合はまったくKの地位を忘れてしまつたらしく、まるで子供とでも話すように、あるいはまた、初めてある地位を志願してなんらかのわからない理由から支店長の好意を呼び起した経験に乏しい若い人間とでも話すように、

Kと話をするのだった。もしこのような支店長のしてくれる心配がKには真実味のこもつたものと思われなかつたならば、あるいは少なくとも、このような瞬間に現われるこういう心配のもつともである点に完全に魅了されてしまつたのでなければ、ほかの誰かのにせよ支店長その人のにせよ、こんな話しかたはKにはきつと我慢がならなかつたことであろう。Kは自分の弱点をはつきりと知つた。おそらく彼の弱点の根本というのは、こういう点については彼には何か子供じみたところがある、ということにあるのだつた。父がきわめて若くして死んでしまつて、自分の父親から心配されるということを経験したことがないし、やがて家をとび出し、母、半分^{めいし}盲いてまだあの変化のない小さな町に生き、彼も

およそ二年前に訪ねたきりの母の愛情というものを、いつも呼び起そうとするよりはむしろしりぞけてきたからである。

「そういうお付き合いをしているとは私は全然知らなかつた」と、支店長は言つたが、弱々しい、親しげな微笑だけがこの言葉のきびしい調子を和らげているのだつた。

(編者注　この断章は本文第七章に直接つながるものだつたのであろう。この冒頭は、第七章の最後の章句の写しを収めているのと同じ紙片に書かれている)

その家

初めは特別の意図をいだいてやつたわけではなかつたが、Kはさまざまの機会に、彼の事件の最初の告発を行なつた役所の所在地を聞きこもうと努めた。彼は苦もなくそれを聞いた。ティトレリもヴォールファールトも、初めてきかれたときにつぐに、その家の詳しい番地を言つた。その後でティトレリは、よく検討するよう求められはしなかつた秘密の計画に對して待ちかまえてい

るような薄笑いを浮べながら、番地を教えたことに補つて、そんな役所なんかは少しも意味を持つものではなく、ただ託された事柄を代弁しているにすぎず、大検事局そのものの末端の機関であり、その大検事局なるものはもちろん訴訟当事者の近づきえぬところである、と主張した。それゆえ、検事局に何かを求める場合には、——もちろんいつでも願望はたくさんあろうが、それを口に出して言うのは賢明だとはかぎらない——もとより今言つた下級の役所を相手にしなければならないのだが、そうしたからといって自らほんとうの検事局にはいりこむこともできないし、自分の願望をけつしてそこまで達することはできないだろう、と言うのだった。

Kはすでに画家の本性をよく知っていたので、別に反対もせず、それ以上たずねることはしないで、ただうなずいて言われたことを知識としてただ受取つた。最近すでにしばしばそうであつたようには度もまた、わざらわしさにかけてはティトレリが弁護士のかわりを十分するように思われた。ちがいというのはただ、Kはティトレリのことを弁護士のように捨てはしなかつたこと、もししたいと思ひさえするなら、造作なく振捨てができるだらうということ、さらにティトレリはひどく腹蔵のないこと、そればかりでなく、今は以前ほどではないがおしゃべりなこと、そして最後にKのほうでもティトレリを大いに苦しめることができるということ、それぐらいであつた。

そしてこの件についてもKは同じように相手を悩ませたが、ティトレリにその家のことを話すときにはしばしば、お前にはあることを隠しているのだ、自分はあるの役所とはいろいろな関係を結んだ、しかしその関係はまだそういうして進んではいないので人に知られると危険がある、というような調子で言うのだつた。ところがティトレリが彼にもつと詳しく言わせようとすると、Kは突然話をそらし、長いあいだ二度とその話をしないのだった。彼はこういうちよつとした成功を楽しんだ。今では裁判所をめぐるこうした連中のことは前よりもずっとよく知っているし、今ではもうこの連中と戯れることもできるし、ほとんど自分でも彼らの中にはいりこんでいて、彼らが身を置いている裁判所の第一段階

というものがある程度可能としている相当な見通しを少なくともしばらくは手に入れているのだ、と思いこんだ。自分の地位をこんな下つ端したばのあいだでついに失わねばならぬとしたら、いつたいどうなるだろうか？ そうなつてもまだそこには救いの機会はあるのであつて、ただこの連中の列の中にはいりこみさえすればよく、そうすれば、この連中の身分が低いとかあるいはほかの理由によつて、自分の訴訟で援助してくれることはできないとしても、自分を迎える、かくまうことはできるし、そればかりではなく、自分が万事を十分考えて秘密にやつてゆくなら、彼らはこういうふうにして自分の役にたつことを拒めはしないはずだ、ことにテイトレリは、今では自分は彼の身近の知人でパトロンとなつたの

だから、拒めはしないはずだ。

こんなふうな希望をKは毎日のように心にいだいて暮していたわけではなく、一般にはきつぱりと見境をつけ、なんらかの困難を見逃したり、あるいは飛び越えたりしないように注意をしていた。しかしどきどきは——それはたいてい仕事の後の夜分の完全な疲労状態でであつたが——きわめてささやかな、そのうえきわめて漠然としたその日のさまざまで出来事から気休めの種を引出すのだった。そういうときはいつも事務室の長椅子の上に横になり——一時間ばかり長椅子で休んで元気を回復しなくては事務室を去れなかつた——頭の中で見たことと見たことを結び合せてみるのだった。裁判所と関係のある人々に厳密に限られるわけ

ではなく、ここで半睡^{うたたね}の状態でいると、あらゆる人々がこんがらかり、裁判所の大きな仕事を忘れてしまい、自分だけが唯一の被告であり、ほかの人々はみな裁判所の建物の廊下を歩く役人や法律家のように歩いており、最も愚鈍な連中でも頸^{あご}を胸に埋め、唇^{くちびる}をそり返し、責任ある考えに沈みながらじつと眼を凝らしているように思われるのだつた。次にはしょつちゅう、グルウバツハ夫人の間僧人たちが自分たちだけのグループをつくつて現われ、まるで苦情の合唱隊のように口を開けて頭と頭とを寄せ合せて立つていた。その中には多くの知らぬ人々がいた。なぜなら、Kはすでにずっと以前から下宿のことは全然気に留めていなかつたからである。知らぬ人々が多いため、そのグループといつそう緊密

にかかりあうことは彼には不快だつたが、その中にビュルストナー嬢を捜し出そうとすると、ときどきはかかりあわなければならなかつた。たとえばそのグループを飛び越してゆくと、突然、二つの全然見なれない眼が彼のほうに向つてき、彼を引留める。そこでビュルストナー嬢を見つけ出せないのだが、次にどんなあやまちをもすまいとしてもう一度捜してみると、彼女はちょうどグループの真ん中におり、両側に立つてゐる二人の男に両腕を託していた。それでもそれは、ほとんどなんらの印象をも彼に与えなかつた。ことに、この情景がなんら目新しいものではなく、彼が一度ビュルストナー嬢の部屋で見た海水浴場での写真の思い出が消えないで残つていたのにほかならなかつたからである。ともか

くこの光景はKをそのグループから離れさせ、Kはなお何回かそちらを振り返りはしたが、大股おおまたで裁判所の建物を横切つて急いだ。あらゆる部屋のどれにでも都合よく通じていて、まだ見ることのできなかつた迷路の廊下は、ずっと前から自分の住居であるかのように親しげに見え、細かなことが逐一ひどくはつきりと彼の頭にはいるのだつた。たとえば、一人の外国人が玄関のホールをぶらぶら歩いており、闘牛士のようないでたちで、腰のあたりはまるで小刀で切られたように刻まれ、非常に短かな、ぴつたり身体についている小さな上着は、黄色の粗糸あらいとのレースからできていて、この男は、そのそぞろ歩きを一瞬たりとも休まずに、絶えずKに驚きの眼を見張らせるのだつた。身体をかがめKはその男に

忍び寄り、眼を大きく見張りながらじつと見つめた。レースのあらゆる模様、へんてこな縫ふさ、上着のあらゆる曲線を彼はよく知つてはいたが、見飽きることがなかつた。あるいはむしろ、もうとつくに見飽きているのか、あるいはもつと正確に言えば、けつしてそれを見たくはなかつたのかもしれないが、それができなかつた。外国というのはなんという仮装舞踏会をやるんだろう、そう彼は考え、両眼をもつとはつきり見開いた。そして、長椅子の上で向きを変えて顔を革に押しつけるまで、この男の面影を追い続けた。

(編者注 以下は抹消されている)

そうやつてかなり長いあいだ横になっていたが、とうとうほんとうに休んでしまった。今でもいろいろ考えてはいるが、暗闇くらやみの中でも邪魔もなかつた。テイトレリのことを考えるのがいちばんよかつた。テイトレリは椅子に腰をかけ、Kは彼の前にひざますき、その両腕をなでて、いろいろなことをして機嫌きげんをとつた。ティトレリは、Kが何を求めているのか、よく知つていたが、何くわぬ様子で、そんな素振りによつてKを少し苦しめるのだつた。だがKのほうでも、万事は結局うまく切り抜けるだろう、ということを知つていた。なぜなら、テイトレリは軽率な、きびしい義務感のない、容易に手に入れられる人間であるからだ。それにしても、裁判所がこんな男とかかりあつていてることが理解できなか

つた。Kははつきり知つた、もしどこかがあるとすれば、ここでこそ、突破が可能だ、と。ティトレリが頭をもたげて虚空に向いている恥知らずな薄笑いに惑わされてはいないで、懇願をあくまで続け、ついには両手でティトレリの両頬をなでるにまでいたつた。たいして懸命になつてゐるわけではなく、ほとんど投げやりな態度だつたが、戯れる気持からそんな動作を長引かせ、成功を確信していた。裁判所の策略なんてなんと簡単なんだろう！

まるで自然の法則に服従するかのように、ティトレリはついに彼のほうに身体をかがめ、いかにもうちとけたようにゆつくりと眼を閉じて、その願いをかなえてやるつもりがある、ということを見せ、Kに手を渡してしつかと握つた。Kは立ち上がり、もちろん

ん彼は少し莊重な氣持がしていたが、ティトレリはもう莊重さなどは我慢がならず、Kを抱きかかえ、駆け足で彼を引つ張つていった。間もなく裁判所の建物まで来て、急いで階段に出たが、ただ登るだけではなく、登つたり降りたりして、水の上の軽やかなボートのように身軽に、少しも労力の消耗がなかつた。そして、Kが自分の足をながめ、この身のこなしの美しいかたちは自分のこれまでの卑しい生活とはもはや縁がないという結論に達したちようどそのとき、彼のうなだれた頭の上に、変化が起つたのだった。これまで背後から投げかけてきていた光は、向きが变つて、突如前からまばゆいばかりにさしてきた。Kが眼が上げると、ティトレリは彼にうなづいてみせ、向きを変えた。Kはまた裁判所

の建物の廊下にいたが、すべては前よりも静かで、単純に見えた。これといって目だつ点はなく、Kは一瞥いちべつですべてを見渡したが、テイトレリから離れ、自分の道を行つた。Kは今日は、新しい、長い、黒っぽい着物を着ていたが、その着物は気持よく温かく、どつしりとしていた。自分がどうなつたのか、彼はよくわかつていたが、それに大いに幸福を感じていたので、彼はそれを認めたくはなかつた。廊下の一方の壁には大きな窓がいくつも開いていたが、その片隅になつて以前の服があるのを見つけた。黒の上着、はつきりした縞しまのズボン、その上にはすり切れかかつた袖そでのシャツがひろがつていた。

支店長代理との闘い

ある朝、Kはいつもよりずっと気分がさわやかで、闘志にあふれていた。裁判所のことはほとんど考えなかつた。裁判所を思い出して、このまつたく全貌^{ぜんぼう}をつかみがたい大きな組織は、なんらかの、もちろん秘密の、暗闇^{くらやみ}で初めて手がけることのできる手段で容易にとらえられ、つぶされ、粉碎されるもののように思われた。Kの異常な状態は彼の心を駆つて、支店長代理に誘いをかけ、その事務室に行き、すでにかなり前から迫つてゐる事務上の用件についていつしょに相談させさえしたのだつた。こんな場合にはいつも支店長代理は、彼のKに対する関係が最近数カ月

に少しも変つていないうように振舞つた。絶えずKと競つては、以前と同じように落着いてやつてきて、落着いてKの詳しい説明を聞き、ちよつとした親しげな、否、同僚らしくさえある言葉で関心を示すのだった。Kを面くらわすことといえばただ、もちろんこの点になんら特別の下心を見るべきではなかつたが、何事によつても事務上の主要問題からはそらされることがなく、明らかに本心の真底までこの問題を受入れる心構えでいることだけだつた。一方Kの思いは、このような義務遂行の模範を前にして、すぐ激しく四方八方に働きはじめ、問題そのものはほとんどなんらの抵抗なしに支店長代理にまかせざるをえなくさせた。一度はそれがあまりひどかつたので、Kはついにただ、支店長代理が突然立ち

上がり、黙つて事務室にもどつてゆくのを見ただけだつた。Kはどういうことが起つたのか、わからなかつた。協議が本式にきまつたのかもしけなかつたが、Kがそれと知らぬうちに支店長代理の気をわるくしたか、あるいはKがばかげたことをしゃべつたか、あるいはまた、Kが聞いていないこと、ほかのことばかり考えていることが明白になつたので、支店長代理が協議を中断したのかもしけなかつた。だが、Kが滑稽な決定を行なつたのか、あるいは支店長代理がKを誘つてそういう決定をさせ、こうなればKの損害を実現してやろうとして急いで出ていつたのか、そういうことさえありうることだつた。ところで、この件はもう蒸し返されないで、Kはそれを思い出したくはなかつたし、支店長代理は

部屋にはいりきりになつていて。もちろんしばらくのあいだは、その後もなんら眼に見えるような結果を生じなかつた。しかしいずれにせよ、Kはその出来事で驚かされはしなかつた。適当なチヤンスが生じさえするなら、そしてKに少し勇氣がありさえするなら、支店長代理の部屋の扉の前に立ち、彼のほうに行くか、あるいは彼を自分のほうに誘うかするだけだつた。前にしていたように、支店長代理に対して隠れているときでは、もはやなかつた。自分を一拳にあらゆる心配から解放してくれ、おのずから支店長代理に対する昔の関係を調整してくれるよう、すみやかで決定的な成果などというものは、Kはもう期待していなかつた。やめることは許されない、とKは見てとつた。おそらくはさまざまなもの

事実から言つて必要なかもしないが、もしそのように後に退いたならば、たぶん、もうけつして昇進できない、という危険が生れるのだつた。支店長代理に、おれのことはもう片づいたのだ、などと思われてたまるものか。そんなふうに思いこんであいつの事務室にのうのうとすわつておられてたまるか。あいつは不安を覚えさせられなくてはならないのだ。あいつはできるだけしおつちゅう、このおれが生きているのだ、今のところは全然危険がないように見えるかもしれないが、あらゆる生きている人間と同じように、いつか新しい能力をもつて驚かすことがあるかもしれないのだ、ということを思い知らなくてはいけない。ときどきKは、自分がこうした方法によつてほかならぬ自分の名譽だけのために

鬭っているのだ、と自分に言い聞かせはした。なぜなら、こんな自分の弱点を持ったまままでいくら支店長代理に対抗しようとも、ほんとうは何の役にたつわけのものでもなく、相手の権力感を強めるだけであり、よく観察をし、刻々の情勢に的確に従つて処置をとるチャンスを相手に与えるだけだつたからである。そうはわかつているものの、Kは自分の態度を全然変えることができないようにも思ひ、自己欺瞞^{ぎまん}に陥り、ときどきはつきりと、自分は今こそなんら心配することなく支店長代理と争つてよいのだ、と信じるのだった。いくら不幸な経験にあっても、彼は利口にはならなかつた。十回の試みでうまくゆかぬことは、万事はいつもまつたくおきまりに自分の不都合なようになつてゆくにもかかわらず、

十一回目にはやりとげることができるものと思いこんだ。こんな出会いの後、疲れきつて、汗を流しながら、からつぽの頭で残つていると、自分を支店長代理に手向わせたのは希望だつたのか、それとも絶望だつたのか、彼にはわからなかつたが、次のときにはまた、支店長代理の扉のほうに急いでゆくとき彼がいだいているものは、まったく明らかだが、ただ希望だけであつた。

(編者注 以下三三三ページ十六行まで抹消されている)

この朝は、こうした希望がことに正しいもののように思えた。

支店長代理はゆつくりと部屋にはいつてきて、手を額に当て、頭痛がすると訴えた。Kはまずこの言葉に返答しようと思つたが、

じつと考え、支店長代理の頭痛にはなんら容赦しないで、すぐ事務上の詳しい説明に取りかかつた。ところがそうすると、この頭痛がたいしてひどいものでなかつたためか、あるいは問題に対する関心が痛みをしばらく追いやつたのか、ともかくも支店長代理は話しているうちに手を額から取つて、いつもと同じく、まるで解答を携えて質問に向つてゆく模範生のように、即座に、ほとんど熟考もせずに、答えるのだつた。Kは今度こそ相手に立ち向い、相手を何回でもはね返すことができるはずだつたのだが、支店長代理の頭痛という考えが、あたかもそれが支店長代理の不利ではなくて、利点でもあるかのように、絶えずKの邪魔をした。相手がこんな痛みを耐え、克服しているのは、なんと驚嘆すべきこ

とだろうか！　ときどき相手は、自分の言うことに基づいてとい
うわけではないが微笑し、自分が頭痛を持つてはいるのに、考える
ことにかけてはそのために少しも妨げられてはいない、ということ
を得意がつてはいるように見受けられた。全然別なことが語られ
ていたのだが、同時に無言の対話が行われ、その中で支店長代理
は、自分の頭痛の激しさを口に出して言いこそしないにせよ、し
よつちゅう、自分のはただ危なくはない苦痛であつて、したがつ
てKがいつも苦しんでいるようなのは全然ちがうものだ、とい
うことをほのめかしもした。そしてKがいくら対抗しても、支店
長代理が苦痛を片づけてしまうやりかたは、彼に反駁するのだ
つた。しかしそれは同時に、彼にひとつの一実例を示した。おれも、

おれの職業には関係のないあらゆる心配をふさぐことができるはずだ。これまで以上に仕事に専念して、銀行で新しい制度をやりとげ、その保持のために引続いて従事し、事務の世界に対する自分の少しゆるんだ関係を訪問や出張旅行によつて固め、もつと頻繁^{ひんぱん}に支店長に報告をし、支店長から特別な命令を受けるように努めることが、まつたく必要だつた。

今日もまたそんな具合だつた。支店長代理はすぐはいつてきて、扉の近くに立ち止り、新たに始めた習慣に従つて鼻眼鏡^{みが}を磨き、まずKを見て、次にはあまり目だつようになにKにばかり気を取られている素振りを見せまいと、部屋全体のほうもいつそうよくながめていた。自分の眼の視力をためす機会を利用しているような様

子だつた。Kはその視線に抗し、少し微笑さえして、支店長代理にすわるようにはすすめた。自分自身は肘掛け椅子ひじかけいすに身を投げ、椅子をできるだけ近く支店長代理のほうに寄せ、すぐ必要な書類を机から取つて、報告を始めた。支店長代理は、初めはほとんど聞いてはいないうだつた。Kの机の表面は、背の低い、彫刻を施してある手すりに取巻かれていた。その机全体がすぐれた細工で、手すりも木製でしつかりしていた。ところが支店長代理は、ちょうど今そこにゆるんだ個所を認めたような素振りで、人差指で手すりを押すことによつて具合のわるい点を取除こうとした。Kはそのために報告を中断しようとしたが、支店長代理は、すべてをよく聞いているし、みなよく理解している、と言つて、そうさせ

なかつた。ところが、Kがしばらく何も具体的な言葉を代理から聞き出すことができないでいるうちに、手すりには特別の処置が必要らしく、支店長代理は今度はナイフを取り出し、梃子としてKの定規^{じょうぎ}を取り、手すりを持ち上げようとしたが、おそらくはそうすればもつと容易にそれだけ深く手すりを押しこめることができたからだつた。Kは報告の中にまつたく新しい類^{たぐい}の提案をはさんだが、これはきっと支店長代理に特別な効果があるものと思つた。そして、今やこの提案に達したとき、非常に自分の仕事に夢中になつていたので、あるいはむしろ、このごろではこういう意識はいよいよまれになつてゆくばかりなのだが、自分がこの銀行にあつてまだなんらかの意味を持ち、自分の考えは自分を正当

化する力を持つているのだ、という意識に非常なよろこびを感じたので、もうやめることができなかつた。おそらくはそのうえ、自己を守るこうしたやりかたは、ただ銀行においてばかりではなく訴訟においても最良のものであつて、自分がすでに試みるか計画するかしたあらゆる防御よりもずっとよいものであるにちがいなかつた。話を急いでいたので、支店長代理をはつきりと手すりの仕事から引戻す余裕は、Kには全然なかつた。ただ二、三度、書類を読み上げながら、空いたほうの手でなだめるように手すりの上をなでたが、そうすることによつて、自分ではほとんどはつきりと意識しなかつたけれども、手すりには何も具合のわるいところはないし、たとい一個所ぐらいあつたとしても、今のところ

は自分の言うことを聞いているほうがもつと大切だし、またどんな修繕を加えるよりも真剣なことだ、ということを支店長代理に示すためであつた。ところが支店長代理は、活潑^{かつぱつ}な、ただ精神上活動的な人間にしばしばあることだが、この手工じみた仕事に夢中になつてしまい、ついに手すりの一部は実際引上げられ、今度はその小さな柱をまた適当な穴にはめこむことが問題であつた。それはこれまでのどの仕事よりもむずかしかつた。支店長代理は立ち上がり、両手で手すりを机の表面に押しつけようとせねばならなかつた。ところが、いくら力を使つてみても、うまくゆきそうちなかつた。Kは読みあげているあいだに——もつとも勝手な話をたくさん混じえたのだつたが——ただ漠然と、支店長代理が

立ち上がるのを認めただけだつた。支店長代理のその内職ぶりをほとんど一度でもすっかり眼から離したことはなかつたけれども、支店長代理の動きは自分の演説にもなんらかの関係があるようを考えたので、彼も立ち上がり、数字のひとつの下を指で押えながら、支店長代理に一枚の書類を差出した。ところが支店長代理はそのあいだに、両手の圧力ではまだ十分でないと見てとつて、たちまち意を決して体重全体を手すりにかけた。もちろん、今度はうまくゆき、柱はめりめりと穴にはいりこんだが、柱のひとつが急いだあまり曲つてしまい、どこかでそのやわな上部の棟が、真つ二つに割れた。

「わるい木だ」と、腹だたしげに支店長代理は言つた。

断片

彼らが劇場から出たとき、雨が少し降っていた。Kはすでに、その脚本とひどい上演とにうんざりしていたが、叔父おじを自分のところへ泊めなければならぬという考えが、彼をすっかり打ちのめしていた。ちょうど今日は、どうしてもF・B・（ビュルストナー嬢）と話そうと思っており、おそらく彼女と出会うチャンスが見つかったことであろう。ところが叔父の接待がそれをまつたくだめにしてしまった。もちろんまだ、叔父が乗つてゆける夜行は出るのだが、叔父はKの訴訟にひどく心をつかっているので、今

晩のうちに出発するような気にさせるということは、まったく見込みがないように思われた。それでもKは、たいして期待もせずに、ためしてみた。

「叔父さん、どうも」と、彼は言つた。「近々あなたのご援助をほんとうに必要とすることと思いますが。どういう方面でかはまだはつきりわかってはいませんけれど、ともかくも必要になるでしょう」

「お前はわしをあてにしていいさ」と、叔父は言つた。「わしは実際、どうしたらお前を助けられるかということばかり考えているんだ」

「叔父さんは相変らずですね」と、Kは言つた。「ただ私は、叔

父さんにまたこの町に来ていただくようにお願いしなければならなくなると、叔母さんが気をわるくなさるんじゃないかと、それが心配です」

「お前の事件のほうがそんなふうな不愉快なことよりよっぽど大切なんだ」

「おっしゃることには同意できませんが」と、Kは言つた。「しかしそれはどうあらうと、必要もないのに叔父さんを叔母さんからお預かりしていたくはありません。ごく最近に叔父さんに来ていただかなくてはならぬことは前もつてわかっているのですから、しばらくはお帰りになりませんか?」

「あしたかい?」

「そうです、明日にでも」と、Kは言つた。「あるいは今これか
ら夜行でも、そうしたらいちばんいいと思うんですが」

青空文庫情報

底本：「審判」新潮文庫、新潮社

1971（昭和46）年7月30日第1刷発行

1990（平成2）年9月5日第37刷発行

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「『』」（非常に小さい、2-67）と「『』」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

※編集注にある「以下三三三一ページ十六行まで」は、「」の朝は、こうした希望が……あつたく必要だつた。」の段落をやります。

入力・kompass

校正：米田

2010年11月28日作成

2012年10月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

審判

DER PROZESS

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 フランツ・カフカ Franz Kafka

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>